宮崎学園都市遺跡発掘調査報告書第１集

山内石塔群

YAMA UCHI

1984

宮崎県教育委員会

正　誤　表

ページ	正	誤
本文目次 第1章第2節	地理的位置と歴史的環境	遺跡の位置と環境
挿図目次	XI区特殊遺構出土遺物実測図 （1号遺構）	XI区特殊遺構出土遺物実測図（1号遺構） （1号遺構）
五輪塔類 法量表目次	空風輪法量表(1)	空風輪法量法(1)
37　1行目	集積を思わせる箇所が。	集積を思わせる箇所がが。
〃　6行目	それの北側には5～8基の	そのの北側には5～8基の
〃　13行目	様子を探るための土層観察	様子を探るための土層観察
49　5行目	B群の石塔列の地輪下	B群の石塔例の地輪下
58下から2行目 59　2行目	石塔類の製作に関わった	石塔類の製作に円わった
60　8行目	V区（20基）・IX区（22基）	V区（20基）・・IX区（22基）
104　下から5行目	石塔群に伴なう灯火器としての土器用途から土師器の出土量が多いかもしれない	石塔群に伴なう石塔群に伴なう灯火器としての土器の出土量が多いかもしれない
117　7行目	石塔群の善提寺	石塔群の善是寺
131　4行目	風化の著しい石塔	風化の著るしい石塔
133　下から7行目	一定の処理に終ってしまった。	一定の処理に終ってしまうた。
〃　下から1行目	再び劣化が進行してくる	再び劣化が行ってくる
134　註（2）	奈良国立文化財研究所	奈良国立文化財国立研究所
139　9行目	I・II・III・VI区に僅かに見えIV・VII・IX・XIII区には見られない	I・II・III区に僅かに見えIV・VII・IV・VIII・区には見られない
182	第37図XII区石造遺物出土状態実測図	第38図　XII区石造遺物出土状態実測図
図版　25	VI・VII・X区の五輪塔	VI・VII区の五輪塔

序

宮崎県教育委員会では地域振興整備公団の委託を受けて，昭和55年度から宮崎学園都市建設予定地内に所在する遺跡の発掘調査を実施しています。

本書は昭和56年１月から57年５月にかけて調査した「山内石塔群」に関する報告書です。

山腹から裾野にかけて発掘された五輪塔，板碑，宝塔等の総数は優に 400 を越えています。このような一大墓地の発掘調査は本県では初めてであります。

近年，区画整理事業やその他の開発事業により近世墓地がつぎつぎと改葬され消滅していく中で，中世から近世にかけて営まれた墓地の発掘調査が実施され，その全容が明らかにされたことは墓制研究上極めて意義深いことです。

本書が，学術関係者だけではなく社会教育や学校教育の分野にも広く活用されると共に，埋蔵文化財に対する認識と理解のための一助となることを期待します。

発掘調査にあたって深い御理解と御協力を示された地域振興整備公団や調査指導の先生方，地元清武町に対して衷心から御礼を申し上げます。

昭和59年３月

宮崎県教育委員会

教育長　後　藤　賢三郎

例　言

1　本書は，昭和56・57年度に実施した宮崎学園都市建設事業に係る山内石塔群の発掘調査報告である。

2　発掘調査は，地域振興整備公団宮崎学園都市開発事務所の委託を受けて，宮崎県教育委員会が実施した。

3　本書の執筆は，岩永哲夫・面高哲郎・永友良典・長津宗重・北郷泰道・菅付和樹・日高孝治・谷口武範・永友加奈子が行った。

4　「山内石塔群理解のための二・三の提言」について，水野正好氏に玉稿をいただいた。

5　石塔類の実測は，永友加奈子・増田慈子・日野美智子・酒井晴子・長友三千夫・鎌田亮一らが行い，遺物の実測は，上記のほか荒武望恵・桑畑　礼・荒木慶子・荒木真由美・鳥越智子・加藤泰子・富永優子・赤塚美智代（旧姓日野）らが行った。

6　遺構・遺物の製図は，調査員ほか増田慈子・酒井晴子・荒木慶子・桑畑　礼が行った。

7　石塔類の写真撮影は，主として石川悦子が行った。

8　五輪塔法量の計算については，県企画調整部電子計算課の協力を得た。

9　山内石塔群は，昭和56年度の概報Ⅱにおいて23号石塔群としたものであり，その後寺院名等確定出来ないため，小字名をとり遺跡名とした。

本 文 目 次

第Ⅰ章 序 説

第1節 調査の契機と経過

1. 調査に至る経緯……(北郷)…… 1
2. 調査の組織……(北郷)…… 2
3. 日誌抄……(長津)…… 4

第2節 遺跡の位置と環境……(岩永)…… 5

第Ⅱ章 遺構と遺物

第1節 はじめに

1. 石塔群のグルーピング……(北郷)……13
2. 石塔類についての覚書……(長津・菅付)……14

第2節 第Ⅰ区……(谷口)……16
第3節 第Ⅱ区……(谷口)……18
第4節 第Ⅲ区……(面高)……24
第5節 第Ⅳ区……(岩永)……26
第6節 第Ⅴ区……(日高)……31
第7節 第Ⅵ区……(日高)……32
第8節 第Ⅶ区……(日高)……32
第9節 第Ⅷ区……(長津)……35
第10節 第Ⅸ区……(長津)……36
第11節 第Ⅹ区……(北郷)……37
第12節 第Ⅺ区……(永友・菅付)……40
第13節 第Ⅻ区……(日高)……51
第14節 第XIII区……(北郷)……51

第Ⅲ章 山内石塔群の諸問題

第1節 石塔群の群構造と道の設定……(北郷)……52
第2節 石塔の形態分類と時期変遷……(長津・永友加奈子)……60
第3節 板碑の総括……(菅付)……72
第4節 土師器に関する二・三の問題について……(谷口)……91
第5節 山内石塔群出土の蔵骨器……(面高)… 111
第6節 特殊遺構と特殊遺物に関する一考察……(日高)… 113

第Ⅳ章 県内の石塔……(永友)… 116

第Ⅴ章 石塔群の保存と移転について……(永友)… 131

付 論 山内石塔群理解のための二・三の提言 奈良大学教授 水野 正好…… 135

挿図目次

第1図　山内石塔群周辺図……6
第2図　石塔群グルーピング……11～12
第3図　Ⅰ区遺構配置図……17
第4図　Ⅱ区A群敷石状態図……19～20
第5図　Ⅱ区A群遺構配置図……21
第6図　Ⅱ区B群遺構配置図……22
第7図　Ⅱ区C群遺構配置図……23
第8図　Ⅲ区遺構配置図……25
第9図　Ⅳ区A群遺構配置図……27
第10図　Ⅳ区B・C群遺構配置図……28
第11図　Ⅳ区B群敷石状態図……29
第12図　Ⅴ・Ⅵ・Ⅶ区遺構配置図……33～34
第13図　Ⅹ区遺構配置図……38
第14図　Ⅹ区土層断面図……39
第15図　Ⅺ区遺構配置図……41～42
第16図　Ⅺ区特殊遺構平面図及び断面図
（1・2・3号遺構）……45～46
第17図　Ⅺ区特殊遺構出土遺物実測図（1号遺構）
（1号遺構）……47～48
第18図　旧鉄肥街道と参墓道……53
第19図　道と広場の構造……55～56
第20図　空風輪形態分類図……60
第21図　火輪形態分類図……62
第22図　水輪形態分類図……64
第23図　地輪形態分類図……66
第24図　相輪形態分類図……68
第25図　五輪塔形態分類図……69
第26図　周辺遺跡出土土師器……99
第27図　本勝寺五輪塔実測図……119
第28図　宮崎県石塔群所在地図……124
第29図　Ⅰ区石造遺物出土状態実測図……173
第30図　Ⅱ区石造遺物出土状態実測図……174
第31図　Ⅲ区石造遺物出土状態実測図……175
第32図　Ⅳ区石造遺物出土状態実測図……176
第33図　Ⅴ・Ⅵ・Ⅶ区石造遺物出土状態実測図……177～178
第34図　Ⅷ区石造遺物出土状態実測図……179
第35図　Ⅸ区石造遺物出土状態実測図……180
第36図　Ⅹ区石造遺物出土状態実測図……181
第37図　Ⅺ区石造遺物出土状態実測図……182
第38図　Ⅺ区石造遺物出土状態実測図……183～184
第39図　ⅪⅠ区石造遺物出土状態実測図……185
第40図　Ⅰ区五輪塔(1)……186
第41図　Ⅰ区五輪塔(2)……187
第42図　Ⅱ区五輪塔(3)……188
第43図　Ⅱ・Ⅲ区五輪塔(4)……189
第44図　Ⅲ・Ⅳ区五輪塔(5)……190
第45図　Ⅳ区五輪塔(6)……191
第46図　Ⅳ区五輪塔(7)……192
第47図　Ⅳ区五輪塔(8)……193
第48図　Ⅳ区五輪塔(9)……194
第49図　Ⅳ区五輪塔(10)……195
第50図　Ⅳ区五輪塔(11)……196
第51図　Ⅳ・Ⅴ区五輪塔(12)……197
第52図　Ⅴ・Ⅵ・Ⅶ区五輪塔(13)……198
第53図　Ⅷ・Ⅸ・Ⅹ区五輪塔(14)……199
第54図　Ⅹ・Ⅺ区五輪塔(15)……200
第55図　Ⅺ区五輪塔(16)……201
第56図　Ⅰ・Ⅱ区五輪塔(17)……202
第57図　Ⅱ・Ⅳ区五輪塔(18)……203
第58図　Ⅵ区五輪塔(19)……204
第59図　Ⅶ・Ⅷ・Ⅹ区五輪塔(20)……205
第60図　Ⅺ区五輪塔(21)……206
第61図　Ⅹ・Ⅺ・Ⅰ・Ⅱ区五輪塔(22)……207
第62図　Ⅱ区五輪塔(23)……208
第63図　Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ区五輪塔(24)……209
第64図　Ⅳ・Ⅴ・Ⅵ区五輪塔(25)……210
第65図　Ⅵ・Ⅶ区五輪塔(26)……211
第66図　Ⅶ・Ⅷ・Ⅸ・Ⅹ区五輪塔(27)……212
第67図　Ⅹ・Ⅺ区五輪塔(28)……213
第68図　Ⅺ区五輪塔(29)……214
第69図　Ⅺ・ⅪⅠ・ⅪⅤ区五輪塔(30)……215
第70図　Ⅺ区宝篋印塔・五輪塔(31)……216
第71図　ⅪⅤ区五輪塔，Ⅰ・Ⅱ区空風輪(32)……217
第72図　Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ区空風輪(33)……218
第73図　Ⅳ区空風輪(34)……219
第74図　Ⅴ・Ⅵ・Ⅶ区空風輪(35)……220

第75図　Ⅶ・Ⅷ・Ⅸ区空風輪(36)…… 221
第76図　Ⅸ・Ⅹ・Ⅺ区空風輪(37)…… 222
第77図　Ⅺ・Ⅻ・ⅩⅢ・ⅩⅣ 区空風輪(38)…… 223
第78図　ⅩⅣ 区空風輪，Ⅰ区相輪(39)…… 224
第79図　Ⅰ区相輪(40)…… 225
第80図　Ⅱ・Ⅳ・Ⅴ・Ⅵ・Ⅹ・Ⅺ区相輪(41)…… 226
第81図　Ⅺ区相輪(42)…… 227
第82図　Ⅺ区相輪(43)…… 228
第83図　Ⅺ区相輪(44)…… 229
第84図　Ⅺ・ⅩⅢ・ⅩⅣ 区相輪，
　　Ⅵ・Ⅶ・Ⅹ区相輪の空風輪(45)…… 230
第85図　Ⅺ区相輪の空風輪，Ⅰ区火輪(46)…… 231
第86図　Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ区火輪(47)…… 232
第87図　Ⅳ・Ⅴ区火輪(48)…… 233
第88図　Ⅴ・Ⅵ区火輪(49)…… 234
第89図　Ⅵ・Ⅶ区火輪(50)…… 235
第90図　Ⅷ・Ⅸ区火輪(51)…… 236
第91図　Ⅸ・Ⅹ区火輪(52)…… 237
第92図　Ⅺ区火輪(53)…… 238
第93図　Ⅺ区火輪(54)…… 239
第94図　Ⅺ区火輪(55)…… 240
第95図　Ⅺ・ⅩⅢ・ⅩⅢ区火輪(56)…… 241
第96図　ⅩⅢ・ⅩⅣ 区火輪(57)…… 242
第97図　ⅩⅣ 区火輪(58)…… 243
第98図　ⅩⅣ 区火輪(59)…… 244
第99図　Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ区水輪(60)…… 245
第100図　Ⅲ・Ⅳ区水輪(61)……246
第101図　Ⅳ区水輪(62)……247
第102図　Ⅳ・Ⅴ区水輪(63)……248
第103図　Ⅵ・Ⅶ・Ⅷ区水輪(64)……249
第104図　Ⅷ区水輪(65)……250
第105図　Ⅷ区水輪(66)……251
第106図　Ⅷ・Ⅸ・Ⅹ・Ⅺ区水輪(67)……252
第107図　Ⅺ区水輪(68)……253
第108図　Ⅺ区水輪(69)……254
第109図　Ⅻ・ⅩⅢ区水輪(70)……255
第110図　ⅩⅢ・ⅩⅣ 区水輪(71)……256
第111図　ⅩⅣ区水輪(72)……257
第112図　ⅩⅣ 区水輪，Ⅰ・Ⅱ区塔身(73)……258
第113図　Ⅳ・Ⅺ・Ⅻ・ⅩⅣ 区塔身(74)……259
第114図　ⅩⅣ 区塔身，Ⅰ・Ⅱ区地輪(75)……260
第115図　Ⅱ区地輪(76)……261
第116図　Ⅲ区地輪(77)……262
第117図　Ⅲ・Ⅳ区地輪(78)……263
第118図　Ⅳ区地輪(79)……264
第119図　Ⅴ・Ⅵ区地輪(80)……265
第120図　Ⅵ・Ⅶ区地輪(81)……266
第121図　Ⅶ・Ⅷ区地輪(82)……267
第122図　Ⅷ区地輪(83)……268
第123図　Ⅷ・Ⅸ区地輪(84)……269
第124図　Ⅸ・Ⅹ・Ⅺ区地輪(85)……270
第125図　Ⅺ区地輪(86)……271
第126図　Ⅺ区地輪(87)……272
第127図　Ⅺ区地輪(88)……273
第128図　Ⅺ区地輪(89)……274
第129図　Ⅺ区地輪(90)……275
第130図　Ⅺ区地輪(91)……276
第131図　Ⅺ区地輪(92)……277
第132図　Ⅺ・Ⅻ・ⅩⅢ・ⅩⅣ 区地輪(93)……278
第133図　ⅩⅣ 区地輪(94)……279
第134図　ⅩⅣ 区地輪(95)……280
第135図　ⅩⅣ 区地輪(96)……281
第136図　ⅩⅣ 区地輪(97)……282
第137図　ⅩⅣ 区地輪(98)……283
第138図　Ⅰ区板碑(1)……284
第139図　Ⅱ区板碑(2)……285
第140図　Ⅲ・Ⅳ区板碑(3)……286
第141図　Ⅳ・Ⅴ・Ⅵ・Ⅶ・Ⅷ・Ⅸ区板碑(4)……287
第142図　Ⅹ区板碑(5)……288
第143図　Ⅹ区板碑(6)……289
第144図　Ⅺ区板碑(7)……290
第145図　Ⅺ区板碑(8)……291
第146図　Ⅺ区板碑(9)……292
第147図　Ⅺ区板碑(10)……293
第148図　Ⅺ・Ⅻ・ⅩⅣ区板碑(11)……294
第149図　土師器実測図(1)……295
第150図　土師器実測図(2)……296
第151図　土師器実測図(3)……297
第152図　土師器実測図(4)……298
第153図　土師器実測図(5)……299
第154図　土師器実測図(6)……300
第155図　土師器実測図(7)……301

第156図　土師器実測図(8)……302
第157図　土師器実測図(9)……303
第158図　土師器実測図(10)……304
第159図　土師器実測図(11)……305
第160図　土師器実測図(12)……306
第161図　土師器実測図(13)……307
第162図　土師器実測図(14)……308
第163図　土師器実測図(15)……309
第164図　土師器実測図(16)……310
第165図　土師器実測図(17)……311
第166図　陶磁器実測図……312
第167図　陶磁器およびその他の出土遺物……313
第168図　土製遺物・墨書石……314

表　目　次

表1　山内石塔群周辺遺跡一覧表(中世)…… 9
表2　各区毎の出土数……60
表3　空風輪の法量グラフ……61
表4　空風輪の法量比グラフ……61
表5　空風輪の法量分布……61
表6　各区における空風輪の形態別出土表……61
表7　データシート(空風輪)……61
表8　火輪の法量グラフ……63
表9　火輪の法量比グラフ……63
表10　火輪の法量分布……63
表11　各区における火輪の形態別出土表……63
表12　データシート(火輪)……63
表13　水輪の法量グラフ……64
表14　水輪の法量比グラフ……65
表15　水輪の法量分布……65
表16　各区における水輪の形態別出土表……65
表17　データシート(水輪)……65
表18　地輪の法量グラフ……66
表19　地輪の法量比グラフ……67
表20　地輪の法量分布……67
表21　各区における地輪の形態別出土表……67
表22　データシート(地輪)……67
表23　各区における相輪の形態別出土表……68
表24　日向の水輪の法量比の推移……70
表25　板碑類一覧表(1)……79
表26　板碑類一覧表(2)……80
表27　板碑類一覧表(3)……81
表28　板碑類一覧表(4)……82
表29　板碑類一覧表(5)……83
表30　板碑類一覧表(6)……84
表31　板碑類一覧表(7)……85
表32　板碑類一覧表(8)……86
表33　板碑類一覧表(9)……87
表34　板碑類一覧表(10)……88
表35　板碑類一覧表(11)……89
表36　板碑類一覧表(12)……90
表37　土師器分類表(1)……92
表38　土師器分類表(2)……93
表39　土師器法量表(1)……94
表40　土師器法量表(2)……95～96
表41　土師器法量推移……97
表42　周辺遺跡出土土師器法量表……99
表43　ヘラ切りと糸切りの各区出土数…… 100
表44　各区における類別出土数(1)…… 100
表45　各区における類別出土数(2)……101～102
表46　土師器法量表(1)…… 107
表47　土師器法量表(2)…… 108
表48　土師器法量表(3)…… 109
表49　土師器法量表(4)…… 110
表50　県内碑石経出土地名表…… 115
表51　県内の国および県指定文化財(石造物関係)…… 116
表52　県内の石塔一覧表(1)…… 125
表53　県内の石塔一覧表(2)…… 126
表54　県内の石塔一覧表(3)…… 127
表55　県内の石塔一覧表(4)…… 128
表56　県内の石塔一覧表(5)…… 129
表57　県内の石塔一覧表(6)…… 130

五輪塔類法量表目次

空風輪法量表(1)…… 144
空風輪法量表(2)…… 145
空風輪法量表(3)…… 146
空風輪法量表(4)…… 147
空風輪法量表(5)…… 148
空風輪法量表(6)…… 149
空風輪法量表(7)…… 150
空風輪法量表(8)…… 151
火輪法量表 (1)…… 152
火輪法量表 (2)…… 153
火輪法量表 (3)…… 154
火輪法量表 (4)…… 155
火輪法量表 (5)…… 156
水輪法量表 (1)…… 157
水輪法量表 (2)…… 158
水輪法量表 (3)…… 159
水輪法量表 (4)…… 160
水輪法量表 (5)…… 161
水輪法量表 (6)…… 162
水輪法量表 (7)…… 163
水輪法量表 (8)…… 164
塔身法量表 (1)…… 164
地輪法量表 (1)…… 165
地輪法量表 (2)…… 166
地輪法量表 (3)…… 167
地輪法量表 (4)…… 168
相輪法量表 (1)…… 169
相輪法量表 (2)…… 170
相輪法量表 (3)…… 171
相輪的空風輪法量表 (1)…… 171

図 版 目 次

図版1 発掘前の全景(西から)
発掘後の全景(西から)
図版2 発掘前の全景(東丘陵上から)
発掘後の全景(東丘陵上から)
図版3 I区・検出の状況(東から)
I区・復元の状況(西から)
図版4 II区・検出の状況(東から)
II区・復元の状況(北から)
図版5 II区C群・板碑復元の状況(東から)
I・II区の遠景(西から)
図版6 III区・検出の状況(北から)
III区(上段)の遠景(西から)
図版7 IV区・検出の状況(東から)
IV区・「コ」の字形配列検出の状況(北から)
図版8 IV区・「コ」の字形配列復元の状況(北から)
IV区・「コ」の字形配列復元の状況(南から)
図版9 IV区・骨片(左手)散乱と敷石(地輪下)
の状態(西から)
IV区・蔵骨器、合子の出土状態
図版10 IV・V・VI区の遠景(西から)
VI区・検出の状況(北から)
図版11 VII区・敷石の状態(東から)
VII区・検出の状況(南から)
図版12 X区・敷石の状態(東から)
X区・敷石下方の土層状態
図版13 XI区・検出の状況(東から)
XI区・地輪、板碑の状態(東から)
図版14 XI区・特殊遺構検出の状況(1号遺構)
XI区・特殊遺構検出の状況(3号遺構)
図版15 XIII区・検出の状況(南から)
XIII区・蔵骨器の出土状態
図版16 I・II区の近輪塔
図版17 II・III区の五輪塔
図版18 III・IV区の五輪塔
図版19 IV区の五輪塔(その1)
図版20 IV区の五輪塔(その2)
図版21 IV区の五輪塔(その3)
図版22 IV区の五輪塔(その4)

図版23　Ⅳ区・五輪塔(その５)
図版24　Ⅳ・Ⅴ区の五輪塔(その６)
図版25　Ⅵ・Ⅶ・Ⅹ区の五輪塔
図版26　Ⅷ・Ⅸ・Ⅹ区の五輪塔
図版27　Ⅹ区の五輪塔，Ⅰ・Ⅳ区の宝塔的五輪塔
図版28　Ⅳ・Ⅺ区の宝塔的五輪塔
図版29　Ⅰ区の変形五輪塔
図版30　Ⅰ・Ⅱ・Ⅶ区の五輪塔
図版31　Ⅱ・Ⅳ・Ⅵ区の五輪塔
図版32　Ⅵ・Ⅶ区の五輪塔
図版33　Ⅶ・Ⅷ・Ⅹ区の五輪塔
図版34　Ⅰ・Ⅳ・Ⅵ・Ⅶ・Ⅷ区の五輪塔
図版35　Ⅰ・Ⅱ・Ⅶ・Ⅺ区の五輪塔
図版36　Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ区の五輪塔
図版37　Ⅴ・Ⅵ・Ⅶ区の五輪塔
図版38　Ⅹ・Ⅺ区の五輪塔
図版39　Ⅺ区の五輪塔
図版40　Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ区の空風輪
図版41　Ⅳ区の空風輪
図版42　Ⅳ・Ⅴ・Ⅵ区の空風輪
図版43　Ⅵ区の空風輪
図版44　Ⅶ区の空風輪
図版45　Ⅶ・Ⅷ区の空風輪
図版46　Ⅷ・Ⅸ区の空風輪
図版47　Ⅸ・Ⅹ区の空風輪
図版48　Ⅹ・Ⅺ区の空風輪
図版49　Ⅺ・Ⅻ区の空風輪
図版50　Ⅻ・ⅩⅢ・ⅩⅣ区の空風輪
図版51　ⅩⅣ区の空風輪
　　《赤外線写真》Ⅵ区墨書のある地輪
図版52　Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ・Ⅵ・Ⅷ・Ⅹ区の相輪
図版53　Ⅹ・Ⅺの相輪
図版54　Ⅺ・Ⅻ・ⅩⅣ区の相輪
図版55　Ⅵ・Ⅶ・Ⅹ・Ⅺ区の相輪的空風輪
　　《赤外線写真》天文十年銘のある火輪
図版56　Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅵ区の火輪
図版57　Ⅶ・Ⅷ・Ⅸ・Ⅹ・Ⅺ区の火輪
図版58　Ⅺ・Ⅻ・ⅩⅢ・ⅩⅣ区の火輪
図版59　Ⅰ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ・Ⅵ区の水輪
図版60　Ⅵ・Ⅶ・Ⅷ区の水輪
図版61　Ⅳ・Ⅷ・Ⅸ・Ⅹ・Ⅺ・Ⅻ・ⅩⅢ・ⅩⅣ区の水輪・塔身
図版62　Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅵ・Ⅷ・Ⅺ区の塔身・地輪
図版63　Ⅳ・Ⅵ・Ⅶ・Ⅷ・Ⅹ・Ⅺ区の地輪
図版64　Ⅺ区の地輪
図版65　Ⅺ・Ⅻ・ⅩⅣ区の地輪
　　《赤外線写真》Ⅺ区の墨書のある塔身
図版66　Ⅻ区・宝篋印塔笠など
図版67　板碑(その１)
図版68　板碑(その２)
図版69　板碑(その３)
図版70　《赤外線写真》板碑(その４)
図版71　土師器　(1)
図版72　土師器　(2)
図版73　土師器　(3)
図版74　土師器　(4)
図版75　陶磁器　(1)
図版76　陶磁器　(2)
図版77　特殊遺物(1)
図版78　特殊遺物(2)
図版79　特殊遺物(3)土製仏像
図版80　特殊遺物(4)碧石鉦・銅(鉄)銭

第Ⅰ章　序　　説

第１節　調査の契機と経過

１．調査に至る経緯

石塔類の調査は，それらが有形の物として顕在し，かつ多くの場合現在においても人々の信仰の対象として生きていることから，考古学的調査の俎上に乗りにくい面をもっている。勿論，仏教考古学のジャンルの中で調査対象として取り上げられ，既に多くの成果が蓄積されているが，発掘調査という手法を経過することにおいては，決して豊富な経験をもつものではなかったと思われる。人々の信仰に生き続けることの所産として，石塔群の配列が変えられたり，五輪塔の組み合せが改変されたりする。従って，石塔類の調査は外表的な観察にとどまることが多く，ことに宮崎県下では，五輪塔・板碑などの石塔類，総じては中・近世の墓が考古学的手続きを経て調査される機会は少なかったといえる。

宮崎市大字熊野から宮崎郡清武町大字木原にまたがる宮崎学園都市建設計画が具体化するに伴い，県文化課では，昭和54年10月24日から26日にかけて清武町域，昭和54年11月12日から15日にかけて宮崎市域の分布調査を実施した。その結果22箇所の遺物散布地と１箇所の石塔群の所在を確認した。最初に確認されたのは，山の中腹の雑木林中に苔むした，10数基分の五輪塔の断片と板碑，山裾の大型板碑の10基に満たない数であった。山内（23号地）石塔群は，こうして昭和55年７月段階においては，「移転を要する石塔群」として検討の俎上に乗った。

しかし，この段階ではまだ発掘調査という考古学的調査の採用については，議論が残されており，昭和55年10月３日に県文化財保護審議会委員，石川恒太郎・寺原俊文両氏を依頼し，移転等取り扱いを含めての現地調査を実施し，その具体的検討に入った。

また，学園都市における発掘調査は，昭和55年10月27日から入料（５号地）遺跡の調査を最初に着手したが，一方では第１回宮崎学園都市発掘調査委員会を昭和55年10月17日に開催し，発掘調査全体の方針等について検討すると共に，石塔群の調査の方法的な検討を行った。

その結果，山内石塔群を考古学的調査の対象として発掘することになり，昭和56年10月15日付けで地域振興整備公団宮崎学園都市建設事務所との間で契約し，受託することになった。

調　査　着　手

第Ⅱ区の発掘調査前の状態

発掘調査には，昭和57年１月11日に着手したが，森林の伐採，表土の除去が進むに従い，多くても数十基程度の石塔類が検出されるに過ぎないであろうとした予想は大きく覆され，分布面も上・中・下の三段に広がり，石塔類の総基数（五輪塔については原位置を保つと思われる地輪の数）が450基を越えるに至った。こうした事態から，年度内での調査の終了が困難となり，昭和57年３月３日に地域振興整備公団に対し，調査延長を申し入れ，その結果昭和57年４月１日を契約日とし，履行期間４月２日から５月31日までの調査延長が可能となった。

第Ⅱ区の発掘調査検出の状態

その間，前原北（20号地）遺跡調査指導のため原口正三氏を招き，山内石塔群の調査についても有効な指摘をいただき，水野正好氏には石塔群の調査全体についての御指導をお願いした。また，昭和56年度の第２回発掘調査委員会を開催し，中間報告すると共に，測量・実測について奈良国立文化財研究所の伊東太作氏の御指導を受けた。

以上の経過を経て，ほぼ５ヶ月にわたる発掘調査は終了したが，検出した石塔群は，清武町教育委員会において移転・保存・整備することになり，山内石塔群の北西約１kmの，かつて勢田寺から移されたとされる弘安銘の五輪塔，そして仁王石像，千手観音のある黒坂観音の隣接地が準備された。県文化課では，移転地において実測等整備・分類作業を進めると共に，地元清武町においては保存処理，整備計画を立て実施している。

２．調査の組織

発掘調査委員会および調査事務局の組織は，次のとおりである。

宮崎学園都市遺跡発掘調査委員会

委員長	石川恒太郎	県文化財保護審議会委員
委員	遠藤尚	宮崎大学教授（委員は昭和56年度まで）
	岡崎敬	九州大学教授
	田中熊雄	宮崎大学名誉教授
	田中琢	奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター研究指導部長（現センター長）
	寺原俊文	県文化財保護審議会委員
	日高正晴	県文化財保護審議会委員
	森貞次郎	九州産業大学教授
	柳宏吉	県文化財保護審議会委員
	横山浩一	九州大学教授
特別調査員	水野正好	奈良大学助教授（現教授）
	河野治雄	鹿児島県維新史料編纂所嘱託
赤外線写真撮影指導	石丸洋	九州歴史資料館写真室

事務局　宮崎県教育委員会

	昭和56年度	昭和57年度	昭和58年度
教育長	後藤賢三郎	後藤賢三郎	後藤賢三郎
教育次長	甲斐俊則	内田琢也	内田琢也
教育次長	船木　哲	船木　哲	船木　哲
文化課長	山本一麿	井上鉄哉	井上鉄哉
課長補佐	村田広則	佐野芳弘	佐野芳弘
庶務係長	島中　勲	島中　勲	安部信宏
主任主事	穂之上　昇	穂之上　昇	穂之上　昇
文化財係長	山下正明		
主幹兼埋蔵文化財係長		田中　茂	田中　茂
(調査員)			
主任主事	岩永哲夫	主任主事 岩永哲夫 (埋蔵文化財センター)	主任主事 岩永哲夫
主事	面高哲郎	〃 面高哲郎	〃 面高哲郎
〃	永友良典	主事 永友良典	〃 永友良典
〃	北郷泰道	〃 長津宗重	主事 長津宗重
〃	山中悦雄	〃 北郷泰道	〃 北郷泰道
〃	菅付和樹	〃 菅付和樹	〃 菅付和樹
		〃 日高孝治	〃 日高孝治
		〃 谷口武範 (埋蔵文化財センター)	〃 谷口武範

調査協力　清武町教育委員会

伊勢木俊秀　日南市議会議長・願成就寺住職

佐藤美春　鵜戸神宮権宮司

佐伯恵達　宮崎県立宮崎東高等学校教諭・長昌寺住職

調査補助員　有田辰美，永友加奈子(旧姓高橋)，佐藤穣治，長友三千夫，鎌田亮一

埋蔵文化財センター整理専門員　津隈久美子

整理補助員　増田慈子，酒井晴子，日野美智子

写真撮影　石川悦子

整理員
(昭和56～58年度)　藤丸美代子，渡辺祥子，菊野悦子，冨田優子，長友玲子，手束千恵美，有田具子，今橋牧子，勇瑞枝，鳥越智子，荒武望恵，桑畑礼，荒木慶子，荒木真由美，加藤泰子，富永優子，橋本真智子，松岡邦子，清水玲子，永峰まり子，竹島典江，川崎法子

3．日誌抄

昭和57年

1月11日　調査区内の雑木等の除去

1月12日　埋没した石塔の検出作業

「おおよそ10区程1区画された窪地部分に石塔群があり，各群が一親族あるいは一村落を示すものと思われる」

1月18日　五輪塔等が以外に数多く埋もれており，西区群では葺石状に河原石が出土する。発掘区に測量基本杭設定。

1月25日　平板実測に入る。

2月22日　森林組合が行なっていた野焼きの火が燃え広がったため，消火作業を手伝う。その際，山の北面の最下部突端と，中腹よりやや上で，新たに石塔群を発見した。

4月2日　各区の石塔群の復元・清掃・写真撮影作業に入る。

4月5日　石塔の搬出作業開始

4月16日　石塔の実測・写真撮影

4月19日　地形平板測量

4月28日　石塔を黒坂へ移転

4月30日　発掘調査終了

5月1日　黒坂で石塔の実測作業に入る。

昭和58年

5月20日　黒坂で石塔の実測作業に入る。

7月7日　写真撮影作業に入る。

12月23日　実測・写真撮影終了。

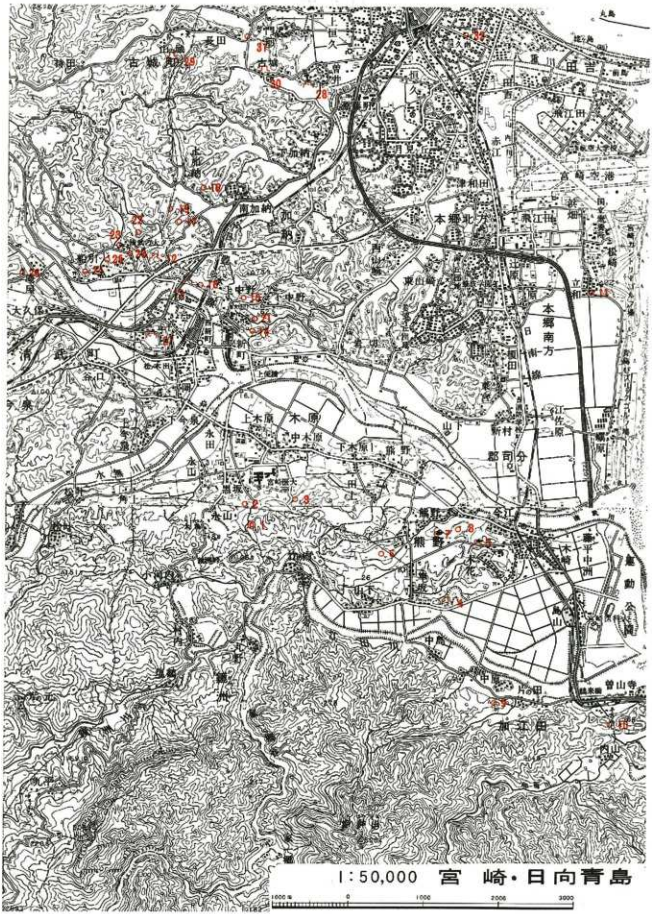
第2節　地理的位置と歴史的環境

宮崎学園都市は宮崎市の南郊清武川と加江田川に狭まれた宮崎市木花地区（大字熊野）から宮崎郡清武町木原地区に跨がる丘陵地を中心に約300haの広大な地域に建設される。宮崎学園都市遺跡群はその地域内に所在し，総面積約30haを占める。

宮崎県を地形的に概観すると，西部には祖母山（1,758m），傾山（1,605m）を最高峰とする標高1,300～1,500mの九州山脈が南北に連なり，南西部には高千穂峰（1,574m），新燃岳（1,421m），韓国岳（1,398m），白鳥山（1,363m），霧島岳（1,344m）などの霧島火山地帯が控えているなど県土の73%を山岳地帯が占めている。東部には比較的単調な海岸線が南北に走り，その間に宮崎平野を最大とする大小の平野部が開けているが，面積的には狭い。また，南西部には小林地方から都城地方に続く盆地が開けている。

清武町は清武川中・下流域を中心とした広がりをみせ，加納，船引，今泉，木原の四地区に大別される。加納地区は北・東は宮崎市に接し，清武川の左岸丘陵間に開析されたわずかな沖積地と宮崎市街の南を東流する八重川の小支流によって構成される。船引地区は加納の西部に隣接し，清武川の中流域一帯をさす。西は宮崎郡田野町に接する。今泉地区は西南部に位置し，鰐塚山系の東北部一帯にあたり，荒平山（603m）を頂点にした山岳・丘陵が東北に延びている。清武川の支流，岡川，水無川に狭まれ，平野部は少ない。木原地区は東南部に位置し，南は宮崎市鏡洲へ続く丘陵を境にしており，北は清武川の右岸を主とするが，一部左岸の新町周辺を含む。東は宮崎市熊野に接する。

山内石塔群は清武町大字木原字山内に所在する。立地的には鵜戸山地の北西端に位置する双石山（509m）が分岐しながら北に延びるが，その最北端の丘陵北斜面に位置する。前面はわずかに開けた狭長な水田面が広がり，清武川の支流田上川が西から東に貫流している。水田と田上川を狭む対岸にも東西に延びた低丘陵が広がり，宮崎医科大学，赤坂（7号地）遺跡，下田畑（1号地）遺跡へと続く。対岸の低丘陵上に勢田寺が所在したと考えられ，同寺に帰属していたとみられる石塔群を含めた勢田寺の寺域は日向地誌によっても相当な勢力を有していたと考えられる。日向地誌[1]には「勢田寺址，真言宗飫肥順成就寺ノ末派ナリ黒阪勢田堂ノ下池ノ上ニアリ古ハ十二ノ支院アリト云ヒ傳フ頗ル大伽藍ナリシト見ユ明治五年壬申廢ス今山林トナル」とある。石塔群の西には旧飫肥街道が通じており，宮崎市鏡洲から山内石塔群に至り，黒坂へと抜けている。石塔群の北900mの黒坂地区に所在する黒坂観音堂の千手観世音大菩薩像と参道入口に立つ仁王像二軀は勢田寺から移転したものと言われ，観音堂脇にある五輪塔も同じく勢田寺からの移転と考えられる。水輪には「弘安八年大歳乙酉四月廿六日造立者法眼蓮覺」と「弘安八年歳次乙酉六月十五日造立者僧蓮覺」の刻銘がある。月日の相違は何によるものかわからないが，造立月日と供養月日とも考えられる。昭和41年7月17日県指定有形文化財になった。勢田寺の創建は元久2年(1205)とされるが，現存する山内石塔群の五輪塔，板碑の中の銘では最古はⅫ区出土塔身の墨銘応永25年（1418），最新はⅩ区出土板碑の墨銘承応3年（1654）であり，この間の二百年余を中心にして石塔群の造営が行われたと考えて良いだろう。



第1図　山内石塔群周辺図

次に山内石塔群をとりまく歴史的環境について概観したい。

大化の改新（645）によって律令制がしかれ，以前の私有化された土地，人民が「公地公民」となり，日向は臼杵，児湯，那珂，宮崎，諸県の五郡を治め，国府は日向のほぼ中央に位置する児湯に置かれることとなった。国府は西都市三宅の地に比定されている。「延喜式」には日向の十六駅の記載がある。北から長井，川辺，刈田，美弥，去飛，児湯，当磨，広田，救麻，救弐，亜椰，野後，夷守，真砺，水俣，嶋津の十六駅である。この中の救麻駅が「建久図田帳」にみえる隈野，現在の宮崎市大字熊野に比定され，この地が交通の要衝であったことが理解できる。しかし，駅家の所在が現在のどの位置にあたるか明確ではなく，課題として残されている。平安時代になると，律令制の有名無実化が進行し，日向のほとんどが荘園化してしまうが，建久８年（1197）の「建久図田帳」にはこの地方は国富荘として登場する。国富荘は大淀川を挟んで河北・河南に分けられるが，図田帳には八条女院領になっており，「田代千五百二町」を占める。国富荘の開発は日下部氏によって行われ，中心は「国富本郷二百四十町」の本郷（宮崎市本郷）にあると考えられている。学園都市遺跡周辺は旧加納村，旧木原村，旧熊野村，旧加江田村あたりが含まれるが，図田帳には加納二百町，隈野八十町，加江田八十町，地頭平五の名がみえる。国富荘は日下部氏にかわって土持氏の支配するところとなるが，保元（1156～58）の頃には八条女院領になり，平氏滅亡後没官領となったものの寿永３年（1184）には平頼盛の所有地となった。国富荘はその後建武中興の際，後醍醐天皇から足利尊氏に与えられ，伊東祐持が国富荘，穆佐院の確保のため建武２年（1335）日向に下っている。祐持も児湯郡都於郡三百町を恩賞として与えられている。南北朝期には日向でも南朝方，北朝方に分かれての戦いが繰り広げられている。更に下って尊氏は暦応３年（1340），国富荘を天竜寺に寄進している。その後天授５年（1379）天竜寺領は実質的に支配してきた伊東，土持の二氏に分領され，加納は伊東氏の支族清武祐行，隈野は土持氏の支族熊野氏，加江田は土持氏の支族岡富氏の領するところとなった。(2)

天正19年「日向国五郡分帳」および「日向国風土記」では木原の名称がみえ，加納八十町，木原八十町とあることから，平部嶋南は木原村は加納二百町の内より分かれたのであろうとしている。また，図田帳では加納村，熊野村，加江田村は宮崎郡に属するが，その後，熊野村，加江田村は那珂郡に属している。これらにより近世初期にはすでにこの地方の村落区分は成立していたことがわかる。

この地方では14世紀末から伊東，島津の攻防が繰り返されたが，文安年間に伊東祐堯の所領となって以来，天正５年(1577)の義祐の豊後落ちまで約130年間伊東氏が領することになる。この時期の城跡として，清武城，車坂城，曽井城，紫波洲崎城などがあり，車坂城を除いて伊東四十八城に数えられる。義祐の後，天正15年(1587)まで島津氏の支配にはなったが，義祐の子祐兵が曽井に封ぜられ(天正15)，飫肥に配されて(天正16)以来幕末まで伊東氏飫肥藩として世襲された。

以下，中・近世のそれぞれの周辺遺跡の概略について記していきたい。

清武城跡は昭和51年10月から12月にかけて九州縦貫自動車道の通過する清武城の一角，通称二の丸と呼称される南平場について県教育委員会が発掘調査を行った。(3) 本丸は二の丸の北標高85ｍの最高所にある。調査の結果，縄文土器等の出土もあったが，城跡に関係するものとして石垣列，

V字状溝，建物跡の柱穴群などの遺構，青磁，白磁，染付などの輸入陶磁，土師器など16世紀前半を中心とする遺物の検出をみている。創築の時期はわからないが，14世紀後半には文献上にあらわれることから大体14世紀創建を考えておいて良いだろう。清武城は元和元年（1615）の一国一城の令により廃城になっている。また，清武城周辺には古城跡をはじめ多くの寺院の建立があり，その状況を日向地誌によりみていくことにする。

古城跡「清武城址ト中野岡トノ中間ニアル一岡ナリ高清武城址ト斉シ其嶺方平均一町許遠クシテ之ヲ望メバ截然トシテ城形ヲナス何人ノ居城ナリシヤ傳ハラズ蓋シ清武城ノ未タ創築セザル以前ノ城ト見ユ今尚古城ト呼テ地名トナル」

文永寺跡「禅宗妖肥報恩寺ノ末派ナリ中野岡ノ東南隅木原村界字檜内ニアリ文永中創建セルナリト見ユ明治五年壬申廃ス」

蓮徳寺跡　「法華宗中野岡ノ中央字楠馬場ノ東畔ニアリ明治五年壬申廃ス」

玄松院跡　「宗派審ナラス中野岡ノ西北古城ノ北畔ニアリ廃毀ノ年月考フ可ラス」

中山寺跡　「真言宗妖肥願成就寺ノ末派ナリ清武城址北一町許一ト迫ヲ隔テ本城ト相対峙セシ一岡上ニアリ要害ノ地ナレハ一寺ヲ建テ本城ノ支城ノ如クセシモノト見ユ明治五年壬申廃ス」

登能尾山跡　「中山寺ノ西北ニ当リ一隍ヲ隔ツ清武城ノ支城ナリシト想ハル此モ古ハ蓋シ寺址ナリ

観音寺跡　「登能尾山トート迫ヲ隔テ西北ニ連ナル一岡ナリ古観音寺ト云寺ノアリシト見エ…」

阿弥陀寺跡　「真言宗妖肥願成就寺ノ末派ナリ本村ノ東白砂阪ニアリ明治五年壬申廃ス」

細川氏政所跡　「南加納ニアリ今其地ヲ失フ元弘建武ノ頃細川氏ノ政庁ナリ」

車坂城は学園都市建設用地の中に所在しており，陣ノ内（18号地）遺跡の南に位置する。昭和53年頃開発事業の土取場として採土され，その多くを失っているが，一部は現在も良くその姿を留めている。加江田城ともいわれ，伊東四十八城に入っておらず，平部嶋南は永禄(1558～1569)中にはすでに廃城になったと考えている。日向地誌によれば熊野村には法満寺跡，貞永寺跡も記載され，貞永寺の項には「真言宗文政ノ頃廃ス今畦圃トナル」とある。板碑，五輪塔の所在した堂地東（11号地）遺跡も字名が堂地として残っており，寺院の可能性が高く，貞永寺の関係も考えられる。板碑には天正17年の刻銘，五輪塔の火輪には大永の刻銘がみられる。法満寺跡の項には「真言宗妖肥願成就寺ノ末派ナリ木花山ノ南畔ニアリ……明治五年壬申廃ス」とある。加江田村には円南寺跡，内山寺跡がある。円南寺は日向七堂伽藍の一つで万治元年（1658）に創立され，日向地誌には「曹洞宗妖肥長持寺ノ末派ナリ片田ニアリ藩治ノ時ハ妖肥藩主伊東氏ヨリ禄八石ヲ給ス明治五年壬申廃ス」とあり，内山寺跡は「真言宗妖肥願成就寺ノ末派ナリ内山ニアリ明治五年壬申廃ス」とある。

寺跡については現在の寺の中にも中世以来の歴史をもつものがあるが，ここでは明治五年の廃仏毀釈による廃寺を中心にあげた。

註

(1) 日向地誌の記載の部分では一部文字を変更した。

(2) 日高次吉「宮崎県の歴史」1970.6

(3) 宮崎県教育委員会「城内遺跡（清武城跡）」『九州縦貫自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書(3)』1979

参考文献

1.「建久図田帳」「日向国五郡分帳」日向郷土史料集第５巻所収　日向郷土史料集刊行会　1963

2．平部嶋南　「日向地誌」1929.10

3．日高次吉　「宮崎県の歴史」1970.6

表１　山内石塔群周辺遺跡一覧表（中世）

番号	遺跡名	所在地	種別	文献	備考
1	山内石塔群	宮崎郡清武町大字木原	石塔群		鎌倉～江戸　五輪塔，板碑 土師器，陶磁器，古銭 ほか
2	勢田寺跡	〃	寺跡	「宮崎郡木原村」『日向地誌』平部嶋南 著 「清武町の文化財」第四集　清武町文化 財保護審議委員会　1981	石段造立記念碑 （宝暦９年）
3	長明寺跡	〃	〃		現在は木原の県道沿いに移転している。
4	車坂城跡	宮崎市大字熊野	城跡 （山城）	「郡司郡熊野村」『日向地誌』	
5	今江城跡	〃	〃 （〃）		車坂城が北に延びる一角であり，ここでは今江城としておく
6	堂地東遺跡 （11号地）	〃	集落跡 墓地	「宮崎学園都市埋蔵文化財発掘調査概報（Ⅰ）」県教委　1982	旧石器～江戸　住居跡，掘立建物，近世墓，五輪塔，板碑，弥生土器，石器，鉄器，青磁，白磁，
7	前原西遺跡 （16号地）	〃	〃 〃	「宮崎学園都市埋蔵文化財発掘調査概報（Ⅱ）」県教委　1981	旧石器～室町　中世の「方形周溝墓」，掘立柱建物，溝状遺構，土師器，銅銭，滓鞴，
8	前原北遺跡 （20号地）	〃	集落跡 館跡	「宮崎学園都市埋蔵文化財発掘調査概報（Ⅱ）」県教委　1981	弥生～鎌倉　住居跡，掘立柱建物，土壙，弥生土器，土師器，鉄器，白磁，陶器，
9	円南寺跡	宮崎市大字加江田	寺跡	「郡司郡加江田村」『日向地誌』 「木花郷土誌」財団法人　木花振興会 1980	明治14年復元され，宮崎市常教寺の末寺になる
10	曽山寺跡	〃	〃	「木花郷土誌」1980	
11	松崎寺跡	宮崎市大字田吉	〃	「郡司郡田吉村」『日向地誌』	
12	清武城跡	宮崎郡清武町大字加納	城跡 （山城）	「宮崎郡加納村」『日向地誌』 「城内遺跡」『九州縦貫道埋蔵文化財発 掘調査報告書(3)』宮崎県教委1979 「清武町の文化財」第三集　1980	南北朝～江戸　城内(伊東墓地 （二の丸跡）　石塔列， ピット群，土壙，青磁，白磁，陶付，ほか
13	古城（こじょう）跡	〃	〃 （〃）	「宮崎郡加納村」『日向地誌』	
14	文水寺跡	〃	寺跡	同上	
15	蓮徳寺跡	〃	〃	「宮崎郡加納村」『日向地誌』 「清武町の文化財」第三集　1980	墓地
16	玄松院跡	〃	〃	「宮崎郡加納村」『日向地誌』	
17	中山寺跡	〃	〃	「宮崎郡加納村」『日向地誌』 「清武町の文化財」第三集　1980	板碑（安永２），住職墓地，無縫塔（安永５，天保６，天保13）
18	登能尾山跡	〃	〃	「宮崎郡加納村」『日向地誌』	
19	観音寺跡	〃	〃	「宮崎郡加納村」『日向地誌』 「清武町の文化財」第三集　1980	薬像板碑，地蔵菩薩，三界万霊碑
20	阿弥陀寺跡	〃	〃	「宮崎郡加納村」『日向地誌』	

番号	遺跡名	所在地	種別	文献	備考
21	安楽寺跡	宮崎郡清武町大字加納	寺跡		
22	弥勒寺跡	宮崎郡清武町大字船引	〃	「宮崎郡船引村」『日向地誌』	
23	神宮寺跡	〃	〃	同上	
24	上岡寺跡	〃	〃	同上	
25	常妙寺跡	〃	〃	同上	
26	内山寺跡	〃	〃	同上	現在もあり
27	井手ヶ城跡	〃	城跡(山城)		
28	曽井城跡	宮崎市大字恒久	〃(〃)	「那珂郡恒久村」『日向地誌』	
29	山ノ城跡	宮崎市古城町	〃(〃)	「宮崎郡古城村」『日向地誌』	
30	古城(ふるじょう)跡	〃	〃(〃)	同上	
31	今福寺跡	〃	寺跡	同上	現在は伊満福寺になっている
32	福長院跡	宮崎市大字恒久	〃	「那珂郡恒久村」『日向地誌』	

この他にも日向地誌に多くの廃寺が記載されているが，確認していないので割愛した。この表の作成（清武町分）には，清武町教委社会教育課長　藤合国利氏の協力を得た。

第2図　石塔群グルーピング

第Ⅱ章　遺構と遺物

第1節　はじめに

1．石塔群のグルーピング

石塔群の群構造の把握について，本報告では「区」「群」「単位」の三つの概念を設定している。「区」は，地形上あるいは開削整備された面を基本に区画される場所を示している。従って，区には次に言う幾つかの「群」を含むことがある。「群」は，家族あるいは一族により造営された石塔のまとまりとみなせるものである。これらは，幾つかの「単位」から成立している。「単位」は，石塔群における最小のまとまりで，２基以上の石塔から成るが，個人あるいは夫婦といった関係の表出にかかるまとまりとみなせるものである。

山内石塔群は，北に向かい延びた丘陵端を大きく３段に開削した平坦面に造営されている。３段の開削面を上段・中段・下段に分け，上段の東側からⅠ区とする。

Ⅰ区は、開削面の法面を背に２基を単位とした五輪塔を中心に成立している。Ⅱ区は，Ⅰ区の西に，細かくは二段に開削された面に，４～６基といったまとまりを一列に配す群から成っている。Ⅲ区は，丘陵の西面に，ほぼ南北に長く開削された面に，２～４基を単位として構成される場所である。

Ⅳ区は，下段の東に位置し，「コ」の字形配列および一群の五輪塔から成っている。Ⅴ区は，Ⅳ区の西に，ほぼ南北に配列された群を中心に成立している。Ⅵ区は，Ⅴ区のさらに西に，50㎡程の〈広場〉[1]を挟み，Ⅴ区と同じく南北に配列された五輪塔の群から成立している。Ⅶ区は，Ⅵ区の西にやや段を低くし開削され，Ⅴ・Ⅵ区と同様南北配列の五輪塔を中心に成立している。Ⅷ区は，丘陵の西面に，Ⅲ区の下に造営されている。

Ⅸ区は，下段の東に位置し，比較的石塔のまとまりに薄い区である。Ⅹ区は，Ⅸ区の西に，おおむね２基を単位に成立している。Ⅺ区は，山内石塔群の中で最も大きい区であり，最も整備された区で，ほぼ東西に配列された多くの五輪塔を中心に成立している。Ⅻ区は，丘陵の西面に，Ⅶ区の下に造営された小さな区である。。

ⅫⅠ区は，石塔群の最も東に，やや離れて存在する２次的集積の五輪塔から成る区である。

ⅫⅡ区は，近年この地に豚舎が建設された際に集積された板碑・五輪塔から成り，石塔群の下段からさらに一段低い豚舎建設面を一括して呼称することにする。

註

(1) ここでいう〈広場〉は，石塔群の中心部にあり祭祀・儀式に際し，石塔群の構成者が誰でも使用することの出来る，共同の場という意味である。

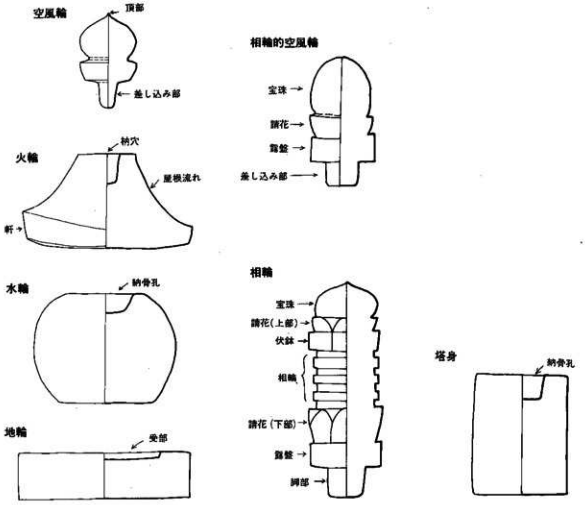
2．石塔類についての覚書

山内石塔群の五輪塔は，空風輪533，火輪347，水輪495，地輪539，計1914検出された。五輪塔は，空風輪・火輪・水輪・地輪に分け，各部名称は図の通りである。

相輪は132検出されており，各部名称は図の通りである。

変形空風輪は，13検出されており，「相輪的空風輪」と仮称し，各部名称は図の通りである。

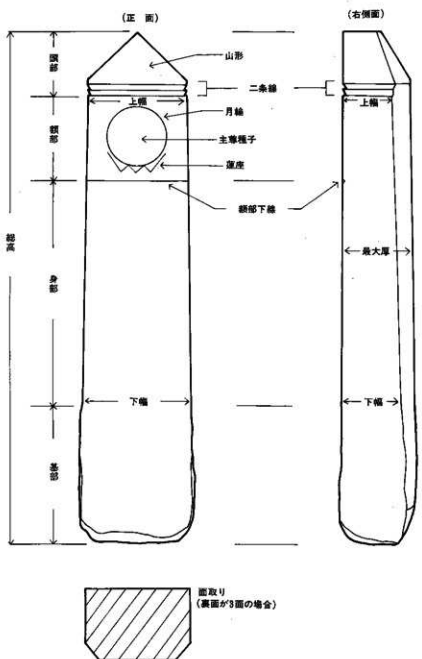
空風輪・火輪・水輪・地輪・相輪の形態分類については第Ⅲ章第2節石塔の形態分類と時期変遷で触れる。



五輪塔各部名称

石塔の各部名称

山内石塔群における「板碑」は，服部清道氏の分類による九州型板碑，或るいは，石田茂作氏の類型板碑・自然石板碑等に若干の類似石造遺物を加えたものを総括して扱った。すなわち，頭部が三角形でその下に二条の彫込みを有し，額部が身部と一条の線彫りや削り出しによって画されるもの，石材が凝灰岩であるものをこの石塔群の「板碑」の〝典型〟とした。そして，二条線のないもの，額部のないもの等形態のやや異なるものや単なる自然石，五輪塔以外の石塔までも「板碑」の項で取扱った。しかし，後述の一覧表では，板碑とは異なるものについてその旨注記した。各部の名称については，下図に示したとおりである。



板碑の形態概念図・各部名称

第2節　第Ⅰ区

1．石塔の配置

Ⅰ区は，13基の五輪塔と10基の板碑から構成される。当区は，弧を描く形で掘り切られ，地形にあわせてならぶ上段と，それに直交する形で配列された下段の2支群に分けることができる。上段は，2基の五輪塔を基本（1単位）として4単位が確認される。地輪などの散乱状態からほかにも数単位の配列が考えられる。上段には3基の板碑が検出されているが，②は自然石の板碑である。①は，レリーフにキツネが用いられている画像碑である。上段に直交する形で配列された下段では，5基の板碑と2基以上の五輪塔が並ぶ。これらの板碑は検出状況により正面が西向きで立っていたと推定される。これはⅡ区西側からの入り口を意識して立てられたものであろうか。

2．五輪塔

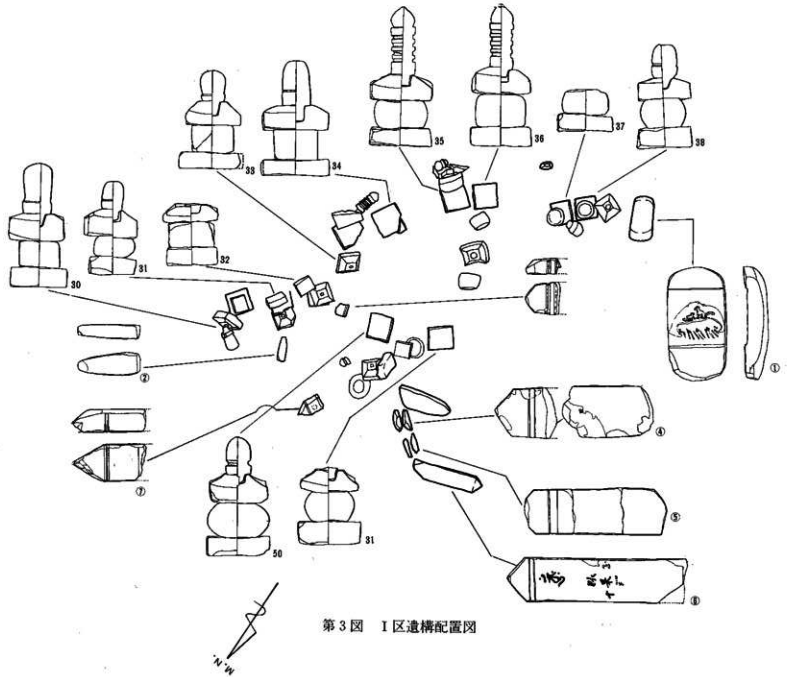
セットになる空風輪の場合は，平頭型で30はこれが先太りした形態である。空輪と風輪の境は薬研および箱掘りの溝で表現される。31は先細りした平頭型で，差し込み部が約23cm（現存長）と長い。相輪は全部で11個体分見つかっている。他と異なってそのうち完形は3基でほとんどが割れていた。宝珠はほとんど尖頭型に属する。請花では，2個体が8角形を呈し残り方は方形である。文様は，唐草文やはざま格子，ハート型ののものなど多種多様である。13と21は盤に墨書による梵字が施されているが判読はできなかった。火輪はⅠ－Ｂ－ａ－1類でほとんどこの形態を示すが，軒先のそりはそれほど顕著でない。軒先は約20cmと他区にくらべ比較的厚いほうである。水輪はＢ－3類に含まれる。当区では水輪の個体数が12個で塔身は7個と他区に比べ多い。これは，水輪のかわりに塔身を使用していたと思われる。水輪と塔身の使い方の違いは被葬者の違いを表わしているのであろうか。地輪も同様Ｂ－3類に含まれるが，31の地輪は厚手にはいる。塔身は，高さ約20cm，最大幅約30cm同形態を示す。

空風輪をのぞいた火輪までのセットの高さは，塔身を使用しているもの約40cm，水輪を使用しているもの約50cmとなっている。

3．板　碑

板碑は，検出された10基のうち，ほとんどが頭部山形である。その中で額部をもつものは⑦だけであった。額部には月輪の陰刻が施されているが銘文等については確認できなかった。⑥は現在長 115.5cmと当区最大で，正面に「バーンク」の種子がある。また⑥と④には頭部全体に墨が塗られている。①は当石塔群唯一のレリーフにキツネをもつ画像碑である。高さ73.5cmで頭部は隅丸に仕上げてある。額部は突出し，その直下に墨書を確認できたが判読は困難であった。そのほかに凝灰岩の板碑や自然石の板碑も検出されているが，墨書，銘文等については確認できなかった。

Ⅰ区は，2基を単位とした五輪塔の配列などから「夫婦墓」（家族墓）としての可能性，あるいは，当石塔群の中で最上位面に開かれ，全体の中で宗教的又は社会的地位の高い被葬者の供養塔群だと思われる。また最西端にキツネの面像碑など立っていることから，Ⅰ区全体がある限られた時期に造立されたものでなく長い期間に立て増しされていったともいえる。これは，全体の中で供養塔の区画割ということも推定される。



第3図　Ⅰ区遺構配置図

第3節　第Ⅱ区

Ⅱ区は，Ⅳ，Ⅴ区からの上り口で，Ⅰ区，Ⅲ区へ進むための分岐点であったと考えられる。その中で「冂」型の配列をもつA群，そしてⅢ区への「墓道」を意識したC群。またC群の上段に位置したB群の3支群にわかれる。

A　群（第4図）

1．石塔の配置

A群の「冂」型の配列は，五輪塔8基，板碑1基から構成される。東西，南北列とも5基以上の配列を基本とする。また両列とも河原石と小礫が敷かれている。(第5図)敷石遺構は上部に河原石をおき下部に小礫が敷かれる。河原石は地輪の周囲を支えるように内部に空間（蔵骨器を納める？）が設けられる。逆に119,122のように直接地面におかれ，周囲に河原石等で根固め石として使用されたものとがある。つまり，石を敷いて地輪を置く場合と地輪をおいて石を敷く場合の2種類が考えられる。

2．五輪塔

空風輪は，薬研掘の溝をもつ平頭型と尖頭型が存在する。火輪は，Ⅰ－A－a－1類に属しⅠ区の偏平な火輪との違いは明瞭である。水輪は，東西列ではB－3類，南北列でA－1類といった違いがある。また地輪についても両列には差異があり前者はB－3類，後者はA－3類に属する。

B　群（第6図）

1．石塔の配置

C群の南側に位置し，B群とは一段高くなった平場に5基の五輪塔から構成される群である。敷かれた河原石の状態から東，西2つの単位に分かれる。東側は2基の五輪塔が散乱しており，両側では，2個の地輪が現在するのみにあった。東端部は緩斜面，西端部はやや急斜面であることから東側の上り口が考えられる。B群の配列および平場の造営は，Ⅰ区の上段に類似しているが，敷石の存在する点が異なりそれによって群あるいは単位に区画化することができる。これは，Ⅲ区，Ⅵ区B，C群でもいえる。

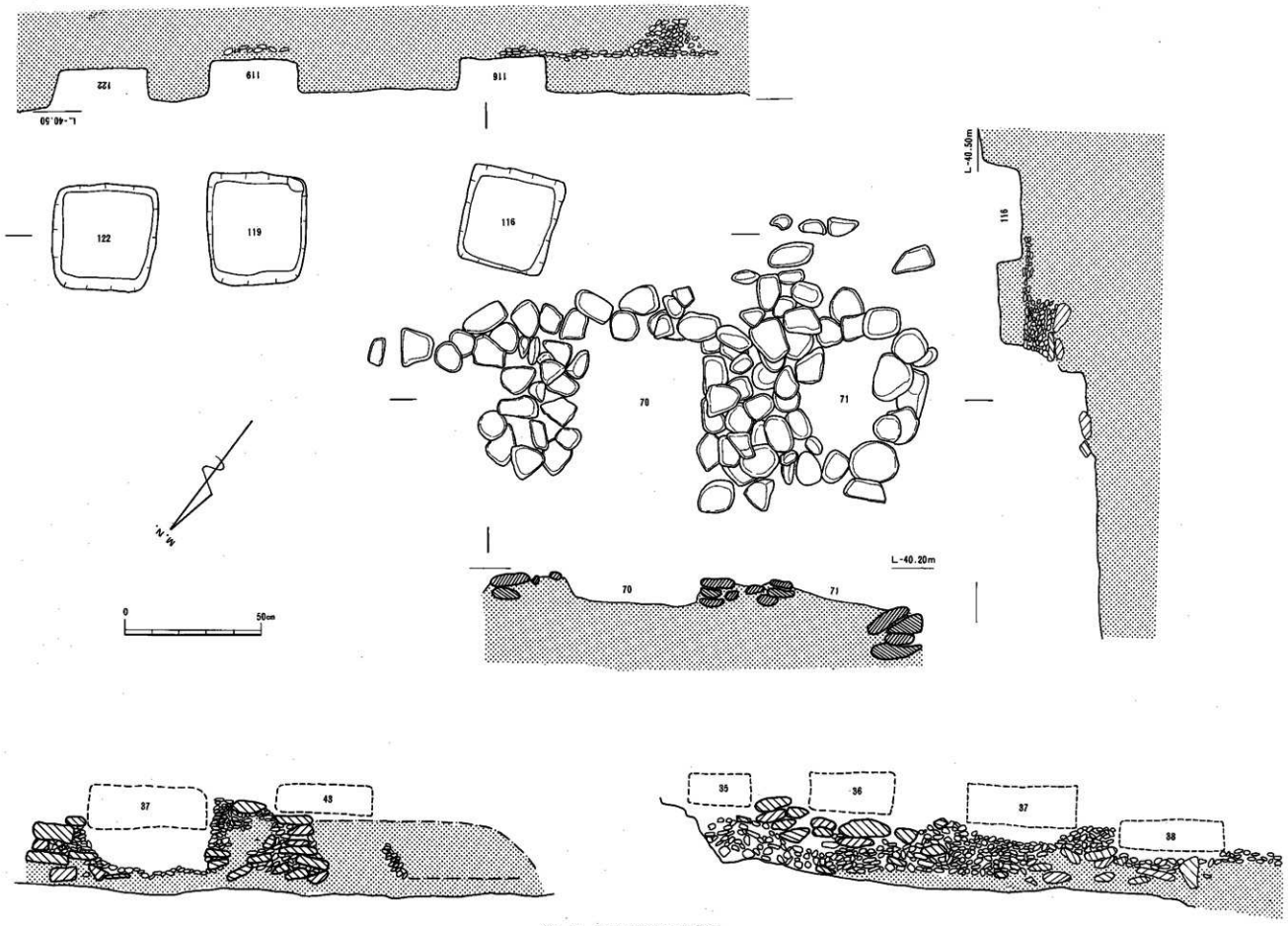
2．五輪塔

空風輪は，頂部が乳房状を呈する円頭型と先細りの円頭型の2個体だけであった。火輪はⅠ－A－a－1類がほとんどだが，55のセットのものはⅡ－b－1類に属する。水輪は，薄手の中のから厚手，そして納骨孔をもつタイプもないタイプもたないタイプなど多種多様である。地輪はB－3類に属する。

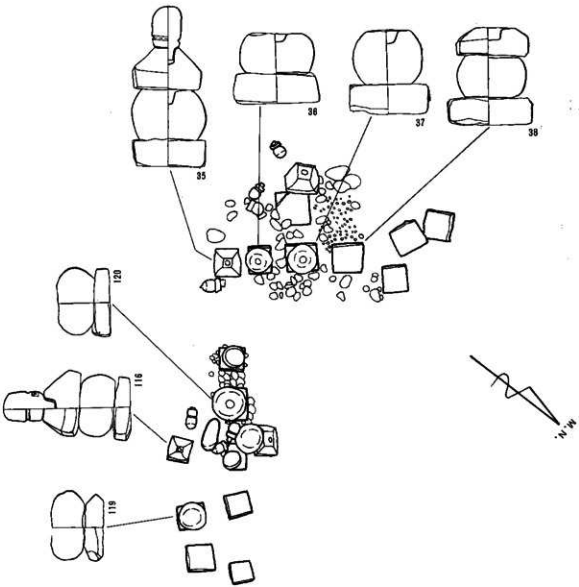
C　群（第7図）

1．石塔の配置

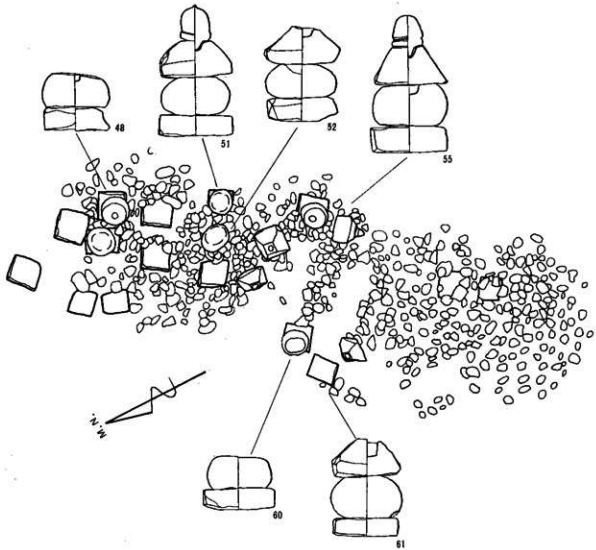
C群はB群から北に一段下がった18基の五輪塔と3基の板碑からなる群である。当群は河原石の検出状態，地輪の配置および板碑の向きから北側に開口した「冂」の字型に配列される。正面(主座)には2＋αの五輪塔，左列には3基の五輪塔，右列には3基の板碑と2＋αの五輪塔から



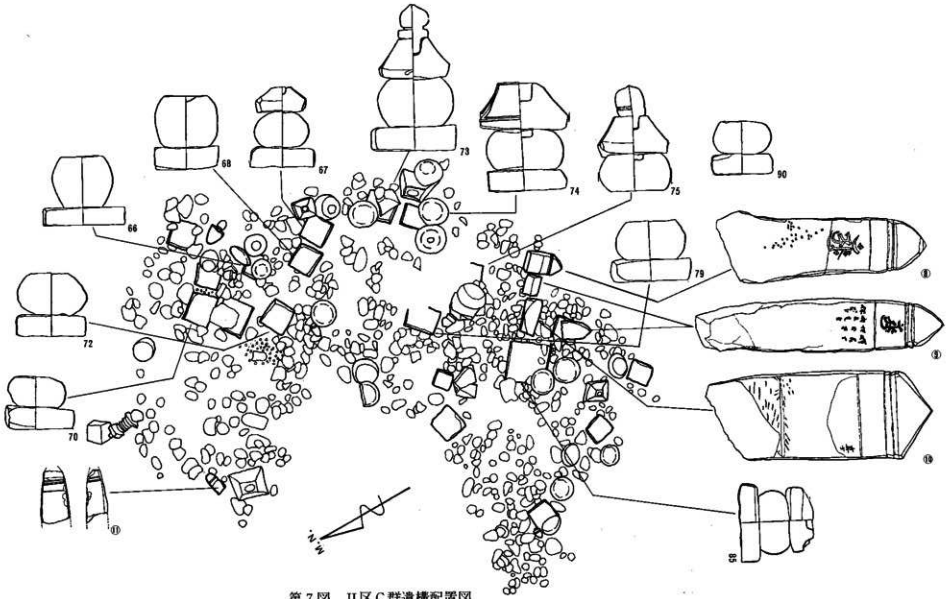
第4図　II区A群敷石状態図



第５図　II区Ａ群遺構配置図



第6図　II区B群遺構配置図



第７図　II区C群遺構配置図

なる。左列北側には2次的に集積された4基の五輪塔があり，「道」を意識した東西配列の可能性も考えられる。

2．五輪塔

空風輪は尖頭型と円頭型がある。火輪はⅠ－Ａ－ａ－1類に属するが特に，主座における火輪は厚手であるが軒先は約10cmと薄い。74の火輪は屋根流れにそりがあり，4つの屋根部内側に幅2㎜の線刻が施される。水輪は主座および左列は厚手，右列は薄手に含まれる。左，右列とも主座，左，右列それぞれ納骨孔をもっている。地輪はほぼ同形態であるが85の地輪は長さ80cmと特に大型である。相輪が1個体出土している。上・下請花はすでに退化形態を示し，そこにはモチーフは施されていない。

3．板　碑

板碑は左列に1基右列に3基配置されている。⑪は現存長約30cmで正面に種子らしき墨書があるが判読は困難であった。⑧は凝灰岩の板碑で額部下に「アーンク」（胎蔵界大日如来）の陰刻がある。頭部山形の正面および右側面には墨が塗られる。右列の3基の板碑は全長1.2m，最大幅10cmをこす中型のものである。

Ⅱ区は前述したように3群に分けられる。Ａ群は「冂」字型の配列であったがこれはＣ群と相対する形「冂」字形の造営中のものであったかあるいはもともと「冂」形であったのかもしれない。墓道は「冂」字形のように北側からはいる経路と，Ａ群東西列の北側（山ののり面）を通る経路が考えられる。「冂」，「冖」などが区画化された配列をもつものは，Ⅱ区，Ⅳ区のみで当石塔群でも上位面に位置する。

セットなる五輪塔は，厚手の火輪，水輪が用いられており，その中で納骨孔をもつ水輪は特に厚手のものが多い。納骨孔をもつ水輪は各群1～3個必ず存在しておりこれは他区においても同様でもある。

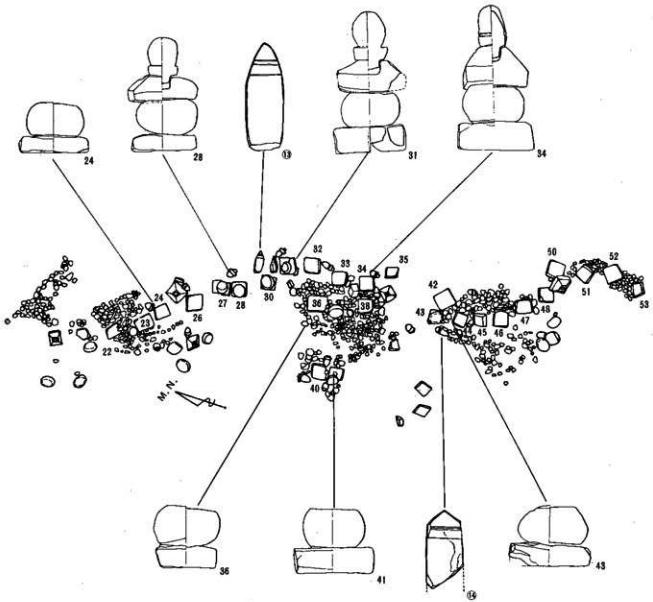
第4節　第Ⅲ区

1．石塔の配置

Ⅲ区は，北西へ突出する丘陵の西斜面，石塔群のなかでは上段の南端に位置し，五輪塔，板碑から構成される。五輪塔は，地輪周辺及び西斜面に空風輪，火輪等が落下している。空風輪16，火輪9（うち2個は地輪に転用している）（第8図48，50），水輪20，地輪28及び板碑2が平坦面で出土しており，セットとして復原できた五輪塔は3基，水輪まで復原できたのは4基である。地輪は原位置を大きく移動しているものもあるが，ほぼ原位置に近いと推定される地輪は28基で，第Ⅲ区の五輪塔は約30基前後から成っていたと推定される。

五輪塔28基は，平坦面奥壁に沿って南北方向にほぼ1列に並ぶ。配列状態から五輪塔は北よりＡ，Ｂ，Ｃの3群に分けられる。各群には，河原石による敷石がある。各群の五輪塔は，2～4基を単位としてほぼ1列に配列されている。中央に位置するＢ群においては，36，38と40，41とが向い合う形で配置されている。板碑2基は出土位置からＢ，Ｃ群に伴っていた可能性がある。

五輪塔は，各群あるいは各単位での形態差は認め難いが，Ｃ群の五輪塔43～46の周辺で出土し



第８図　Ⅲ区遺構配置図

た空風輪3点は，圭頭型の直線化したものである。

2．五輪塔

第Ⅲ区出土の五輪塔は，中型に属する。セットとして復原できたのは3基である。地輪と火輪が同幅のものと地輪幅が火輪幅より大きいものの2タイプがある。第Ⅲ区の五輪塔は，この2タイプから構成されていたものと考えられる。

空風輪は16点出土し，その形式は圭頭型の直線化したもの，円頭型，平頭型，頂部に突起はないが尖頭型とみられるものがある。尖頭型は少なく，大半は圭頭型，円頭型である。火輪は軒のある型式で，屋根流れの反りをもつ。水輪は納骨孔をもたない形式で厚手，薄手，樽型があり，樽型は1点出土したのみである。地輪は受部のない形式である。全て中型であるが，幅が40cm台と30cm台の2群に細分される。後者の出土数が多い。

3．板碑

板碑は2基出土している。14は，頭部が山形の小型のもので身部の中ほどから欠損している。13は，額部から先細りとなる正面舟型の板碑の完形である。正面に墨書等は見られない。

4．出土遺物

遺物は，五輪塔周辺で糸切りの土師器皿，坏が出土している。皿が大半で，口径8cm前後のものと11cm前後のものがある。

第5節　第Ⅳ区

Ⅳ区はⅠ区の下の段に配置された地区で，約40基の五輪塔と7基の板碑から構成される地区である。Ⅳ区を群毎に分けると「コ」字形に配置されたA群と，河原石の敷かれた群でⅠ区寄りのB群とⅧ区寄りのC群がある。

A　群

1．石塔の配置

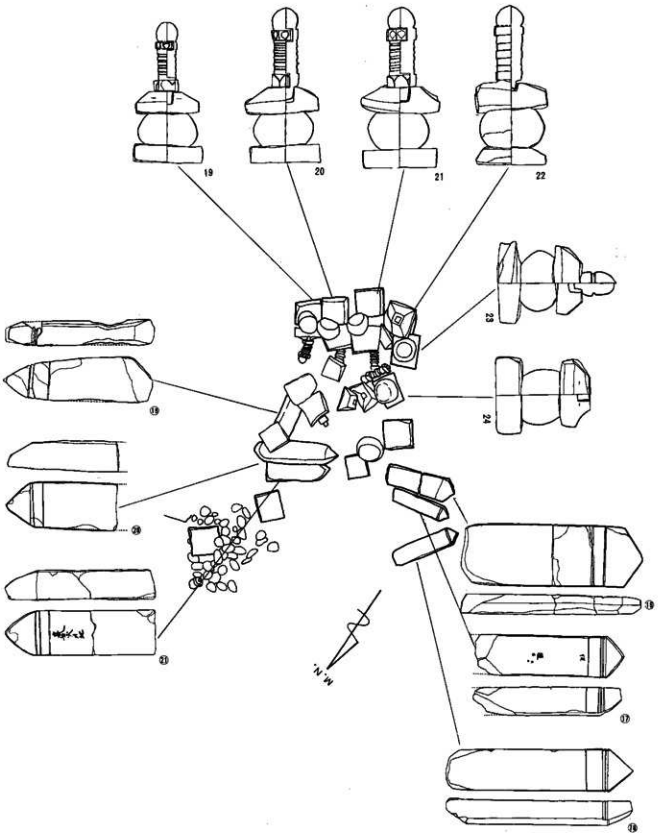
A群は「コ」字形の構成を成し，左方に3基の板碑，右方に同じく3基の板碑と2基の五輪塔を向かい合う形で南北に配列し，中央正面（主座）には五輪塔の空風輪に相輪を転用した4基の五輪塔を東西に配列している。A群には他群の多くに見られる河原石の敷石はない。

2．五輪塔

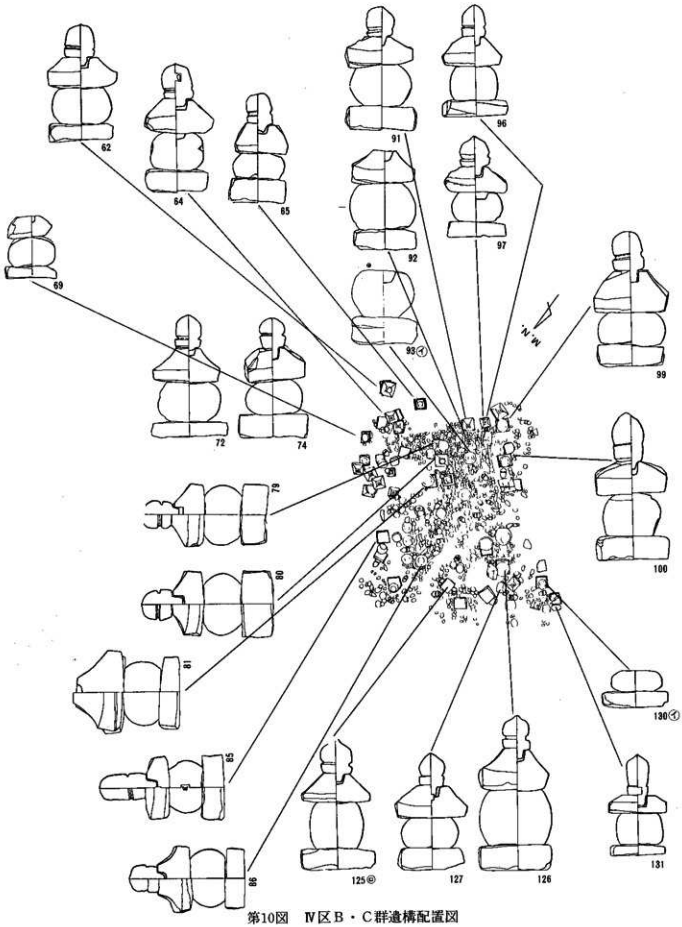
セットとして組合せのできた五輪塔は6基であるが，主座の4基はいずれも相輪の転用が行われていることからこの4基は一つの単位として設置された五輪塔とみることができる。また，地輪，水輪，火輪の規模はほぼ同程度であるものの21の火輪の屋根流れの反り，22の火輪の枘穴が方形であることおよび相輪の脚部が方形で請花のみられないことなどが特徴としてあげられる。右方に設置された2基の五輪塔も規模としてはさきの4基と変わらないが，空風輪のみが相違点としてあげられ，この2基は別の単位として認めることができる。なお，周囲に数個の地輪が遺存しており，これらとも合わせて2～4基を単位とする五輪塔の構成の可能性も考えられる。

3．板碑

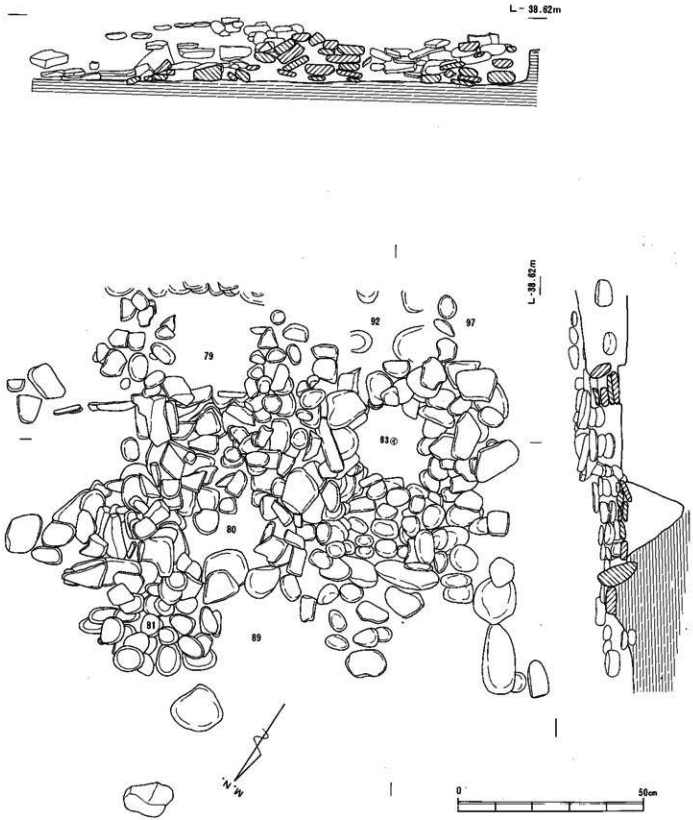
板碑は左右に3基づつ合計6基確認されたが，いずれも頭部が山形を成し，地面に埋め込まれ



第９図　Ⅳ区Ａ群遺構配置図



第10図　Ⅳ区B・C群遺構配置図



第11図　Ⅳ区Ｂ群敷石状態図

る基部の調整は粗い。規模は右方前列の⑱が最も幅が広い割に厚みが薄い。⑯には裏面に「キャ・カ・ラ・バ・ア」の墨書があり，正面には確認できない。⑰は正面に「天文」の紀年銘があり，正面，左右側面，裏面の四面に墨書がある。⑱，⑲，⑳は判然としない。㉑は他と相違し，正面に「地水火風空」等の墨書がみられる。石材はいずれも凝灰岩である。

B群

1．石塔の配置

B群は河原石の敷かれていた所のⅠ区寄りに位置し，五輪塔および河原石によって構成される群である。五輪塔の配置状況をみると，A群に隣接して東西に3基が並ぶ。更に西側の河原石の多い部分は2～3基を単位として「コ」字形に配置されているようであるが，一列の「コ」字形ではなく，左方および中央正面は二列配置とみることができるし，3基程度を単位として南北に四列配置とみることもできよう。

2．五輪塔

まず，A群隣接の71，72，74は火輪の厚みは3基とも相違するがいずれも屋根流れの反りがみられる形態をしている点で共通する。火輪で最大のものは81，最小は69，85他は大きさに大差はない。空風輪には各種の形態があり，バラエティに富んでいる。尖・圭・円・平頭形いずれもあり空風輪の境の溝も薬研掘り，箱型掘りがある。地輪では一つの単位とみられる80，81が厚い。また，水輪では唯一97だけに納骨孔がある。

3．敷石の状態

敷石は全体的な散らばりをみせているが，特に密集した93の五輪塔付近の敷石状態は10～20㎝程度の大きさの河原石を普通として最大40cm弱の大きさのものまで使用している。五輪塔の設置のしかたに二つの状況が観察できる。地輪を置いてのち敷石するものと，敷石されたのち設置するものとである。特に93の周囲は五輪塔の設置後整然と敷石を行っていることがわかる。敷石群の厚さは20～25cm程度である。

4．その他の遺物

B群からは土師器皿，褐釉陶器（骨蔵器）の出土がある。また，河原石の集積した部分に骨片の分布も確認された。

C　群

1．石塔の配置

C群は最も南に位置し，五輪塔約10基と敷石群とから成る。五輪塔で原位置を保っているとみられるものは少なく，群としての規格は不明確である。

2．五輪塔

セットとして組み立てられたのは5例であるが，それぞれ異なった様相を呈している。特に126の水輪の大きさ，131の空風輪の背の高さは特に目立つものである。空風輪の頂点だけは尖頭形で共通している。

敷石の状態もまばらであり，二次的移動が考えられる。

3．その他の遺物

Ⅳ区からは五輪塔，板碑の他に土師器，骨蔵器，合子，銅銭が出土している。ここでは，骨蔵

器，合子について説明する。

蔵骨器1（第166図）

中に骨片の遺存がみられた陶器である。口径9.3cm，底径9.4cm，器高23.4cm，最大径は肩部にあり17.3cm，最小径は頸部にあり7.5cmを測る。器形は肩部が最も張り，頸部からわずかな外反をみせて口縁端部に至り，底部は平底を成す。胎土に多くの砂粒を含み，赤褐色を呈している。口縁部の内側，底部の内側，肩部に自然釉がかかっている。口縁部はロクロ成形とみられるが，体部はロクロ成形のあとヘラ削りを行い，器面調整は雑である。口縁部の変形は焼成時のものであろう。

蔵骨器2（第166図）

口縁部を欠損しているが，器幅に対して器高の高い褐釉陶器である。頸部径7.0cm，底径7.0cmを測る。また，最大幅は胴部上半にあり，13cmを測る。胎土には黒褐色の細砂を含み焼成は良い。器面は内外面ともに黒味がかった褐色の釉を施している。ロクロ成形によって形は整っているが，仕上げがやや雑である。底部はヘラ切りで中窪みを呈する。

青白磁合子（第166図）

通高3.5cmの平型合子である。蓋は小壺の蓋を転用しており，口径6.0cm，かえりの径3.6cm，器高1.5cmを測る。体部は影青の施釉を行い，内面は露胎である。肩部に蓮弁を入れ，天井部には草花文と思われる文様の浮き出しがみられる。身は口径6.4cm，立ち上がり径5.3cm，器高2.0cmを測る。施釉は内面および体部にみられ，底部および受部は露胎のままである。菊座状の側面を有している。

第6節　第Ⅴ区

1．石塔の配置

Ⅴ区は，中段の中央部に存在する空間とその東側に位置する，約20基の五輪塔と1基の板碑から形成された区である。

区の構成は，中央に存在する段によってA・Bの2群に分けられる。西側の下段をA群，東側の上段をB群とする。A群は，西側に広がる空間を規制するように，やや弧状を呈しながら一列に並んでいる。これを五輪塔の形態より見ると，2～3基の単位に分けることができる。五輪塔の配列がない個所には，小型の自然石が同一方向に3～4個並んで立っておりこれらは小型の板碑の可能性も考えられる。ここでの五輪塔の形状は，単位ごとに差が現れており，17，18のような大型のものと，19，20，23のような中型のものとに分かれる。B群は，並列的に並んでおり，形態的に見て2，3や5，7のような同タイプで2基単位に分けられる。形状的には，2，3は小型に属し，5，7は中型に属する。また納骨孔を有する2が1基だけ存在する。また空風輪は，段によってくぎられる尖頭型のものが多い。

またA，B群の西側には広場と想定できる空間が存在する。その中央部に河原石の集中が見られたが，下部構造は存在しなかった。この河原石の上に石塔が存在したかどうかは不明である。

2．板碑

板碑は広場の北側に残欠したが1点出土している。幅は20cmを計るが，山形と二条線しか残っていないため，全長と身部の形態は不明である。

第7節　第Ⅵ区

1．石塔の配置

Ⅵ区は中段の中央に存在する空間の西側に位置し，段によってⅦ区と区切られている。

Ⅵ区は約30基の五輪塔により構成されている。その中の地輪の配列等によりA・B・C・Dの4群に分けることができる。A群は，東側に位置する群で南北に1列に並んで存在する。これは，地輪の配列により，2基・2基・3基の単位が認められる。この群は，大型・中型の五輪塔で構成されている。B群はA群の南西に位置する1群である。南北に4基，その南端より西へ2基の五輪塔が配列されている。B群は残存状態が良好で，セット関係がよく観察できた。それらを形態により分けると，106・107，108・109，112・113というように2基を単位に分けることができる。それぞれの特徴を見てみると106・107は大型で，水輪に大きな納骨孔を有す。108・109は中型で，112・113は小型である。C群はB群の北に位置する1群である。この群は河原石の散布も少ない。五輪塔も数は少ないが，B群の小型の五輪塔（112・113）と同タイプの五輪塔で構成されている。D群はB群の西側に位置する1群である。この群はⅥ区の西端に位置するために，Ⅶ区への流れ込みが多く原位置を保っているものが少ないと思われるが，地輪の配列等から，概ね2～3基の単位に分けることができる。五輪塔では141が他と異って櫓型を呈するような水輪を有する特徴的なものが見られた。

Ⅵ区の五輪塔を全体的に見れば，106，107の2基が大型を呈するのに対し他は中・小型に属するものが多い。

2．遺　物

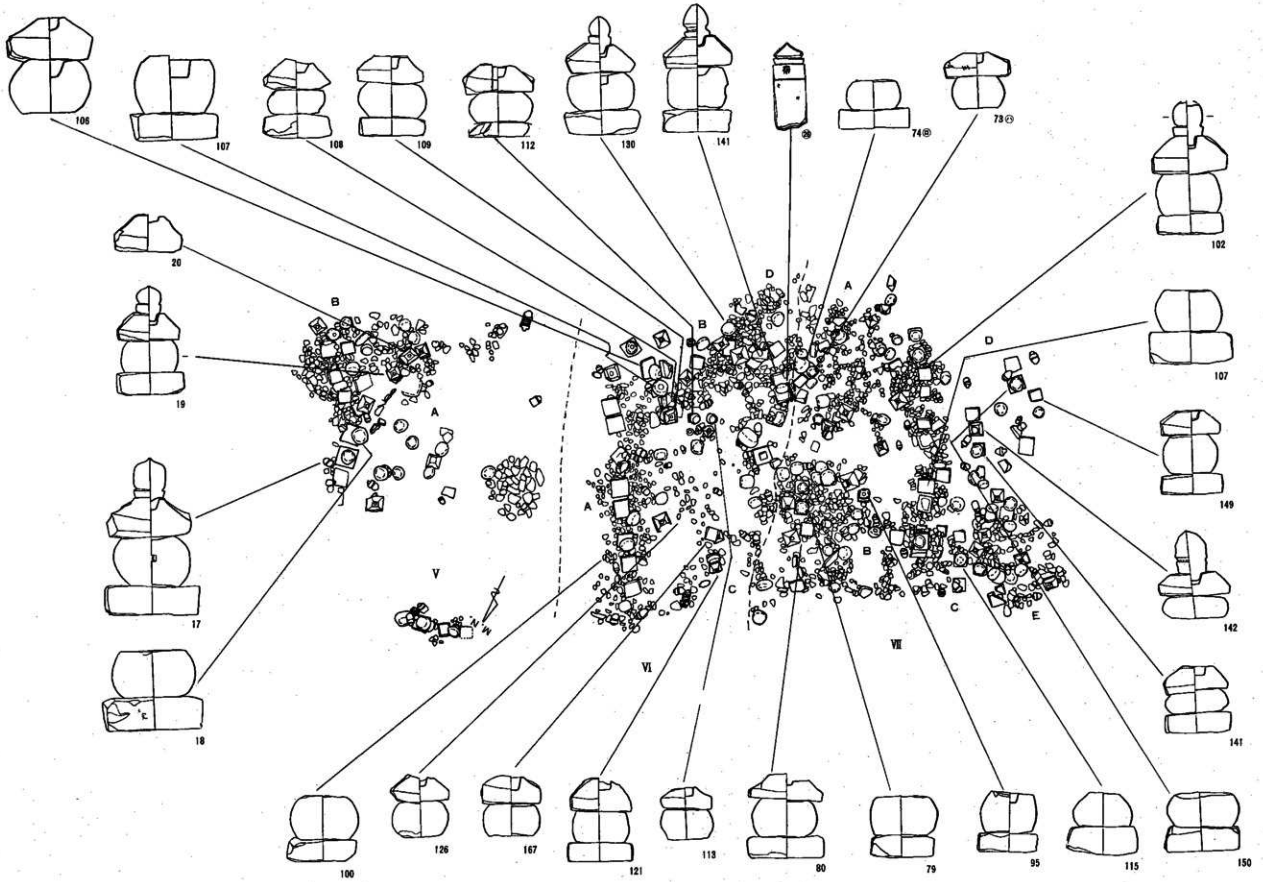
遺物としては，土師器が出土している。土師器は小皿が多い。口縁端部の1ケ所～数ケ所にスス付着が認められる。灯明皿と思われるものが出土している。底部は，ヘラ切りを呈するものも若干存在するが糸切りのものが多い。

第8節　第Ⅶ区

1．石塔の配置

Ⅶ区はⅥ区の西側に位置し，若干の段によって区画されている。Ⅶ区は約50基の五輪塔と1基の板碑によって構成されている。

この区は河原石の散布や地輪の配列等によりA・B・C・D・Eの5群に分けることができる。A群は，南東部に位置する群である。数は少ないが，奥壁に板碑が1基立ててあったと想定されるような状態で出土している。また五輪塔の単位でみれば，同タイプの小型の水輪を有する，74・75の関係から考えて2基単位の存在が考えられる。B群は南西に位置する群である。この群は地輪の数量に比べて水輪・空風輪の数量が多く，これはⅥ区からの流れ込みが想定される。またセット関係で見ると79・80の様な同タイプ2基単位が存在する。C群は，中央部に南北に細長く位置する群である。この群も地輪の配列により2基単位に分けられる。D群は北東に位置する群である。ここは河原石が敷かれていない。五輪塔はその配列により2～3基単位に分けられる。こ



第12図　Ⅴ・Ⅵ・Ⅶ区遺構配置図

こでは141・142の様に偏平な水輪を有するものが特徴的に見られる。E群は北西に位置する群である。この群では南東の部分に水輪が重なって出土している。これは，原位置ではなくてD群からの流れ込みが想定される。単位は2～3基を基本にすると考えられる。

2．五輪塔

全体的に五輪塔の形状を見ると，中型～小型のものが多い。その中で特徴的なものは，前述した様に，偏平な水輪を有する141・142が見られる。また水輪に納骨孔を有するものは少ない。

3．板　碑

板碑はA群に1基存在する。形状は小型であるが，頭部の山形が若干反りぎみで，二条線はしっかりとした段で形成されている。額部と身部の境は線で表現してある。一部欠損している。銘文は墨書でなされており，額部に「南無」の2字が入り，その下に「妙法蓮華経」と続いている。身部の右側に明確ではないが「禅定門」の字が読み取れ，左側には「文明11年3月…」の字が読み取れる。石質は凝灰岩である。また銘文の文字は，日蓮宗で現在一般に使用されている書法ではなく，普通の書法である。

4．土師器・墨書石

その他の遺物としては，土師器と墨書石が出土している。土師器は，糸切り底の小皿が多く出土している。その中には口縁端部にススの付着が認められるものがあり，灯明皿と想定される。またⅪ区との境付近で墨書石が出土している。(168-5)これは偏平な河原石に墨書されたもので，法量は縦15cm・横14cm・厚さ3.5cmを計る。片面には「南無阿弥陀仏」が三行書かれており，他面にも墨書が認められるが判読できないものである。これは一種の礫石経であろう。

第9節　第Ⅷ区

1．石塔の配置

Ⅷ区からは空風輪63，火輪26，水輪56，地輪30，板碑4基出土しており，五輪塔の最大造営数は63基と推定される。Ⅷ区は，南北方向に4～5基を1単位として配置されており，河原石の敷石の状況から推定すると，1群は2～3単位であり，3群8単位が想定される。原位置を保つ単位は，86・90・91・92・93の単位と132・134・135の単位であり，推定される単位としては，121の南の単位，107の南の単位，114を中心とする単位，114の東の単位，56・57の単位と，その西の単位がある。一方板碑は，北の群に1基，南の群に2基出土している。

2．五輪塔

セットの五輪塔は3基あるが，すべて中型である。空風輪は，67に代表される尖頭型が半数である。特異な例としては，201のように円頭型であるが，空輪部が長手のもの，115のように尖頭型であるが，全体的に直線的なものがある。また167のように差し込み部がなく穴を穿っているものもある。火輪は，厚手の中型・小型，薄手の中型がそれぞれ$\frac{1}{3}$ずつ占めるが厚手の大型はない。

枘穴はほとんど円形であるが，2・27だけは正方形であり，1・4のようにないものもある。水輪は，27に代表される薄手の中型が半数を占めるが，51㋑に代表される厚手の小型の樽型が遺跡平均より割合が高い。薄手の小型はない。納骨孔を持つのは88とb1-6のみである。地輪は45に代表される厚手の中型が半数に近いが，51㋥・114などの薄手の小型は平均より高い。

3．板　碑

板碑は4基出土しており，㉘・㉚は角柱状を呈し，山形を二条線によって区切られ，㉘の方は額部下の碑面部分は4面とも一段差がある。㉛は円柱状を呈し，頂部に二条の線彫りが一周巡る。

第10節　第Ⅸ区

1．石塔の配置

Ⅸ区からは，空風輪22，火輪11，水輪6，地輪8，板碑1基が出土しており，五輪塔の最大造営数は22基と推定されている。原位置を保つ五輪塔の単位は，25・24・23・22の東西方向の単位だけであるが，河原石の敷石が3群に分かれることから，それぞれの敷石に東西方向に並列の2単位，3群6単位が想定される。一方，板碑は東群から1基出土している。

2．五輪塔

セットの五輪塔は27㋥の1基で中型である。空風輪は6に代表される尖頭型が多く，43の平頭型や9㋑・38の圭頭型もある。特異な例としては尖頭型であるが，15のように全体的に偏平的なものと，30のように差し込み部の長いものがある。火輪は，6タイプすべてそろっている。枘穴は，36・37は正方形である。水輪は49に代表される薄手の中型・小型がそれぞれ$\frac{1}{3}$を占め，薄手の大型・小型，厚手の大型はない。円形の納骨孔は16・42が有する。地輪は，23の厚手の中型以外は，3に代表される薄手の中型と厚手の小型が各1個である。

3．板　碑

㉜は角柱状を呈し，山形を二条線によって区切られる。

第11節　第Ⅹ区

1．石塔の配置

Ⅹ区は，約30基の五輪塔と10基の板碑から成る区である。二次的な石塔の集積を思わせる箇所がが，東側と中央付近にあるが，最東端の３基の五輪塔が南北に配列されているほかは，東西の方向での配列が基本とされている。

最東端の南北配列の３基単位の西隣に，東西配列の３基の五輪塔が位置し，これらは群として形成されたものと思われる。これらのさらに西には，２基単位の五輪塔が２箇所に認められ，そのの北側には５～８基の五輪塔群が２箇所に認められる。これらの５～８基から成る群も，細かくは東西配列のおおむね２基を単位とする五輪塔に分けることが出来る。さらに，北側には，五輪塔など残存しないが，河原石の敷石があり，これらは２次的に，五輪塔などが移転された跡とみられる。

一方，板碑は，最東端の単位周辺に１基，南の２基単位の周辺に１～２基，５～８基から成る群におおむね２基の割合で配置されていたようである。

又，Ⅹ区の位置する下段とさらに一段低位となる豚舎の立地する平担面にかけて，傾斜地形成の様子を探るため土層観察のトレンチを設定した。検出時の河原石の敷石の下に，さらに一層間層を置き五輪塔空風輪が検出されており，石塔群廃絶前に少なくとも二層にわたり石塔群が形成された可能性がある。

2．五輪塔

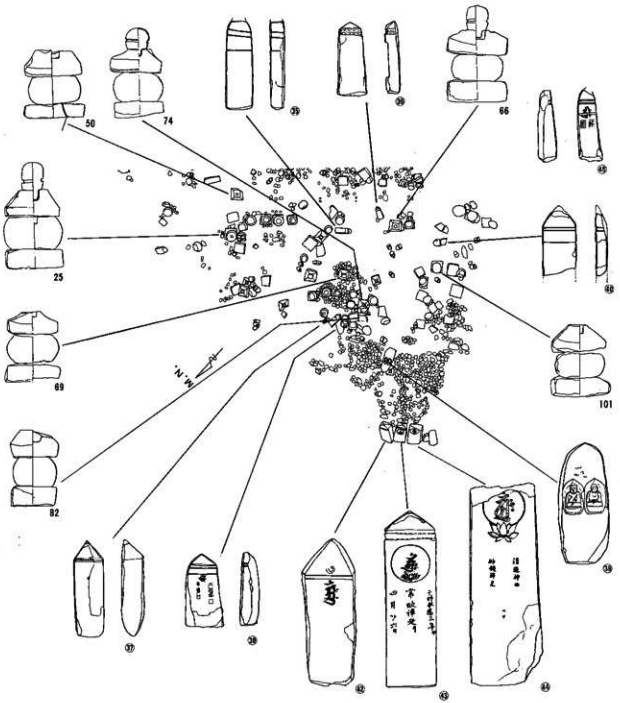
Ⅹ区で検出された五輪塔のうち，火輪では80が最小，６が最大のものであるが，そのほかは，ほぼ均一的な大きさの五輪塔で構成されている。

五輪塔の形態は，66が全体と他と異なる様相を示している。空風輪については，空輪の宝珠形が尖頭型で25・74の円頭型と異なり，空風輪の境の表現も66が薬研掘りで25・74は箱掘りでなされている。さらに，火輪でも66が軒厚で，高さが偏平なものであるのに対し，他は軒が薄く，高い。

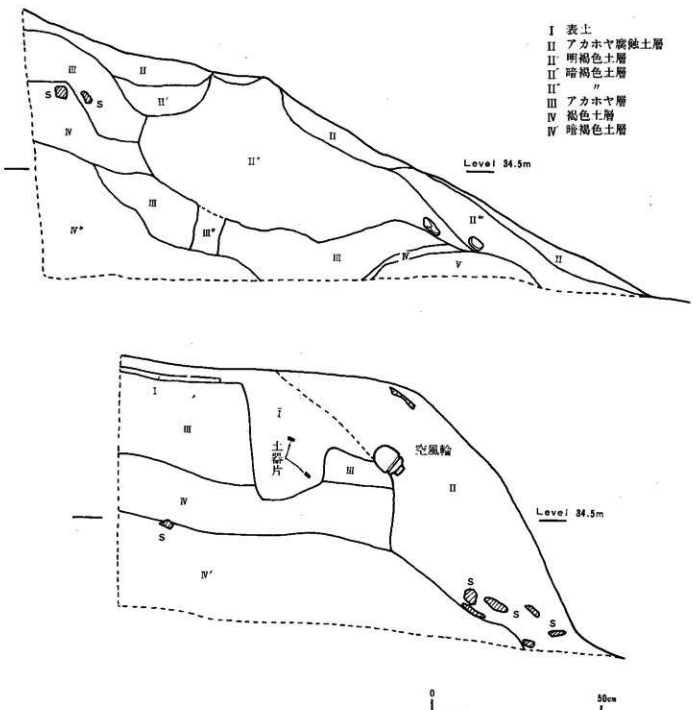
3．板　碑

Ⅹ区の前面に３基の比較的大型の板碑が並べられていたが，これらは豚舎建築の際集積されたものとして，Ⅹ区の構成からははずすしかない。

五輪塔において66が特徴的であったのと同様，その東隣で検出された板碑も，形態上他の板碑と大きな違いがみられる。山形が低平で，二条線ははっきりしており，なによりも他との違いは，額部の突出と基部の突出である。又，㊴の二仏画像板碑は，石塔群において唯一の存在である。



第13図　X区遺構配置図



第14図　X区土層断面図

第12節　第Ⅺ区

1．石塔の配置

Ⅺ区では，空風輪87，火輪85，水輪99，地輪140，塔身16，相輪76の総計412を数え，推定140基の五輪塔と約40基の板碑から構成されている。山内石塔群内で基数，規模とも最大の区である。

石塔の配置は，区の中央に南北に延びる幹道があり，Ⅵ区・Ⅶ区へ続いている。この道を境に東西方向に130余りの地輪が4群づつ列をなしている。

Ⅵ区とⅦ区からⅪ区へ下るゆるやかな傾斜地に配列された最も南側のA群には，この石塔群内で最大級で古い時期の五輪塔が3基，等間隔に配列されている。この超大型の五輪塔の横に2基単位の五輪塔がみられ，最も西端に宝篋印塔の基礎がおかれている。

A群から傾斜面が下りきった所に1段の掘り込み部が三方にめぐっている。幹道から西にかけては，20数基の地輪や火輪から転用した土止めのためと思われる石列がみられる。東側にはこのような石列はみられず，掘り込みも明確でない。このA群の下にB群がある。B群は幹道の東側に6基，4基，8基の地輪列がみられ，特に東端の6基は他と比べ異なっている。西側には15基の長い地輪列があり，3基から6基の地輪がその前後に接するような形で置かれている。特に幹道の直ぐ西には4列平行で並ぶ。

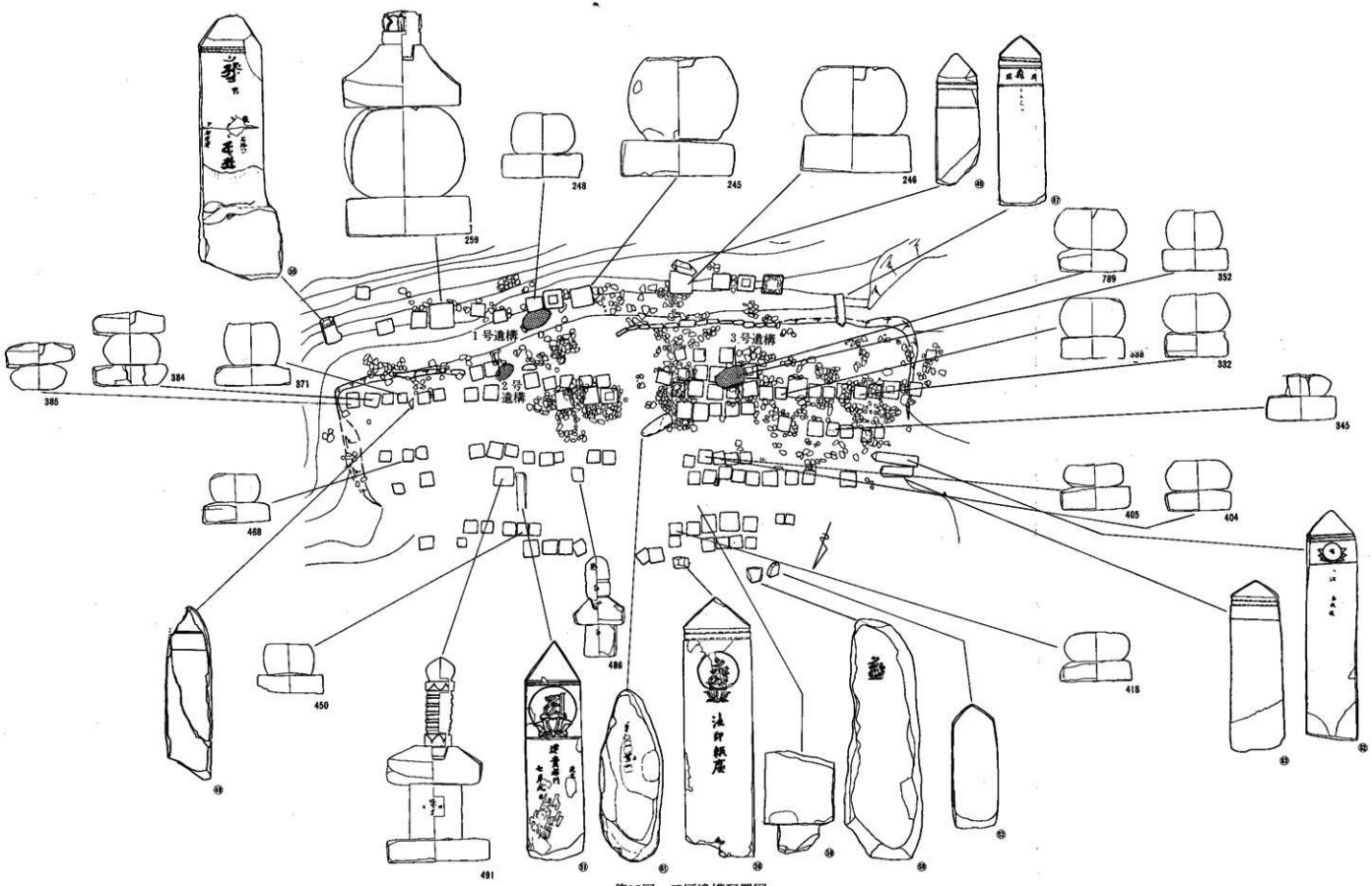
B群の北にあるC群は，東側に4基から2基単位の地輪が並ぶ。東端の4基はB群の6基と同類の五輪塔で他と異なる。真中の6基は3基づつの単位に分けられる。その南には列から離れた状態で「大永年間」(1521～1528)と「永正十五年」(1518)の五輪塔が置かれている。東側には5基と9基の地輪列がみられる。9基の地輪列は2基から3基の単位がみられる。

Ⅺ区の最前列にあたるD群は2次的に集積された五輪塔が山積みされた状態でみられるが，その下に4基から5基単位で2列に配列される。

板碑については，A群の東端に「蓮宥……」銘の板碑，幹道の直く西の大型五輪塔の後に角柱塔，西端に無銘の板碑がある。B群の幹道の直ぐ西に「天正」銘の自然石板碑がある。C群には東端に一基，「大永」塔の西に「天文」銘の板碑，西端に無銘の板碑2基が内側を向く形で並んでいる。D群では，幹道の直ぐ西に，「寛永」銘，3m程間隔をあけて「慶長」銘の自然石板碑と無銘板碑が立てられる。

以上のようにⅪ区の石塔の配置については，東西方向に地輪が整然と並んでいるが，B群～D群で見られるように地輪列に2列から4列並列がみられる点や，「大永」塔，「永正」塔が明らかに2次的な配置である点，河原石がC群，D群で全く見られない点などからB群～D群では明らかに2次的移動による配列が想定される。また，A群とB群の間の地輪火輪転用の土止めの石列や掘り込みが見られることから造営途中での拡張が考えられる。石塔の2次的移動や区域の拡張は板碑からもうかがえる。D群中央の3基の板碑のうち「寛永」の板碑が基部を欠いて立てられており，その基部が近くの2次的集積に置かれているように，板碑のほとんどに移動がみられる。

Ⅺ区からはほかに，特殊遺構に伴う土製品をはじめ，土師器片，蔵骨器，磁器片，墨書石等が出



第15図　XI区遺構配置図

土している。

2．五輪塔

XI区では，セットとなる五輪塔が少なく，XI区の全体の五輪塔の形態を言うことはむずかしい。群列を構成する石塔列についてもほとんどが地輪のみの配列でありそれぞれの群列の特徴はつかみにくい。しかし，少ない完全セットの五輪塔と単品の空風火水地輪からみると全体的に厚手のものが目立つ。その代表的なものがA群にみられる大型の五輪塔（第55図XI－259，第68図XI－245，XI－246）である。これらの3基は，山内石塔群内の大型五輪塔よりもさらに大型のもので他に類を見ない。形態からは古手のものと思われる。259は相輪上部を欠くがほぼ完全な形の五輪塔で火輪までの高さ約110cmを計る。水輪の背面には「…権僧都□□逆修」の陰刻がみられる逆修供養塔である。245，246の五輪塔は火輪から上を欠くが水輪までの高さは約60cm前後で，水輪上面には方形，円形の納骨孔がみられる。大型五輪塔の他に塔身が多いのも特徴的である。第54図XI－491は，塔身前面に「大永」(1521～1528)銘の墨書がみられ，相輪が空風輪に転用されている。C群の東側か地輪列から離れた所に置かれている。隣に「天文」銘の板碑と，近くに「永正」塔がある。第60図XI－486の「永正」塔も塔身を水輪に転用しており，火輪の屋根流れ部に「妙海禅尼」「永正十五年」(1518) の墨書がみられる。地輪を欠くが平頭型の空風輪を持ちキャ・カ・ラ・バの墨書が空風火輪および塔身にみられ，かなり小型となっている。XI区では第113図XI－342外のように塔身に墨書や陰刻がみられる例が多い。第54図XI－260の塔身は納骨孔を持つ塔身で地輪とセットで検出されたが，前面に「𑖀 賢一房」を中心に右に「奉建立逆修□」左に「天文七年　三月廿一日」の陰刻がみられ，また梵字内に朱も確認できる。供伴の地輪に陰刻の梵字はみられずセットとは考え難い。XI区で陰刻のある単品からみたところ260の状態でセットと思われる。また，単品だが342の「応永廿五年」(1418) の塔身もある。

塔身の数に比例するかは確かではないが，塔身をのせたと思われる方形の受部をもつ地輪が多く，石塔列や一単位の西端に置かれているのは何か意図的なものかどうかは不明である。

また，地輪・火輪・水輪も全般的に厚手でガッチリしたタイプが多い。そんな中で石塔の配置でも述べたように，B群からD群にかけて西端に薄手のタイプが並ぶ。

空風輪は他区と同タイプのものが多いが，相輪が他区に比べ3倍近い数にのぼる。タイプとしては，請花文の施されているもの（第81図XI－144外）が多く，特に8弁の花弁文様が下部だけ施してあるもの（第81図XI－96外）が最も多い。次に8弁の花弁文様が上下に施してあるもの（81図XI－44外），花弁文様とハート文様の両者が施してあるもの（第81図XI－121外）などだけで相輪全体の3分の2近くになる。これらの相輪を受ける火輪としては，枘部が方形のタイプ（第92図XI－33外）や火輪上面の平坦面が広いタイプ（第93図XI－268外）が考えられる。

その他の石塔としてはC群の西端で仏像のレリーフを入れこんだ塔身（第70図XI－183）と思われるものがある。仏像は阿弥陀如来像で顔面が風化したか，あるいは意図的に削られたか磨滅している。その近くにある軒下に刻みを入れた少し薄めの火輪（第70図XI－474）とセットになっている。A群の東端には宝篋印塔の基礎が配置されており，近くにその笠が転げている。(第70

図XI－241）基礎は格狭間が彫られておりその中には蓮華文が刻まれ，上面には複弁八葉が刻んである。高さ36cm，幅59cmを計る。笠は下三段，上五段で，隅飾突起は二弧式でほぼ垂直に近い。高さは37cm，幅66cm，下段最下部幅33cmを計る。

3．板　碑

XI区で検出された板碑類は計27基になる。しかし，それ以外にも扁平で重心が下部に寄る河原石を板碑の様な立て方で用いていたと考えられる例が多数検出されている。これと板碑の破片等を合わせると，総数40基近くになるものと思われる。

XI区出土の板碑類のうち完形或るいは総高の推定できる完形に近いものは18基ある。最も高いものは第145図㊺の寛永二年銘のものであり，第144図㊿の基部と接合する。基部先端は欠損していると思われるが，現高190.5cmを測る。第145図㊺の板碑は頭部先端が欠けているが，約160cm前後の総高を示すものと推定され，XI区では二番目に高いものである。最小の板碑は第144図㊸の板碑で山形の先端を欠くものの推定31.5cm前後になると思われる。

XI区全体では，いわゆる九州型の部厚い板碑が中心になる。石材は比較的軟らかい凝灰岩であるが，硬質の凝灰岩も利用されている。形態的には，頭部が三角形でその下方に二条線を有し，額部を一条の切り込み線で身部と画する。額部は広めに造られ，そこに種子を入れるものもある。身部正面及び断面が長方形を呈する板碑と，いわゆる舟形光背に近い板碑とはほぼ同率で見られる。その外には，第144図㊾や第146図㊷の角柱状を呈する板碑などがある。

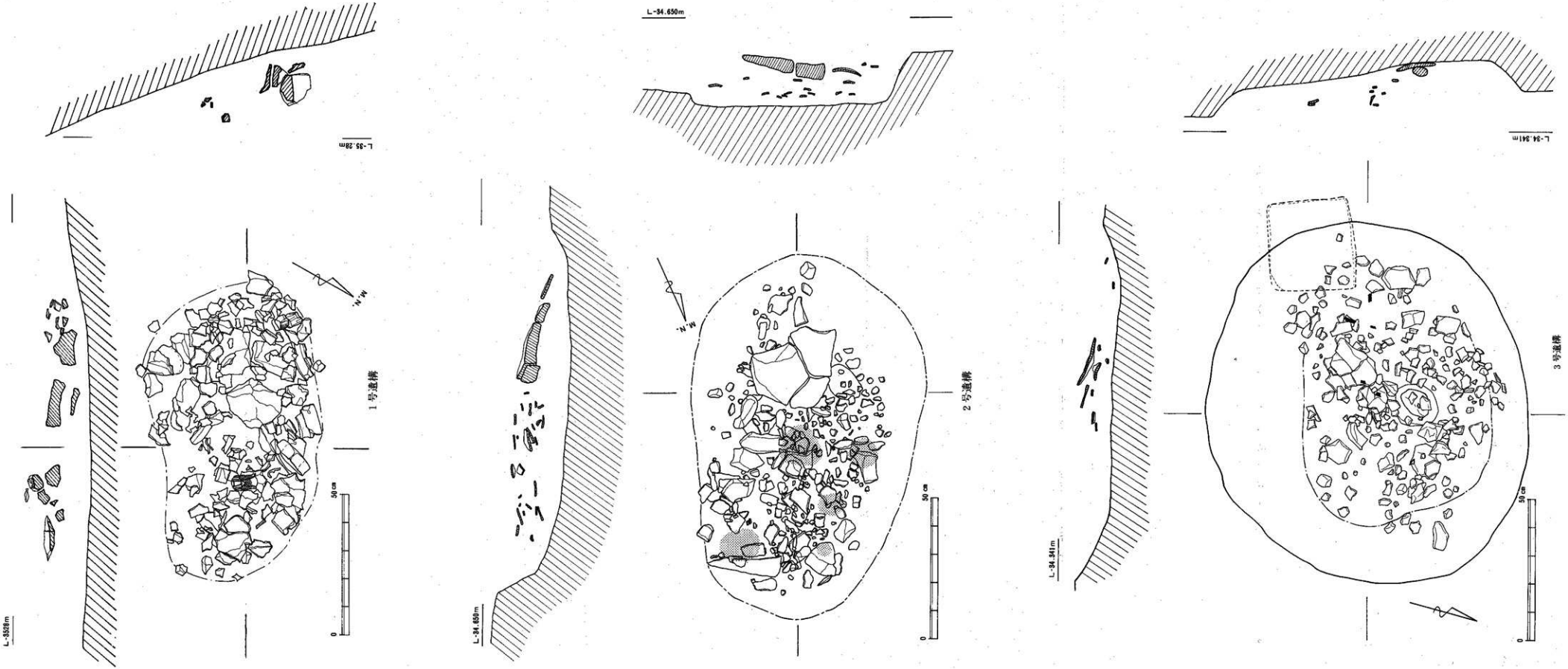
また，自然石を正面のみ面取りし，種子・銘文を陰刻した砂岩製の板碑が1基（第147図㊽）表面の滑らかな自然面の多い凝灰岩を若干加工して種子・銘文を書いたものが1基（第146図㊶）見られる。これら2例の板碑には山形や二条線が作られていない。基部は，荒削りのまま外へ張り出すもの（第145図㊺），身部から方柱状のまま続くもの（第146図㊷外），側面形が尖った基部を持つもの（第144図㊷・第146図㊸）等が見られる。第144図㊿は基部が枘状を呈し，第145図㊻の板碑と接合するもので1例のみ出土している。この基部を受ける台石は確認できなかった。

XI区の板碑のうち種子・銘文等を墨書若しくは陰刻するものは10例を数える。その中で紀年銘のあるものは4例である。古い板碑は天文年間（1532～1555年）にまで遡り（第144図㊶），慶安二年（1649年）銘の板碑（第147図㊽）が最も新しい。主尊は，胎蔵界大日如来が4例，種子のかわりにその音を表わすと思われる「暗」銘の板碑（第146図㊷）が1例みられる。また，第144図㊼・第145図㊺は4面全てに種子が見られる板碑である。特に後者には，正面に五大種子の涅槃門が，左側面には発心門の一部と思われる梵字が見られ，左側面を北の方向に向けて立位で出土している。

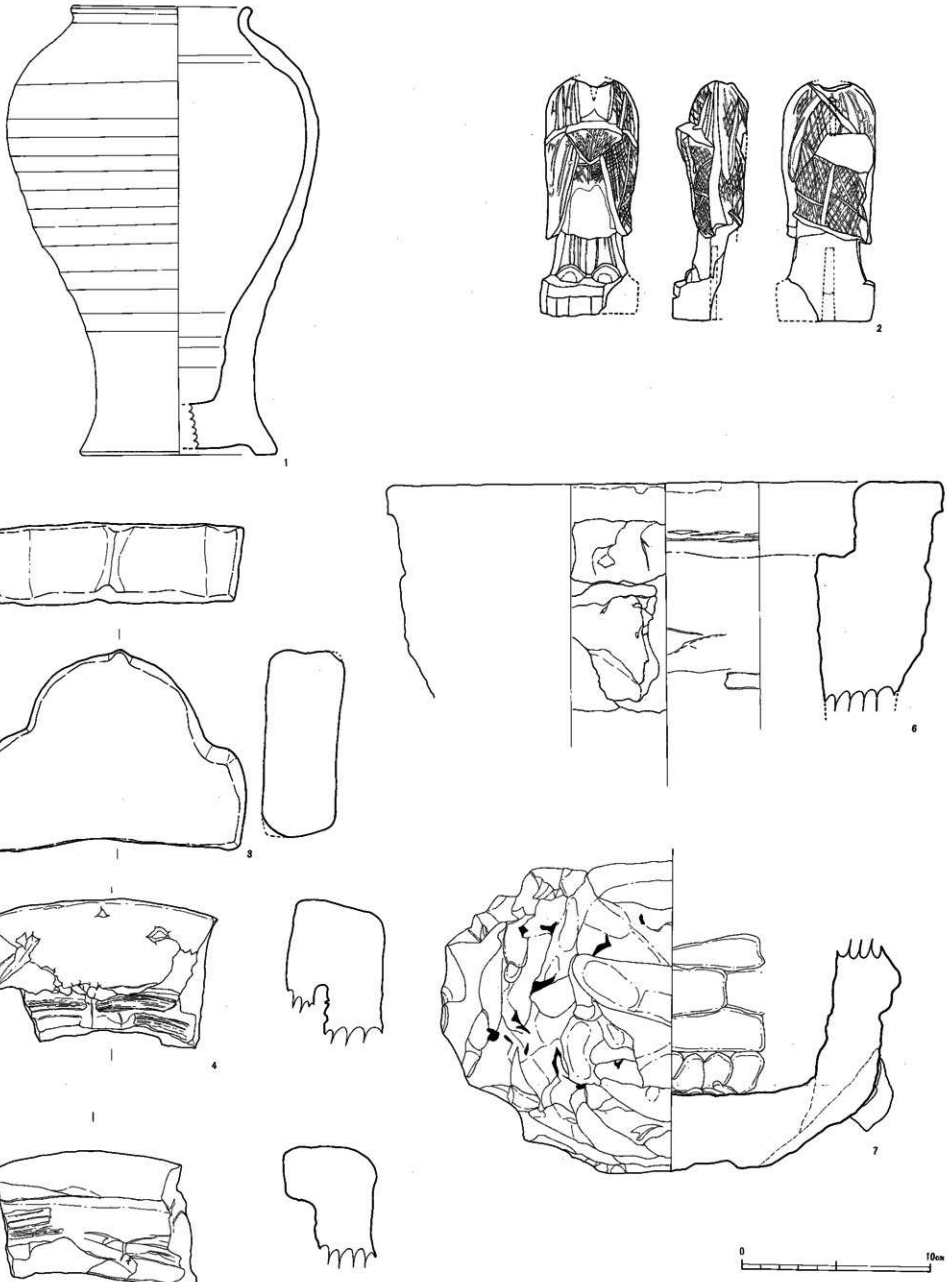
4．遺　構

XI区では3ケ所で炭化物を含む黒色土を埋土する竪穴状の遺構があり，中から土製品や須恵器片，鉄片等が検出された。

1号構造（第16図1），は，A群の248の五輪塔の直ぐ北東にあり，B群への傾斜地にある。



第16図　XI区特殊遺構平面図及び断面図(1・2・3号遺構)



第17図　XI区特殊遺構出土遺物実測図(1号遺構)

およそ90cm×60cmの範囲の炭化物を含む黒色土の不明瞭な堀り込みの中から，大きいものでは40cm大の素焼きの土製品の破片が一面にひろがって出土した。中にはスス付着のものもみられる。その土製品の上に置かれた形で，頭部を欠く僧形像が検出された。その他，灰釉系の古瀬戸片や角釘片，鉄片，銅片等が出土した。

2号遺構（第16図2）は，B群の石塔例の地輪下を東端にし，西へのびる。120cm×80cmの範囲で堀り込みが確認された。その中から礫や板状の岩片，小礫が一面にみられ，中位から下位にかけて炭化物の中集箇所や角釘と思われる鉄片が出土している。地輪の西20cmの所に40cm大の石が置かれており下から骨片らしい物がごくわずか見られた。この遺構はさらに北西へ大きくひろがる。

3号遺構（第16図3）は，B群の石塔列の地輪下を東端にし，西へのびる。1mの範囲で黒土の落ち込み広がる。深さ10cmで，上位から中位にかけて2号遺構同様の礫や板状岩等が出土し，炭化物，鉄釘片がみられる。

このように3基の遺構については，土製品の僧形像を出土する1号遺構では祭祀的な遺構の可能性も考えられるが，2号，3号の遺構については性格は不明である。ただ，2号，3号の遺構は地輪との関係から，五輪塔に併う遺構とは考えられず，おそらくXI区形成前から五輪塔移動以前に作られた遺構である。1号遺構については，XI区形成前というよりは，形成時か途中，あるいは形成後に作られたと考えられる。

5．遺　物

XI区出土の遺物としては，土製品，僧形像，墨書石，須恵器片，土師器片，磁器片等がみられる。

土製品（第17図4・5・6・7）は，1号遺構から出土しており，7は円筒状を呈しており，外径約24cm，現在高約6cm，内面高約12cmを計る。底部の厚さ約4cmとなり厚手である。内面には2cm～3cm幅の荒々しい調整がみられるだけで，外面は全くの未調整で粘土をかさねながら整形した痕跡がみられ部分的に外側が剝がれている。側面の厚さも3cmから5cmと一定でない。底部内面には一面にススが付着している。4は，おそらく7の上に接合するものと思われる。7同様，内面は荒調整のみで，3層の粘土を重ねており外面は全くの未調整である。上部は垂直に立ちあがり2cm幅で平担に整形されている。さらに3.5cmほど垂直にのびて上端部が4.5cm幅で平担に整形されている。外側にも2cm呈整形されている。6・7も同じ破片である。機態的には，鋳型の可能性も十分考えられるが不明である。

第17図2，第168図1・2・3は素焼きの土製品で第17図－2，第168図－2，3は僧形像，第168図－1は阿弥陀如来像である。第17図－2は1号遺構から出土している。頭部を欠き現高8cm，幅3.3cm，厚さ2.4cmを計り3つの僧形像のうち最大のものである。七条袈裟と思われる模様が施されている。脚部の下には幅0.3cmの四形柱状の穴が施してあり鋳型から抜きると時の棒のさし込み穴か，像製作時の棒穴かと思われる。第168図2も僧形像の脚部で第17図－3と同じ作りで，上部を半分欠き現高5.8cm，幅3.2cm，厚さ2.7cmを計る。第168図－2は胸部か

ら下を欠く僧形像で現高2.8cm，幅2.1cm，厚さ1.5cmを計り，七条袈裟の文様が胸部にわずかに見られる。顔面は，目鼻口が明瞭でなく風化したと思われる。第168図－1は阿弥陀如来像と思われる。腹部から下を欠き現高7.2cm，幅4.0cm，厚さ1.6cmと薄手である。下部から首にかけて幅0.4cmのさし込み穴があり第17図－2のタイプと同様の用途が考えられる。顔面は第168図－2同様，風化が著しく，目と鼻が若干分かる程度である。頭部は観音像を思わせる作りである。

第17図－1は灰釉系の古瀬戸の蔵骨器と思われ，僧形像を伴う1号遺構から出土した。出土時にはかなりの破片で復元も3分の2程度であった。全高約23.7cm，口径約9.4cm，底部径約10.4cmを計る。最大径（16.6cm）を胴部上位にもち，ゆるやかに底部へ向って絞りこんであり，胴部下位で外に反りながら底部となる。底部は厚手（厚さ2.4cm）で，わずかに凹んでいる。一方，口縁部は胴部最大部から極端に絞まり口縁部で外反する。さらに口唇部は丸味を持っている。内外面とも，ロクロナデ仕上が施されており，　施釉がみられる。胎土は0.1㎜から0.2㎜の砂粒を含み，焼成も硬質で灰白色から淡灰青色を呈している。おそらく古瀬戸の蔵骨器と思われる。

第160図XI－259～第163図XI－320は，全て，土師器の杯・皿である。第167図8は，染付けの磁器片である。

第168図4は墨書石で，Ⅶ区に近い西南隅で出土した河原石である。五輪塔の敷石群の中に露出しており，ほかの扁平な石に比して厚みがあった。この石は四面平らな面を持った砂岩の自然石である。長径21.3cm，短径8.2cmの不整長円形の面に文字が記され，断面隅丸長方形の短辺側の狭い一面に書かれている。上半部及び下半部は既に墨痕も確認できないが，中央部に7行計30字程の墨痕を確認できた。これら墨痕も所々薄く消えかけており，漸く10数文字が右下がりの字体くずし字を用いて書かれているのが判読できた。出典は「妙法蓮華経，分別功徳品第17」の一節である。(□□□/□□□□□/□□誡臨是経典者□/□功徳當知是人已趣□/□三藐□□提座道□/坐若□/一切□/如□)

第13節　第Ⅻ区

1．石塔の配置

Ⅻ区は下段の西端，Ⅺ区の下段に位置する区である。Ⅻ区は約20基の五輪塔と１基の板碑で構成されている。

石塔及び河原石の散布状況により，A・B・Cの３群に分けることができる。A群は南に位置し，B群は北に位置する群である。両群は，いずれも河原石の散布が少なく，４～５基の五輪塔が存在する。それらは概ね２～３基の単位で構成されていると思われる。

A・B群の東に存在するC群は，河原石の集中は見られるが，五輪塔は単品でしかも少量しか存在せず，五輪塔の構成単位は不明である。この群が，築成時より河原石のみであったのか，五輪塔が動かされた後の状況なのかは確認できなかった。

2．五輪塔

Ⅻ区の五輪塔を全体的に見ると，空風輪は円頭型を呈するものが多く，火輪・水輪は厚手・薄手ともに存在する。特徴的なものは60の水輪で深い納骨孔を有している。

3．板　碑

板碑は，A群に残欠が１点出土している。頭部の山形は若干ふくらみがあり、２条線は線で表現してある。額部も明確には形成されていない。無銘である。

第14節　第ⅩⅢ区

1．石塔の配置

ⅩⅢ区には，セットとなる五輪塔，そして板碑は存在しない。集積された状態は，廃棄された五輪塔の各輪を無造作に積み上げたというに過ぎない。

ただ，特記すべきこととしては，集積された石塔・河原石の下から，須恵質の蔵骨器が検出されたことである。

2．五輪塔

ⅩⅢ区に検出された五輪塔の各輪には，他の区と極立った幾つかの相異点がある。形態上古式としたい，丁寧に上げられた大型の空風輪，及び火輪がある。しかし一方では，空風輪の差し込み部がないものや，火輪の枘穴が造作されていないものなどがあり，注目される。

3．蔵骨器

集積された五輪塔，そして河原石を取り除いた地山から，須恵質の蔵骨器が検出されている。上方から押し潰された状態であったが，中には火葬骨がおさめられていた。蔵骨器が検出されているには，石塔群の東の弧立したはずれである。このことは，下段のさらに一段下の豚舎敷地にも，豚舎建設前に石塔群があり，建設に伴い東端のⅩⅢ区だけ残され，他が２次的に集積・移転された可能性を示している。

第Ⅲ章　山内石塔群の諸問題

第１節　石塔群の群構造と道の設定

１．喪失と変化

現代の墓地造りは，画一的な空間への〈点〉の集合として,進行している。都市部においては，納骨堂という建物への骨壺の集合があり，農村部に及ぶ周辺地においては，セメント・ブロックで区画整備された共同墓地への家族墓の集合があり，さらに家族墓への個体の集合がある。そこでは金銭の高低によるランク付けが存在するとしても，ランクに対応し平均化された〈儀式〉が成立しているに過ぎない。いわば，それらは慣習・習俗の中で育生された民俗としての〈儀式〉としてではなく，形骸化を前提としてはじめて成立つという逆説的な〈儀式〉として現代に育生されている。

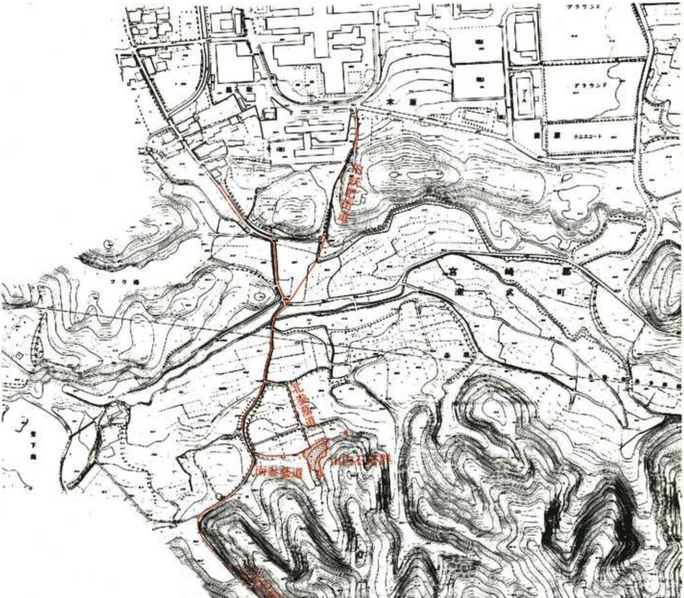
もはや墓あるいは墓地がその時代時代の社会を反映し得るという歴史的役割りを，極限にまで放棄した姿がそこにはある。未来の考古学研究者達は，現代の墓あるいは墓地から「昭和○年の墓」という規定以外，もはや何ものをも復元することは出来ない。そうでなくとも，わたしたちは文字通り草葉の陰から，「見てきたような嘘をつくわい」と，今わたしたちが見られている以上に，白々しい思いで未来の考古学研究者達を眺めざるを得ないであろう。

平城宮造営に伴う前方後円墳の抹消・破壊という代表例を上げるまでもなく，たゆまぬ人間の土地への開拓は，決して常に先人達の思いに忠実であったとはいえない。墓は動かし難い死の世界と結び付きながら，彼岸のこちら側に物として存在するものである以上，可変的な存在であることを免れ得ない。時に，非情な合理性をももつものである。有形文化財の一つに称される五輪塔・板碑も現在に至るまで，その時代時代様々に改変され，またその変化の過程そのものも,一つの歴史であった。その最も大きな改変の歴史として，廃仏毀釈という異常な信仰のパニックを上げてもいい。

しかし今最も現代的な問題は，変化の歴史が喪失の歴史として現出しつつあることにあるのではないか。

２．集落からの道

山内石塔群は，旧鉄肥(おび)街道添いに立地している。旧鉄肥街道は，鉄肥を発し北上を続け，加江田川が大きくＵ字形に蛇行する左岸に位置する竹ノ内の集落から，一路山手に入る。北上し，丘陵を登り詰めた所が勢田(せいだ)峠と呼ばれる。峠を下り，丘陵を出る所で街道は左に折れ，丘陵の裾部を100m程行き，今度は右に折れる。山内石塔群に至る，竹ノ内などの集落からの参墓道は，この屈折点から分岐していたと想定出来る。ここでは，これを南参墓道と呼んでおく。街道はその後ゆるやかに蛇行を帯びながら北上し，現在の医大の南に立地する丘陵を横断し，木原の集落へと至る。現在では，西手に途中から分岐する道が使用されており，街道に後出し，丘陵を開き道と成した



第18図　旧飫肥街道と参墓道

ものといわれるが，とはいえその時期も極立って新しい時期の事とは思われない。ここに山内石塔群に至る，木原などの集落からの南下する参墓道が，もう一つ想定される。ここでは，これを北参墓道と呼んでおく。

3．石塔群の道の設定

石塔群を構成する道として，ここでは根道・幹道・枝道の概念(1)を採用する。南参墓道と北参墓道は，石塔群の立地する丘陵裾部をほぼ東西に結ぶ根道に導入される。竹ノ内側からの南参墓道から直結した石塔群に入る最も西の道をA幹道と呼ぶ。石塔群は，北面する区と西面する区とで「L」字形に構成されているが，このA幹道は，その屈折点を導入口とするものである。

A幹道は，さらにⅫ区へのa枝道，Ⅶ区へのb枝道，c枝道と分岐し，これら3つの枝道は，Ⅷ区にまで導入される。

第2の幹道として，最も整備されたⅪ区の中心を通るB幹道がある。このB幹道は，先のa・b・cの枝道とも結ばれるが，Ⅵ区，Ⅲ区，Ⅱ区に最短距離で導入される幹道として使用される。Ⅵ区を貫通した枝道は，丘陵の西面を伝い延長され，Ⅲ区にd枝道として結ばれる。一方，Ⅱ区へはe枝道として分岐している。

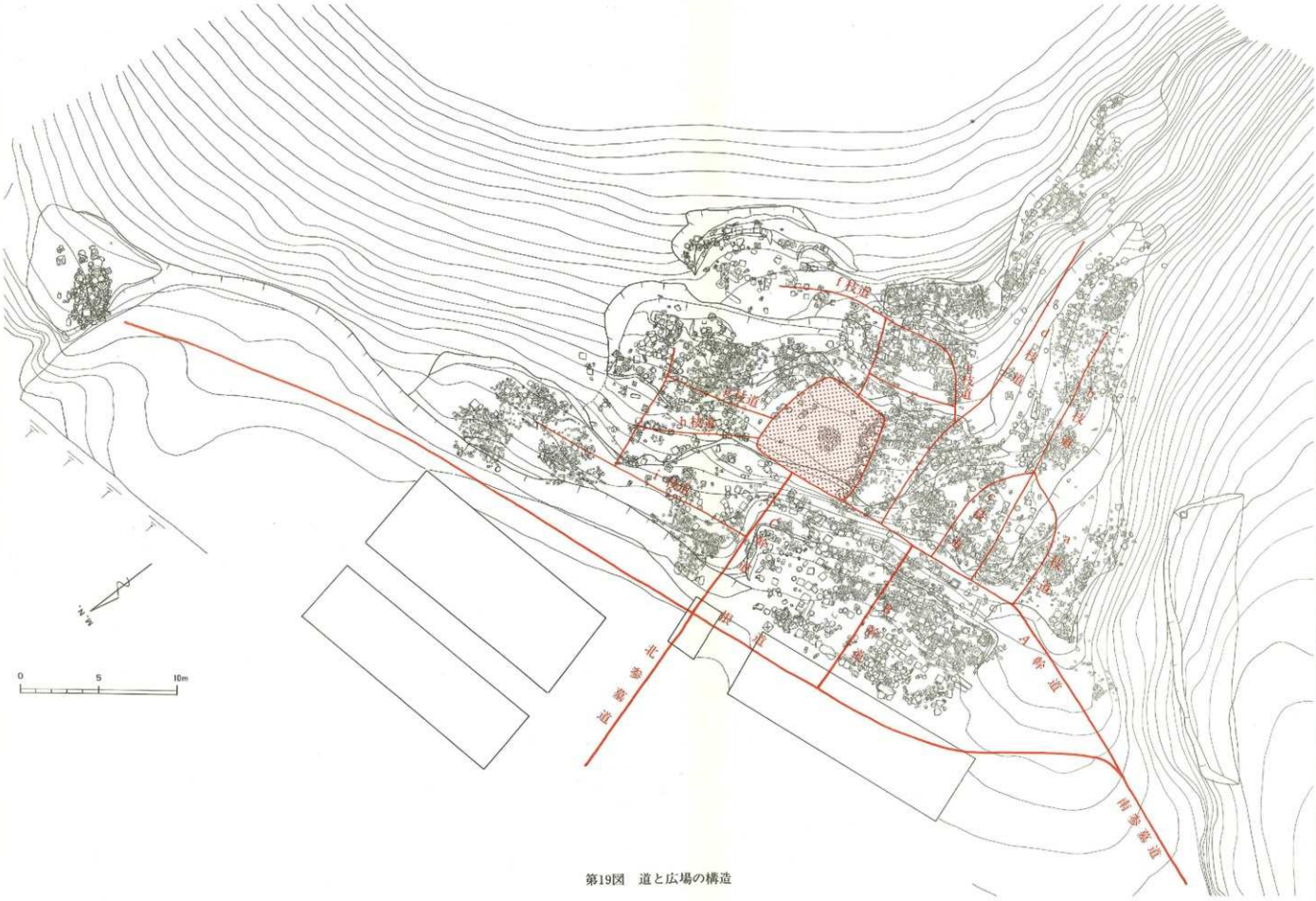
第3の幹道として，最も東に位置する道をC幹道と呼ぶ。石塔群全体に対し，このC幹道は東端の道にも関わらず，中心的な幹道としての機能をもっている。それは，この幹道が中段の開削面に登ぼり，〈広場〉に導入されるためである。この〈広場〉は，石塔群全体の中心的な〈空間〉として，一家族あるいは一族などの特定に属することなく〈儀式〉に際し共同の使用に供された場所とみなせる。この〈広場〉から，f枝道として上段のⅠ区及びⅡ区への導入があり，g枝道として中段のⅣ区，Ⅴ区への導入があり，h・i枝道としてⅨ区，Ⅹ区への導入があり，西へは先のA・B幹道に結ばれるというように，石塔群の全体に至ることが出来る。この全体に至ることの意味は，Ⅷ区を別とすれば遠くはⅢ区とⅨ区を両端に，ほぼ等距離内に配する中心性に在る。

4．石塔群の形成

一定の「導線計画」にそくして，石塔群は形成されている。しかし，どのように「導線計画」が立てられたかは，残された石塔群のパターンにより逆にたどる他ない。

山内石塔群の所在地に近接した場所に比定される二つの寺がある。勢田寺と長明寺の二寺である。勢田寺は，平部嶋南著『日向地誌』によれば，「真言宗 鉄肥願成就寺ノ末派ナリ黒阪勢田堂ノ下池ノ上ニアリ古八十二ノ支院アリト云ヒ傳フ頗ル大加藍ナリシト見ユ明治五年壬申廃ス今山林トナル」とある。廃仏毀釈の嵐の中で廃絶された寺の一つとみることが出来る。「堂ノ下池ノ上ニアリ」とする記述，及び地元に残る伝承，あるいは石段供養塔などの残存から，勢田寺と呼ばれる寺の本堂は，山内石塔群の北に対面する丘陵上に所在したものと考えられる。

一方，長明寺は，現在も木原の集落の中に下り，存続しているが，同じく『日向地誌』には，「真宗 鉄肥浄念寺ノ末派ナリ黒阪ニアリ廣一段三畝六歩」とあり，勢田寺と同じ黒坂に所在していたものと考えられる。伝えられた資料では，字下田畑に所在するものと，今少し限定されて



第19図　道と広場の構造

おり，その位置は現在の医大の東の丘陵になる。勢田寺とは，医大敷地の南の丘陵を挟み対称に所在したものと考える他ない。

こうした位置関係，及び宗派の問題からいえば，山内石塔群は長明寺関連の石塔群とみるより，勢田寺関連の石塔群とみなし得る妥当性が高い。事実，長明寺推定地の西に対面する丘陵上には一群の墓地がかつて存在しており，長明寺に関連したものと考えられ，これに対し勢田寺の南に対面する丘陵上に，山内石塔群が所在したものと考えた方が無理がない。

そう考えた時，山内石塔群Ⅺ区の中段と下段の境に配された大型の三基の五輪塔水・地輪は，現在勢田寺跡から黒坂に移されたとされる弘安八年（1285）銘の五輪塔水・地輪に比べひとまわり小さいとはいえ，山内石塔群の中では極立った大きさを示し，弘安八年銘の五輪塔に継続し，後出するものと考えることが出来る。従って，山内石塔群の開始期は，これら三基の大型五輪塔に求めることが可能であろう。その年代は，13世紀末～14世紀初頭の鎌倉時代の終り頃か，少なくとも室町時代の初めには想定されてよいであろう。

次に，石塔群の各区で，最も初源的な構造を保つと考えられるのは，Ⅰ・Ⅲ区である。上段の開削面に位置するⅠ・Ⅲ区で，初源的構造と考えられるのは，２基単位の五輪塔の配列であり，開始期の大型の五輪塔が村落共同体を背景とした〈個人〉の表出であれば，これらは村落共同体との紐帯を断ち切れないでいる〈対偶〉の表出とみることが出来る。従って，２基単位の五輪塔が，Ⅰ区では４組が群となり，Ⅲ区では５～６組が群となり，共同体の規制の中で群構成されるのである。

開始期，初源期に対し，第３の画期とでもいうのは，Ⅳ区に「コ」の字形の五輪塔及び板碑による配列が形成される時期である。こうした「コ」の字形の石塔の配列は，Ⅵ区にもみることが出来る。これは，一族あるいは一家族の顕在した姿であり，独自の世界観で完結されている。天文年間の板碑から，16世紀中頃のことと考えられる。

第４の画期と呼ぶべきものは，Ⅺ区の形成された時期で，この時期の意味は，全くこれまでの各期とは異なる。すなわち，２基単位の配列にしろ，「コ」の字形の配列にしろ，これらは人間関係の物化された表象として具現されているのに対し，Ⅺ区の形成は石塔群の物としての〈整備〉が成されているのであり，ここから人間の関係を復元することは難しい。Ⅺ区に検出されている紀年銘のある石塔では，応永25年（1418）の宝塔の塔身が最も古く，慶安２年（1649）の板碑が最も新しい，又，Ｂ幹道の横の東北に配列された五輪塔の北から三列目の場所には，天正年間（1573～1591）の自然石板碑がある。

天正年間に一度目の整備が行なわれ，さらに慶安年間に二度目の整備が行なわれたか，慶安年間あるいはそれ以降に整備が行なわれたか確定の方法がないが，最も古式形態をもっと思われる大型の３基の五輪塔，山内石塔群の中でも紀年銘のあるものでは最も古い応永25年銘の塔身等，造営当初の位置から大きく整備配列されたことは疑い得ないし，多くの五輪塔も，かつては２基単位あるいは「コ」の字形配列をもったものであったであろう。

ただ，Ⅺ区形成の時期比定の一つの参考になると思われるのは，この石塔群が勢田寺に関係するものであり，よしんばそうでなくとも飫肥伊東氏とは密接な関係にあったと思われ，伊東氏の天

正期における興亡と全く無関係であり得るとは思われない。

こうした石塔群の形成が追えるとするならば，大型の五輪塔の造られた開始期においては明確でないが，2基単位の構成が行われた15世紀～16世紀初頭の初源期段階において，すでに全体的な石塔群の構成が，地割り企画され，丘陵の開削も実施されていたとみなせる。石塔群を結ぶ「導線計画」は，その後〈広場〉の位置も含めⅤ・Ⅵ・Ⅶ区に南北に統一された配列を規定し，Ⅻ区の整備が行われる際にも強い既成による規制を示している。

5．造営集団と石工達

山内石塔群においては，蔵骨器とみなせるものは3点確認されただけで，五輪塔地輪下などに埋葬の痕跡を示す遺構・遺物は確認出来なかった。豚舎の建設された下段下の平坦面に，Ⅻ区に検出された須恵質の蔵骨器のように，他に幾つかの埋葬が行われていた可能性はあるが，少なくとも調査対象となった石塔類に関しては，埋め墓というより参り墓とみなすべきものであろう。五輪塔水輪の納骨穴に焼骨の納められた痕跡も，調査の範囲では確認出来なかった。

こうした，山内石塔群を造営した人々の階層を確定付けることは難しい。僧侶とみなし得る板碑以外について，五輪塔類は，伊東塔ほどの定式化された姿はないが，宝塔的五輪塔とでもいうべき相輪をいただく五輪塔などから，伊東氏につながる武士層，その中でもより地付きの階層に限られた人々の造営になるものとみなしたい。

「石場」（中央）の遠景

現在も行われている石切り場

一方，石塔類の製作者達及びその石材の供給については，かすかながら辿る術がある。石塔群に使用された石材の大半は，清武町方面でいう安ケ野（あがの）石と呼ばれる凝灰岩とみられる。これら凝灰岩の切り出しは，古くから知られており，石塔群から北西へ約6kmの黒北周辺が産地である。かつて石切りされていた場所は，現在「石場」という地名で残っており，さらに北西の山手に入った場所では，今も石材の切り出しが続けられている。

凝灰岩の採石は，10数mの高さの切り通し場で行われているが，岩質は上層が軟かく，下層に従って硬くなり，上面から8～10mでいわゆる岩のシンに行きつく。石塔群の中にみられた，雨水にも溶けてしまいそうな軟質な石塔も，加工にも苦心のみられる硬質な石塔も，同一産であり，採られた岩質の違いによることが分かる。

これらの石切りに参加した山石工及び石塔類の製作に関わった石工たちについては，明瞭な文献・伝承も伝えられていない。現在も行われている石切りに従事する山石工達から，過去にさ

かのぼる系譜をとらえることは難しい。せいぜい祖父の代までで，それ以上の確認は出来なかった。それに対し，石塔類の製作に門わった石工たちについては，検出された石塔類に作者名の刻まれたものもなく，決定的な資料に欠ける。ただ，現在黒坂の観音堂に移転されている，勢田寺に所在したとされる仁王像（宝暦３年（1753）製作）には，平賀民祐全という製作者名が刻まれている。平賀民祐全は，平賀快有（宮崎市古城伊満福寺の天文３年（1534）銘の仁王像作者）や，平賀快然坊（宮崎市松崎観音の貞享３年(1685)銘の仁王像作者）につながる，石工というより仏師といえる人物である。従って，これらの人物は，直接山内石塔群の石塔類の製作者達につながるものではないであろう。ただ，名を刻み得た石工・仏師の背景に，祈りつつ刻む多くの人々の群れが存在したには違いない。

註

(1) 水野正好「群集墳の群構造とその性格」『高山古墳群調査報告書』小野市教育委員会（1974）

第2節　石塔の形態分類と時期変遷

1．はじめに

当石石塔群では，空風輪533，火輪347，水輪495，地輪539，相輪132，塔身37出土しており，各区の出土数は**表2**の通りである。各区の石塔の推定最大造営数により当遺跡の各区を見ると，Ⅺ区（140基）の大グループ，Ⅱ区（62基）・Ⅳ区(67基)・Ⅵ区(57基)・Ⅷ区(52基)・Ⅻ区(63基)・Ⅹ区(47基)の中グループ，Ⅰ区（27基）・Ⅲ区(23基)・Ⅴ区(20基)・・Ⅸ区(22基)・Ⅺ区（18基）・ⅩⅢ区（7基）の小グループに分かれる。

紀年銘を有するのは，Ⅺ区の342の応永25(1410)年の塔身，Ⅺ区の486の永正15(1518)年の火輪，Ⅺ区の491の大永（1521～28）年間の塔身，Ⅺ区の260の天文7（1538）年の塔身だけであるので，石塔の形態分類にあたっては法量の利用を計った。

区	空風輪	火輪	水輪	地輪	相輪	塔身
Ⅰ	16 3.0	27 7.8	12 2.6	18 3.3	18 13.6	7 18.9
Ⅱ	25 4.7	17 4.9	34 6.9	62 11.5	1 0.8	1 2.7
Ⅲ	16 3.0	9 2.6	20 4.4	23 4.3	1 0.8	1 2.7
Ⅳ	62 11.6	47 13.5	67 13.5	58 10.8	11 8.3	4 10.8
Ⅴ	10 1.9	8 2.3	20 4.0	12 2.2	4 3.0	
Ⅵ	57 10.7	29 8.4	33 6.7	28 5.2	4 3.0	1 2.7
Ⅶ	49 9.2	20 5.8	52 10.5	41 7.6	2 1.5	
Ⅷ	63 11.9	26 7.5	56 11.3	30 5.6	1 0.8	1 2.7
Ⅸ	22 4.1	11 3.2	6 1.2	8 1.5		
Ⅹ	47 8.8	18 5.2	27 5.5	26 4.8	7 5.3	
Ⅺ	87 16.3	85 24.5	99 20.0	140 26.0	76 57.6	16 43.2
Ⅻ	18 3.4	11 3.2	15 3.0	8 1.5		1 2.7
ⅩⅢ	5 0.9	7 2.0	7 1.4	1 0.2		
不明	56 10.5	32 9.2	47 9.5	84 15.6	7 5.3	5 13.5
計	533	347	495	539	132	37

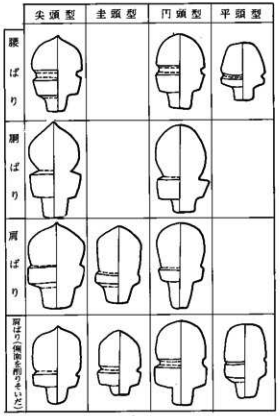
表2　各区毎の出土数

2．石塔の形態分類

空風輪

空風輪は，空輪の頂部の形態によって尖頭型・圭頭型・円頭型・平頭型に分け，更に関忠夫氏の分類[1]を踏襲して空輪の最大径によって腰ばり・胴ばり・肩ばり・肩はり（側面を削りそいだもの）に分けられる（第20図）。

次に空輪の最大径(e)と高さ(a)の法量を利用して細身と太身に分けた。細身と太身は，a／eの数値を求めるにあたっては次の過程を経た。①高さと最大径それぞれ1㎝刻みの数量の折れ線グラフを作成し，ピークのグループを中型，それより大きい数値のグループを大型，小さいグループを小型とする(表3)。②高さ大・最大径中，高さ大・最大径小，高さ中・最大径小の組み合わせを抽出し，高さ／最大径の数値の



第20図　空風輪形態分類図

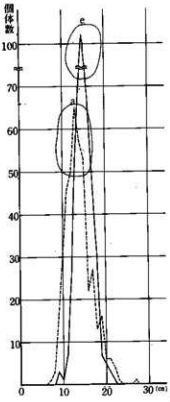


表 8　空風輪の法量グラフ

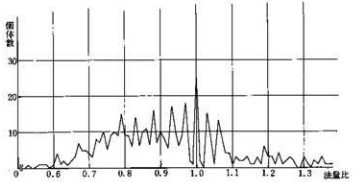


表 4　空風輪の法量比グラフ

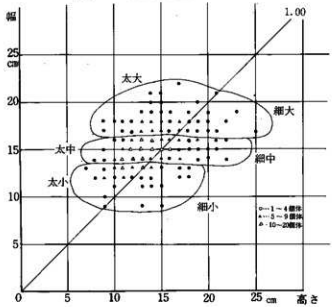
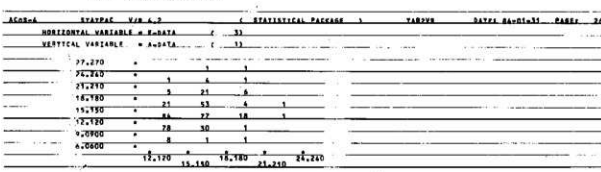


表 5　空風輪の法量分布

区	太大	太中	太小	小計	細大	細中	細小	小計	計
I	3 30.0	2 20.0	1 10.0	6	1 10.0	2 20.0	1 10.0	4	10
II	0	4 20.0	0	4	1 5.0	9 45.0	6 30.0	16	20
III	2 13.3	4 26.7	1 6.7	7	0	7 46.7	1 6.7	8	15
IV	1 1.9	3 5.8	5 9.6	9	12 23.1	18 34.6	13 25.0	43	52
V	1 10.0	1 10.0	0	2	4 40.0	2 20.0	2 20.0	8	10
VI	3 5.4	9 16.1	4 7.1	16	14 25.0	21 37.5	5 8.9	40	56
VII	1 2.1	4 8.5	5 10.6	10	11 23.4	24 51.1	2 4.3	37	47
VIII	2 3.6	9 16.1	5 8.9	16	4 7.1	28 50.0	8 14.3	40	56
IX	0	1 10.0	0	1	2 20.0	1 10.0	6 60.0	9	10
X	4 10.3	4 10.3	4 10.3	12	9 23.1	15 38.5	3 7.7	27	39
XI	5 7.2	29 37.7	8 11.6	42	9 13.0	14 20.3	4 5.8	37	69
XII	1 6.7	3 20.0	3 20.0	7	2 13.3	6 40.0	0	8	15
XIII	0	0	0	0	2 100.0	0	0	2	2
XIV	0	9 23.7	2 5.3	11	6 15.8	13 34.2	8 21.1	27	38
計	23 5.2	82 18.7	38 8.7	143 32.6	77 17.5	160 36.4	59 13.4	296 67.4	439

表 6　各区における空風輪の形態別出土表



```
ACORN4    STATPAC   V/B 4.2          ( STATISTICAL PACKAGE )    YARVEN      DATE: 84-01-31   PAGE:  24
     HORIZONTAL VARIABLE = A=DATA      ( 33)
     VERTICAL VARIABLE   = A=DATA      ( 33)

     27.270  *
     25.240  *                                    1
     21.210  *                5          21      6
     17.180  *                21         53      4        1
     13.150  *                84         77      18       1
     11.120  *                78         30      1
      9.0900 *                 8          1      1
      6.0600 *                 1
             *----------*----------*----------*----------*
             12.170     15.140     18.180     21.210     24.240
```

表 7　データシート (空風輪)

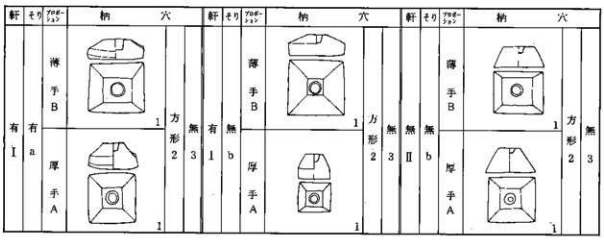
0.01刻みの数量の折れ線グラフを作成する(表4)。④ ②と③から数値を求める。①～④の段階を経て，空風輪の細身・太身の数値を1.00に求めた。①で，最大径の小型は9.0～13.9cm，中型は14.0～16.9cm，大型は17.0～21.9cmである。1.00の数値で太細の2類，最大径で大・中・小の3類，計6類に分類される(表5)。6タイプ分類によって遺跡全体では，太身の大型5.2%・中型18.7%・小型8.7%・計32.6%，細身の大型17.5%・中型36.4%・小型13.4%・計67.4%である(表6)。各区において割合が最も高いのは，太身の大型はⅠ区，太身の中型はⅪ区，細身の大型はⅤ区，Ⅷ区，細身の小型はⅨ区，他の区は細身の中型である。

空風輪の規格としては，最大径4尺・高さ4尺，最大径5尺と高さ4尺・5尺の組み合わせの割合が高い(表7)。

火輪

火輪は，軒の有無・プロポーションの厚薄・枘穴の形態（円形・方形・無）・そりの有無の4要素によって分類する（第21図)。特にプロポーションの厚手・薄手に関しては，高さ(C)／幅(p)の数値で分ける。その数値を求めるにあたっては，空風輪と同じ①～④の段階を経て(表8・9)，火輪の厚薄の数値0.48を求めた。①で幅の小型は25.0～33.9cm，中型は34.0～39.9cm，大型は40.0～54.0cm，高さの小型は11.0～13.9cm，中型は14.0～23.9cm，大型は24.0～37.9cmである。0.48の数値で厚薄の2類，幅で大・中・小の3類の計6類に分類される（表10)。6タイプ分類によって遺跡全体では，厚手の大型14.8%・中型23.7%・小型11.7%・計50.2%，薄手の大型14.4%・中型27.1%・小型8.2%・計49.8%である(表11)。各区において割合が高いのは，厚手の大型はⅫ区，厚手の中型はⅡ・Ⅷ区，薄手の中型はⅠ・Ⅳ・Ⅵ区，薄手の小型はⅦ区，厚手の中型と薄手の中型の組み合わせはⅢ・Ⅴ・Ⅸ・Ⅺ区，薄手の大型と薄手の中型の組み合わせはⅩ区である。厚手はⅡ・Ⅲ・Ⅷ・Ⅸ・Ⅻ区，薄手はⅠ・Ⅳ・Ⅵ・Ⅶ・Ⅹ・Ⅺ・Ⅻ区が割合が高い。遺跡全体では大型29.2%，中型50.9%，小型19.9%であり，大型はⅧ区，小型はⅦ区，大型と中型の組み合わせはⅠ区，他の区は中型が割合が高い。

枘穴の形態としては，幅11尺と高さ5尺・6尺・7尺，幅12尺と高さ6尺・7尺の割合が高い(表11)。



第21図　火輪形態分類図

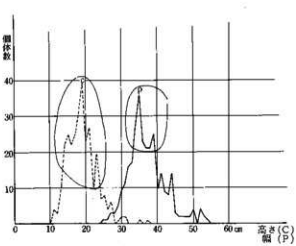


表8　火輪の法量グラフ

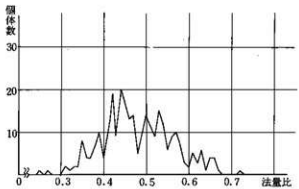


表9　火輪の法量比グラフ

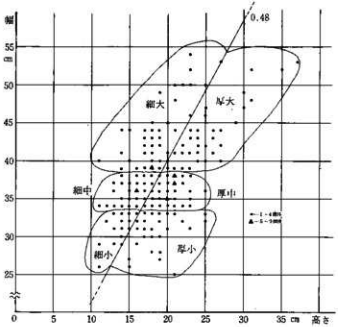


表10　火輪の法量分布

区	厚大	厚中	厚小	小計	薄大	薄中	薄小	小計	計
I	2 8.7	2 8.7	2 8.7	6	8 34.8	8 34.8	1 4.3	17	23
II	3 21.4	8 57.1	1 7.1	12	0	2 14.3	0	2	14
III	2 15.4	3 37.5	0	5	0	3 37.5	0	3	8
IV	6 14.3	11 26.2	3 7.1	20	9 21.4	12 28.6	1 2.4	22	42
V	0	2 33.3	1 16.7	3	0	2 33.3	1 16.7	3	6
VI	3 12.5	4 16.7	2 8.3	9	0	12 50.0	3 12.5	15	24
VII	1 5.3	4 21.1	4 21.1	9	1 5.3	4 21.1	5 26.3	10	19
VIII	0	7 35.0	6 30.0	13	1 5.0	5 25.0	1 5.0	7	20
IX	2 20.0	2 20.0	2 20.0	6	1 10.0	2 20.0	1 10.0	4	10
X	1 5.6	3 16.7	3 16.7	7	5 27.8	5 27.8	1 5.6	11	18
XI	10 15.2	16 24.2	6 9.1	32	10 15.1	16 24.2	8 12.1	34	66
XII	1 14.3	2 28.6	0	3	1 14.3	2 28.6	1 14.3	4	7
XIII	4 80.0	0	1 20.0	5	0	0	0	0	5
XIV	8 27.6	5 17.2	3 10.3	16	6 20.1	6 20.1	1 3.4	13	29
計	43 14.8	69 23.7	34 11.7	146 50.2	42 14.4	79 27.1	24 8.2	145 49.8	291

表11　各区における火輪の形態別出土表

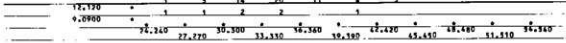
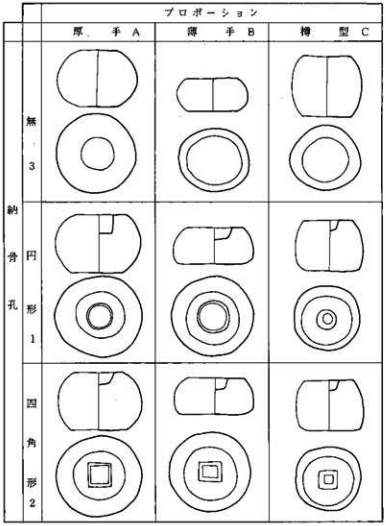


表12　データシート（火輪）

水　輪

水輪は，納骨孔（円形・四角形・無）・プロポーションの２要素によって分類する(第22図)。特にプロポーションの厚薄に関しては，高さ(Ⓒ)／幅(ⓦ)の数値で分ける。その数値を求めるにあたっては，火輪と同じ①～④の段階を経て(表13・14)，水輪の厚薄の数値0.63を求めた。①で幅の小型は21.0～29.9cm，中型は30.0～38.9cm，大型は39.0～47.9cm，高さの小型は12.0～15.9cm，中型は16.0～23.9cm，大型は24.0～33.9cmである。0.63の数値で厚薄に分け，大・中・小型の３種の計６種に分類された(表15)。遺跡全体では厚手の大型6.2％・中型26.2％・小型10.4％・計42.8％，薄手の大型7.2％・中型43.2％・小型6.8％・計57.2％である(表16)。各区においては，厚手の中型はⅥ・Ⅶ区，他の地区は薄手の中型の割合が高い。厚手はⅢ・Ⅵ・Ⅸ・Ⅻ区，薄手はⅠ・Ⅱ・Ⅴ・Ⅷ・Ⅹ・Ⅺ区が割合が高く，半々がⅥ・Ⅶ区である。遺跡全体では大型13.4％，中型69.4％，小型17.2％であり，Ⅻ区がすべて大型であるのに対して，他の区はすべて中型の割合が高い。

納骨孔の形態は円形が59の11.9％，四角形が10の2.0％である。水輪の幅と高さの規格としては，幅10尺と高さ５尺，幅11尺と高さ５尺・６尺，幅12尺と高さ６尺・７尺，幅13尺と高さ７尺の割合が高い(表17)。



第22図　水輪形態分類図

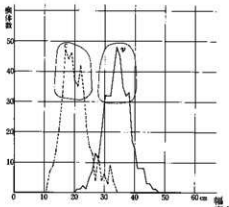


表13　水輪の法量グラフ

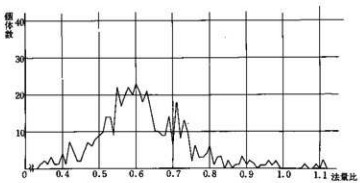


表14　水輪の法輪比グラフ

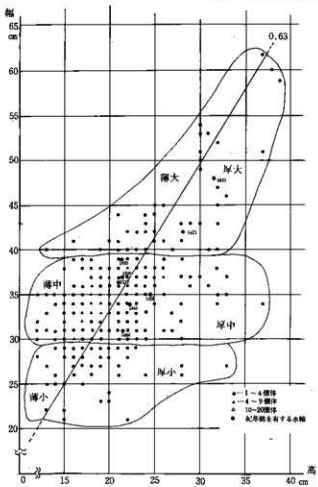


表15　水輪の法量分布

IX	厚大	厚中	厚小	小計	薄大	薄中	薄小	小計	計
I	0	1 8.3	2 16.7	3	1 8.3	7 58.3	1 8.3	9	12
II	1 2.9	7 20.6	2 5.9	10	6 17.6	17 50.0	1 2.9	24	34
III	0	7 38.9	3 16.7	10	0	8 44.4	0	8	18
IV	4 6.3	23 35.9	6 9.4	33	3 4.7	25 39.1	3 4.7	31	64
V	3 23.1	2 15.4	1 7.7	6	1 7.7	4 30.8	2 15.4	7	13
VI	3 7.5	13 32.5	4 10.0	20	4 10.0	13 32.5	3 7.5	20	40
VII	0	18 36.0	7 14.0	25	2 4.0	14 28.0	9 18.0	25	50
VIII	2 3.7	11 20.4	8 14.8	21	2 3.7	30 55.6	0	32	53
IX	0	2 33.3	2 33.3	4	0	2 33.3	0	2	6
X	0	10 37.0	2 7.4	12	2 7.4	11 40.7	2 7.4	15	27
XI	7 7.4	18 18.9	8 8.4	33	4 4.2	47 49.5	11 11.6	62	95
XII	1 7.1	4 28.6	0	5	1 7.1	8 57.1	0	9	14
XIII	6 100.0	0	0	6	0	0	0	0	6
XIV	2 5.3	7 18.4	4 10.5	13	8 21.1	17 44.7	0	25	38
計	29 6.2	123 26.2	49 10.4	201	34 7.2	203 43.2	32 7.0	269 57.2	470

表16　各区における水輪の形態別出土表

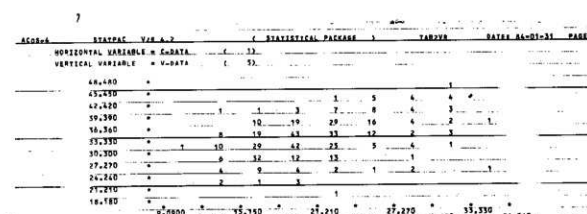
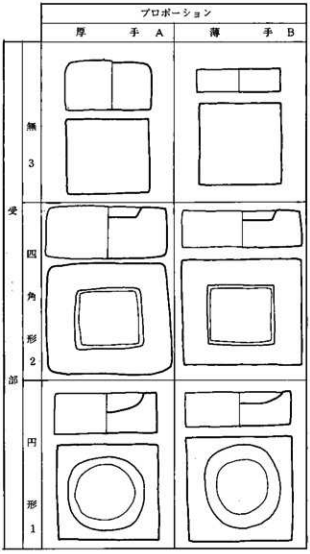


表17　データシート(水輪)

地　輪

地輪は，受部（無・円形・四角形）・プロポーションの厚薄の２要素によって分類する(第23図)。特にプロポーションの厚薄に関しては，高さ（D)／幅（x）の数値で分ける。その数値を求めるにあたっては空風輪と同じ①～④の段階を経て(表18・19)，地輪の厚薄の数値0.30を求めた。②で幅の小型は26.0～34.9cm，中型は35.0～45.9cm，大型は46.0～60.9cm，高さの小型は 6.0～8.9 cm，中型は 9.0～13.9cm，大型は14.0～27.9cmである。0.30の数値で厚薄の２類，幅で大・中・小の３類の計６類に分類される(表20)。６タイプ分類によって遺跡全体では厚手の大型 7.4％・中型50.0％・小型13.3％・計70.7％，薄手の大型 4.9％・中型20.3％・小型 4.0％・計29.3％である(表21)。各区において割合が高いのは，厚手の中型である。すべての区で厚手が薄手より割合が高い。遺跡全体では大型12.4％，中型70.3％，小型17.3％であり，すべての区で中型の割合が高い。

受部に四角形の二段掘り込みを持つものが少数存在する。地輪の幅と高さの規格は，幅12尺と高さ３尺，幅13尺と高さ３尺・４尺，幅14尺と高さ４尺，幅15尺と高さ４尺の組み合わせの割合が高い(表22)。



第23図　地輪形態分類図

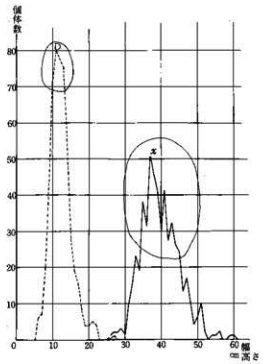


表18　地輪の法量グラフ

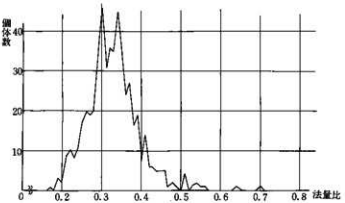


表19　地軸の法量比グラフ

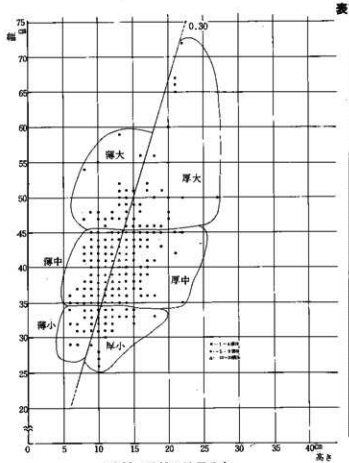


表20　地軸の法量分布

	厚大	厚中	厚小	小計	薄大	薄中	薄小	小計	計
I	1 5.6	7 38.9	4 22.2	12	1 5.6	4 22.2	1 5.6	6	18
II	3 4.9	30 49.2	9 14.8	42	4 6.6	13 21.3	2 3.3	19	61
III	1 4.3	14 60.9	1 4.3	16	1 4.3	6 26.1	0	7	23
IV	1 1.8	29 45.6	6 10.5	36	2 3.5	16 28.1	3 5.3	21	57
V	1 10.0	5 50.0	3 30.0	9	0	1 10.0	0	1	10
VI	4 14.3	10 35.7	4 14.3	18	2 7.1	4 14.3	4 14.3	10	28
VII	0	20 50.0	10 25.0	30	3 7.5	6 15.0	1 2.5	10	40
VIII	1 3.3	15 50.0	3 10.0	19	2 6.7	3 10.0	6 20.0	11	30
IX	0	6 75.0	1 12.5	7	0	1 12.5	0	1	8
X	0	15 57.7	5 19.2	20	1 3.8	5 19.2	0	6	26
XI	16 11.6	73 52.9	11 8.0	100	7 5.1	29 21.0	2 1.4	38	138
XII	0	3 37.5	1 12.5	4	1 12.5	2 25.0	1 12.5	4	8
XIII	1 100.0	0	0	1	0	0	0	0	1
XIV	10 12.8	36 46.2	12 15.4	58	2 2.6	17 21.8	1 1.3	20	78
計	39 7.4	263 50.0	70 13.3	372 70.7	26 4.9	107 20.3	21 4.0	154 29.3	526

表21　各区における地軸の形態別出土表

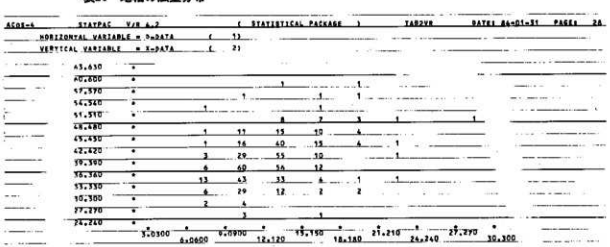


表22　データシート（地軸）

相　輪

相輪は，セットとなる個体はⅠ・Ⅳ・Ⅺ区に出土しており，全部で7基である。それ以外のものの出土状況はセットにならずに散在している。長い年月のため破損しているものもあり，1個体として数え得るものは94基である。その中でも，請花と露盤に趣きをおいた型式分類に耐え得る個体は86基となる。これらの相輪を5型式に分類してみた(第24図)。

Aタイプ…二段かさねの上部請花を持ち，下部請花と露盤を有する。請花には，花弁・ハートをモチーフとして文様を施す。大型のものが多い。

Bタイプ…上部請花は一段となり，下部請花と露盤を有する。請花には，花弁・ハートをモチーフにした文様を施す。小型である。

Cタイプ…上部請花は一段で，露盤は退化し，下部請花が残る。請花には花弁・ハートをモチーフとした文様を施す。

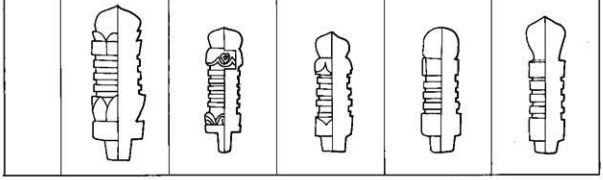
区	A	B	C	D′	D′	計	不明
Ⅰ	0	0	7 53.8	2 15.4	4 30.8	13 15.1	5
Ⅱ	0	0	0	0	1 100.0	1 1.2	
Ⅲ	0	0	0	1 100.0	0	1 1.2	
Ⅳ	0	0	3 33.3	1 11.1	5 55.6	9 10.5	2
Ⅴ	0	0	0	0	0	0	4
Ⅵ	0	1 50.0	1 50.0	0	0	2 2.3	2
Ⅶ	0	0	0	0	0	0	2
Ⅷ	0	0	0	0	0	0	1
Ⅸ	0	0	0	0	0	0	0
Ⅹ	0	1 25.0	1 25.0	0	2 50.0	4 4.7	3
Ⅺ	6 11.8	0	24 47.1	2 3.9	19 37.3	51 59.3	26
Ⅻ	0	0	1 100.0	0	0	1 1.2	0
ⅩⅢ	0	0	0	0	0	0	0
ⅩⅣ	0	0	0	2 50.0	2 50.0	4 4.7	3
計	6 7.0	2 2.3	37 43.0	8 9.3	33 38.4	86	

表23　各区における相輪の形態別出土表

Dタイプ…上部請花は一段で，露盤は退化し，下部請花が残る。請花は上下のどちらか，あるいは両方が八角形を呈する。請花は無文となる。

D′タイプ…Dタイプと同じ形態ではあるが，請花の上・下とも四角形を呈する。請花は無文である。(但し，この分類には宝珠・九輪・脚部の形態は考慮していない。)

	A	B	C	D	D
上部請花	二　段	一　段			
露　盤	有	退　化			
請　花	花弁・ハート	無　文			
				八角形	四角形



第24図　相輪形態分類図

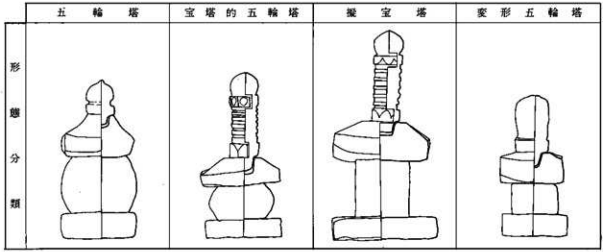
上記の分類に基づく各区の出土状況を示す表23からもわかるように，各区とも出土例が少量で区ごとに傾向をつかむことは難しい。中には，全体の6割近くを占めるような区もあるが，傾向はつかめるものの全体的な傾向と同じになる。そのため，ここでは各区については取り扱わずに全体的に考えることにする。

当石塔群において主流となる型式は全体の43.0%をも占めるCタイプということになる。しかし，DとD'タイプは請花・露盤の構成・文様等が全く同じなので類似と見れば47.7%となり，ほぼCタイプと同じ割合でこれも又当石塔群の主流ということになる。つまり，C，D（D'）タイプの2型式が山内石塔群の相輪の一般的な形態を示しているということになる。

石　塔

石塔のタイプとしては，空風輪・火輪・水輪・地輪の五輪塔，相輪・火輪・水輪・地輪の『宝塔的五輪塔』，相輪・火輪・「塔身」・地輪の『擬宝塔』，空風輪・火輪・「塔身」・地輪の『変形五輪塔』がある（第25図）。『宝塔的五輪塔』は，Ⅳ区では倒壊した状態で出土しており，また最初から規格して製作されている。『変形五輪塔』はⅠ区に特徴的に多数出土している。

空風輪を除く器高で，五輪塔の小型は29～36cm，中型は39～59cm，大型は62～97cmである。



第25図　五輪塔形態分類図

3．石塔の編年

空風輪の編年に関しては，関忠夫氏[2]によって「鎌倉時代以後，腰ばりのもの，胴ばりのものが大勢を占めるが，肩ばりのもの，胴のふくらみを削りそいだものなどが南北朝時代から多くなり，やがて尖頂部の著しくのびるものができてくる」という指摘がある。当石塔群においてタイプ分類を行なって形態的な変遷を追求しようとしたが，石塔の紀年の少なさと空風輪の可動性のために変遷を明示することはできなかった。

火輪の編年を行なう上で当遺跡で点として把握できるものとしては，永正15（1518）年の紀年銘を有するⅪ区の486，塔身に大永（1521～28）の紀年銘を有するⅪ区の491，塔身に天文7（1530）の紀年銘を有するⅨ区の260がある。486は厚手（0.50）の小型，491は薄手（0.44）の大型，260は厚手（0.59）であり，堂地東遺跡Ⅵ区出土の大永の火輪は厚手（0.48）の大型である。16世紀前半に厚手の小型→厚手の大型と変遷する。県内の紀年銘を有する火輪を「日向の金

石文」[3]から抽出すると，応永５（1399）年の厚手（0.51）の大型，応永（1394～1427）年間の厚手（0.51）の大型，大永６（1526）年の厚手（0.51）の大型，天文10（1541）年の厚手（0.68）の中型，天正２（1574）年の薄手（0.40）の大型，天正３（1575）年の厚手（0.62）の大型，天正６（1578）年の厚手（0.69）の大型，文禄５（1596）年の厚手（0.76）の大型，慶長２(1597)年の厚手の中型である。15世紀は0.50前後の厚手の大型のものが，16世紀になると厚手の大型に厚手の中型，薄手の大型が加わり多様化して一つの規格及び規制がくずれる。

水輪の編年を行なう上で点として把握できるものは当石塔群にはない。しかし，本勝寺（宮崎市）には水輪に紀年銘が線刻しており，応永17（1410）年の0.66，応永20（1413）年の0.67の厚手の大型，嘉吉元（1441）年の0.65の厚手の中型，康正元（1455）年の0.58の薄手の中型，長禄２（1458）年の0.70，寛正５（1464）年の0.69の厚手の中型，明応２（1493）年の0.54の薄手の大型，大永６（1526）年の0.58，天文11（1532）年の薄手の中型がある。本勝寺では，15世紀前半の厚手の大型→15世紀中頃の厚手の中型→15世紀末の薄手の大型→16世紀前半の薄手の大型へと変遷する。日向国内の13世紀～16世紀にかけての紀年銘を有する水輪[4]の法量の推移は表24である。最古の五輪塔は観音堂墓地（宮崎市生目）の寛喜４（1232）年の厚手（0.93）の大型（幅51.5cm）であり，それ以後14世紀前半にかけて厚手から薄手へ，そして小型へと推移をたどり，14世

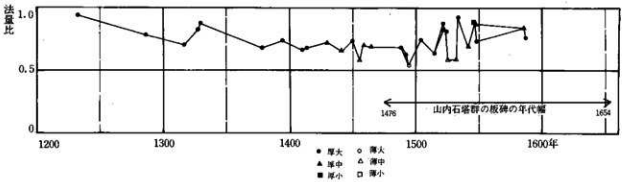


表24　日向の水輪の法量比の推移

紀前半から中頃に厚手の中型に変換する。15世紀末から16世紀前半は，薄手の大型・中型が登場し，厚手の大型・中型・小型，薄手の大型・中型と多様化し，一つの規格及び規制がくずれる。[5]しかし，16世紀後半には厚手の中型へ指向する傾向が窺える。

地輪の編年を行なう上で点として把握できるものとしては次のものがある。大永（1521～28）年間を紀年銘十有する塔身とセットである。Ⅺ区の491は薄手(0.23)の大型である。天文(1532)～55）年間の紀年銘を有する塔身とセットであるⅪ区の260は厚手（0.39）の大型である。16世紀前半に薄手の大型→厚手の大型であるが，火輪や水輪の推移を見ると，やはり一つの規格及び規制がくずれた結果の多様化である。

おわりに

当石塔群の石塔の形態分類を行なううえで，紀年銘を持つ石塔がわずか３点しかないために法量の利用を計った。その結果，空風輪は当石塔群の時期的な問題，石工の癖，可動性のためによい結果がでなかったが，火輪には法量の適用が可能であり，薄手のが15世紀に登場する。しかし，

水輪の場合にも板碑の示す室町から江戸へかけての変動期（1476年～1654年）においては，多様化のために法量で以って時期を特定することは困難である。『相輪的五輪塔』がⅠ区で倒壊状態で検出されたことは注目されることであり，今後の類例が待たれる。

今後，石塔の形態分類及び編年をする上で，何を以て石塔のセット関係とみなすかという基本的な認識や石塔は頻繁に立て替えられるものであるという認識に立って進めなければならないと思う。

註

(1) 関忠夫「宝珠の造形意匠」（『東京国立博物館紀要』第10号）1975

(2) 同　上

(3) 瀬之口傳九郎「日向之金石文」（『宮崎県史蹟名勝天然紀念物報告』第12輯』1942

(4) 同　上

(5) 15世紀後半～16世紀前半にかけて水輪の規格の多様化は，応仁の乱後の政治・経済・社会等の混乱に対応する可能性がある。

第3節　板碑の総括

1．はじめに

「板碑」という名称は，主に関東地方に産する緑泥片岩製の薄い板状の石材を使用した石造供養塔婆を指すもので，既に江戸時代から使われ始めた言葉である。その形態的な特徴は，頭部が三角形でその下に2本の横線または切り込みを入れること。身部正面に主尊や銘文を彫り込み，基部は荒削りのままで地面や台石にさし込み易い形に加工することなどである。また，性格的には追善供養や逆修供養など「供養」のために造立されたものと言われる(1)。学術用語としての「板碑」の名称は，大正～昭和初期の名称論議を経て現在ほぼ定着しているが，一方では「板石塔婆」の名称も使われており，統一されるには至っていない。「板碑」名称の定着には服部清道氏の『板碑概説』(2)の影響が強く，関東の典型的な板碑に限定されず各地の板碑様の石造供養塔婆も「一一型板碑」として分類されて以来，各地方の地域性・石材事情等に立脚した部厚い形態のものや自然石のものまでも「板碑」として認識されているようである。

九州では，大正年間に相次いで「板碑様の古碑」(3)「板碑系統の碑」(4)（河野清実氏），「九州系統の板碑」(5)（瀬之口伝九郎氏），「板碑」(6)（池上　年氏）などの名称が使われ，板碑の外観を持つが関東のものに比べて部厚いものでも「板碑」として認識しはじめている。そして，さらに前述の『板碑概説』でもこれらを「九州型板碑」として取扱い，九州地方の板碑の存在が紹介され現在に至っている。

宮崎県では，現在まで板碑に関する研究・論文は少なく，昭和17年瀬之口伝九郎氏の「日向之金石文」(7)以降は，久保常晴氏の「宮崎県の題目板碑」(8)，多田隈豊秋氏の『九州の石塔』下巻(9)ほか市町村刊行の文化財関係の書物に板碑の銘文などが紹介されている程度である。しかし，まだ県内各地には相当数の石塔群が忘れられ放置されたまま日々風化の危機に瀕していると考えられ，また，未発見のまま埋没していると予想される。それ故，当県の中世社会を解明するためにも，これらの悉皆調査は急務であると思われる。

比較的研究もすすみ資料の多い大分県・鹿児島県の間にあって宮崎県の板碑はどのような特徴を持っているのかを述べる前に，隣県の板碑について概観してみたい。先ず，当県の北隣り大分県の板碑は，国東半島中心の分布を示している。形態的には豊後型と呼称される額部の突き出た特徴的な碑伝型の板碑が古く，時代が下るにつれて額部の突出もなくなり技術が稚拙になるといわれる。また，宮崎県寄りの県南に近い地域では，時期差とは関係なく額部の突出が少ないものが多いともいう(10)。現在最古の紀年銘は「正応4年(1291)」で東国東郡安岐町護聖寺に存在する。一方，南隣りの鹿児島県ではほぼ全県的な分布が見られ，形態的には角柱状（方柱状）のものや額部が突き出たり，或るいは線刻によって上額部を区切るもの，自然石のものなど多種多様である。また，台石に据えるものもよく見られる(11)。宮崎県に近い県北には軽石製の小型の板碑も多く見られる。現在最古の紀年銘を有する板碑は肝付郡根占町宇都の「正応6年（1293）」の板碑である。次に宮崎県の板碑の一般的な正面形態としては，鎌倉～南北朝期の板碑は殆ど山形が高く，二条線も深く彫られ額部が大きく突き出ること。種子は，大分・鹿児島両県同様薬研彫りで深く彫

られること。室町期以後は額部の突出が少なくなるか殆ど見られなくなり，二条線も浅い線彫りになることなどが指摘されている[12]。また，高さの長短は宗派色・地方色によっても違うが，長いものが古く，時代が下ると短いものが多いともいわれる[13]。現在，日南市大追寺跡の「永仁３年（1295）」銘板碑が最古のものとして知られ[14]，大分・鹿児島両県の板碑と初現時期はほぼ同じである。

２．調査の結果

今回発掘した山内石塔群では80基を越える板碑類が出土し，そのうち頭部形態の不明な身部や基部の破片，砂岩の小自然石柱等を除くと，74基程の板碑が確認された。出土状態は前章で各区毎に述べられているが，殆ど倒れた状態で出土し，元位置に直立していたものは少ない（Ⅱ区⑩，Ⅺ区㊽の基部，Ⅺ区㊺などが確認されている）。また，Ⅹ区㊷～㊹の板碑やⅪ区㊷・㊻・㊽の板碑など，この石塔群の北面を果樹園や豚舎で削平した際に移設されたものと考えられる。特に㊻はその基部（㊿）が，後世に集められたと思われる五輪塔など石造遺物の中に混在しており，折損した身部のみⅪ区北前面に立てられていた。板碑は移動性の高い石造物と言われ，当県でも宮崎郡佐土原町の本永寺が今の東諸県郡高岡町に移った際に応永８年銘板碑（現在県内最古の題目板碑）も移された例がある。しかし，山内石塔群は造営当時のまま埋没したと思われ，移動があったとしても群内での移設にとどまるものと推測される。前述の開墾の際の移設の外，Ⅺ区などで造営期間中のある時期に拡張が認められ，その際に板碑の配置が変わった可能性が高い。造立当時の様子は，Ⅳ区Ａ群の「コ」の字形の配置に見られるように主要な五輪塔数基を中心にその両側の前端に数基対置している場合と，Ⅲ区ほか各区で見られるように数基の五輪塔に１基の割合で立てられている場合等がある。五輪塔がこの場合に供養塔的性格を持つか墓塔的性格を持つか，いずれにしても，板碑は追善供養塔的な性格が強いといえよう。

３．頭部形態による編年試案

出土板碑類の法量や諸特徴については別表に一覧した。これらの板碑類は様々な特徴が組合わさり，多種多様なバリエーションを示している。このため，正面形態・法量・面取りなど各要素を総合した形態分類による編年については，将来県内の板碑資料の増加を待つこととして，今回は板碑に普遍的な頭部形態による分類を試みた。なお，ここでいう大型・中型・小型の板碑とは，計測値を参考に全体のバランスから分けた概略の規模を指すもので，厳密に定義付けしたものではないことを断わっておきたい。

Ⅰ類……正面形山形が直線によって構成された三角形をなすもの。次のように細分した。

Ⅰａ…山形が低く，二条線の切り込みが深いもの（㉜・㊸など）。大型のものは少ない。身部に削り込みが多く見られ，深浅の違いにより額部が突き出て見えるものがある。

Ⅰｂ…山形が高く，線彫りに限らず切り込みのものも概して二条線は浅い（㉘など）。小型の板碑は見られない。

Ⅰｃ …山形は低いが，二条線の位置が身部の方まで下がり線彫りになるもの（⑯など）。これには大型・小

型のものは見られない。

Ⅰ′類……正面形山形が直線的な三角形を保ちつつも，既に線に歪みが見えるもの（㊺など）。これは基数も少なく，小型の板碑が多い。二条線等線彫りである。Ⅱ類への過渡的なものと見るより，石工の技量や石質によるものと考えられる。

Ⅱ類……正面形山形がやや円味を帯びて，曲線で構成された三角形をなすもの。次のように細分した。

Ⅱa1…正面形頭部と身部の境は角張っているか，二条線の切り込みで区画されているもの（⑤・㉖など）。

Ⅱa2…正面形Ⅱa1の断面が方形をした角柱状のもの（㊷など）。頭頂部が少々丸味を帯びる。

Ⅱb1…正面形頭部と身部の境が角張らず曲線的なもの（㉒など）。基数は少ない。

Ⅱb2…正面形身部から頭頂部にかけて流線形をなすもの（⑬など）。基数は少ない。

Ⅲ類……正面形頭部と身部の境が角張らず，山形はやや円味を帯びて曲線で構成され，頭頂部も丸くなるもの。

Ⅲa…頭部が略三角形を保つもの（㊽など）。

Ⅲb…頭部が円に近くなるもの（㉙など）。基数は少ない。

Ⅳ類……正面形頭部が三角形をなさず不整形なもの。

Ⅳa…自然石を一部整形，加工したもの（㊾など）。

Ⅳb…自然石を未加工のまま使ったもの（㊶など）。

いずれも基数は少ない。

Ⅳ′類……正面形頭部が三角形をなさず円いもの。

Ⅳ′a…円柱状のもの（㊿）[15]。

Ⅳ′b…正面形頭部が弧を描くもの（①）。

いずれも1基ずつの例外的な石造遺物である。

以上，頭部形態を主として分類を試みたが，当石塔群においてはⅠ・Ⅰ′類としたものが板碑総数の約49%を占め，次いでⅡ類が41%，Ⅲ～Ⅳ′類が10%の割合で存在している。紀年銘の判明している板碑12基（このうち㊹は頭部を欠く。⑥は「正□」銘で年代が不明である。頭部・二条線や法量などの一般的な傾向から江戸初期のものと推定されるが，ここでは除く）にあてはめると，

Ⅰa（㉘）⟶Ⅰc（㊴）⇢$\frac{Ⅱb}{Ⅱa_1}$（$\frac{㊿}{⑫}$）⇢Ⅰa（㊽）⇢Ⅱa1（㊸）

となり，途中Ⅱb1（㊳）・Ⅳ′b（①）・Ⅳa（㊶・㊽）等の少数のものが入る。これらから，紀年銘で確認できる約180年間については，頭部形態による板碑の年代的な変遷の傾向は，大きくⅠ類を基調にⅡ類が加わったとしか握めない。また，小型の板碑から大型のものへ変わったようにも思える。しかし，これは当石塔群の板碑の傾向としては言えても，在銘板碑の基数が少なく年代の判明している造立期間も短いために，そのまま県内全域に適用できる傾向とはいえない。前述の当県の板碑の一般的な正面形態からいえば，二条線の深いものや大型のものが江戸初期まで残るということは，この地域のみの特色であろうか。ただ，大きさについては，当地方の混乱が治まったと思われる天文年間，伊東義祐の勢い盛んな頃と，江戸時代になり飫肥藩の領域が確定した頃[16]に板碑の大型化がみられ，時代を反映するとともに，その造立者の階層をも暗示しているようである。

4．種子・銘文等による一考察

出土板碑の42%に何らかの種子・銘文・画像等が見られた。その内訳は墨書だけのものが23基，

陰刻のみ3基，陰刻の一部が墨書或るいは墨書の一部が陰刻のもの3基，レリーフだけのもの1基，レリーフと墨書の組み合わせ1基であり，圧倒的に墨書のものが多い。これは種子・銘文等の確認できないほかの板碑にもその風化した碑面には墨書されていた可能性が高いことを思わせる。種子・銘文を主に墨書で表わした板碑はこの地方に普遍的にみられ，清武町今泉や宮崎市熊野など周辺地でも確認できる。県内や隣県の板碑はその殆どが陰刻によって種子・銘文が記されているのに対し，特徴的な現象である。

当石塔群では銘文によってその造立主旨のわかる板碑は殆どなく，㉝と㉟の板碑ほか数例が追善供養を確認できるのみである。しかし，前述のとおり石塔の配置などから，他の板碑も追善供養と考えられる。主尊については，紀年銘板碑中最古の「文明8年」板碑（㉖）が七字題目の日蓮宗系の板碑である外は，殆どが密教系の板碑と考えられる。特に金・胎合わせて11基に大日如来種子が記され，従来，南九州は大日信仰が盛んであったとの指摘[17]どおり，当石塔群においてもその影響下にあったことが知られる。また，密教系の阿弥陀信仰かと思われる阿弥陀三尊種子3例の外，阿弥陀如来一尊種子が1例，「喝」字主尊[18]のもの一例も見られる。身部に五大種子の記されている板碑は10例あり，そのうち正面に五大種子だけ記されるもの2例，裏面に見られるもの1例，四面全てに見られるものが3例あった。関東の板碑には側面や裏面に文字を刻むものが例外的にしか見られないのに比らべると，その出現の割合は高いといえる。また，五大を「空風火水地」の漢字で表わしたものも1例見られた。これらは全て密教色が濃く表われているといえよう。特殊な例として，陽刻像の見られる①と㊴がある。①は正面に「きつね」のレリーフがある。この「きつね」は密教でも見られるモチーフらしいが，右側面に「サ」が墨書してあり，正面中央の梵字らしい墨痕と考えあわせると，左側面には確認できなかったが，阿弥陀三尊を祭っている可能性がある。㊴は舟形光背を負った弥陀・観音二尊と思われる陽刻像板碑である。板碑の特徴である山形も二条線も見られない。「九州の画像板碑の多くは16世紀における造立である」[19]との指摘もあり，形態が近世に多い舟形光背を呈することから，当石塔群の終わり頃[20]のものと思われる。

「文明8年」銘の㉖はこの石塔群では最古の板碑であり，また異質な存在でもある。「宮崎県の題目板碑」（前掲）によると，当県の題目板碑の分布は文明年間には既に日向市中心の分布圏へと移行したあとである。密教系の五輪塔・板碑の多い中で，㉖だけが日蓮宗系統の板碑であり1基しか存在しないということは疑問が残るところであるが，題目板碑の分布からすると，当時日向市中心の分布圏にありながら15世紀末からは日南市方面や宮崎市方面の分布圏にも宗勢が伸びていることが窺えるため，或るいは当地方にも日蓮宗の影響が及んだものであろう。しかし，県内の他の題目板碑が殆ど陰刻であり，特徴的な髭題目であるのに対し，これは墨書で記された特異なもので，楷書体の文字は時代的な特徴といえよう。

造立者・被供養者及び造立年代については，銘文からは十分に述べることができない。㉝は「孝子」という文字が見られ，子による追善供養のための板碑と思える。また，被供養者については，「権大僧都　和尚位」「権少僧都」「法印」等比較的高位にある僧籍の者の場合と，「神伯・禅尼（㊹）」「禅定門」「禅門」等僧籍以外の人々の法名とが見られるが，歴史上の人物に比定できるものはない。県内の板碑造立は，先ず日南地方を中心に鎌倉時代末の永仁年間（1293～1299

年）に始まり，南北朝を通じて宮崎市に及びさらに室町時代には日向市中心の分布圏に達している。[21] 山内石塔群の五輪塔群は既に14世紀初めには営まれていたと思われるが，[22] 板碑の方の初現は15世紀末であり，約200年間の開きがある。また，板碑伝播の傾向からいっても，宮崎市中心の分布圏に移行して約100年間過ぎていることになる。そこで，紀年銘のない板碑の中には頭部Ⅰa類で身部を深く削り込み額部が少し突出したもの（㊷）などが見られることから，これら無銘・古形態遺存の板碑の中に「文明8年」以前のものが存在する可能性があり，当石塔群における板碑の初現は遡るものと思われる。しかし，五輪塔群より先行することはないと考えられる。

5．まとめにかえて

以上，山内石塔群出土の板碑を簡単に総括してみたが，当県の板碑の調査研究例が少ないため，これらの系統やその背景について述べるだけの視野が得られていない。次に，若干の事実と可能性を示すにとどめ，今後の調査及び研究に期待したい。

当石塔群は造営期間中，終始密教的な宗勢の影響下にあったと思われる。また，石塔群盛衰の背景として，14世紀前半には土持・伊東両氏の影響があり，以後，伊東氏の勢力の進退に関連し，特に清武城の盛衰と軌を一にして石塔群は変遷したのではないだろうか。そして，Ⅺ区の「天文」年間銘㊺の板碑を，その東隣りの「大永」年間銘伊東塔の追善供養的な性格のものと考えるならば，Ⅺ区における拡張・改変は，この元位置に倒れたと思われる伊東塔が造立された「大永」年間前後の伊東氏の領地建て直しに呼応して行われたものと推測できないだろうか。さらに，江戸時代初期になって，一国一城の制が制定され飫肥が城下町として発展しはじめた頃，彼の清武の山内石塔群を担って来た人々は次第にこの石塔群を忘れ去って行ったのではないか。従って造立者は武士階級ではなかったかと考える。

この石塔群にはしばしば方柱状または扁平な河原石の立石が見られた。これらは墓塔としての可能性と供養塔としての可能性が考えられ，この性格をどう見るかも今後の課題である。その他，当石塔群の板碑に特徴的な頭部（山形正面が垂直で，頂部は切妻の屋根形を呈す）や墨書の銘，額部形態や額部に種子を記すことなど，その出自はどこにあるのだろうか。これらについては，日南市伊比井の本源寺に頭部形が同じもの，頂部の山形の稜がやや膨らみを持つものが確認されており，「文禄3年」銘の板碑には額部が横線で画されていると紹介されている。[23] また，額部に種子を記すものも県内には多く見られ，墨書銘が圧倒的に多いこと以外は，山内石塔群だけの特徴ではないことが窺える。久保氏の「宮崎県の題目板碑」で指摘された石材については，当板碑類の中に砂岩は少なく，瀬之口氏が指摘したように殆どが凝灰岩である。なかには極めて硬質の他地方（飫肥方面）でしか産出しない凝灰岩も含まれている。将来，これらの系譜を解明するには，周辺及び県内各地の板碑類や在銘石塔群の悉皆調査が行われるべきであり，これからの資料の増加に期待したい。

最後に，本稿を草する直前に刊行された『板碑の総合研究』（前掲）は大いに参考になったが，十分消化できないままに筆の誤りや不足も多々あると思う。先学諸氏の御教示，御指導をお願いする次第である。

註

(1) 五輪塔などと同じく，まれに墓標的な使用例も見られる。特別展図録『板碑』（埼玉県立博物館 1982年）に入間市円照寺裏中世墓址の例のほか1例が紹介され，『板碑の総合研究』2．地域編（坂詰秀一編 柏書房 1983年）の「神奈川県」の項に渡辺美彦氏が墓碑的板碑と蔵骨器出土の遺跡を紹介されている。

参考：赤星直忠「海老名市上郷中世墓群調査概報・埋骨場所と造立板碑との関係」『神奈川県埋蔵文化財調査報告』19 1980年

(2) 服部清五郎著 鳥居龍蔵監修 鳳鳴書院 1933年

(3) 「豊後に於ける板碑様の古碑」『歴史地理』21－5 1913年

(4) 「豊後に於ける板碑系統の碑」『歴史地理』23－3 1914年

(5) 「大隅に於ける九州系統の板碑」『考古学雑誌』第7巻第11号 1917年

(6) 「福岡附近に於ける板碑と五輪塔との関係」『考古学雑誌』第7巻第10号 1917年

(7) 「日向之金石文」『史蹟名勝天然紀念物調査報告』第12輯 宮崎県 1942年

(8) 「宮崎県の題目板碑」『立正大学人文科学研究所年報』8 1970年

(9) 『九州の石塔』下巻(西日本文化協会 1978年）に「宮崎県の石塔」の項目がある。

(10) 渋谷忠章 「3．大分県・宮崎県」(『板碑の総合研究』2．地域編 前掲）による。

(11) 河野治雄 「4．鹿児島県」(同上）による。

(12) 渋谷忠章 (10)の文献による。

(13) 久保常晴 (8)の文献による。

(14) 多田隈豊秋 (9)の文献による。ここでは「碑伝」として紹介されているが，「碑伝」を証明できる銘文もないため，額部突出の「碑伝型の板碑」として考えたい。

(15) 時枝 務 「修験道の板碑」(『板碑の総合研究』1．総論編 柏書房 1983年)に『美彦山・求菩提山仏教民俗資料緊急調査報告書』(財団法人 元興寺文化財研究所編 1977年)からの引用として，求菩提山阿弥陀窟出土の「異形板碑」が掲載されているが，これは形態的に類似のものと思える。

(16) 日高次吉 『宮崎県の歴史』(山川出版社 1970年）によると，天文年間は，伊東義祐が飫肥城（日南市）攻めを度々行う程勢い盛んな時代であり，当地はその支配下にあったと思われる。また，江戸時代初期に当地は既に飫肥藩（伊東氏）の藩域内にあり，社会は安定していたと思われる。なお，凝灰岩自然石の「天正」年間銘板碑(1)の頃，伊東氏は島津氏によって劣勢に陥り日向から一掃されている。その後，島津氏は九州平定にのりだすこととなる。

(17) 斎藤彦松 「南九州の塔婆と大日信仰」『南九州の石塔』第2号 南九州石塔研究会 1981年

(18) 「鳴」字主尊は(7)の文献にも2例程見られ，このうち都城市野々美谷の「大永4年仲秋」板碑は歴史上の伊東氏の動向に対応する貴重なものである。この外に，「鳴」字や「鈔」字も数例ずつ見られる。

(19) 金澤邦夫 「画像板碑」 (15)と同一文献による。

(20) 当石塔群の在紀年銘板碑で見る限り，江戸時代初期の承応3年（1654）銘が最も新しい。

(21) 久保常晴 (8)の文献による。

(22) 当遺跡の北西側谷をへだてた所に「勢田寺址」と言われる丘陵があり，ここから出土したと伝え

られる「弘安８年（1285）」銘の大五輪塔と同規模の五輪塔がⅡ区にも見られる。

(23) 久保常晴（8)の文献による。

その他，概説的な文献として『板碑研究入門』（考古学ライブラリー12，坂詰秀一編　ニュー・サイエンス社　1982年）等参考にした。

出土石塔類出土遺構一覧表

凡　例

1．図版番号は，Ⅰ区～Ⅵ区東し番号である。また，各区の遺構図実測図番号及び遺構出土状況の番号とし一致する。

1．出土層位は，ヤスチメートルで表した。出土状態は，風化による表面の剥離等があり，また，板碑の多くが破損的であるため，測る部位により数値が若干異なるため，小数点以下第一位までを単位で表した。

○完全…総高のわかるものは，数値の上に〝総〟と記した。

○主軸方向・断面幅…計測部位は，上端と下部とした。正面と裏面が外傷ら場合，特に重大なる欠損等は備考欄に記した。

1．面取りは，仕上げられた面の数を記した。〝三面の場合は，そう裏面の面取りがなされているもの。

1．欠損は，完形を〝完〟，一部欠けるものを〝欠〟，分断復原したものを〝復〟で示した。

1．石質は，〝A〟…非常に硬い，〝B〟…硬い，〝C〟…ふつう，〝D〟…軟かいで表した。

1．備　考

○主尊・銘文は赤外線写真等も利用し，判読できるものを記した。文字の周縁のわかる部分は，□□，判読不能の部分及び文字の存在が推定される部分は，□　□等で示した。また，推定できる文字は□内に入れた。

○梵字のものについてはその旨記し，種子のものについては特に記さなかった。

○字体は新字体を用い，場合によっては旧字体も用いた。

○月輪は○で示し，蓮座は〰で表した。

1．調査開始当時，明らかに後世の移動によると思われる出土石塔類のものについては，対象とこして扱した。

区	I						II			
図面番号	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧		
高さ	総 73.5	総40.5	22.5	総 84.0	92.5	115.5	47.5	112.0		
正面幅 上部	36.5	4.5	17.5	30.5	28.5	27.5	23.5	29.0		
正面幅 下部	36.5	13.5	25.5	32.0	28.5	27.0	23.0	32.0		
側面幅 上部	12.0	6.5	9.0	10.5	8.5	15.5	12.0	13.0		
側面幅 下部	13.5	8.5	10.5	13.0	10.0	19.0	11.5	14.0		
面取り	3	4	3	3	3	4	6 (裏面は3面)	1 (正面のみ)		
形状	完	欠	破	完	欠	欠	破	欠		
石材 石質	B 凝灰岩 (黄色味を帯びる)	凝灰岩 C	凝灰岩 C	凝灰岩 C	凝灰岩 C	凝灰岩 C	凝灰岩 C	凝灰岩 C		
備考	(右側面) (左側面) キツネのレリーフ キツネのレリーフ 卒塔婆(?)の陰刻 ○主尊は不明。 ○墨書は判読できない。 ○「大永」年間の墨書があるが年月日は不明である。 ○頭部と基部が突出し、身部は削り込まれて碑面となっている。 ○裏面は丸くゆるやかな球面を呈する。 ○身部 縦36.0㎝×横36.5㎝ ○画像碑である。 ○左側面には墨書等、確認できない。	○主尊・銘文等確認できない。 ○頭部山形がなく、二条線等もみられない。	○主尊等はみられない。 ○山形と二条線の間は広く、6.5㎝程あいている。	(山形塗墨) (身部) ○異字体だが、「阿弥陀如来と思われる薄い主尊種子がみられる。 ○五大種子修行門と思われる墨書がみられる。 ○山形と二条線との間隔が広い。 ○身部下半は剝落している。	○主尊・銘文等は確認できない。 ○山形と二条線との間隔が9.0㎝と広い。 ○頭部先端は面取りされており、水平であった可能性がある。	(山形塗墨) (身部) 妙果禅門 十 ○主尊は金剛界大日如来である。 ○年号は「正」以下が不明であるが、正保年間ではないか。 ○二条線は線彫りである。 ○身部下半は墨書が消えている。	(額部) ○主尊は胎蔵界大日如来であろう。 ○種子は墨書である。 ○月輪は額部にあり、除刻されている。	(山形・二条線塗墨) (額部) (身部) ○主尊は胎蔵界大日如来である。 ○種子は身部に除刻されている。 ○山形の左右側面も塗墨してある。 ○二条線間に縦方向の丸ノミ痕が21個見られる。 ○右側面と裏面は粗削りのまま仕上げが行われてない。左側面には2㎝幅のノミ痕が上から下へみられる。 ○蓮部は張り出す。	

表25 板碑類一覧表 (1)

区	(Ⅱ)				Ⅲ			Ⅳ
図面番号	⑨	⑩	⑪	⑫	⑬	⑭	⑮	⑯
高さ	総 139.0	総 121.5	29.0	25.0	総 57.0	37.0	21.0	総 110.0
正面幅 上部	24.0	47.0	12.0	20.4	18.5（額部下）	18.0	18.0	36.5
正面幅 下部	26.0	46.0	14.5	22.0	19.0	19.0	19.0	37.5
側面幅 上部	10.0	17.0	9.0	10.4	8.0	8.5	9.5	10.5
側面幅 下部	10.5	19.0	12.0	11.0	8.5	8.5	9.5	12.0
面取り	3	3	4（裏面も面取り？）	4	3	3	3	4（右側面は2面）
形状	完	完	破	破	完	破	破	完
石材 石質	凝灰岩 A	凝灰岩 C（やや硬め）	凝灰岩 C	凝灰岩 C	凝灰岩 C	凝灰岩 C	凝灰岩 C	凝灰岩 D
備考	（額部）（身部） （山形塗墨） ○主尊は胎蔵界大日如来である。 ○主尊種子は額部にある。 ○身部正面に五大種子がみられる。 ○全体がやや前屈する。 ○基部は粗削りのまま5分厚い。 ○最大厚は上部14.8㎝、下部18.0㎝である。	（身部） （山形・額部塗墨） ○主尊はアークかアフと思われる。 ○銘文は「般若心経秘鍵」の偈と思われる。 ○身部は削られ、額部と基部が突出している。 ○裏面は丸く内反りし、基部側面形が尖る。 ○額部厚は19.0㎝。	（身部） ○種子らしい墨書痕があるが判読できない。 ○二条線が斜めに傾き、額部が狭い。 ○全体に下方程幅広になる。正面幅より裏面幅の方が広い。 ○裏面の剥離が著しい。	○主尊・銘文等は確認できない。 ○二条線・額部を有し、山形は丸い曲線を持ち、直線的でない。	○主尊・銘文等は確認できない。 ○頭部山形は曲線的で身部との境が不明瞭である。 ○二条線・額部下線は山形の面形り込まれている。 ○正面形は光背型に近い。基部側面形は斜めに切られ尖っている。 ○左側面の面取りは幅が狭い。	○主尊・銘文等は確認できない。 ○二条線は丸彫りである。 ○右側は二条線からやや間をおいて山形が始まる。 ○身部は、額部の下でやや削り込まれ、額部がわずかに突出してみえる。	○主尊等は確認できない。 ○山形が低い。二条線はなく、一条の深い切り込みがみられる。 ○正面幅より裏面幅の方が広い。	（裏面）（正面） ○正面に主尊・銘文等は確認できない。 ○裏面に五大種子の普拙門がみられる。 ○山形と二条線との間隔が11.0㎝程と広い。 ○二条線は側面及び裏面にはめぐらない。 ○額部が広い。種子があったものか。 ○左側面は面取りの仕上げがみられない。

表26 板碑類一覧表 (2)

(Ⅳ)

区分	関面番号	高さ	正面幅 上部	正面幅 下部	側面幅 上部	側面幅 下部	面取り	形状	石材石質	備考
	⑰	90.5		24.0		17.5		欠	凝灰岩 B	(右側面) (正面) (左側面) (裏面) ○額部に梵字が確認できるが判読できず、主尊は不明。 ○身部正面に五大種子の蓮心門が、右側面に渡弊門、左側面に修行門、裏面に菩提門と四面全てに墨書してある。 ○「天文□年閏の墨書がみられるが、年月日は不明である。 ○二条線及び額部下線は両側面にもめぐるが、裏面にはみられない。 ○右側面幅は左側面幅より2.0cm程広い。
	⑱	総 114.5	25.0	25.0	15.0	15.0	6 (裏面は3面)	完	凝灰岩 C	(額部) (身部) ○主尊・銘文等確認できない。 ○正面形、頭部から基部にかけて幅が広くなる。 ○身部下半及び正面の剥離が著しい。
	⑲	90.0	21.5	28.0	15.0	15.0	(6) (裏面は3面か)	欠	凝灰岩 C	○主尊は確認できない。 ○墨書があるが判読できない。 ○形が整っている。 ○基部側面形が斜めに尖っている。
	⑳	総 124.0	26.8	27.0	16.0	16.5	4	欠	凝灰岩 C (やや粗い)	(額部) (身部) ○額部及び身部上位に梵字が確認できるが判読できない。 ○主尊はが確認できない。 ○身部正面に五大種子の菩提門がみられる。 ○額部山形に二条線がくい込んでいる。 ○二条線は両側面にはみられない。 ○額部は狭い。
	㉑	総 91.0	27.0	27.5	18.0	18.5	3	完	凝灰岩 C	(額部) (身部) 空風火水地 □ ○額部に三尊種子が確認できるが判読できない。 ○紀年は確認しがたいが墨痕がみられる。 ○身部下半「月」より下は墨書が消えている。 ○頭部山形は曲線的である。 ○二条線は側面にみられず、額部が狭い。
	㉒	35.0	15.5	18.0	13.0	14.0	5 (両側面は2面ずつ)	破	凝灰岩 C	○主尊・銘文等確認できない。 ○二条線及び額部下線は浅く、かすかな線彫りである。 ○正面幅より裏面幅の方が広く、正面形は舟形を呈する。
	㉓	38.5	19.5	19.0	12.5 (額部)	11.0 (身部)	3	破	凝灰岩 B	(身部) ○身部に墨書があるが、主尊は判読できず、銘文も確認できない。 ○額部は突出し、身部が削り込まれた神仏型を呈する。 ○身部を ひと 巡りする。挟りから下位は 摺損 している。 ○正面のみ仕上げの面取りがある。

表27 板碑類一覧表 (3)

区	(Ⅳ)		V	Ⅵ	Ⅶ		Ⅷ			
図面番号	㉔		㉕		㉖		㉗	㉘	㉙	㉚	㉛
高さ	総 44.0		25.5		総 40.0		21.5	26.0	33.5	24.0	36.0
正面幅 上部	6.0 (最上位)		19.5 (額部上位)		16.5		17.0	14.0	19.0	13.5	11.5 (身部面取り面)
正面幅 下部	18.0 (中位)		20.0		16.0		—	13.5	19.5	15.0	12.0 (同上)
側面幅 上部	—		8.0 (額部上位)		7.0		6.5	—	9.0	7.5	19.0
側面幅 下部	—		9.5		7.5		6.5	14.5 (身部中央)	9.0	8.5	14.5
面取り	—		3		3		4	4	4	3	1
形状	完		破		完		破	破	破	破	破
石材 石質	砂岩		凝灰岩 C		凝灰岩 C		凝灰岩 C	凝灰岩 C	凝灰岩 C	凝灰岩 C	凝灰岩 C
備考	○主尊・銘文等確認できない。 ○断面がほぼ二角の縦長い自然石で、加工痕はみられない。 ○側面中位での最大幅は、15.0㎝。		○主尊・銘文等は確認できない。 ○二条線は間延びし、側面の線に連続しない。 ○左側面に額部下線が残っており、この下線あたりで折損している。		(額部) 南無 妙法蓮華経 □□禅定門 (身部) 文明八年三月一日 遍 ○題目板碑である。 ○額部から墨書している。 ○二条線の抉りが深く、裏面は丸味を帯びている。 ○山内石塔群の板碑中最古の「文明八年」の銘がみられる。 ○「遍」は或るいは「遠」か。		○主尊・銘文等は確認できない。 ○山形が低い。 ○額部と身部が一段の切り込みによって分けられている。	○主尊・銘文等は確認できない。 ○頭部が方錐形で、二条線は全面をめぐる。 ○身部は四面とも額部より少し削り込まれている。 ○断面が方形である。 ○角柱塔婆（角柱板碑）である。	○墨痕があるが、銘文等確認できない。 ○身部から折損し、頭部等は不明である。 ○基部は粗削りのまま、身部表面より突出している。 ○右側面は丸味をもった面取りで、左側面は一部面取り、裏面は丸味を帯び粗い調整である。	○頭部に種子があるが、判読できない。 ○墨痕が数ヵ所みられる。 ○山形に二条線がくい込み、角は丸味をおびる。 ○正面幅より裏面幅は広い。	(額部) □ ○主尊・銘文・墨痕等確認できない。 ○頭部断面が円形をなし、二条の切り込みが巡る。 ○面取りは正面のみで、側面はわずかに調整面がみられる。 ○ほぼ円柱状を呈する。

表28 板碑類一覧表 (4)

区		Ⅸ	X			
図面番号		㉜	㉝	㉞	㉟	㊱
高さ		25.0	60.0	総 61.0	65.0	総 52.0
正面幅	上部	28.0	24.0	19.5	17.0	15.5
	下部	29.0 (額部下位)	22.5	20.0	18.5	18.0
側面幅	上部	13.0	9.0	8.5	9.0	6.5
	下部	—	9.0	8.0	8.0	7.0
面取り		3	8 (4つの角も面取り)	3	6 (裏面は3面)	4
形状		破	欠	完	欠	完
石材		凝灰岩 C (やや硬め)	凝灰岩 C	凝灰岩 B	凝灰岩 C	凝灰岩 C
備考		(山二条線 彩墨 塗墨) ○主尊等確認できない。 ○額部から下が折損しているが、碑伝型のものか。	(身部下位) ○多尊種子が確認できる。金剛界五仏の一部及びその左右に五大種子の一部がみられる。 ○梵字にくずれがみられる。 ○墨書は剝落した上面に書かれ、「文明十八年」の銘がみられる供養塔婆である。 ○側・裏面に墨痕は確認できない。 ○山形と二条線の間は8.0cmと広い。	(身部) ○主尊は判読できない。 ○墨書は判読し難い。 ○「右」は或るいは「石」か。 ○山形は低く、側面に二条線はみられない。 ○額部が広く、額部下縁が斜めに彫られる。 ○身部は若干削り込まれている。 ○整った面はわずかかみられず裏面は粗い。	(身部) ○主尊・銘文等は判読できない。 ○正面に墨書痕が2ヵ所みられる。 ○二条線間が間延びし、斜めに彫られている。 ○山形は丸味をおび、額部は広い。 ○全面が薄赤褐色を呈し、ススの付着もみられる。直接火を受けたものか。 ○正面は剝落が激しい。	(頭部) (身部) ○主尊・銘文等は確認できない。 ○山形は低く、幅広の横線が二条入る。 ○額部と基部が突出し、身部が削り込まれた碑伝型を呈する。 ○額部厚7.5cm。

表29 板碑類一覧表 (5)

区	(X)						
図面番号	㊳	㊴	㊵	㊶	㊷	㊸	㊹
高さ	総 54.0	総 89.5	46.0	総 38.0	総 106.5	総 130.0	146.0
正面幅 上部	21.5	30.0 (レリーフ上位)	23.5	8.0 (中位)	35.0	38.0	46.5
正面幅 下部	22.0	33.5 (レリーフ下位)	24.0	11.0 (中位)	31.5	36.5	51.0
側面幅 上部	10.0 (額部最大厚)	12.0 (レリーフ上位)	7.0	11.0	23.0	18.0	20.0
側面幅 下部	12.0 (身部下位厚)	9.0 (レリーフ下位)	7.0	11.0	22.5	18.0	23.0
面取り	2	3	(3) (裏面不明)	—	4	4	6 (裏面が3面)
形状	完	完	破	完	完	完	破
石材 石質	凝灰岩 C	凝灰岩 A	凝灰岩 C	砂岩	凝灰岩 A	凝灰岩 C	凝灰岩 C
備考	(身部) 一優成道観□□ 草木国土 大永□ ○主尊は阿弥陀如来である。 ○「大永」年間の銘がある。 ○身部正面形が曲線的で舟形光背に近い。 ○正面と右側面のみ面取り調整がなされ、裏面は丸く粗い整形である。	(レリーフ) ○主尊・銘文等は確認できない。 ○二条線は間延びし、線彫りである。 ○裏面は剥落が激しく、面取りは確認できない。	○墨書供は確認できない。 ○加工した痕跡がみられない。 ○断面が方形をした自然石である。	(額部) (身部) ○主尊は胎蔵界大日如来である。 ○墨書は一部判読できないところがある。 ○額部はみられない。 ○全体的に幅広で形がくずれて曲線が多い。	(身部) [宗時本]応三年甲 常般禅定門 四月廿六日 ○主尊は胎蔵界大日如来である。 ○全て墨書である。 ○「承応二年」の紀年銘がある。 ○蓮座が月輪の内側に入る。 ○額部はみられない。 ○形状が整っている。 ○種子は簡略化されている。	(左側面) 寛永十九年十一月[元]日 (正面) (身部) 清蓮神伯 妙綿禅尼 両□ ○種子は刷毛書きを薬研彫りであり、月輪は箱彫りである。 ○蓮座は、陰刻と陽刻を用い、花弁の陽刻部分には墨書の細い筋がひかれる。 ○「廿」は成ふいは「卅」か。 ○下部程、幅広になり分厚くなる。	右側面 寛永十年四月八日 ○主尊は胎蔵界大日如来である。 ○「神伯」は「寛永十年」の紀年銘であり「禅尼」は「寛永十九年」の紀年銘がある。 ○「両□」は墨書である。

表30 板碑類一覧表 (6)

区	(X)		XI		
図面番号	㊾	㊺	㊼	㊽	㊾
高さ	48.0	52.0	総 99.0	95.5	77.5
正面幅 上部	24.0	12.5	25.5	22.5	23.5（神面）
正面幅 下部	25.0	13.5	27.5	24.0	24.5
側面幅 上部	18.0	6.0（額部下位）	11.5	18.0	20.5（神面）
側面幅 下部	19.0	9.0	12.0	18.5	21.0
面取り	4	3	4	4	4
形状	破	欠	完	欠	欠
石材 石質	凝灰岩 C	凝灰岩 C	凝灰岩 C	凝灰岩 B	凝灰岩 D
備考	○墨書が確認できるが判読できない。 ○身部で折損している。	○種子は阿弥陀三尊である。 ○観世音菩薩（左）と勢至菩薩（右）の位置が通常と異なる。 ○阿弥陀如来の種子は異体であり、額部から身部にまたがって墨書される。 ○山形に墨痕が認められる。 ○正面下半部の墨書は判読できない。 ○左側面に墨書があるが判読できない。 ○裏面、正面種子よりやや上位に墨書があるが判読できない。 ○右側面には確認できない。 ○山形は曲線的で全体が舟形を呈し、基部はやや張り出す。 ○中央部最大厚は12.0cmを測る。	○額部に阿弥陀三尊（脇侍、右観世音菩薩、左、勢至菩薩）が墨書してある。 ○身部は四面に五大種子が墨書してあり、正面が発心門である。 ○二条線は裏面には巡らない。 ○面取りは横方向の仕上げ調整がなされている。	○主尊・銘文等は不明である。 ○額部に錐彫りの月輪がみられる。 ○墨書があるが判読できない。 ○基部近くにも墨痕がある。 ○両側面には二条線はみられない。 ○裏面は簡単な面取りがみられる。	○碑面（身部）と思われる面は四面とも削り込まれて、すこし奥まっている。そのうち二面に墨書で種子が確認できるが、判読できない。 ○額部が方錐形をなし、一条の横線が四面を巡る。 ○断面形状を呈する。 ○方柱状塔婆である。

表31 板碑類一覧表 (7)

(XI)

区	図面番号	高さ	正面幅 上部	正面幅 下部	側面幅 上部	側面幅 下部	面取り	形状	石材 石質	備考
	㊿	57.0	40.0（裏面幅）	39.5（裏面幅）	—	—	4	破（㊾と接合）	凝灰岩 C	○身部下位で折損している。基部は柄状を呈し、下端は欠損す。 ○納上位幅24.0cm（裏面）厚さ15.0cm、枘高18.0cmを測る。 ※報告書作成直前に、図㊾と接合することが判明した。この実測図は裏面を実測したものであり、また、実際の正面側は剝落していることがわかった。XI区に台石は発見できなかった。
	㊿	総 128.5	31.0	32.5	21.0	24.0	4	完	凝灰岩 B	○主尊は胎蔵界大日如来である。 ○種子・蓮台の一部・額部下線には墨入れしている。 ○右側面に墨書があるが判読できない。 ○左側面の「見」は「昇」か。 ○「天文」年間の紀年銘がある。 ○山形が高く、額部が広い。 ○種子・蓮座・月輪は陰刻である。 ○裏面は仕上げ調整は行われていない。
	㊾	総 72.0	24.0	26.0	14.0	12.5	4	完	凝灰岩 B	○主尊・銘文等は確認できない。 ○頭部は二角形であるが、二条線や額部はみられない。 ○裏面は軽い前かがみの曲線を持ち、正面は丸く膨らん左面を持つ。 ○基部側面形が尖っている。 ○最大厚は17.0cmである。 ○全面総敲仕上げ調整がなされている。
	㊽	29.5	13.0	14.0	5.0	5.0	3	欠	凝灰岩 D	○主尊・銘文等確認できない。 ○二条線の間が間延びしている。 ○二条線は左側面は連続し、右側面は位置のずれた二本の横線がみられる。 ○正面は剝離が著しく、やや外に丸く膨らんだ面を持つ。
	㊼	92.0	30.0	30.5	16.0	16.5	4	欠	凝灰岩 C	○正面、額部から下半にかけて五大種子・枠が判読できない。 ○墨書は一部判読できない。 ○左右側面とも墨書は確認できない。 ○額部から山形にかけて曲線的である。 ○正面は特に丁寧な仕上げである。
	㊻	151.5	35.0	35.5	21.5	20.0	4	欠	凝灰岩 C	○主尊は胎蔵界大日如来である。 ○四面に五大種子が墨書され、正面は浬槃門、左側面が発心門である。 ○五大種子は大左へ位置がずれている。 ○「梵字」部は「種子曼荼羅」であろう。 ○「墨書」は墨書の上を陰刻してある。 ○二条線の切り込みの上面は墨入れしてある。 ○額部はみられない。 ○基部は粗割りのまま外へ張り出す。 ○裏面は仕上げ調整は行われていない。

表32 板碑類一覧表 (8)

区	図面番号	高さ	正面幅 上部	正面幅 下部	側面幅 上部	側面幅 下部	面取り	形状	石材	石質	備考
(XI)	㊷	総 133.0	28.5	28.5	24.0	25.0	4	完	凝灰岩	C	(額部) 元□七□ 江□□□奉造□ 七月十□日 (身部) ○種子のかわりに墨書で「鳴」の字がみられる。 ○銘文の左右に墨痕が確認できるが判読できない。 ○変形した蓮台と月輪は陰刻である。 ○「鳴」字、月輪・蓮台は額部にある。 ○二条線は裏面にはみられず、頭部方錐形の角柱状を呈する。 ○面取り調整は縦方向である。
	㊶	総 101.0	23.0 (種子直下)	31.0 (中位)	—	—	—	完	凝灰岩	A	(額部) 天正□ 大□□師勢□□ (身部) ○主尊は判読し難いが、胎蔵界大日如来か？ ○「天正」年間の銘がみられる。 ○側面には装飾等確認できない。 ○二条線・額部等はみられない。 ○中位最大厚は29.0cmである。 ○部分的に整形してあるが、自然面が多く残る。 ○断面は三形状を呈する。 ○自然石板碑である。
	㊵		14.0	—	6.0	5.0	—	破	凝灰岩	C	○主尊は種認できない。 ○二条線は、右側面にはみられない。 ○頭部は円味を帯びて尖っている。 ○面取りが不明瞭である。
	㊴		44.0	20.0	—	11.0	3	欠	凝灰岩	C	○主尊・銘文等確認できない。 ○二条線は両側面の途中でとまる。 ○額部下線が右側面に残っており、額部の存在がうかがえる。 ○額部から山形にかけて曲線的で円い。 ○面取りは正面及び両側面になされたものと思われる。 ○風化・剝離が著しい。
	㊳	総 48.0	10.5	12.0	4.5	4.5	4	完	凝灰岩	C	○主尊・銘文等は確認できない。 ○二条線・額部下線は線彫りで、二条線は間が間延びし両側面にはみられない。 ○基部は粗削りで、正面が張り出し分厚い。 ○裏面は剝離が著しい。
	㊲		16.0	17.5	7.0	8.0	4	破	凝灰岩	D	○主尊・銘文等は確認できない。 ○二条線は線彫りで、額部はみられない。 ○山形が曲線的で円味を帯びる。 ○裏面の風化が著しい。
	㊱		152.0	39.0	38.5	26.5	27.0	4	欠 (㊴と接合)	凝灰岩	(左側面) 十一月廿一日 (正面) 法印権大□□ 和尚位 (右側面) 寛永二年□ ○主尊は胎蔵界大日如来である。 ○「寛永二年」の銘がある。 ○種子・月輪・銘文外全て陰刻である。 ○額部はみられない。 ○面取りは丁寧である。 ※図㊴の納状基部と接合する。接合後の推定総高は190.5cm以上になると思われる。
			C	C	C	C	C	C	C	C	備考

表33 板碑類一覧表 (9)

区	図番号	高さ	正面幅 上部	正面幅 下部	側面幅 上部	側面幅 下部	面取り	形状	石材	備考
	㊸	総 98.5	28.0	30.5	19.0	21.0	4	完	凝灰岩 D（粗い）	（額部）（身部） □ ○山形中央に墨痕がある。 ○額部から身部にかけて五大種子発心門がみられる。 ○基部は粗削りのままで、側面形が尖っている。 ○面取りが丁寧である。
	㊹	33.0	18.0	19.0	6.5	6.0	6 （裏面は3面）	破	凝灰岩 B	○主尊・銘文等は確認できない。 ○山形が高く、約15.0cmある。 ○二条線は片面切り込みである。 ○額部はみられない。 ○正面の調整痕は縦方向で、曲面が少ない。
	㊺	総 37.0	10.5	12.0	7.0	9.0	3	欠	凝灰岩 C	○主尊・銘文等は確認できない。 ○山形と二条線との間、二条線の間が間延びしている。 ○二条線は側面にみられない。 ○額部はみられない。 ○裏面は粗削りでやや外へ膨らむ。 ○基部は粗仕上げしてある。
	㊻	35.0	14.0	14.5	9.0	10.0	3	破	凝灰岩 C	○主尊等確認できない。 ○額部から頭部にかけて曲線的である。 ○二条線は側面にはみられない。 ○裏面はわずかに外膨らみし、正面はわずかに凹面をなしている。 ○額部下線で折損している。
	㊼	29.5	20.0	—	11.5	11.0	3	破	凝灰岩 C	（身部） 慶安二暦 ○主尊は胎蔵界大日如来である。 ○種子・銘文とも全て陰刻である。 ○両側面に銘文等はみられない。 ○山形・二条線はみられない。 ○正面の面取りは基部までみられるが、裏面及び両側面に整形痕はみられない。 ○断面方柱状の自然石板碑である。
	㊽	総 141.0 （種子直上）	24.0 （「位」陰刻底下）	33.0	29.0	32.5	1	完	砂岩	大日如来 種子 バン 地蔵菩薩 種子 カ 勢至菩薩 種子 サク 阿弥陀如来 種子 キリーク 観音菩薩 種子 サ 大日如来 種子 バン 仲春時正 ○主尊・銘文等は確認できない。 ○二条線の下線と思われるものが残っている。上部は折損。 ○二条線は丸彫りである。 ○基部は調整が粗い。 ○全面が薄赤褐色を呈し、火を受けたものらしい。
	㊾	89.5	16.5	19.0	9.5	11.5	3	破	凝灰岩 C	○主尊・銘文等は確認できない。 ○二条線は側面にはみられない。 ○額部は狭く、額部下線で折れている。 ○頭頂部は円い。 ○正面の風化が著しい。 ○総高に比して、幅が広い。
	㊿	総 68.5	26.5	27.0	15.0	15.0	4	完	凝灰岩 C	○主尊・銘文等は確認できない。 ○二条線の下線と思われるものが残っている。上部は折損。 ○二条線は丸彫りである。 ○基部は調整が粗い。 ○全面が薄赤褐色を呈し、火を受けたものらしい。

表34 板碑類一覧表 (10)

区	(XI)			XIII	XIV		
図面番号	㉑	㉒	㉓	㉔	㉕	㉖	㉗
高さ	総 32.0	総 43.0	34.0	47.5	総 43.0	22.0	43.0
正面幅 上部	15.5 (中位)	17.0	26.5	約 22.5	18.0	15.5	16.0 (額部下位)
正面幅 下部	14.0 (中位)	19.5	28.5	約 24.0	20.0	—	20.0 (中位)
側面幅 上部	—	7.0	12.0	10.0	7.0	7.5	—
側面幅 下部	—	7.5	12.0	約 11.5	5.0	—	—
面取り	—	3(?)	3	1	3	6 (右側面角が2面)	4
形状	完	完	破	破	完	破	欠
石材 石質	砂岩	凝灰岩 C	凝灰岩 B	凝灰岩 C	凝灰岩 C	凝灰岩 C	凝灰岩 C
備考	○墨書等は確認できない。 ○重心が長軸の下位に寄り、面取りや整形痕などはみられない扁平な自然石である。 ○中位での最大厚は10.0cmを測る。	○主尊・銘文等は確認できない。 ○表面の風化が著しいが、二条線や額部が認められる。 ○山形は丸味を帯びる。 ○二条線は側面にもみられる。 ○正面以外の面取りは粗い。 ○総高に比してやや幅が広い。	○銘文等は確認できない。 ○基部付近である。 ○最下部は整形が粗く、裏面は粗い仕上げがなされている。	○主尊・銘文等は確認できない。 ○頭部は曲線的で円味を帯びる。 ○額部と身部とを斜線で区切る。 ○二条線・額部下線は丸彫りである。 ○両側面は整形が粗い。 ○正・裏面はわずかに外膨らみである。 ○中位最大厚14.0cmを測る。	（額部）（身部） 是圖為大法師 ○額部中央に阿弥陀如来、左に観世音菩薩と思われる種子がみられるが判読し難い。 ○右の脇侍は勢至菩薩の可能性がある。 ○頭部は曲線的で円味を帯びる。 ○二条線間は間延びし、二条線及び額部下線は片面切り込みである。 ○裏面は外膨らみで、正面はやや凹面をなしている。 ○面取りは粗い。	○主尊・銘文等は確認できない。 ○片面切り込みの二条線の間は間延びし、額部はみられない。 ○面取りは、正・裏面及び両側面の外、右側面の角が両面取ってある。	○主尊・銘文等確認できない。 ○二条線や額部下線は線彫りで浅く、側面の途中でとまる。 ○全体的に剝離が著しいが、正面のみ仕上げの面取りがなされ、正面形は舟形を呈する。 ○中位での最大厚は10.0cmを測る。

表35 板碑類一覧表 (11)

区	図面番号	⑦⑧	⑦⑨	⑧⓪	⑧①	⑧②
	高さ	総 40.5	総 101.5	29.5	24.5	44.0
正面幅	上部	10.0 (身部上位)	27.5 (額部下位)	10.0 (頭部下位)	17.0	19.5
	下部	16.5 (中位)	34.0 (身部下位)	17.0 (最大幅)	16.0	22.0
側面幅	上部	4.0 (身部上位)	9.0 (額部下位)	5.0 (頭部下位)	5.5	10.0
	下部	4.5 (中位)	12.0 (身部下位)	7.0 (中位)	6.0	11.0
面取り		3	1	4	4	4
形状		欠	完	欠	欠	破
石材 石質		凝灰岩 C	凝灰岩 A	凝灰岩 C	凝灰岩 C	凝灰岩 C
備考		○主尊・銘文等は確認できない。 ○二条線は線彫りで、正面で一度区切れ、側面へ続く。 ○額部はみられない。 ○正面形が舟形を呈し、頭部は曲線をえがいて尖る。 ○頭部が厚く、身部はやや薄くなる。 ○身部中位最大厚は7.0㎝を測る。	○主尊・銘文等は確認できない。 ○頭部が円く、半円に近い。 ○二条線・額部下線は線彫りで浅く、額部は非常に狭くなっている。 ○二条線は側面にはみられない。 ○正面と裏面が外へ膨らみ、面取りは正面のみ行われている。 ○中位最大厚は18.0㎝を測る。 ○基部端の幅は32.0㎝である。	○主尊・銘文等は確認できない。 ○二条線は線彫りで、側面にはみられない。 ○額はみられない。 ○正面はやや外膨らみである。 ○正面最大幅が基部近くにあり、卵形を呈する。 ○裏面の面取りはやや粗めの仕上げである。 ○中位最大厚は8.0㎝である。	○主尊・銘文等は確認できない。 ○頭部下位に線彫りで二条線が表わされ、一度区切れて側面に続く。 ○裏面は風化が著しいが、面取りしてあるものと考えられる。 ○中位での最大厚は8.0㎝を測る。	○銘文等は確認できない。 ○上部・下部が折損している。

表38 板碑類一覧表 (12)

第4節　土師器に関する二・三の問題について

1．はじめに

山内石塔群では約600点にのぼる土師器が出土している。ヘラ切り底あるいは，糸切り底をもつ坏，皿がほとんどを占める。赤坂遺跡[1]，前原西遺跡[2]，浄土江遺跡[3]，上別府遺跡[4]など県内では奈良～平安時代にかけての土師器類についてはかなりの発掘例におよび，一部では編年作業がなされている[5]。一方，中世にかけては発掘件数の少なさや詳細分布調査の不徹底さ，文献史学と考古学の歩みよりのないまま現在にいたっていることなどから，他地域に比べ立遅れは否めない。北部九州においては，御笠川南条坊遺跡などの調査によって土師器の位置づけが固まりつつある[6]。また鹿児島県西の平遺跡，成岡遺跡などから良好な一括資料が報告されている[7]。

ここでは，石塔群という遺跡の性格から一括資料としてあつかえるものはほとんどない。そこで，土師器の形態分類を中心に相対的編年を行ない，遺跡の性格など二・三の問題について触れてみたい。今後，歴史時代土器編年を行なうにあたっての一資料となればと考える。

2．形態分類とその特徴

土師器はヘラ切り底をもつもの（以下ヘラ切り）と回転糸切り底をもつもの（以下糸切り）の2種類が出土している。ほとんどが坏と皿である。よってヘラ切りをⅠ類，糸切りをⅡ類，坏をA，皿をBとした。分類は法量では困難であったため底部からの立ち上がりや体部の延びあるいは口縁部の仕上げかたなどを中心に行なった。なお分類したなかで法量のちがいによって小皿と特小皿にわけた。前者をa，後者をbとして取り扱った。（表37，表38）

Ⅰ類は法量によってきれいに坏と皿とにわかれる。(表39，表40)　Ⅰ－A－1類は2類に比べ器高が高く底径も大きい。1，2類とも器高は同じ範囲におさまる。なお1，2類の形態のちがいが時期差を示すかどうかはこの段階では不明である。なお，Ⅰ－A－1類はⅡ－A類にはまったく例をみない。Ⅰ－B類については，1，2類は法量ではそれほど大差はない。しかし，1類は体部が2類に比べ短く指で引きのばしただけである。3類は前の2者に対し，器高が高く口径が小さい。Ⅱ－A類は1，2にわけたが1類に比べ2類はやや大型である。1類は体部に横ナデによる凹凸が残り器壁は厚手である。3類は1個体であるが，1，2類に比べ口径では劣るが器高は非常に高い。Ⅰ－A－1類，Ⅱ－A－3類は，厚手でしっかりした底部をもっている。Ⅱ－B類は形態によって7類に分類した。1，2，4，5類は法量によって特小皿(a)と小皿(b)にわけられる。1類の場合、特小皿が小皿に比べ底部が厚手である。2類はa，bには差はみられないが，口縁端部が丸く収められるものとシャープなものが存在する。5類では小皿が特小皿に比べ体部の屈曲は弱く体部は肥厚する。上げ底のものもある。Ⅱ－B－3類は，Ⅰ－B－1類と形態が類似し法量も同じ範囲内におさまる。ただ底部から体部への立ち上がり部がⅠ－B－1類ではやや内側に屈曲するのに対し，Ⅱ－B－3類では直線的に外上方に軽くつまみあげられている。B－6類は，底部はやや薄手である。底部と体部との境は隅丸を呈するが明瞭である。口縁端部は先太りの感で丸く収められる。B－6類はまだ細分の可能性がある[8]。B－7類は他類に比べ器高

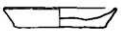
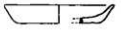
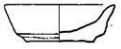
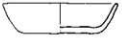
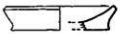
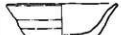
			形態	法量(cm)	特徴	胎土・色調	備考
Ⅰ	A	1		4.2～4.5 8.4～9.9 12.5～15.4	底部と体部との境が明瞭である。体部は直線的に外方へ延び口縁端部は丸く収められる。体部外面は、横ナデ調整。	砂粒を含む淡茶褐色あるいは黄褐色を呈す	
		2		約3.6 7.2～10.9 11.8～14.0	底部からの立ち上がりは丸味をもつ。横ナデによる調整。	砂粒を含む橙茶褐色を呈す	
	B	1		約1.5 5.2～7.2 5.8～8.6	底部と体部が明瞭にわかれる。体部は短く直線的に外方へ延びる。口縁端部は面取りされている。	砂粒を含む淡黄褐色および茶褐色を呈す	Ⅱ－B－3類と類似
		2		1.0～2.1 4.4～6.3 6.2～8.9	底部から丸味をもって立ち上がる。口縁端部は丸く収められるものと、シャープなものの2種類がある。	〃	
		3		約2.0 4.0～5.9 6.6～7.2	底部から高台を有する感で立ち上がり体部上半から外反する。口縁端部はシャープである。	〃	Ⅱ－B－5類と類似
Ⅱ	A	1		3.1～3.5 7.0～7.5 10.1～12.0	底部から丸味をもって立ち上がる。体部は直線的に外方に延びる。口縁端部は面取りされる。	胎土はきめ細か，淡茶褐色を呈す	
		2		2.5～4.0 6.8～9.2 6.2～14.0	底部と体部との境は丸味をもつ。体部はなめらかに横ナデ調整。	〃	
		3		5.3 7.3 12.2	底部から高台を有する感じで立ち上がりやや内湾する。比較的厚手である。器面は横ナデ調整。	胎土には砂粒を含む淡赤褐色	完形は一例であったが小片では数点みつかっている

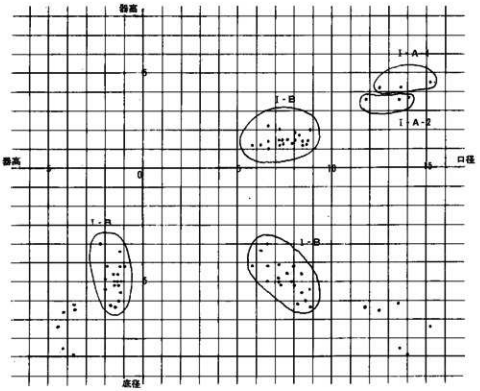
表37　土師器分類表(1)

			形態	法量(cm)	特徴	胎土・色調	備考
Ⅱ	B	1		a 1.2~2.2 4.4~6.2 6.6~8.0 b 1.2~2.6 6.0~7.0 8.4~10.4	底部から外上方にひらく。 体部は横ナデ。 比較的薄手である。	砂粒を含む 淡赤褐色を呈す	
		2		a 1.2~2.2 4.6~6.3 6.8~8.1 b 1.7~2.7 4.6~8.0 8.6~11.0	底部から丸味をもって立ち上がる。 体部は短く、口縁端部は鋭い。 底部は上げ底気味である。	砂粒を含む 淡赤褐色で呈す	
		3		約1.5 5.6~7.3 7.1~8.1	底部と体部の境が明瞭である。 体部は短く、直線的に開く。 口縁端部は面取りされる。	砂粒を含む 赤褐色あるいは淡赤褐色を呈す	Ⅰ-B-1類と類似
		4		a 1.4~2.0 5.4~7.0 8.0~8.8 b 2.2~2.9 5.0~7.4 10.0	底部からなめらかに立ち上がる。 体部は直線的ないしは、やや屈曲して口縁部に至る。	砂粒を含む 赤褐色を呈す	
		5		a 1.5~2.6 4.2~5.9 6.7~8.7 b 2.4~2.9 5.6~7.2 9.5~10.0	体部上半より屈曲し外反する。 口縁端部はシャープである。 体部は横ナデ調整。	砂粒を含む 淡赤褐色あるいは茶褐色を呈す	Ⅰ-B-3類と類似
		6		2.0~3.0 4.0~6.3 7.5~9.2	底部と体部との境が明瞭である。 体部は薄い、口縁端部は丸く収められる。底部はあげ底が多い。	砂粒を含む 淡茶褐色を呈す	
		7		2.0~3.0 2.8~4.5 7.2~8.5	しっかりした底部から外上方にのび、体部上半でかるく外反する。 口縁端部は、面取りされている。 底径に対して、口径が広く器高も高い。	胎土はきめ細い 淡茶褐色を呈す	

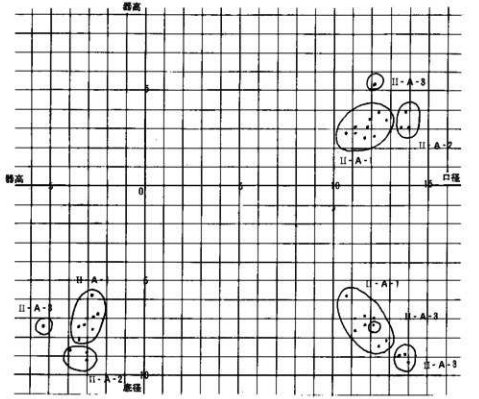
※法量は、上から器高、底径、口径の順である。

※縮尺は不同

表38　土師器分類表(2)

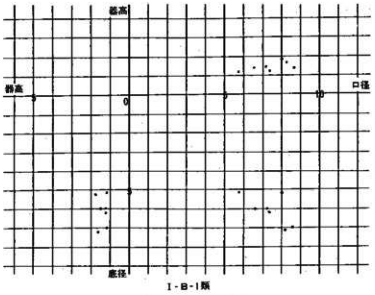


ヘラ切り（坏、皿）

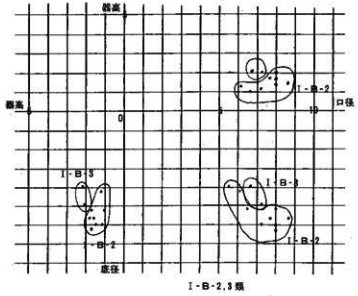


糸切り（坏）

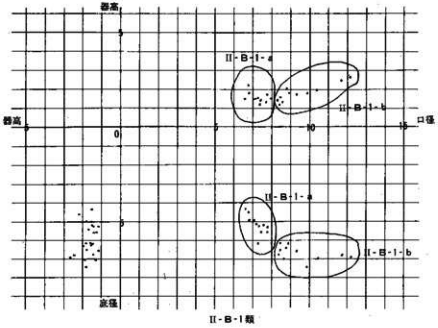
表39　土師器法量表(1)



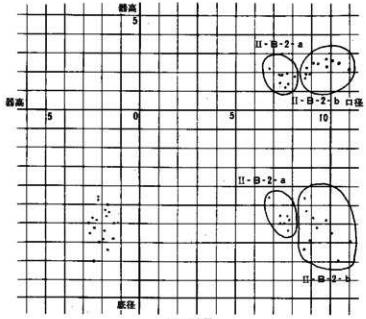
I-B-1類



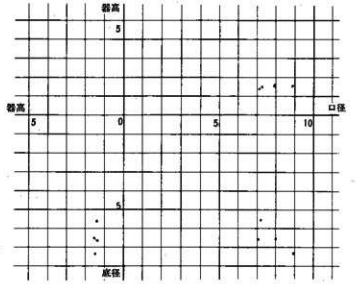
I-B-2,3類



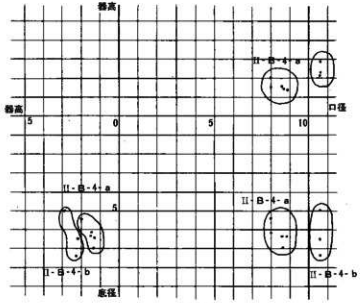
II-B-1類



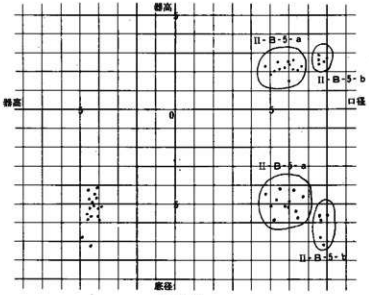
II-B-2類



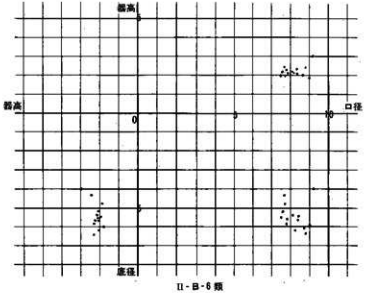
II-B-3類



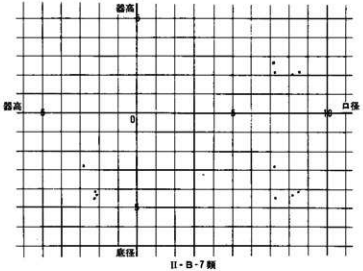
II-B-4類



II-B-5類



II-B-6類



II-B-7類

表40　土師器法量表(2)

が高く，口径に対して底径が小さい。B－6類，B－7類は法量から特小皿と考えたほうがよいかもしれない。

3．編年の問題

前述したように遺跡の性格から明確な編年を進めることはできない。そこで各類の相対的な配列を行ない，紀年銘をもつ五輪塔や板碑，あるいは周辺遺跡出土の土器類などを加味してある程度の年代を考えてみたい。

最初に最も多く出土している小皿（B類）から考えてみたい。B類はⅠ類で3，Ⅱ類で7に分類した。ここで注目すべきはⅠ－B－1類とⅡ－B－3類，Ⅰ－B－3類とⅡ－B－5類が類似していることである。形態，調整，法量もほとんど同じであることから，これらはヘラ切りから糸切りへの変化の境目に位置づけられる土師器群であろう。[9] ヘラ切りと糸切りのそれぞれの出土数をみてみるとⅡ－B－1類～50，Ⅱ－B－3類～22，Ⅰ－B－3類～2，Ⅱ－B－5類～30である。出土数から単純に想定するとヘラ切りを多く出したⅠ－B－1類があらわれ，Ⅰ－B－

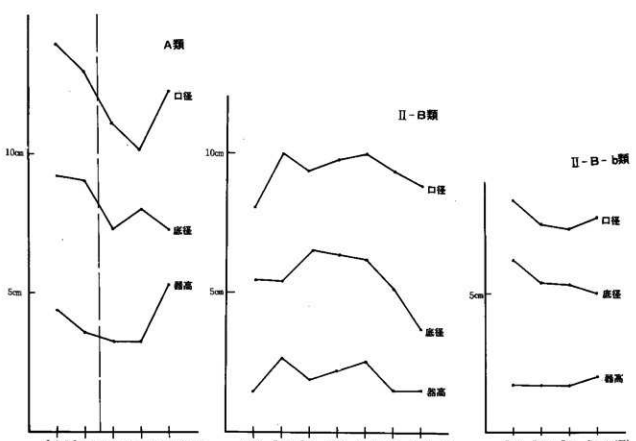


表41　土師器法量推移

3類が後出する。それは糸切りに変化してもⅡ－B－3類,Ⅱ－B－5類に引きつがれる。糸切りの出土数からⅡ－B－3類が消失したあともⅡ－B－5類は長くのこり，のちに分化し特小皿が出現すると考えられる。Ⅰ－B－2類も同様で形態的にはⅡ－B－1類に引きつがれのちに特小皿が出現するまでにいたる。Ⅱ－B－2，4，6，7類は法量から考えてみたい。大宰府市御笠川南条坊遺跡においては，Ⅱ－2類まで口径9cmを越えるがⅡ－3類からⅡ－5類にかけ小さくなり約7.5cmほどになる。底径では7cm程あったがⅡ－4類から約3.6cmと次第に小さくなっている。器高はⅠ－4類からⅡ－6類まで約1.1cmと変化はみられない。[10]次第に小型化するという傾向からB－4→B－2→B－6→B－7という順序が考えられる。特小皿は，Ⅱ－B－1，2，4，5類にそれぞれ存在する。南条坊遺跡ではⅡ－3類から分化する。[11]小皿と同様な傾向を示すと考えるならばB－4→B－2→B－1となる。B－6類，B－7類は法量からすると特小皿に属しB－1類につづくものであろうと思われる。なお，B－5類はヘラ切りからの系統を引くもので，どの時期に分化するかは不明である。便宜的に法量からB－2とB－1の間ぐらいに位置づけておきたい。

坏は，Ⅰ類で2，Ⅱ類で3に分類した。Ⅰ－A－1類は，ヘラ切りの特徴で糸切りにはこの形態を引きつぐものは出土していない。Ⅱ－A－2類は，Ⅰ－A－2類と形態的には類似し，法量でもほぼ同じ範囲にはいる。Ⅱ－A－3類は1個体出土しているだけで法量でも他類には属さない。底部から体部にかけての立ちあがりはⅠ－A－1類にやや似るが，これについての位置づけは保留しておきたい。[12]（表41）

同時期の周辺の遺跡としては，堂地東遺跡[13]，前原西遺跡[14]，前原北遺跡[15]などある。(第26図,表42)なかでも前原西遺跡（A地区）では周溝をもつ土拡から良好な一括資料が得られている。1～6まですべて糸切りである。1，2はⅡ－A－2類に属する。小皿の場合，形態と法量から考えると3，4はⅡ－B－4の類に，5はⅡ－B－1－a類に属するであろう。前原北遺跡出土のものは7～11である。7は推定であるがⅠ－A－1類にはいると思われる。8はⅠ－B－1類，11はⅡ－B－3類，9,10はⅡ－B－4類に属する。前原北遺跡ではほかに常滑の大甕,古瀬戸灰釉瓶子や白磁椀が出土しており上限として鎌倉時代後半から室町時代が考えられ，前原西遺跡より古い様相を呈している。[15]12～14は堂地東遺跡出土である。12～13はⅠ－B－1類，14はⅠ－B－2類に含まれる。

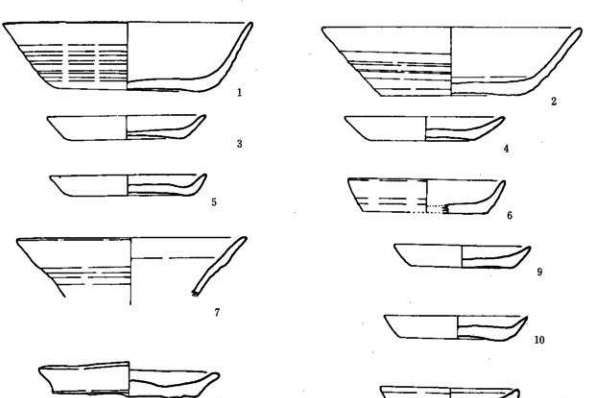
以上，大まかに相対的な編年を行なってきたが前原西遺跡（A地区）などの一括資料を参考にして次のⅣ期にわけることができる。

Ⅰ期　ヘラ切りが中心となる。（Ⅰ－A－1類，Ⅰ－B－1類）

Ⅱ期　ヘラ切りと糸切りが混在する。(Ⅰ－A－2類，Ⅰ－B－2，3類，Ⅱ－A－1類，Ⅱ－B－3，5類)

Ⅲ期　糸切りが大半を占め特小皿が出現する。（Ⅱ－A－2類，Ⅱ－B－1，2，4類）

Ⅳ期　特小皿のみとなる。（Ⅱ－B－6，7類）



第26図　周辺遺跡出土土師器

1～6　前原西遺跡周溝墓出土
7～11　前原北遺跡出土
12～14　堂地東遺跡出土
越11、註2)文献より抜すい

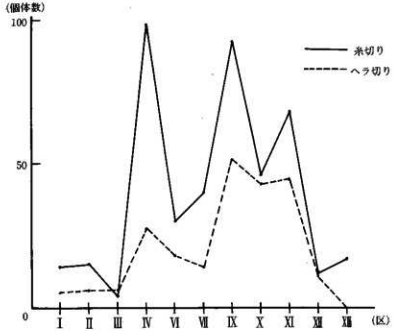
	口径	底径	器高		口径	底径	器高
1	13.2	7.5	3.8	8	9.5	7.7	1.8
2	13.7	7.0	3.8	9	7.2	5.4	1.2
3	8.3	6.9	1.45	10	7.5	5.6	1.2
4	8.3	5.9	1.6	11	7.2	5.9	1.1
5	8.1	6.8	3.3	12	7.9	6.0	1.6
6	8.2	6.1	1.6	12	8.1	6.8	1.4
7	7.0			14	8.0	6.1	1.6

表42　周辺遺跡出土土師器法量表

4．土師器からみた遺跡の性格

前に述べた大まかな土師器の相対的編年をもとに各区における類別出土数によって，山内石塔群のありかたについて考えてみたい。

糸切りは出土総数の約9割を占める。(表43) 糸切りがもっとも多く出土しているのは，Ⅳ区，Ⅸ区で，ヘラ切りはⅨ区，Ⅹ区，Ⅺ区である。ヘラ切りと糸切りの出土量が均衡しているのはⅠ区，Ⅱ区，Ⅲ区，Ⅹ区，Ⅻ区で，特にⅢ区ではヘラ切りと糸切りの出土量が逆転している。Ⅻ区ではヘラ切りは出土していない。各区における出土総数やヘラ切り，糸切りの出土数からそれぞれの区の存続期間がある程度窺えるのではなかろうか。



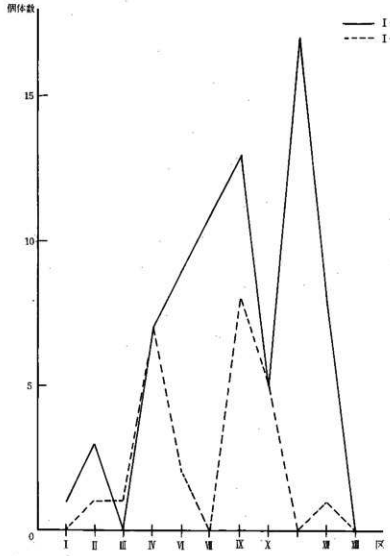
	ヘラ	糸	計
Ⅰ	5	14	19
Ⅱ	6	15	21
Ⅲ	6	4	10
Ⅳ	28	99	127
Ⅴ	18	30	48
Ⅵ	14	40	54
Ⅸ	52	93	145
Ⅹ	43	46	89
Ⅺ	45	68	113
Ⅻ	11	12	23
ⅩⅢ	0	17	17
計	208	438	666

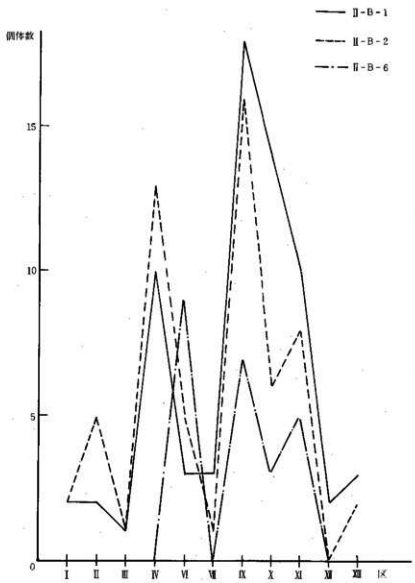
表43　ヘラ切りと糸切りの各区出土数

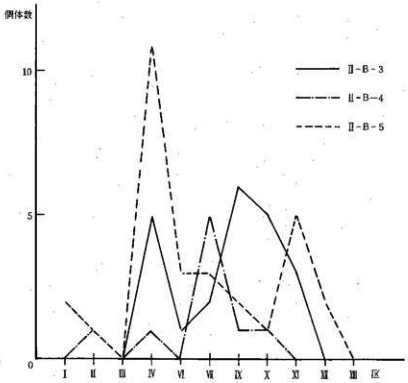
次に各区における類別出土状況について考えてみたい。(表44, 表45) Ⅰ区ではヘラ切り5，糸切り14出土している。内訳はⅠ－A－1類，Ⅱ－A－1，2類1個体ずつで，ほかにⅡ－B－5－bや7類である。Ⅲ期であるⅡ－A－2類やⅡ－B－4類が出土していない。しかしⅥ期のB－7類が数個体みられることなどから，Ⅰ区は造営されてあまり長く利用されず終了しある程度の空白期をおいて再利用されたとも考えられる。Ⅱ区は，Ⅰ－A－1類もあるがⅡ，Ⅲ期の土師器を多く出土している，Ⅲ区では糸切りとヘラ切りの出土数が逆転している。Ⅰ－A－1類は出土していないが，Ⅰ－B－1類が比較的多くみられる。ほかにⅡ－B－7類も出土している。Ⅲ区はⅠ区などよりやや遅れて造営され短期間営なまれたのではなかろうか。そしてⅠ区同様後世に

類		区	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	Ⅵ	Ⅶ	Ⅸ	Ⅹ	Ⅺ	Ⅻ	ⅩⅢ	計
Ⅰ	A	1	1	3	0	7	9	11	13	15	17	8	0	74
		2	0	1	1	7	2	0	8	5	0	1	0	25
	B	1	4	3	4	3	5	5	13	5	5	3	0	50
		2	0	0	0	3	1	1	11	3	4	0	0	23
		3	0	0	0	0	1	0	1	0	0	0	0	2
Ⅱ	A	1	1	0	0	0	2	0	4	0	1	0	0	8
		2	1	0	0	6	0	0	9	2	0	0	0	18
		3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1
	B	1	2	2	1	10	3	3	18	14	10	2	3	68
		2	2	5	1	13	5	1	16	6	8	0	2	59
		3	0	0	0	5	1	2	6	5	3	0	0	22
		4	0	1	0	1	0	5	1	1	0	0	0	9
		5	2	1	0	11	3	3	2	1	5	2	0	30
		6	0	0	0	0	9	0	7	3	5	0	0	24
		7	3	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	4

表44　各区における類別出土数(1)







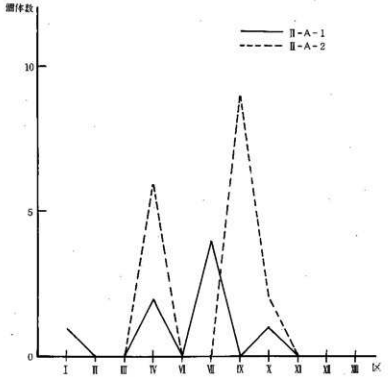


表45　各区における類別出土数(2)

再利用された可能性もある。それは火輪を地輪に代用していたことなど必ずしも無関係とはいえないであろう。Ⅳ区はⅨ区に次いで土師器を多く出土している。Ⅰ－Ａ－１，２類やⅡ－Ｂ－１，２，３類もみられる。その中でⅡ－Ｂ－５類が他区に比べもっとも多い。Ⅳ区は，Ⅰ，Ⅲ区に比べ長期間利用されていたことが考えられる。供養塔としての「冂」字形を有するＡ群やＢ群では地輪下に石を敷いた中から褐釉陶器，越前系壺や青白磁などの蔵骨器が検出され，当石塔群中もっと使用目的のはっきりする区である。Ⅴ区，Ⅵ区では，Ⅰ－Ａ－１類やⅠ－Ｂ－１類などⅠ期の土師器からⅡ－Ｂ－６類のⅣ期の土師器まで幅広く出土している。Ⅴ，Ⅵ区は広場をはさんで東西に相対して配列されている。広場は当石塔群開始期から存在していた可能性もあり，当石塔群が廃棄されるまであったと思われる。Ⅶ区は，Ⅱ－Ｂ－４類がもっとも多く出土している。Ⅳ期の土師器類はみられない。Ⅸ区は当石塔群でもっとも多く土師器を出土する。類別にみても圧倒的に多いのがⅡ－Ｂ－５類はⅣ区，Ⅶ区が，またⅠ－Ａ－１類はⅪ区がⅨ区の出土量を上回っている。Ⅸ区は，当石塔群開始期から廃棄まで長期間利用されてきたと思われる。Ⅹ区は，Ⅱ－Ａ－２類とⅡ－Ｂ－７類を除いてほとんど出土している。Ⅺ区は，当石塔群中五輪塔，板碑など最も多く配列されている。Ⅰ－Ａ－１類が極めて多くⅡ－Ｂ－１，２，５類も出土している。Ⅺ区が石塔群中もっとも古いと考えられるが，地輪の配列から１度あるいは数度石塔類が整理された可能性もある。[17] Ⅻ区は，土師器の出土量は少ないがその中ではⅡ－Ｂ－１類が目をひく。ⅫⅠ区は土師器の出土量がもっとも少なく，ヘラ切りは出土していない。Ⅱ－Ｂ－１，２類が数個体出土しているだけである。そのほかに糸切り底の須恵器系の蔵骨器が出土している。

以上の如く土師器の各区における類別出土状況をみてきたわけであるが，それによって想定できることをまとめると次のとおりである。

1．山内石塔群はある一時期にそれぞれ区画性をもって造営されたと思われる。

2．上位面に位置するⅠ区，Ⅱ区，Ⅲ区は，ヘラ切り，糸切りの出土量や類別出土状況から短期間の利用ののち空白期間をおいて再利用された可能性がある。

3．上位から下位にしたがって土師器の出土量が増加することや下位面になるにつれて幅広い時期の土師器が出土している。つまり上位面から下位面になるにつれて各区の営続期間が長くなる。

4．Ⅻ区は他区よりやや遅れて造営されたと思われる。

5．出土土師器の時期について

出土した土師器は約600点にものぼる。これらは遺構の一括資料として扱えるものは少なく，五輪塔などに伴い灯火器として使われたものがほとんどと思われる。そのため確実に年代のはっきりするものはない。そこでヘラ切りをもつものから糸切りをもつものへの移行がすみやかに行なわれたと過程して，類似するⅠ－Ｂ－１類，Ⅱ－Ｂ－３類を例にとって考えてみたい。大分県大分市豊後国分寺跡からⅡ－Ｂ－３類に属すると思われる土師器が出土している。塔西地区から出土した小皿ｉ類である。[19] 形態も厚手の底部に，短く直線的に外上方に延びる体部をもつ点など非常に類似する。この土器群は，豊後国分寺が鎌倉期の大友氏による複興（仁治元年・1240年）の時期を上限年代として考えられている。[19] また大分県三重町に所在する惣田遺跡では武士層の居館と

しての可能性がある建物群が検出されているが，その中で出土した皿－A，BがⅡ－B－3類と同形式と思われる。それは，玉永氏によれば14世紀中～15世紀中葉ごろに比定されている[20]。鹿児島県では13世紀後半には少なくとも糸切りに変化している[21]。地域差やヘラ切りと糸切りの混在する可能性も充分に考えられるがここではⅡ－B－3類をいちおう14世紀前半頃としておきたい。またこの時期をヘラ切り単独で存在する時期の下限と，また14世紀前半をヘラ切りから糸切りへの変換期と考える。よってⅠ類は13世紀後半を下限とするわけであるがその中でⅠ－A－1類が気になる。Ⅰ－A－1類と同形式のものは周辺遺跡からほとんど出土していない。ただ大分県大分市守岡遺跡から同形態と思われるものが出土しているだけである[22]。Ⅰ－A－1類の形態は現段階では地域的なものなのかあるいは外来的な要素を含んでいるのか不明である。次にⅡ－B－7類の類似資料として惣田遺跡の坏Aがある。これは16世紀代を中心とする土器群としてとらえられている[23]。山内石塔群ではⅡ－B－7類は，最も新しい形態と考えられ，承応3年（1654）の紀年銘をもつ板碑が出土していることから，16世紀後半～17世紀代にかけてのものとしておきたい。

以上の如く大まかに，ヘラ切りと糸切りの変換の時期と最も新しいⅡ－B－7類についての年代を考えてみた。しかし，良好の資料めぐまれないことなどから他地方の資料をもとに作業を行ったため年代は資料の増加に伴いかなり上下する可能性を大きく含んでいる。

6．二・三の問題について

小稿では土師器の形態分類とその前後関係について考えてきたわけであるが，数々の問題を残している[24]。第1に糸切りの出現期である。ここではそれを14世紀前半と考えたが他地方の資料を参考にしたわけで必ずしもそうであるとは限らない。御笠川南条坊遺跡ではⅠ－3D類からヘラ切りと糸切りが共存しⅡ－1類で完全に糸切りへ変化している[25]。このようにヘラ切りと糸切りは混在ししていた時期もあり14世紀前半というのは上下する可能性が大きい。なお，清武城（14世紀代～1615），中之城（1375～1615）[26]などからはヘラ切りは一片も出土していない。第2に土師器と陶磁器との出土関係である。山内石塔群では，褐釉陶器，須恵器系の糸切り底をもった壺，青白磁の合子など注目すべきものが出土している。しかし土師器の出土量に対して陶磁器の出土は極めて少ない[27]。学園都市遺跡群でも同様で国産の土器類は出土しているが[28]輸入陶磁器関係は少ない。特に染付は少なく，まとまって出土しているのは清武城ぐらいである[29]。中国陶磁はすでに奈良時代に官貿易によって大宰府を中心にもたらされている[30]。日向記でも「同発卯年（天文12）日向ノ津々ニ唐船十七艘入来故異国ノ珍物数不知浦々大ニニギハヒケリ。」とあり輸入陶磁器が日向にも艘入されていたという裏付けとなっている。しかし，このような出土量の低調さは，使用対象者が上層階級でしかなく一般庶民用の日常用具としてはまだ浸透していなかったことが窺える。異った観点からすると，石塔群に伴なう石塔群に伴なう灯火器としての土器の出土量が多いかもしれないし，前原西遺跡の周溝をもつ土拡内からも土師器だけしか出土しておらず[31]，墓地には土師器を中心に使用されていたとも考えられる。第3に紀年銘をもつ五輪塔，板碑との関係で，土器編年をやっていくうえで加味しなければいけないことである。しかし，ここではある程度無視して土器形態を中心に行ったため片手落ちと言わざるえない。最も古い紀年銘は㉖区出土の㉖の

板碑（文明８年(1476)）で，新しいのはⅪ区出土の承和３年（1654）銘をもつ㉝の板碑である。これから類推するなら土師器の年代はかなり下がるであろう。第４に土師器生産の問題である。周辺では古代において松ヶ迫窯[34]が知られているのみでそれ以外の窯址については発見されていない。土師器において形態，法量，製作技法など多様化しており，古代の如く強い規制[35]のもとに生産されたとは考え難い。これは五輪塔空風輪，火輪などの形態にも同様なことがいえる。土師器生産は特定の「工人」たちによって行なわれていたかどうか。もし行なわれているとしたらその分布はどういう広がりを示すのかなどの問題が残る。

最後に山内石塔群を営んでいた階層についてである。石塔群を営んでいた人々は，ある一定の階層であったのか，あるいはいろいろな階層の人々によるものなのか。Ⅰ区，Ⅱ区などに見られる五輪塔２基を基本とした配列やⅣ区における「冂」字形の配列は家族墓的色彩が強い。また，石塔が多いⅨ区，Ⅺ区などは一般庶民の詣り墓としての要素が強い。しかしこれらは土器類からだけでは，はっきり言及できない。文献や墓地のあり方，周辺の墓，寺との関係から総合して考えていかねばならないことであろう。また，前原西遺跡の周溝をもつ土拡墓と山内石塔群は出土土師器から考えると時期的には重複するものであり，これら中世における墓地についても検討しなければならない。

以上，土師器を中心に述べてきたが形態分類，時期比定など問題が数多く残されており，御批判等あるかと思われる。今後，資料の増加に伴ない歴史時代土器編年を再度試みたい。

註

(1) 『宮崎学園都市埋蔵文化財発掘調査概報』（Ⅱ） 宮崎県教育委員会 1981
(2) 『宮崎学園都市埋蔵文化財発掘調査概報』（Ⅲ） 宮崎県教育委員会 1982
(3) 『浄土江遺跡』 宮崎市文化財調査報告書第６集 宮崎市教育委員会 1981
(4) 『上別府遺跡』 宮崎県教育委員会 1979
(5) 野間重孝 「浄土江遺跡における土師式土器の編年的試論」『宮崎考古 7』1981
(6) 前川威洋他 『福岡南バイパス関係埋蔵文化財調査報告』 第２～８集 1975～78
(7) 『成岡・西ノ平・上ノ原遺跡』 鹿児島県教育委員会 1983
(8) 口縁端部の仕上がりや体部の立ち上がりなどから細分できる可能性がある。
(9) ここではヘラ切りから糸切りへのすみやかな変化を前提に考えた。
(10) (6)に同じ
(11) (6)に同じ
(12) 大分県大分市豊後国分寺跡における坏－ｈに類似している。
(13) (2)に同じ
(14) (1)に同じ
(15) (2)に同じ
(16) (1)に同じ
(17) 北郷氏の御教示による。

(18) 『豊後国分寺跡』 大分市教育委員会 1979

(19) 同 上

(20) 『惣田遺跡』 三重町教育委員会 1983

(21) 池田耕一「出土遺物からみた古代の薩摩・大隅」『大宰府古文化論叢』上巻 1983

(22) 『守岡遺跡』 大分市教育委員会 1979

(23) (20)に同じ

(24) 形態分類における細分の問題はここでは除いた。

(25) (6)に同じ

(26) 「清武城跡」『九州縦貫自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書』(3) 宮崎県教育委員会 1979

(27) 『都城中之城』 都城市教育委員会 1983

(28) 堂地東遺跡（昭和58年度調査）では青磁，白磁，陶器などまとまって出土している。しかし染付の出土量は極めて少ない。また若宮田遺跡においても大量の糸切底をもつ土師器が出土しているが陶磁器類はほとんどみられない。

(29) 堂地東遺跡，前原北遺跡からは古瀬戸，前原南遺跡，平畑遺跡からは緑釉陶器が出土している。

(30) (26)に同じ。

(31) 亀井明徳 「九州」『世界陶磁全集』 3 1977 小学館

(32) 伊東氏の記録である「日向記」の原形が落合兼朝により編述されている。

(33) (1)に同じ。

(34) 石川恒太郎『宮崎県の考古学』 1968 吉川弘文館

(35) 小笠原好彦「7，8世紀の土器の生産」『考古学雑誌』第65巻第3号 1979

No.	口径	器径	器高	色調	底部切り離し	備考
				Ⅰ区		
1		6.0		淡褐色	ヘラ切底	
2		7.2		淡黄褐色	〃	
3	7.6			淡褐色	〃	
4		6.4		〃	〃	
5	8.2	4.3	2.1	淡茶褐色	糸切底	Ⅱ-B-7
6	7.3	4.5	2.2	うす茶色	〃	〃
7	8.0	4.0	3.0	淡茶褐色	〃	〃
8		6.0		〃	〃	
9				淡赤褐色		
10				〃		
				Ⅱ区		
11		8.0		淡黄褐色	ヘラ切底	
12		7.8		〃	〃	
13	8.2	4.3	2.6	淡茶褐色	糸切底	Ⅱ-B-5-a
14	8.9	6.2	1.8	〃	〃	Ⅱ-B-1-b
15	9.3	6.6	1.75	淡黄褐色	〃	〃
16	10.6	5.0	2.9	〃	〃	Ⅱ-B-4-b
17	11.8	7.3	3.1	淡茶褐色	〃	Ⅱ-A-1
18		6.0		淡黄褐色	〃	
19		7.4		〃	〃	
20		7.2		淡茶褐色	〃	
21				淡黄褐色	〃	
22	10.6	6.5	2.2	〃		Ⅱ-B-4-b
				Ⅲ区		
23	6.6	6.0	1.45	淡黄褐色	ヘラ切底	Ⅰ-B-1
24		6.4		〃	〃	
25	7.2	2.8	2.75	〃	糸切底	Ⅱ-B-7
26		7.0		淡茶褐色	〃	
27				〃		
				Ⅳ区		
28	8.0	6.2	1.5	淡黄褐色	ヘラ切底	Ⅱ-B-4-a
29	14.0	9.9	3.7	淡茶褐色	〃	Ⅰ-A-2
30		6.0		〃	〃	
31		10.8		〃	〃	
32		7.4		淡黄褐色	〃	
33		8.2		〃	〃	
34		9.0		〃	〃	
35	7.8	5.1	2.25	〃	糸切底	Ⅱ-B-5-a
36	7.1	5.0	1.5	〃	〃	Ⅱ-B-1-a
37	8.9	6.9	1.9	うす茶色	〃	Ⅱ-B-2-b
38	9.2	4.0	3.0	淡茶褐色	〃	Ⅱ-B-6
39	7.2	5.6	1.4	淡赤褐色	〃	Ⅱ-B-3
40	8.6	6.4	1.5	淡茶褐色	〃	Ⅱ-B-4-a
41	7.8	5.6	1.4	淡黄褐色	〃	Ⅱ-B-2-a

No.	口径	底径	器高	色調	底部切り離し	備考
42	7.3	5.3	1.2	淡黄褐色	糸切底	Ⅱ-B-1-a
43	10.1	6.5	2.6	淡茶褐色	〃	Ⅱ-B-2-b
44	9.6	6.8	2.9	淡赤褐色	〃	Ⅱ-B-5-b
45	10.7	5.8	2.8	淡茶褐色	〃	Ⅱ-A-1
46	11.2	7.6	2.7	淡赤褐色	〃	〃
47	11.9	7.5	3.5	淡茶褐色	〃	〃
48	14.0	9.2	3.0	〃	〃	Ⅱ-A-2
49	10.6	7.4	2.3	〃	〃	Ⅱ-B-4-b
50	12.2	6.95	2.6	〃	〃	Ⅱ-A-1
51	11.0	7.0	2.1	〃	〃	Ⅱ-B-2-b
52		4.8		淡赤褐色	〃	
53		4.8		〃	〃	
54		5.0		淡褐色	〃	
55		5.2		淡赤褐色	〃	
56		6.2		淡黄褐色	〃	
57		4.6		〃	〃	
58		4.4		淡茶褐色	〃	
59		5.6		淡黄褐色	〃	
60		5.6		淡茶褐色	〃	Ⅱ-B-4
61		4.2		淡赤褐色	〃	
62		4.2		淡茶褐色	〃	
63		6.2		淡黄褐色	〃	
64		5.2		〃	〃	
65		8.4		淡茶褐色	〃	
66		6.8		〃	〃	
67		8.2		淡黄褐色	〃	
68			2.1	淡茶褐色	〃	
69				〃	〃	
70	12.6	7.4	3.8	淡黄褐色		
71		5.4		淡褐色		
72				淡赤褐色		
73				淡茶褐色		
				Ⅵ区		
74	8.8	6.4	2.0	淡黄褐色	ヘラ切底	Ⅱ-B-1-b
75	7.6	5.6	1.5	淡赤褐色	〃	Ⅰ-B-2
76	7.2	5.9	2.0	〃	〃	Ⅰ-B-3
77		6.4		淡茶褐色	〃	
78		5.6		淡黄褐色	〃	
79		7.6		〃	〃	
80		9.0		〃	〃	
81		9.2		〃	〃	
82		7.0		淡茶褐色	〃	
83	7.2	4.7	2.0	淡黄褐色	糸切底	Ⅱ-B-1-a
84	7.5	5.5	2.0	淡茶褐色	〃	Ⅱ-B-6
85	7.9	5.2	2.5	赤褐色	〃	Ⅱ-B-5-a
86	8.2	6.2	2.1	淡茶褐色	〃	Ⅱ-B-6
87	7.6	5.2	2.1	〃	〃	〃
88	7.7	4.3	2.4	〃	〃	〃

表46　土師器の法量表 (1)

No.	口径	底径	器高	色調	底部切り離し	備考
89	7.0	5.1	1.85	淡赤褐色	糸切底	II-B-5-a
90	6.75	4.5	2.25	〃	〃	〃
91	8.7	6.1	1.95	淡茶褐色	〃	II-B-6
92	8.7	5.3	1.9	淡黄褐色	〃	II-B-2-b
93	8.4	5.5	2.1	淡赤褐色	〃	II-B-6
94	8.8	6.4	2.4	淡茶褐色	〃	〃
95	8.3	5.4	2.05	〃	〃	II-B-5-a
96	7.3	6.6	1.45	淡黄褐色	〃	II-B-3
97		6.6		〃	〃	II-B-2-b
98		6.4		淡茶褐色	〃	
99		6.2		〃	〃	
100		5.2		淡黄褐色	〃	
101		7.2		淡茶褐色	〃	
102		7.6		〃	〃	
103		7.0		〃	〃	
104				〃	〃	
105				〃	〃	
106			3.4	淡赤褐色	〃	
107				〃	〃	
108		5.0		淡黄褐色		
109			1.35	〃		
110						
			Ⅶ	区		
111	7.2	6.0	1.5	淡茶褐色	ヘラ切底	I-B-1
112	8.2	7.2	1.7	淡黄褐色	〃	〃
113		5.8		〃	〃	
114		8.4		〃	〃	
115		9.0		〃	〃	
116		6.6		〃	〃	
117		8.0		〃	〃	
118		8.6		〃	〃	
119		6.8		〃	〃	
120		7.0		〃	〃	
121		9.4		淡灰褐色	〃	
122		6.9		〃	〃	
123		8.4		淡黄褐色	〃	
124		7.4		淡褐色	〃	
125		6.2		内:淡灰褐色 外:淡黄褐色	〃	
126	8.0	5.4	2.0	赤褐色	糸切底	II-B-4-a
127	8.6	7.0	1.3	淡黄褐色	〃	
128	9.6	5.7	2.45	淡茶褐色	〃	II-B-5-b
129	10.0	5.6	2.7	〃	〃	〃
130		5.2		淡黄褐色	〃	
131		5.2		淡暗茶褐色	〃	
132		4.1		赤褐色	〃	
133		3.6		〃	〃	
134		6.1		淡茶褐色	〃	
135		6.6		淡黄褐色	〃	

No.	口径	底径	器高	色調	底部切り離し	備考
136		5.2		淡灰褐色	糸切底	
137		6.9		淡黄褐色	〃	
138		7.2		〃	〃	
139		8.6		淡黒褐色	〃	
140		8.9		淡黄褐色	〃	
141			1.6	淡茶褐色	〃	
142				淡黄褐色	〃	
143				〃	〃	
			Ⅸ	区		
144	6.6	4.0	2.2	淡褐色	ヘラ切底	I-B-3
145	8.4	6.6	1.2	淡茶褐色	〃	I-B-1
146	8.6	7.0	1.3	〃	〃	〃
147	7.5	6.2	1.5	〃	〃	II-B-1-a
148	13.5	7.2	3.6	淡黄褐色	〃	I-A-2
149	11.8	7.4	3.6	淡茶褐色	〃	〃
150	8.0	7.0	1.0	淡暗黄褐色	〃	I-B-1
151		4.8		淡黄褐色	〃	
152		6.0		〃	〃	
153		6.8		〃	〃	
154		7.2		〃	〃	
155		6.4		淡褐色	〃	
156		8.2		淡黄褐色	〃	
157		8.0		淡褐色	〃	
158		8.4		〃	〃	
159		7.4		〃	〃	
160		8.8		淡黄褐色	〃	
161		8.4		〃	〃	
162		9.05		淡褐色	〃	
163		7.6		黄褐色	〃	I-A-1
164		7.2		淡黄褐色	〃	
165		6.8		淡褐色	〃	
166			1.1	〃	〃	
167			1.55	淡黄褐色	〃	
168			1.3	〃	〃	
169				〃	〃	
170	7.3	6.0	1.4	淡茶褐色	糸切底	II-B-2-a
171	7.6	5.4	1.8	淡褐色	〃	〃
172	6.8	4.8	1.8	淡茶褐色	〃	II-B-1-a
173	8.35	6.8	1.4	〃	〃	II-B-1-b
174	7.6	6.0	1.2	淡黄褐色	〃	II-B-2-a
175	7.4	5.6	1.4	淡褐色	〃	II-B-1-a
176	6.6	4.4	1.5	〃	〃	〃
177	7.7	5.6	1.3	淡茶褐色	〃	〃
178	8.4	6.4	1.55	淡褐色	〃	II-B-1-b
179	8.0	5.4	1.7	〃	〃	II-B-1-a
180	7.2	5.2	1.5	淡茶褐色	〃	〃
181	7.85	4.8	1.9	淡黄褐色	〃	II-B-6
182	7.7	6.4	1.9	淡暗黄褐色	〃	II-B-2-a

表47　土師器の法量表 (2)

No.	口径	底径	器高	色調	底部切り離し	備考
183	8.1	5.4	2.15	淡黄褐色	糸切底	II-B-6
184	12.4	8.4	3.8	淡赤褐色	〃	II-A-1
185	13.8	8.8	3.9	淡茶褐色	〃	II-A-2
186	7.7	6.0	1.9	淡赤褐色	〃	
187		5.0		〃	〃	II-B-5
188		4.0		褐色	〃	
189		4.0		淡赤褐色	〃	
190		4.4		赤褐色	〃	
191		6.4		淡茶褐色	〃	
192		6.0		内:淡黄褐色 外:淡黒褐色	〃	
193		6.8		淡褐色	〃	
194		7.25		淡茶褐色	〃	
195		8.4		淡黄褐色	〃	
196		7.8		〃	〃	
197		8.0		〃	〃	
198		7.4		淡褐色	〃	
199		7.8		赤褐色	〃	
200		7.2		淡赤褐色	〃	
201		7.6		淡暗黄褐色	〃	
202		8.4		淡茶褐色	〃	
203		6.0		淡褐色	〃	
204		6.0		〃	〃	
205			2.0	黒褐色	〃	
206				淡茶褐色	〃	
207				淡褐色	〃	
208				淡茶褐色	〃	
209		6.4		〃		
210			1.6	淡赤褐色		
211				〃		
			X	区		
212	7.6	5.9	1.3	淡茶褐色	ヘラ切底	I-B-1
213	8.0	5.2	1.9	〃	〃	I-B-2
214	8.65	5.6	1.4	〃	〃	〃
215	5.8	5.2	1.2	淡赤褐色	〃	I-B-1
216	6.2	4.4	1.2	黄褐色	〃	I-B-2
217	7.2	6.0	1.2	黒褐色	〃	〃
218	6.6	5.2	1.0	黄褐色	〃	〃
219		6.0		淡茶褐色	〃	
220		5.6		淡黄褐色	〃	
221		6.0		淡茶褐色	〃	
222		8.4		淡黄褐色	〃	
223		6.8		淡赤褐色	〃	
224		9.0		淡茶褐色	〃	
225		7.6		黒褐色	〃	
226		10.0		淡茶褐色	〃	
227			1.2	淡黄褐色	〃	
228			1.3	〃	〃	
229			1.4	黒褐色	〃	

No.	口径	底径	器高	色調	底部切り離し	備考
230				淡黄褐色	ヘラ切底	
231				〃	〃	
232				〃	〃	
233				〃	〃	
234	8.4	5.6	2.2	淡茶褐色	糸切底	II-B-6
235	7.6	5.6	1.9	淡黄褐色	〃	II-B-2-a
236	7.6	5.8	1.3	淡茶褐色	〃	II-B-2-b
237	8.2	6.6	1.5	〃	〃	II-B-3
238	8.85	4.7	2.2	淡赤褐色	〃	II-B-5-a
239	7.6	5.2	1.4	淡褐色	〃	II-B-1-a
240	9.3	6.2	2.4	淡茶褐色	〃	II-B-2-b
241	12.6	8.8	3.6	淡赤褐色	〃	II-A-1
242	13.6	8.9	3.05	淡茶褐色	〃	II-A-2
243		4.8		淡黄褐色	〃	
244		4.8		〃	〃	
245		3.9		淡赤褐色	〃	
246		4.8		淡黄褐色	〃	
247		3.8		淡茶褐色	〃	
248		6.0		淡黄褐色	〃	
249		6.8		〃	〃	
250		4.4		〃	〃	
251			1.6	淡茶褐色	〃	
252				淡黄褐色	〃	
253				淡茶褐色	〃	
254	10.4			黒褐色		
255		6.0		淡茶褐色		
256			1.35	淡赤褐色		
257			2.45	〃		
258				淡黄褐色		
			XI	区		
259	8.1	6.0	1.35	淡黄褐色	ヘラ切底	II-B-1-a
260	13.6	9.4	4.25	淡茶褐色	〃	I-A-1
261	15.4	8.4	4.5	〃	〃	〃
262		5.0		淡黄灰褐色	〃	
263		7.2		淡茶褐色	〃	
264		7.8		〃	〃	
265		7.0		〃	〃	
266		8.6		内:淡黄褐色 外:淡茶褐色	〃	
267		7.6		淡茶褐色	〃	
268		7.0		〃	〃	
269		6.8		淡黄褐色	〃	
270		7.8		〃	〃	
271		7.0		淡茶褐色	〃	
272		6.4		淡赤褐色	〃	
273			1.7	淡黄褐色	〃	
274				〃	〃	
275				暗淡黄褐色	〃	
276				淡黄褐色	〃	

表48　土師器の法量表 (3)

No.	口径	底径	器高	色調	底部切り離し	備考
277	8.15	5.6	2.1	淡茶褐色	糸切底	II-B-6
278	7.8	5.8	2.25	淡赤褐色	〃	〃
279	7.5	4.2	2.1	淡茶褐色	〃	II-B-5-a
280	8.0	4.9	2.4	〃	〃	〃
281	7.0	4.6	2.2	〃	〃	II-B-1-a
282	8.65	7.4	1.7	〃	〃	II-B-2-b
283	9.8	7.2	2.5	〃	〃	II-B-5-b
284	9.6	5.8	2.65	〃	〃	〃
285	10.65	7.0	1.9	淡黄褐色	〃	
286	9.1	5.7	2.35	〃	〃	II-B-5
287	9.75	6.0	2.7	〃	〃	II-B-2-b
288	10.0	5.8	2.3	淡茶褐色	〃	〃
289	9.9	7.5	1.75	淡赤褐色	〃	II-B-1-b
290	12.1	7.4	5.3	〃	〃	II-A-3
291		6.4		淡黄褐色	〃	
292		6.6		〃	〃	
293		6.0		淡茶褐色	〃	
294		5.4		〃	〃	
295		5.2		〃	〃	
296		6.0		淡黄褐色	〃	
297		6.7		〃	〃	
298		6.4		淡茶褐色	〃	
299		6.8		〃	〃	
300		7.0		淡黄褐色	〃	
301		8.4		〃	〃	
302		7.6		〃	〃	
303		11.6		〃	〃	
304		7.0		〃	〃	
305		5.0		〃	〃	
306		6.0		淡茶褐色	〃	
307			1.95	〃	〃	
308			1.7	淡黄褐色	〃	
309	10.45	8.0	2.4	〃		II-B-2-b
310	8.6	7.0	1.4	淡赤褐色		II-B-4-a
311		6.0		〃		
312			0.9	暗黄褐色		
313				淡茶褐色		
314				淡黄褐色		
315				淡 褐 色		
			XII	区		
316		5.6		淡黄褐色	ヘラ切底	
317		7.6		〃	〃	
318		8.1		〃	〃	
319		7.0		淡茶褐色	〃	
320		8.0		淡黄褐色	〃	
321	7.4	4.8	2.5	淡赤褐色	糸切底	II-B-5-a
322	8.5	5.9	2.1	暗茶褐色	〃	〃
323		6.0		淡茶褐色	〃	

No.	口径	底径	器高	色調	底部切り離し	備考
324		6.8		淡黄褐色	糸切底	
325		5.6		淡茶褐色	〃	
			XIII	区		
326	12.9	8.1	3.4	淡茶褐色	糸切底	II-A-1
327		6.2		赤褐色	〃	
328		5.2		〃	〃	
			XIV	区		
329	8.9	7.35	1.5	淡茶褐色	ヘラ切底	I-B-1
330		6.4		淡黄褐色	〃	
331		8.2		〃	〃	
332		9.2		淡茶褐色	〃	
333		8.2		淡黄褐色	〃	
334		10.2		〃	〃	
335		8.7		〃	〃	
336		8.5		〃	〃	
337	9.0	6.0	1.85	淡赤褐色	糸切底	II-B-6
338	8.5	4.15	2.2	淡褐色	〃	II-B-7
339	8.1	5.0	1.75	淡黄褐色	〃	II-B-2-a
340	8.85	6.4	1.35	〃	〃	II-B-4-a
341	11.9	6.8	2.5	淡赤褐色	〃	II-A-1
342	11.1	7.0	3.1	淡茶褐色	〃	〃
343		6.0		淡黄褐色	〃	
344		6.2		淡茶褐色	〃	
345		6.8		淡黄褐色	〃	
346		5.4		淡茶褐色	〃	
347			2.9	淡黄褐色	〃	
348			2.55	淡茶褐色	〃	

表49　土師器の法量表 (4)

第５節　山内石塔群出土の蔵骨器

山内石塔群出土の蔵骨器は，第Ⅳ区及び第Ⅶ区で３点出土している。その他，第Ⅺ区で古瀬戸と考えられる灰釉広口梅瓶が土壙内から出土しているが，蔵骨器かどうか詳細は不明である。第Ⅳ区出土の蔵骨器は２点あり，その出土位置は第Ⅳ区平坦部西縁のやや北よりである。蔵骨器は，横位及び直立した状態で出土し，その中ほどの位置で合子も１点出土している。蔵骨器を埋納した土壙等は確認されていない。蔵骨器の上部には河原石による敷石がみられたが，これは，蔵骨器に伴った敷石でなく，石塔群に伴っているものである。

横位の状態で出土した蔵骨器は，口縁部を欠損し，現高21.8cmを測り，口縁部が直口ぎみに立ち上がる短い口縁部をもつ長壺である。胴却下半はヘラ削り，中位に成形時の凹凸を残し，肩部は横ナデである。底部は，左回りのヘラ削りによりあげ底となっており，目跡が３ケ所ある。釉は全面に褐釉が施されている。この蔵骨器は輸入陶磁器で13～14世紀に比定されている褐釉長壺である。(1)

直立して出土した蔵骨器は，口縁部が外反ぎみに開き，肩部は丸みをもって張り，底部へ直線的に続く茶褐色の膚を呈する壺である。成形は粘土輪積みで，体部の調整は下半が横方向のヘラ削り，中位が縦方向のヘラ削りであり，その調整は荒い。口縁部の調整は横ナデであり，また，口縁内面に１条の沈線が巡っている。肩部に「十」印のヘラ記号があり，口縁内面及び肩部には自然釉がみられ，肩部の自然釉は暗緑色を呈する。蔵骨器の成形，器形，色調，調整手法は鎌倉時代の越前壺に類似する。(2)

２蔵骨器の中ほどで出土した合子は，蓋に小壺の蓋が転用されている。これらは，12世紀の影青合子及び小壺である。(3)

第Ⅶ区で出土した蔵骨器は，整理された五輪塔の下で発見されている。押し潰され，口縁部は内へ落ちた状態で出土しているので，直立した状態で埋納されていたものと考えられる。土壙等については不明である。蔵骨器は，青灰色を呈する須恵質壺で器高22.5cm，口径10.5cm，最大径18.3cm，底径9.1cmを測る。成形は粘土巻き上げ法で底部は回転糸切りである。口縁部はやや外反し，口縁外端は粘土貼り付けにより断面三角形状を呈する。底面の調整は荒いナデである。須恵壺は，器形及び底部の切り離し手法から鎌倉期のものと考えられる。。

山内石塔群出土遺物は，陶磁器類は極めて少なく，土師器坏・皿が大半である。その土師器の切り離し手法は，ヘラ切り及び糸切りの両手法がみられ，後者の出土率が高い。両手法の土師器は，糸切りの坏を少量出土した第Ⅶ区を除く各区から出土している。ヘラ切り手法は，北部九州では10世紀中頃から後半にヘラ切り手法から糸切り手法に変わったとされているが，(4)山内石塔群出土のヘラ切り手法の土師器を平安期まで上げるには，他の遺物に平安期のものが出土していないことから無理がある。学園都市20号地Ａ地区では，ヘラ切り・糸切りの土師器坏・皿とともに，鎌倉期の白磁，鎌倉後半から南北朝期の常滑Ⅲ期の大甕が出土しており，13世紀を中心とした鎌倉～室町期に比定されている。(5)また，16号地で検出された周溝墓からは，糸切りの土師器坏・皿

が出土しており，これは14世紀末～15世紀初頭に比定されている。[6] 当地域においては，ヘラ切り手法から糸切り手法へ転換したのは鎌倉期に求められるようであり，山内石塔群出土の土師器は，鎌倉期以後のものと言えよう。

山内石塔群は，五輪塔，板碑，宝篋印塔などから構成される石塔群である。石塔の中で最古のものは，形態から第Ⅺ区に所在する三基の大型の五輪塔であり，その時期は13世紀～14世紀のものと考えられている。山内石塔群の中で紀年銘を有する五輪塔，板碑があり，それは，応永25年(1418)から承応３年（1654）である。当石塔群は，石塔の形態，紀年銘及び土師器等の年代観から，造立は13世紀～14世紀に始まり，少なくとも承応３年までは造立が続いていたものと考えられる。

第Ⅳ区出土の蔵骨器は，13世紀～14世紀の褐釉長壺，鎌倉期の越前系壺である。又蔵骨器は出土状態は異なるが，近接していることから，埋納時期はほぼ同時期の13世紀～14世紀であろう。第Ⅳ区において，石塔類は形態的に埋納時期までさか上るものはなく，また，蔵骨器上部の敷石は，石塔に伴うものであることから，蔵骨器に後出するものである。また，第Ⅻ区出土の蔵骨器は，鎌倉期の須恵質壺である。蔵骨器上部の石塔類は，整理されたものであることから，蔵骨器に直接関係するものでない。山内石塔群出土の蔵骨器は，石塔群が造立され始めた時期のものであり，また，石塔群に先行していた可能性もある。

最後に，山内石塔群は，対岸の低丘陵上に所在したと考えられる勢田寺の石塔群と推定されている。その創建は，元久２年（1205）とされるが，その年代が正確かどうかは別にして，少なくとも鎌倉時代には存在していたと考えられる。

註

(1) 九州歴史資料館亀井明徳氏教示による。
東京国立博物館「日本出土の中国陶磁」1978

(2) 座右宝刊行会編「世界陶磁全集３，中世」小学館　1977
古越前の分布範囲は，平安から鎌倉前半期のものは福井県内のみであり，福井県以外で出土するのは鎌倉末から南北朝以降で，その分布も東日本が中心とされる。山内石塔群出土の蔵骨器を越前とするには躊躇されるが，時期的には，褐釉長壺及び合子と近接して出土したことから鎌倉期のものとみて大過ないと思われる。

(3) ２に同じ

(4) 前川威洋他「福岡南バイパス関係文化財調査報告書」第２～８集福岡県教育委員会　1975～1978

(5) 山中悦雄「20号地遺跡」(『宮崎学園都市埋蔵文化財発掘調査概報Ⅱ』)宮崎県教育委員会　1981

(6) 山中悦雄「16号地遺跡」(『宮崎学園都市埋蔵文化財発掘調査概報Ⅱ』)

第6節　特殊遺構と特殊遺物に関する一考察

1．特殊遺構及び遺物

ここで特殊遺構として取り扱うのは，XI区に三例存在する黒色土を埋土とする竪穴状遺構である。これらの遺構を比較して見ると，1号がXI区の中でも一段高い箇所に存在するのに対し，2号・3号はXI区の下段に位置する。2号・3号は両方とも炭化物を多く含む黒色土を埋土とし中に鉄片や礫を多く含む竪穴状の遺構であり，特徴的な遺物は出土していない。礫等も焼けている点などから火の使用が考えられる。時期的に見ると，上に存在する石塔との有機的なつながりが見られない所から，XI区の下段の石塔群が最終的な形態を形成する以前のものであると考えられる。それに対して1号は第15図－246の石塔の前面にあり，第17図－2の土製仏像や第17図－1の陶器片，第17図－3～7の土製品が出土しており，また時期的に見ても，1号は出土状態等から見てXI区が形成された後の時期が考えられる。以上のようなことより1号と2号・3号では遺構の性格及び時期が違うと考えられる。

特徴的な遺物としては，第17図－7の土製品があげられる。この土製品は外径が約30cm程度の大きさで，容器状を呈すると推定される。外面は粘土塊を貼り付けたままで調整が行われていない。内面は指で簡単なナデ調整が施こされてある。口縁部と推定されるもの，第17図－6は内面に段を有し，口縁帯のみ丁寧な整形が施こされている。また別個体と思われるが口縁帯の内面に，人為的かどうかは不明であるが2～3条の溝を有するものや，第17図－3のような瓦のような形態をもつものもある。その用途を考えると，類例がなく，明確には把握し難いが2～3の可能性を考えてみたい。

まず，全体的な土製品の形及び整形等から，小型の鋳型の可能性が考えられるが，他地域の鋳型及びその関連遺物[1]等を見る限り，この土製品は実際に鋳造に使用された痕跡が残っておらず，鋳型としては未使用のものと考えられる。また，これらの遺物が石塔群内の最下段の特別大型の五輪塔の前面より出土している点などから，石塔群に対する祭祀的性格の強い遺物群の可能性が考えられる。また，共伴の遺物（土製仏像・陶器）等から考えて，破砕されているが，埋経施設（礫石経も含む）の一種である可能性も考えられる。以上述べてきたようなことが考えられるが，明確なものとは言い難く，今後の類例の増加に期待したい。

2．土製仏像

本石塔群では，完形ではないが土製仏像が4体出土している。いずれもXI区より出土しており，その内，第17図－2は特殊遺構1号より出土している。4体とも立像と思われる。(第168図－1は座像の可能性もある。)第168図－1は如来像であり，第168図－2は地蔵菩薩像である。第17図－2，第168図－3は胴部しか残存していないため，明確ではないが，僧形をした仏像であろう。仏像には芯木を差し込む為の孔があいている。第17図－2は背中の部分にも孔が存在しており，これは光背を付けるためのものであろう。

この種の仏像の出土例は県内では珍しく貴重なものである。県外では大宰府[2]等で出土例を見ることができる。また用途については種々想定されるが，大きさ等から考えて，個人用の守り本尊

的なものや，また石塔供養の際に祭祀的な用い方をされたものか。また極楽寺の経塚[3]で見られるように経塚の副納品的な用途も考えられる。

3．墨書石（礫石経）

墨書石（礫石経）は，本石塔群において２か所で発見されている。第168図－５はⅦ区の北側Ⅺ区との境付近で出土しており，第168図－４はⅪ区の西側の部分より出土している。両方の石とも石塔の下または埋納施設内よりの出土ではなく，他の川原石に混じった状態で出土している。第168図－５は偏平な石の片面に「南無阿弥陀佛」と三行にわたって書かれており，その裏には明確ではないが梵字と思われるものが書かれている。第168図－４は縦長のやや厚みのある石に書かれており，一面にしか墨書は残存していない。墨書されているものは『法華経第６巻分別功徳品第17』[4]の中間の一部分である。前後の箇所を書いたものがあるはずであるが確認されていない。

これらは，供養のための埋経の一例であると思われるが，出土地点ではそれらの施設が確認されていないので，後世に動かされたか，流れ込みの可能性がある。

礫石経は県内では現在の所表46に示す通り本石塔群を含めて20例ほど知られている。学園都市遺跡群の２例を除けば，他は一字一石経であり，本遺跡の遺物は県内でも希な例として注目すべきものである。

また礫石経に書かれる経典は『法華経』の例が多い。近年太宰府[5]で出土したものも，法華経の一部である。その点においては本遺跡出土のものも同類である。

また時期は，共伴遺物がなく，石自体に紀年銘もないので明確なものは言えないが，三宅敏之氏の「経塚遺物年表」[6]によると，礫石経の初現は長寛３（1165）年と鎌倉時代に入るが，中世には数例しか存在せず，中世末～近世（江戸時代）に増加する。県内での例を見ても享保年間（1716～1735），慶応年間（1865～1866）等江戸時代中期以降のものが知られている。以上の点から考えて本遺跡出土の礫石経も近世（江戸時代）のものである可能性が強いと考えられる。

註

(1) 財団法人　京都府埋蔵文化財センター『梵鐘鋳造遺構の現状とその諸問題』 1982

(2) 九州歴史資料館「第67次調査」『太宰府史跡昭和55年度発掘調査概報』 昭和56年

(3) 奈良国立博物館『経塚遺宝』 昭和52年

(4) 坂本幸男・岩本裕，訳注『法華経』（下）岩波書店　1976

(5) 九州歴史資料館「第78次調査」『太宰府史跡昭和57年度発掘調査概報』 昭和58年

(6) 三宅敏之「経塚遺物年表」『新版仏教考古学講座第六巻経典・経塚』雄山閣　昭和52年

(7～10) 茂山　護氏（宮崎県総合博物館埋蔵文化財センター）の御教示による。

(11) 経碑だけ確認し礫石経を確認していないものも含む。

番号	出　　土　　地	備　　考	参考文献
1	西臼杵郡日ノ影町鹿川		①
2	延岡市夏田琴塚北側麓		①
3	東臼杵郡北浦町三川内土々呂		①
4	〃　北郷村宇納間		①
5	〃　南郷村神門		①
6	西都市一の迫[17]	宝永四年（1707） 奉納法華一部一字一石薬師彩色万人供養塔	
7	〃 中村[18]	寛延二年？（1749） 奉書作法国妙典一字一石三蹟	
8	児湯郡高鍋町蚊口		①
9	〃　〃　家床東光寺址		①
10	〃　木城町石河内本村	享保二十弁年（1727） 奉書写大乗妙典一字一石塔	①
11	〃　新富町大字新田中塚原	元治元年（1864） 南無妙法蓮華経一字一石塔	②
12	宮崎市吉村町下別府一の宮墓地[19]	天保十五年（1844） 大乗妙典一字一石供養塔	
13	〃　北川内中間[18]	弘化三年（1846） 奉納経門品一字一石塔	
14	〃　大字熊野前原西（16号地）遺跡	一字・石，周溝内より出土	③
15	〃　〃　堂地東（11号地）遺跡	多字一石	④
16	宮崎郡佐土原町愛吾神社境内		①
17	〃　清武町大字木原山内石塔群（23号地）	多字一石	
18	西諸県郡須木村尾鹿		
19	日南市酒谷下永野	慶応二丙年（1866） 奉書写光明真言一字一石塑霊仏果修	①
20	南那珂郡北郷町北河内曽和田		①

表50　県内礫石経出土地名表[11]

〈参考文献〉

① 茂山　護「宮崎の経塚地名録」『宮崎県総合博物館研究紀要３』

② 新富町教育委員会『新富町の埋蔵文化財』1981

③ 宮崎県教育委員会『宮崎学園都市埋蔵文化財発掘調査概報Ⅱ』1981

④ 〃 『 〃 〃 Ⅲ』1982

第Ⅳ章　県内の石塔

1．はじめに

宮崎県内石造物については以前から隣接県に比べ，量的にも質的にも劣っていると言われてきたが，石造物の国および県指定の有形文化財や史跡の数にも表わされている（表－47)。このことは，五輪塔や板碑についても言えることで，清武町黒坂観音堂の五輪塔，日南市大迫寺跡，石塔群，小林市伊東塚，えびの市彦山寺跡石塔群の板碑の計４件のみが県指定の文化財である。

文献のうえからは，昭和17年に宮崎県が出版した「史蹟名勝天然記念物調査報告第十二輯日向ノ金石文」の中で当時県の史蹟主事の職にあった瀬之口傳九郎氏が，紀年銘を持つ県内の458件の金石文の資料を集成している。石塔類では，石碑，板碑，五輪塔，石幢，宝塔，伊東塔[(1)]，多宝塔，宝篋印塔，笠塔婆等400件余りの紀年銘，銘文，所在地を調査している。その後，「日向ノ金石文」を超えた石塔関係の資料は出されておらず，県内の石塔の資料としては貴重な文献である。しかし，近年では，県教育委員会発行の「郷土文化財基礎調査報告」や「宮崎県郷土文化財総合調査報告書」などで県指定の石塔を中心とした調査がなされたり，市町村発行の市町村史や文化財をあつかった資料等で石塔の記載や調査が多くなっている。しかし，以前として民間の研究会や史談会等に依存する所が多く，「九州の石塔」をはじめ貴重な文献が数多くみられる。

このように，全県的な石塔分布の把握は不十分だが，徐々に調査研究が活発になりつつある。そこで本章では，山内石塔群の所在する清武町や，飫肥藩の中心地である日南市をはじめとする県内の石塔群および重要な石塔について，現在，文献で確認されている物件をあげることにする。

表51　県内の国および県指定文化財（石造物関係）

名　称	所在地	指　定	備　考
中ノ尾供養碑	日南市東郷	国史跡 昭9. 8. 9	天文十八年(1549)の島津氏と伊東氏の飫肥城の戦いで敗れた伊東方の霊を弔うために島津方が建てたもの。
宗麟原供養塔	川南町湯迫	〃 昭8. 2. 28	天正元年(1578)の高城川原での島津氏と伊東氏の合戦の犠牲者の霊を弔うために島津方がたてたもの。
五　輪　塔	清武町黒坂観音堂	県有形文化財 昭41. 7. 17	「弘安八年乙酉四月廿六日造立者法眼蕙覚」「弘安八年乙酉六月十五日造立者僧蕙覚」の銘文あり。
大迫寺址石塔群	日南市吉野方	〃 昭40. 8. 17	中世の墓地。「永仁三年」(1295）の板碑，「文保元年」(1317）の五輪塔などがある。
六地蔵幢	小林市水流迫	〃 昭40. 8. 17	「天文十年」(1541）の銘あり。
石造六地蔵幢	延岡市大神小路内藤記念館内	〃 昭40. 8. 17	延岡山舞野に所在していたもの。「弘治二年」(1557）藤旗氏がその子の供養のため造立したとの銘がある。
板　碑	えびの市東川北	〃 昭40. 8. 17	彦山寺跡内にあり「正中二年」(1325）に賓光が御覚然の三十三年忌にあたり供養を営んだ旨の銘文あり。
本庄の石仏	国富町本庄	県史跡 昭8. 12. 5	地上より光背上端まで約5ｍ，照幅約1.6ｍの薬師如来像。
東麓石窟仏	野尻町東麓	〃 昭32. 12. 15	高さ138 cm，幅183 cm，男行166 cmの岩窟壁面に薬師三尊と十二神将が彫り出されている。鎌倉後期。
伊東塚	小林市上ノ馬場	〃 昭9. 4. 17	元亀二年の木崎原合戦で敗退した伊東義祐軍の戦死者を葬った塚。「文化四年」(1817）銘の供養碑もある。
僧日講遺跡	佐土原町上田島	〃 昭17. 6. 23	無縫塔。日講は妙覚寺日奥上人創場の不受不施をさらに説きすすめ日蓮宗から分立，元禄十一年（1698）没。
古月禅師分骨塔	佐土原町大光寺	〃 昭9. 4. 17	無縫塔。宝暦元年（1751）没，大光寺42世住。
僧日要の墓	日向市細島	〃 昭17. 1. 27	延徳元年（1489）日蓮宗本山妙本寺第11世，日向市細島生まれ。
何欽吉墓	都城市鷹尾町	〃 昭9. 4. 17	自然石「生於大明広東朝州澄海県，逝于万治元年戊戌九月二十九日」銘あり。

参考文献　「宮崎県の文化財」昭和57年９月　宮崎県教育委員会編

2．清武町の石塔

山内石塔群の北西約1km，黒坂観音堂に県指定有形文化財の五輪塔がある。水輪の前面と背内の二ヶ所に「弘安八年乙酉(1285) 四月廿六日造立者法眼蓮覚」と「弘安八年乙酉六月十五日造立者僧蓮覚」の刻銘がある。火輪と空風輪は原形のものとは別個で水輪までの高さ約100cm，地輪の幅約100cmと大型の五輪塔である。なお，この五輪塔は現地の南東方にあり，山内石塔群の菩是寺の可能性を持つ長徳山勢田寺の境内にあったものを明治の初めに現地に移したといわれている。[文献18、111、112]

黒坂観音堂五輪塔

上加納城内伊東墓地内には，伊東塔4基，板碑10基余りがある。これらは昭和13年に登尾山の不動迫渓谷に埋まっていたものをこの地に移したものである。伊東塔は伊東祐国，祐堯・尹祐らの墓で高さ140cm～180cmの宝塔である。この型式の塔は大永のころより江戸期に及び，伊東一族の墓・供養碑に多く見られる。尹祐の墓といわれている塔は相輪の頭部を欠くが現高129cmで火輪（笠）屋根流れに「大永四年甲申八月□日(1524)」の銘を持つ。祐国の墓といわれている塔も相輪の頭部を欠くが現高157cmを計る。塔身に「天文五丙申歳　六月八日(1536)」の銘を持つ。また，露盤から塔身にかけて無・阿・弥・陀の各号がある。板碑には「永禄五年壬戌(1562)」・「文禄二年癸巳(1593)」などの紀年銘のものがある。石材は全て安山岩である。[文献71、112]

伊東塔（尹祐の墓）

このほかに石塔が群をなしている所としては，清武城跡北西の中山寺跡周辺に「寛永三年(1626)」から「天保十三年(1842)」にかけての板碑，宝塔，無縫塔の石塔群がある。いずれも中山寺住職の墓で，そのうち「寛永三年丙寅九月十日 (1623)重玄」の墓だけが宝塔となっている。[文献71] 今泉地区には，丸目の石塔群と永山の石塔群がある。丸目の石塔群は丸目山麓の薬師堂境内周辺に板碑，五輪塔など20基の石塔がある。「慶安元年(1648)」，「天和二年(1682)」銘の板碑が目立つ。[文献51] 永山の石塔群は，観音堂周辺に板碑や宝塔などが10数基ある。「天正二年(1574)」の宝塔と「明暦三年 (1657)，法印勢真逮修」の供養塔や「當寺開発・永禄四年(1561)」と刻され，室町時代にこの地に寺院開発があったことを示す板碑もある。[文献51]

また，船引字園田にある「寛政十一己年(1799)」銘の板碑には「石工　落合安次郎・浅田又右衛門・永友大和正・黒木龍四良」の名は見られるが，山内石塔群とはかなりの時期差がある。[文献16]

3．県南の石塔

清武町は旧飫肥藩領に所属することから飫肥との関係も深い。そこで，飫肥藩の城下町でも，ある日南市に所在する石塔群についてあげることにする。

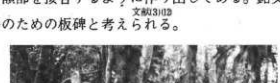
日南市に大迫寺址や歓楽寺址に石塔群がみられる。

大迫寺は日南市飫肥にあり真言宗の寺であった。島津氏が飫肥を領していた頃は隆盛をきわめたが，伊東氏が飫肥藩主となってからは衰微し，明治の初め廃寺となった。その寺址の石塔群は県の有形文化財に指定されており，「永仁三年(1295)」「正平廿五年(1370)」の板碑や，「文保元年(1317)」「大永八年(1528)」「天文廿四年(1555)」の五輪塔があり中世の墓地と推定される。「文保元年」の五輪塔は凝灰岩質で総高170cmを計る大型のものである。火輪は高さ47cm，幅78cmで反りは少ない。水輪背面に「文保元𠀋」「本通明尊」の刻名があり，水輪，火輪の四面には五大の梵字を刻む。空風輪・地輪には梵字はなく後補の可能性も考えられる。文献3)(1)(2)

大迫寺五輪塔(1)

大迫寺五輪塔(2)

歓楽寺は日南市西弁分にあり，その寺址墓地には中世石塔百数十基が数段に並ぶ，そのうち完全な五輪塔は2基ある。「嘉暦三年(1328)」銘の五輪塔は地上高132cmを計る大型のもので水輪，火輪は厚手で火輪の反りは少ない。水輪に「嘉暦三年八月十二日，比丘尼蓮性」の銘を持つ。石質は凝灰岩質である。「元徳二年（1330)」銘の五輪塔は地上高96cmでやや小型のものである。屋根流れの反りが少ない。銘は水輪にあり「法名大夫□□，元徳二季庚申十一月十四日，勝犬靏丸」と記されている。また，「正慶二年（1333)」の板碑は額部に内部施設を持つと考えられる。この内部施設は，20cm×14cmの長方形で深さ13cmの内部奉籠のための穴を穿ち，口辺に溝を刻み頭部と額部を接合するように作り出してある。銘文には死没のことを記していることから，納骨と供養のための板碑と考えられる。文献3)(2)



歓楽寺五輪塔(1)

歓楽寺五輪塔(2)

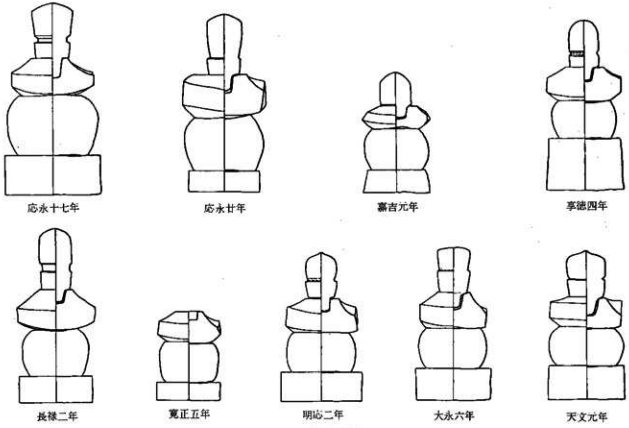
その他，日南市では，鵜戸伊比井の本源寺址およびその墓地には，「明応九年（1398)」の五輪塔をはじめに「永正十年(1513)」から「慶長三年(1598)」にかけての板碑が十数基見られ，室町後期から安土桃山期にかけての石塔群がある。文献1)

4．宮崎市周辺の石塔

清武町の隣接する宮崎市周辺には，宮崎市の生目小村薬師堂，本勝寺，王楽寺，佐土原町大光寺，西都市大安寺にそれぞれ代表的な石塔がみられる。

山内石塔群から北へ約10kmの宮崎市生目小村薬師堂には，県内最古と言われる五輪塔がある。安山岩製で高さ137cmを計る。水輪の四方には円相の中に蓮台を描き，そのうえに何れも阿字を彫り「寛喜四年壬辰（1232）十一月四日」等の銘がある。「翁公塔」とも彫ってあるため翁公塔と呼ばれている。地輪は，火・水輪に比べ大きく後補の可能性がある。火輪は下面の反りはなく屋根流れの反りが少しみられる。風輪は四角で空輪は円頭に近い圭頭をなすが，少し小型で後補も考えられる。[文献⑫]

小村薬師堂と同じ生目に日蓮宗の本勝寺がある。東向きの山の斜面を利用して千基近くの五輪塔と板碑が列をなしている。石塔列は最上段の稜線上に板碑を中心に70～80基が配列されており「永享」・「大永」・「享禄」の五輪塔がある。そこから裾部へ7～8段の配列があり，五輪塔と板碑がほぼ交互に見られる。上段に「天正」・「元禄」の板碑，「永享」・「文明」・「永正」・「永禄」の五輪塔が，下段に「天正」の板碑と「永正」の五輪塔がみられる。裾部の平坦地には道をへだてて14～15列の配列があり，傾斜地側に「明応二年(1493)」「応永十七年(1410)」，中頃に「天文元年(1532)」「嘉吉元年（1441）」「応永廿年（1413）」「寛正五年（1464）」「享徳四年（1455）」，前列に「大永六年（1526）」「長禄二年（1458）」の五輪塔が並んでいる。五輪塔の紀年銘は全て水輪に刻まれている。[(2)]



第27図　本勝寺五輪塔実測図　(1/20)

本勝寺五輪塔（嘉吉元年）

同　（応永廿年）

同　（天文元年）

宮崎市生目の北，瓜生野に王楽寺石塔群がある。五輪塔８基の中には「大永二年(1522)」の紀年銘の五輪塔がみられる。地上高は他の五輪塔と同様に 150 cm程で，地輪，水輪，火輪の割には大きな空風輪が特徴的である。各輪に正規の五大種子を刻み，水輪に「檀大像都法師□□大永二年　廿九日」の銘がある。[文献(2)12]

伊東氏の一族田島氏の開基による大光寺には，無銘の砂岩質の五輪塔４基がみられるが塔の形態から新旧がうかがわれる。南北朝前期と考えられる五輪塔は火輪の下面は水平で反りの少ないタイプである。これに次ぐタイプが水輪の高さと幅の比率が小さく，火輪の下面にふくらみをもちながら両端になる五輪塔２基。新しいタイプのものが火輪の四角がかなり強い反りをみせる五輪塔である。[文献(2)18]

大安寺には前述の伊東尹祐の墓と伝えられる隅切五輪塔と二基の伊東塔がみられる。伊東塔のうち祐允塔は高さ 176 cmで相輪部の特徴として露盤各面に二弧式渦巻文様を線刻し，蓮弁彫出の請花の上に七輪を立て輪状の花台の上に宝珠を置く。義益塔も祐允塔とほぼ同じ形態だが，露盤正面に雲形格狭間を配している。この塔身には「永禄十二年(1569)」の銘があり，隅切五輪塔は水輪の四隅を切り落し，四方を円形の平面とする隅切水輪である。また，地輪は土面の縁を面取りし，その上に二段階を設けている。[文献(2)29]

義門寺墓地内にある宝篋印塔は無銘であるが様式等から南北朝前期のものと言われている基礎は方郭の中に格狭間を彫り，その中に正背面には蓮肉を抱く蓮台，両側面には花瓶に荷葉を浮彫にする。上面には塔身を請けて複弁八葉を刻出す。笠は下二段上六段，隅飾は三弧式で立ちは垂直に近い，相輪は露盤がなく，伏鉢請花を順逆の臼形に重ねる。九輪は上細りに刻み，現在八輪を残す。[文献(2)12)18]

5．県北の石塔

県北地区には，延岡市，東郷町，日向市等に石塔が多くみられる。

日向市日知屋の本善寺墓地には65基の石塔が群をなしている。石塔は伊東氏の墓で，江良にあったものを昭和に入って移転したものでその際，五輪塔については混同が行なわれたらしい。そのうち，「宝徳三年（1451）」と「永正三年（1506）」と水輪に銘のある二基は日蓮宗系の墓塔として空風火水地の各輪に題目の「妙法蓮華経」の五文字が配してあり，水輪には「華」の文字が他の文字より大きく表現されている。凝灰岩で高さはそれぞれ93.5cmと113.0cm。五輪塔は「宝徳三年」から「天文四年（1535）」，板碑は「文亀三年(1501)」から「天正二十年(1592)」のものがみられる。[文献12]

同じ日向市財光寺の定善寺には，五輪塔，板碑数10基がみられる。「永正六年(1509)」銘の五輪塔は，総高129cmで空風輪は後補と思われる。火輪に「蓮」，水輪に「華」と紀年銘地輪に「経」の銘がみられる。他に「応永二年(1395)」と「大永三年(1523)」銘のものがある。板碑は「大永六年(1526)」から「慶長十六年(1611)」銘のものが20数基みられる。[文献12]

同じ日知屋の蘇我の森には本善寺でみられる五輪塔と同系のものがみられる。紀年銘にないが室町中期以後のものと思われる。伝蘇我兄弟２墓の一例である。[文献12]

延岡市貝の畑町には戦国時代と思われる五輪塔235基，自然石板碑121基が群をなしている。五輪塔は凝灰岩製で最大のものでも高さ125cmと大型のものはあまりない。「享禄五年(1532)」から「慶長十五年(1610)」の銘を持つ。「永禄十天□三月吉日□」(1567) 銘の五輪塔には「藤原氏秀宗□禄定門」の銘もみられる。[文献03]

延岡市三須町法明寺境内，東臼杵郡東郷町山陰の成願寺にそれぞれ宝篋印塔が数基ずつみられる。成願寺の宝篋印塔は「天文」～「慶長」の銘があるが他地域の物と比べ変形を呈している。法明寺境内所在のものは，基礎は上二段の全階式で笠も下二段，上三段のものである。高さも全高91.5cmと小型である。「永禄六年(1563)」の銘あり。他に「永禄十二年(1569)」，「天正六年(1578)」のものもある。[文献12][文献12][19]

6．その他の石塔

都城地区には石塔群はあまり確認されてないが，都城市梅北町西生寺跡に鎌倉中後期の五輪塔や板碑等がみられる。同安久町の正應寺跡の墓地跡には中世期の五輪塔がみられる。納骨孔を持つ石塔が多い。「天正七年(1579)」銘の板碑もみられる。[文献13][文献10]

最後に，山内石塔群も含まれる学園都市遺跡内の宮崎市側でも板碑が何基か確認されているので合わせて紹介する。堂地東

堂地東石塔群

堂地東石塔群板碑

遺跡のは，二尊レリース板碑で，二尊の右に「大正十七□□□(1589)」左に「七月十日孝子敬白」の銘がみられる。同じく堂地東遺跡近くの民家には，「□禄二年己九月」銘の板碑がみられるが，紀年銘はおそらく「享禄二年(1529)」か「文禄二年(1559)」のいづれかであろう。さらに小山尻西遺跡には3基の板碑がみられるが，そのうちの1基，「大永六年丙戌八月廿八日(1526)」銘の板碑四面にわたって銘文がみられる。(13)

7．まとめ

以上見てきたように，県内に所在する石塔については，五輪塔が宮崎市生目の小村観音堂墓地の「寛喜四年(1232)」，板碑が日南市歓楽寺墓地の「正和四年(1315)」が現在確認されている中では最も古いタイプのものである。鎌倉中期にはじまる本県の石塔の分布は，初期の段階では数も少なく，日南市や宮崎市周辺の県南・県中央部を中心に分布がみられ，しだいに数的にも多くなり，分布も県北・県西部へとひろがりを見せる。応仁の乱後の室町時代後期，いわゆる戦国時代に入ってから急激に数が増し，安土桃山時代の天正年間（1573～59）から慶長年間（1596～1611）にかけてその数はピークとなる。その代表的なものでは天正13年（1585）銘の宗隣原供養塔や大永年間(1521～28)からみられる伊東塔が県南から清武町，西都市の県中央部にかけて分布する。

現在，確認されている石塔からは，旧飫肥藩の日南市や清武町，旧佐土原藩の佐土原町，西都市，天領の日向市，国富町，それに宮崎市の県南から県中央部にかけて多くみられ，旧延岡藩の延岡市や東・西臼杵郡(14)にもいくらか分布するが，明治初期の排仏毀釈運動の激しかった旧薩摩藩都城領の都城市周辺では数的にかなりおちてくる。おそらく排仏毀釈との関係が考えられるであろう。しかし，近年徐々に市町村や民間の研究会での調査研究が進んできており，分布が少しずつ塗りかえられてきており，今後の研究に期待したい。また五輪塔については，後世での移築や，補追が目立ち，紀年銘を持つ五輪塔についても組み合わせのおかしいものもあり県内の五輪塔の形態を考えるうえで考慮すべき点であろう。

註

(1) 「日向ノ金石文」の中で瀬ノ口伝九郎氏が「宝塔ノ式ニ合スルモノハ・二ヲ数フルノミデアリマスガ，基礎ノ上輪部ト首部ノ代リ二方柱ヲ置キ其上方ハ笠相輪二終ルモノガ大永頃ニハジマリ下ハ江戸時代ニ及ンデキマスガ，厳密ニイヘバ宝塔デハナイガ宝塔ノ簡略化サレタモノデアリマセウ是等ノ変形宝塔ハ伊東氏及ビ其ノ一族ノ墓碑，供養碑ニ多イ所カラ伊東塔ト呼ブコトニシマシタ」として以来，この種の石塔を伊東塔と称している。

(2) 山内石塔群調査の一貫として本勝寺の簡単な分布調査を行った。

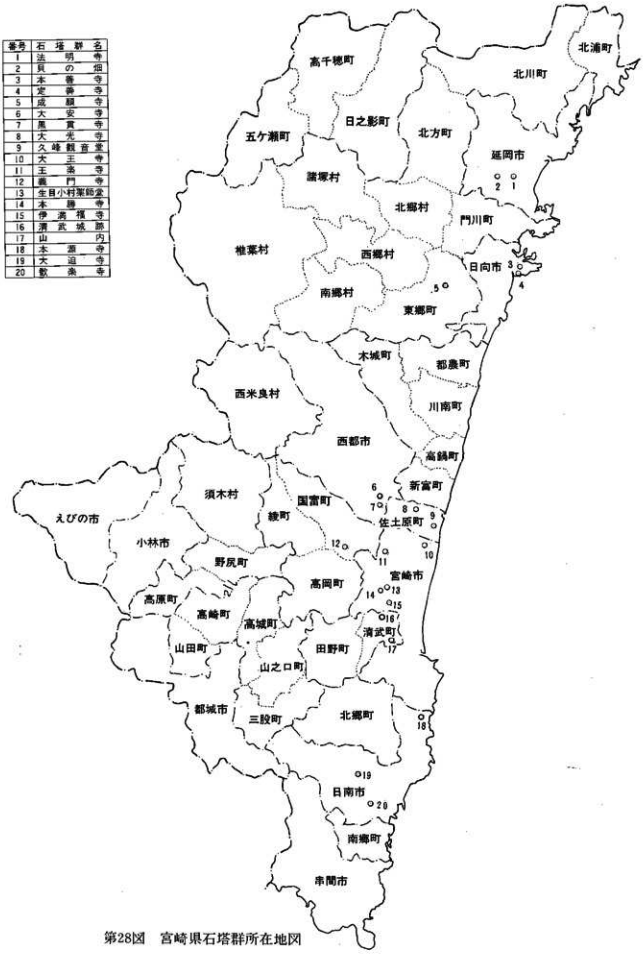
(3) 現在調査中の学園都市遺跡内に所在する石塔では，堂地東遺跡で石塔群が検出された。

(4) 高千穂教育委員会では現在町内の石塔分布の調査を実施中であり，約50基の石塔を確認している。日之影町教育委員会は文献(2)で11基の石塔群を報告している。

参考文献

(1)「史蹟名勝天然紀念物調査報告　第十二輯，日向ノ金石文」瀬之口伝九郎，宮崎県（昭和17年２月）
(2)「県中地区の美術工芸品，郷土文化財基礎調査報告　第２集」宮崎県教育委員会（昭和40年３月）
(3)「県南地区の美術工芸品，郷土文化財基礎調査報告　第３集」宮崎県教育委員会（昭和40年10月）
(4)「宮崎県郷土文化財総合調査報告書」宮崎県教育委員会（昭和41年３月）
(5)「清武町の文化財第１集　石造物今泉編」清武町文化財保護審議委員会（昭和53年３月）
(6)「清武町の文化財第２集　石造物船引編」清武町文化財保護審議委員会（昭和54年３月）
(7)「清武町の文化財第３集　石造物加納編　清武町文化財保護審議委員会（昭和55年３月）
(8)「清武町の文化財第４集　石造物木原編　清武町文化財保護審議委員会（昭和56年３月）
(9)「清武町の文化財　木造物編」清武町文化財保護審議委員会（昭和57年11月）
(10)「延岡の歴史と文化財」延岡市教育委員会（昭和54年５月）
(11)「宮崎県の文化財」宮崎県教育委員会（昭和57年９月）
(12)「九州の石塔」下巻，多田隈豊秋（昭和57年）
(13)「西生寺跡古石塔分布調査報告書」南九州文化研究会（昭和57年）
(14)「正應寺遺跡及古石塔所在調査書」都城史談会（昭和57年）
(15)「宮崎県下の石造新資料」甲斐常興「史迹と美術」490号　史迹美術同攷会（昭和53年）
(16)「国富町文化財調査資料第１集」国富町教育委員会（昭和56年３月）
(17)「国富町文化財調査資料第２集」国富町教育委員会（昭和57年３月）
(18)「佐土原町史」佐土原町（昭和57年２月）
(19)「東郷町史」東郷町（昭和30年３月）
(20)「西都市の文化財」西都市教育委員会（昭和49年９月）
(21)「日之影町の歴史と文化財」日之影町教育委員会（昭和58年１月）

番号	石塔群名
1	法明寺
2	貝の畑
3	本庵寺
4	定善寺
5	成願寺
6	大安寺
7	星買寺
8	大光寺
9	久峰観音堂
10	大王寺
11	王洛寺
12	星一門寺
13	生目小村墓跡群
14	本願寺
15	伊満福寺
16	清武城跡
17	山内
18	太源寺
19	大迫寺
20	数泉寺



第28図　宮崎県石塔群所在地図

番号	所在地		種類	紀年名	西暦	文献
1	海織禅寺址	宮崎市吉村町一の宮	五輪塔	大永五年二月二日	1525	(1)
2	姜墓地	宮崎市	板碑	天正五年九月廿七日	1587	(1)
3	景清廟境内	宮崎市下北方町	〃	永禄十三年八月十八日	1570	(1)
4	伊満稲寺墓地	宮崎市大坪	〃	天正七年十二月吉日	1579	(1)
5	〃	〃	〃	天正九年八月廿九日	1581	(1)
6	〃	〃	〃	天正十年七月	1582	(1)
7	〃	〃	〃	天正十二年七月	1584	(1)
8	長久寺址	〃	〃	天正十二年七月十二日	1584	(1)
9	〃	〃	〃	天正十六年十月□日	1588	(1)
10	長久寺墓地	〃	〃	慶長六年五月廿四日	1601	(1)
11	奈吉神社境内	宮崎市池内	〃	天正二年□月十一月二日	1574	(1)
12	満願寺境内	〃	〃	天正三年八月彼岸中日	1575	(1)
13	明星寺墓地	宮崎市中埜	〃	慶長十一年二月廿二日	1606	(1)
14	正光寺農林中	宮崎市浮ノ城	〃	嘉暦四年二月中旬	1329	(1)
15	春日神社境内	宮崎市赤江	〃	大永四年十月八日	1524	(1)
16	〃	〃	五輪塔	天正十年	1582	(1)
17	海鳥塚	〃	〃	天正十五年□秋十二月	1587	(1)
18	寶泉寺墓地	〃	板碑	嘉暦三年九月四日	1328	(1)
19	妙法寺	宮崎市城ヶ崎	〃	嘉暦三年	1328	(1)
20	長友奥吉宅地内	宮崎市田吉	〃	慶長十四年十一月十二日	1609	(1)
21	源頼堂境内	宮崎市赤江高畑	変形五輪塔	明應五年小春吉日	1496	(1)
22	〃	〃	板碑	元亀三年八月十二日	1572	(1)
23	田元神社境内	宮崎市本郷南方	〃	慶長十八年十月十二日	1613	(1)
24	長島寺	宮崎市都司分字田	〃	正和三年	1314	(1)
25	加護神社境内	宮崎市国富	五輪塔	天正十四年八月廿三日	1586	(1)
26	〃	〃	板碑	永正十一年八月廿三日	1514	(1)
27	王楽寺境内	宮崎市瓜生野	五輪塔	大永二年	1522	(1)(2)
28	〃	〃	〃	大文十年	1541	(1)(2)(3)
29	〃	〃	変形五輪塔	大永八年四月七日	1523	(1)
30	〃	〃	板碑	天正六年五月廿一日	1578	(1)
31	王楽寺門前	〃	〃	永禄十一年七月吉日	1568	(1)
32	日高卯之吉方	宮崎市瓜生野竹鎌	〃	慶長五年二月廿七日	1600	(1)
33	本勝寺	宮崎市生目	五輪塔	応永十三年	1406	
34	〃	〃	〃	応永二十年	1413	
35	〃	〃	〃	永享二年	1430	
36	〃	〃	〃	永享十二年	1440	
37	〃	〃	〃	嘉吉元年	1441	
38	〃	〃	〃	享徳四年	1455	
39	〃	〃	〃	長禄二年	1458	
40	〃	〃	〃	寛正五年	1467	
41	〃	〃	〃	明応二年又は四年	1493又は1496	
42	〃	〃	〃	永正十四年	1517	
43	〃	〃	〃	大永六年	1526	
44	〃	〃	〃	天文元年	1532	
45	〃	〃	板碑	応永三十三年	1426	
46	〃	〃	〃	応永三十三年	〃	
47	〃	〃	〃	永正二年	1505	
48	〃	〃	〃	大正五年	1577	
49	〃	〃	〃	天正六年	1578	
50	〃	〃	〃	天正十三年	1585	
51	〃	〃	〃	天正十四年	1586	
52	〃	〃	〃	元禄七年	1694	
53	宮崎学園都市宮地東遺跡	宮崎市熊野	〃	天正十七□□□□	1589	
54	〃	〃	〃	□禄二年[illegible]九月	1559又は1592	
55	宮崎学園都市小山尻西遺跡	清武町木原	〃	大永六年[illegible]八月廿八日	1526	
56	観音堂墓地	宮崎市生目小村	五輪塔	寛喜四年十一月四日	1232	(1)(3)
57	妙興寺墓地	宮崎市生目浮田	〃	永享二年十一月六日	1430	(1)
58	〃	〃	板碑	天文七年	1538	(1)

表52　県内石塔一覧表 (1)

番号	所在地		種類	紀年名	西暦	文献
59	妙圓寺址	宮崎市生目浮田	板碑	永禄五年	1562	(1)
60	町原敷	宮崎市下小松	五輪塔	天文四年二月四日	1535	(1)
61	長友藤雄方	宮崎市生目	〃	天文二十三年二月十六日	1554	(1)
62	中福良墓地	宮崎市福江	板碑	天正十年四月十二日	1582	(1)
63	〃	〃	〃	天正十一年七月吉日	1583	(1)
64		宮崎市跡江	〃	明徳元年	1390	(1)
65	大王寺境内	宮崎市住吉	〃	永禄十一年七月吉日	1568	(1)
66	〃	〃	〃	永禄十一年七月吉日	〃	(1)
67	〃	〃	〃	永禄十二年七月吉祥日	1569	(1)
68	〃	〃	〃	永禄十二年今月今日	〃	(1)
69	〃	〃	〃	永禄十三年六月吉祥日	1570	(1)
70	新名爪神社境外	〃	〃	天正六年七月廿日	1578	(1)
71	天正寺墓地	宮崎市村角	〃	天正二十年四月廿日	1592	(1)
72	金崎神社裏山	宮崎市倉岡	〃	慶長十九年十一月廿七日	1614	(1)
73	正應寺址	都城市中郷安久	〃	天正七年十月二日	1579	(1)
74	竹下半十郎宅	都城市志和池野々美	〃	大永四年八月八日	1524	(1)
75	常楽寺境内	延岡市南方	五輪塔	天文十六年八月廿一日	1547	(1)
76	〃	〃	〃	天文十七年八月廿一日	1548	(1)
77	法明寺境内	延岡市三須	宝篋印塔	永禄六年□月廿八日	1563	(1)(2)
78	〃	〃	〃	永禄十二年閏五月二日	1569	(1)(2)
79	〃	〃	〃	天正六年□月十四日	1578	(1)(2)
80	其の畑石塔群	延岡市其の畑町	五輪塔	享禄五年[享]三月廿六日	1532	(1)
81	〃	〃	〃	天文廿年[干]九月十六日	1551	(1)
82	〃	〃	〃	永禄十年三月吉日	1567	(1)
83	〃	〃	〃	永禄十三天[正]三月吉日	1570	(1)
84	〃	〃	〃	天正十五天[干]五月廿五日	1587	(1)
85	〃	〃	〃	慶長十五年[乙酉]	1610	(1)
86	大師堂光福寺	延岡市南方吉野	板碑	永正十五年	1518	(1)
87	大通寺址	日南市鵜肥吉野方	五輪塔	文保元年	1317	(1)(3)(12)
88	〃	〃	〃	永正二年	1505	(1)
89	〃	〃	〃	永正七年十月	1510	(1)
90	〃	〃	〃	大永八年閏九月廿六日	1528	(1)
91	〃	〃	板碑	正平二十五年四月八日	1370	(1)(3)
92	〃	〃	〃	天正五年三月廿一日	1577	(1)
93	〃	〃	〃	永仁参季	1606	(1)(3)
94	親恩寺墓地	日南市鵜肥	〃	天正二年九月十八日	1574	(1)
95	〃	〃	〃	天正四年十月一日	1576	(1)
96	〃	〃	〃	天正五年六月十九日	1577	(1)
97	〃	〃	〃	天正十三年七月十七日	1585	(1)
98	斉藤氏山林内	日南市鵜肥吉野方	〃	貞和四年二月八日	1348	(1)
99	鼓薬寺墓地	日南市吾田上限谷	五輪塔	寛暦三年八月十二日	1328	(1)(2)
100	〃	〃	〃	元徳二年十一月	1330	(1)(3)(12)
101	〃	〃	板碑	正和四年二月四日	1315	(1)(3)
102	〃	〃	〃	正慶二年二月十一日	1333	(1)(3)
103	耳田墓地	日南市吾田	〃	永禄十一年今月今日	1568	(1)
104	建法寺址	日南市油津	五輪塔	天正十一年六月十七日	1583	(1)
105	〃	〃	〃	慶長二年十一月十九日	1597	(1)
106	鵜戸神宮境内	日南市鵜戸	〃	大永六年三月廿九日	1526	(1)
107	宮ノ浦墓地	〃	板碑	慶長二年八月廿八日	1597	(1)
108	天神ノ原	日南市鵜戸伊比井	〃	貞和五年	1349	(1)
109	本源寺址墓地	日南市鵜戸伊比井	五輪塔	明應九年八月彼岸	1500	(1)
110	本源寺址	〃	板碑	永正十年	1513	(1)
111	〃	〃	〃	永正十六年八月	1519	(1)
112	〃	〃	〃	大永五年二月彼岸	1525	(1)
113	〃	〃	〃	大永五年二月彼岸	〃	(1)
114	〃	〃	〃	大永八年	1528	(1)
115	〃	〃	〃	永禄十年十月十三日	1567	(1)

表53　県内石塔一覧表　(2)

番号	所在地		種類	紀年名	西暦	文献
116	本源寺址	日南市鵜戸伊比井	板碑	天正四年五月廿八日	1576	(1)
117	〃	〃	〃	天正九年	1577	(1)
118	〃	〃	〃	天正七年七月十五日	1579	(1)
119	〃	〃	〃	天正九年	1581	(1)
120	〃	〃	〃	天正十□七月十四日	1582(?)	(1)
121	〃	〃	〃	天正十年七月□□	1582	(1)
122	〃	〃	〃	天正十一年七月□十二日	1583	(1)
123	〃	〃	〃	文禄三年	1594	(1)
124	〃	〃	〃	文禄五年七月□日	1596	(1)
125	〃	〃	〃	慶長三年	1598	(1)
126		日南市板敷中の尾	〃	天文十八年	1549	(1)(12)
127	中ノ尾供養碑	日南市殿所中ノ尾	〃	弘治二年三月二十日	1556	(1)(11)
128	板敷寺墓地	串間市北方	五輪塔	天正六年八月彼岸日	1578	(1)
129	伊東塚	小林市	板碑	元亀三年五月四日	1572	(1)(11)
130	〃	〃	〃	元亀三年五月四日	〃	(1)(11)
131	〃	〃	〃	元亀三年五月四日	〃	(1)(11)
132	〃	〃	〃	元亀三年五月四日	〃	(1)(11)
133	〃	〃	〃	元亀三年九月四日	〃	(1)(11)
134	〃	〃	〃	元亀三年五月四日	〃	(1)(11)
135	茶臼ヶ丘	〃	〃	元亀三年五月四日	〃	(1)(11)
136	旧岩瀬橋畔	小林市境水流迫	〃	永仁元年	1293	(1)(12)
137	本善寺墓地	日向市日知屋	五輪塔	永和五年二月廿五日	1379	(1)
138	〃	〃	〃	宝徳二年十一月二日	1450	(1)(12)
139	〃	〃	〃	長享二年六月十一日	1488	(1)
140	〃	〃	〃	延徳三年	1491	(1)
141	〃	〃	〃	永正元年三月廿二日	1504	(1)(12)
142	〃	〃	〃	永正十二年	1515	(1)
143	〃	〃	〃	大永二年	1522	(1)
144	〃	〃	〃	天文四年八月彼岸中日	1535	(1)
145	〃	〃	板碑	文亀三年二月二十□日	1501	(1)
146	〃	〃	〃	大永七年三月十四日	1527	(1)
147	〃	〃	〃	享禄三年二月十日	1530	(1)
148	〃	〃	〃	享禄四年八月廿五日	1531	(1)
149	〃	〃	〃	享禄四年八月廿九日	〃	(1)
150	〃	〃	〃	天文二年彼岸中日	1533	(1)
151	〃	〃	〃	天文二年	〃	(1)
152	〃	〃	〃	永禄元年八月廿九日	1558	(1)
153	〃	〃	〃	永禄十年	1567	(1)
154	〃	〃	〃	永禄十一年八月廿一日	1568	(1)
155	〃	〃	〃	元亀三年二月八日	1572	(1)
156	〃	〃	〃	元亀三年八月十二日	〃	(1)
157	〃	〃	〃	天正十一年十一月廿四日	1583	(1)
158	〃	〃	〃	天正十三年七月	1585	(1)
159	〃	〃	〃	天正十六年八月	1588	(1)
160	〃	〃	〃	天正十九年	1591	(1)
161	〃	〃	〃	天正二十年二月十三日	1592	(1)
162	蘇我の森	〃	五輪塔	不明(室町時代)		(12)
163	本善寺境内	日向市竹ノ内	板碑	文禄元年二月	1592	(1)
164	〃	〃	〃	文禄元年二月	1592	(1)
165	〃	〃	〃	慶長五年	1600	(1)
166	定善寺墓地	日向市財光寺	五輪塔	應永二年	1395	(1)
167	〃	〃	〃	永正六年六月三日	1509	(1)
168	〃	〃	〃	大永三年七月一日	1523	(1)
169	〃	〃	板碑	天正十六年十月	1588	(1)
170	〃	〃	〃	天正五年五月廿四日	1577	(1)
171	〃	〃	〃	永正十一年九月	1514	(1)
172	〃	〃	〃	永正十二年七月	1515	(1)
173	〃	〃	〃	永正十二年八月	〃	(1)
174	〃	〃	〃	永正十四年	1517	(1)

表54　県内石塔一覧表 (3)

番号	所在地		種類	紀年名	西暦	文献
175	定善寺墓地	日向市財光寺	板碑	大永六年二月十二日	1522	(1)
176	〃	〃	〃	享禄三年二月	1530	(1)
177	〃	〃	〃	天文十年六月	1541	(1)
178	〃	〃	〃	天文□一年三月二日	1542	(1)
179	〃	〃	〃	天文十 ・年	〃	(1)
180	〃	〃	〃	永禄六年七月廿五日	1563	(1)
181	〃	〃	〃	永禄十一年九月廿九日	1568	(1)
182	〃	〃	〃	永禄十一年九月廿九日	〃	(1)
183	〃	〃	〃	永禄十二年二月十三日	1569	(1)
184	〃	〃	〃	元亀三年二月廿三日	1572	(1)
185	〃	〃	〃	元亀三年三月七日	〃	(1)
186	〃	〃	〃	元亀三年十月	〃	(1)
187	〃	〃	〃	元亀三年□月□日	〃	(1)
188	〃	〃	〃	慶長十六年	1611	(1)
189		日向市美々津鞘鹿	〃	弘治二□十一□□□	1556	(1)
190		日向市美々津高松	〃	天正三年十一月十七日	1575	(1)
191	黒門寺墓地	西都市都於郡	五輪塔	天文十年	1541	(1)
192	〃	〃	〃	慶長二年八月十七日	1597	(1)
193	大安寺墓地	西都市都於郡	宝篋印塔	元亀六年六月二日	1575	(1)
194	長谷観音堂境内	西都市三納	板碑	天文十四年二月彼岸	1545	(1)
195	〃	〃	〃	天正二年八月吉日	1575	(1)
196	〃	〃	〃	天正二年八月吉日	〃	(1)
197	〃	〃	〃	天正二年八月	〃	(1)
198	原口墓地	西都市三納	〃	永禄十二年十月廿五日	1569	(1)
199	時宗佛堂墓地	西都市三納	〃	慶長二年二月彼岸	1597	(1)
200	〃	〃	〃	慶長二年二月彼岸	〃	(1)
201	宗光寺境内	西都市妻有松	〃	弘治三年二月十日	1557	(1)
202	役場	えびの市飯野	〃	天正十年十二月廿三日	1582	(1)
203	宗江院墓地	〃	宝塔	文禄二年元月廿八日	1593	(1)
204	〃	〃	〃	天正十六年三月廿三日	1588	(1)
205	彦山寺址	えびの市加久藤東川北	板碑	正中二年	1325	(1)(3)(10)
206	観音堂	宮崎郡清武町木原黒坂	五輪塔	弘安八年四月廿六日	1285	(1)(2)
207	丸月の右塔群	清武町今泉	板碑	慶安元年$_{甲辰}$五月二十一日	1685	(5)
208	〃	〃	〃	天和二年二月二十 ・日	1682	(5)
209	〃	〃	〃	明和二年$_{乙酉}$十二月十九日	1755	(5)
210	円目寺	清武町今泉	〃	天正十七年三月	1589	(5)
211	永山の石塔群	清武町今泉	〃	明暦九年乙未	1655	(5)
212	〃	〃	宝塔	天正二年$_{甲戌}$六月十二日	1574	(5)
213	〃	〃	〃	明暦三年$_{乙酉}$四月一日	1657	(5)
214	〃	〃	板碑	永禄四年	1561	(5)
215	船引神社境内	清武町船引	〃	文禄三年十一月二日	1594	(1)(6)
216	船引観音様境内	清武町船引吾妻田	〃	元和八年十月吉日	1622	(6)
217	〃	〃	〃	明暦三年$_{丁酉}$十月二十四日	1657	(6)
218	〃	〃	〃	延宝二年寅霜月	1674	(6)
219	〃	〃	〃	元禄十六年	1703	(6)
220		清武町船引園田	〃	寛政十一己卯年未之月日	1799	(6)
221		清武町船引正手	〃	大正六年	1578	(7)
222	内山寺	清武町船引滝屋	〃	慶長三年	1598	(7)
223	〃	〃	〃	寛文二年壬人三月十八日	1662	(7)
224	〃	〃	〃	宝永元年申天十一月二十二日	1704	(7)
225	〃	〃	〃	宝永二年酉年八月二十三日	1705	(7)
226	伊東氏倫墓南側	清武町下中野	〃	元和$_{乙卯}$十二月廿日	1615	(7)
227	〃	〃	〃	寛文十二年$_{壬子}$仲春六日	1672	(7)
228	蓮徳寺墓地	清武町下中野	伊東塔	天保三年$_{壬辰}$上千十二月十四日	1833	(7)
229	〃	〃	板碑	享保三年$_{戊}$十二月十八日	1718	(7)
230	〃	〃	〃	明和九$_{壬辰}$上千十二月廿日	1772	(7)

表55　県内石塔一覧表　(4)

番号	所在地	種類	紀年名	西暦	文献
231	宮崎郡清武町上中野実盛	板碑	宏治六年七月二十六日	1859	(7)
232	清武城址	清武町上加納	五輪塔	文禄五年二月吉祥日	1596	(7)
233	〃	〃	板碑	大永四年七月十三日	1524	(7)
234	〃	〃	〃	大永四年八月□日	1524	(7)
235	〃	〃	〃	永禄五年	1562	(7)
236	〃	〃	〃	天正二年十月廿四日	1574	(1)(7)
237	〃	〃	〃	文禄二年二月十五日	1593	(1)(7)
238	〃	〃	〃	文禄二年八月七日	1593	(1)(7)
239	〃	〃	〃	文禄二年九月八日	1593	(1)(7)
240	〃	〃	〃	享保十七年壬子六初年吉祥日	1732	(7)
241	〃	〃	〃	明和壬申天九月廿四日	1772	(7)
242	清武城址墓地	〃	〃	天正十五年四月廿・日	1587	(1)(7)
243	森目神社	清武町上加納	〃	不明（室町時代）		(7)
244	中山寺跡	清武町上加納	〃	安永二己天九月八日	1773	(7)
245	石黒墓地（中山寺西）	清武町上加納	〃	寛永二年	1626	(7)
246	〃	〃	〃	延宝二年	1674	(7)
247	〃	〃	〃	享保十二年	1727	(7)
248	〃	〃	〃	享保十七年	1732	(7)
249	〃	〃	〃	元文元年	1736	(7)
250	〃	〃	〃	宝暦十二年	1762	(7)
251	〃	〃	〃	安永五年	1776	(7)
252	〃	〃	〃	天明三年	1783	(7)
253	〃	〃	〃	天保六年	1835	(7)
254	〃	〃	〃	天保十三年	1842	(7)
255	〃	〃	〃	宝暦十二年壬午六月十九日	1762	(7)
256	〃	〃	〃	元文元年辛巳	1736	(7)
257	〃	〃	宝塔	寛永三年丙寅九月十廿	1626	(7)
258	伊東墓地	清武町上加納	板碑	大永四年甲申八月□日	1524	(7)
259	〃	〃	〃	永禄五年壬申九月十八廿	1562	(7)
260	〃	〃	〃	天正十五年四月二十一日	1587	(7)
261	〃	〃	変形板碑	千時文禄二年壬辰八月初七	1593	(7)
262	〃	〃	伊東塔	大永四甲申歳六月八日	1524	(1)(2)(7)
263	〃	〃	〃	天文五丙申歳六月八日	1536	(1)(2)(7)
264	上加納坂墓地	清武町上加納	板碑	慶長七年壬寅十月十八日	1602	(1)(7)
265	上加納観音寺北西	清武町上加納	〃	天文四乙未八月十一廿	1535	(7)
266	〃	〃	〃	享保二戊申十月八廿	1718	(7)
267	〃	〃	〃	享保八癸卯正月二十六日	1723	(7)
268	〃	〃	〃	享保八年卯八月廿六日	1723	(7)
269	〃	〃	〃	元文四己申八月十一廿	1739	(7)
270	南光院	清武町上加納	〃	千時寛文元年八月時正敬白	1661	(7)
271	〃	〃	〃	寛文元年八月吉日	〃	(7)
272	坂墓地	清武町上加納	〃	慶長七年十月十八日	1602	(7)
273	明栄寺	清武町下加納	〃	宝暦十一年辛巳天十二月二十三日	1762	(7)
274	権野八幡神社境内	清武町下加納	〃	正徳四甲午年	1714	(7)
275		清武町南加納	〃	天正八年	1580	(7)
276		清武町南加納	〃	天正八年八月□□日	〃	(7)
277	シラス坂斤上	清武町南加納自坂	伊東塔	文禄二年六月十四日	1592	(1)(7)
278 |久峯観音堂境内	宮崎郡佐土原町広瀬	五輪塔	明應三年二月・三日	1494	(1)
279	〃	〃	〃	天文四年乙未八月彼岸中日	1535	(1)(3)
280	〃	〃	〃	天文十三年	1544	(1)(3)
281	〃	〃	板碑	天文四年十一月	1535	(1)
282	下那珂馬場	佐土原町広瀬下那珂	五輪塔	天正三年	1575	(1)(3)
283	塞神盆	佐土原町広瀬下那珂	板碑	天正十二年五月廿四日	1584	(1)
284	大光寺	佐土原町郷頭	九輪塔	不明（南北朝時代）		(2)
285	後田大師教会境内	佐土原町那珂	板碑	永禄八年十月□日	1565	(1)
286	平等寺跡	佐土原町那珂	五輪塔	永正二年八月廿八日	1505	(1)(3)
287	〃	〃	板碑	永正二年	1505	(1)(3)
288	〃	〃	〃	大正二年閏十月	1521	(1)(3)
289	伊倉墓地	佐土原町那珂	〃	永正十八年戊己六月廿四日	1574	(1)

表56　県内石塔一覧表　(5)

番号	所在地	種類	紀年名	西暦	文献
290	松巌寺境内	宮崎郡佐土原町	五輪塔	天文十七年十一月廿一日	(1)(16)
291	多福院	佐土原町	板碑	永禄八年乙丑八月十五日	(1)(16)
292	上浦上墓地	佐土原町	〃	天正九年辛巳十月十五日	(1)(16)
293	〃	〃	〃	天正十二年甲申三月廿四日	(1)
294	延命寺址	南那珂郡南郷町目井	〃	慶長九年八月如意日	(1)
295	〃	〃	〃	慶長九年八月如意日	〃 (1)
296	〃	〃	〃	慶長九年□□十三日	〃 (1)
297	春日神社前	北諸県郡高城町	〃	天正□二□月時正	1580年代 (1)
298	正宗寺境内	山田町	〃	文禄三年四月十五日	1594 (1)
299		西諸県郡高原町広原十文字	〃	文安三年弐月一日	1446 (1)
300		高原町後川内	〃	大文二年十一月吉日	1533 (1)
301	本永寺	東諸県郡高岡町	〃	應永八年	1401 (1)
302	義門寺墓地	国富町本庄	五輪塔	應永六年□月廿一日	1299 (1)(17)
303	〃	〃	〃	應永□六月六日	1394～1428 (1)(17)
304	地蔵塚	国富町本庄	板碑	天文十四年三月十四日	1546 (1)(17)
305	照時寺境内	国富町本庄嵐田	〃	大正十年十二月十三日	1582 (1)
306		国富町八代川上	〃	永禄十三年八月吉日	1570 (1)
307		国富町八代伊佐里	〃	天正七年八月彼岸	1579 (1)(17)
308	地蔵寺墓地内	国富町八代伊佐生	〃	慶長十三年二月彼岸	1608 (1)
309	〃	〃	〃	慶長十八年十月廿九日	1613 (1)
310	西光寺址	国富町木脇	〃	永禄十三年十月吉日	1570 (1)
311	〃	〃	〃	元亀四年十月廿日	1573 (1)
312	〃	〃	〃	天正十二年	1584 (1)
313	入野墓地	綾町	五輪塔	永正十八年十一月廿五日	1521 (1)
314	本蓮寺境内	児湯郡新富町新田	板碑	享禄五年七月十八日	1532 (1)
315		新富町新田柳瀬	〃	元亀三年二月□日	1572 (1)
316		西米良村村角大王	〃	大正二年六月二日	1574 (1)
317	比木墓地	木城町	〃	大正三年九月八日	1575 (1)
318	大師常境内	木城町権水小	〃	天正十四年十一月七日	1586 (1)
319	興福寺址	木城町高城	〃	慶長三年六月一日	1598 (1)
320		都農町	〃	永禄十二年八月六日	1569 (1)
321		都農町	〃	元亀二年四月廿六日	1571 (1)
322	北ノ内墓地	東臼杵郡門川町川内	〃	文明五年二月	1473 (1)
323	福寿寺址	門川町	〃	大永四年十一月八日	1524 (1)
324	〃	〃	〃	天正三年八月廿八日	1575 (1)
325	〃	〃	〃	天正五年九月吉日	1577 (1)
326	〃	〃	〃	大正五年九月吉日	〃 (1)
327	火切地蔵前通寺址	〃	五輪塔	天正三年二月彼岸日	1575 (1)
328	成願寺墓地	東郷町山陰	宝篋印塔	大文九年十一月十二日	1540 (1)(19)
329	〃	〃	〃	大文十九年七月廿二日	1550 (1)(19)
330	〃	〃	〃	天正三年十月九日	1575 (1)(12)(19)
331	〃	〃	板碑	大文十二年十月十日	1543 (1)(19)
332	〃	〃	〃	天文十二年十月十日	〃 (1)(19)
333	〃	〃	〃	慶長八年三月	1603 (1)(19)
334	成願寺境内	〃	宝篋印塔	永禄七年四月廿七日	1564 (1)(19)
335	〃	〃	〃	元亀二年四月三日	1571 (1)(19)
336	〃	〃	〃	慶長七年十一月廿日	1602 (1)(19)
337	成願寺址	〃	〃	天正三年三月九日	1575 (1)(12)(19)
338	六地蔵墓地	東郷町山陰	板碑	弘治三年九月廿日	1557 (1)(19)
339	〃	〃	〃	元亀二年	1571 (1)(19)
340	地蔵堂	東郷町山陰小野田	〃	慶長十一年九月二日	1606 (1)(19)
341	〃	〃	〃	慶長十一年十月五日	〃 (1)(19)
342	神門神社	南郷村	〃	應永八年二月十…日	1301 (1)
343	奥野神人田墓地	南郷村神門	〃	慶長八年二月十一日	1603 (1)
344	〃	〃	〃	慶長二年十月十六日	1597 (1)
345		北川町川坂	五輪塔	不明（室町時代）	(4)
346		西臼杵郡高千穂町押方片内	板碑	天文五年十月九日	1541 (12)
347		高千穂町中山	〃	不明（室町時代）	(12)

表57　県内石塔一覧表（6）

第Ⅴ章　石塔群の保存と移転について

1．はじめに

山内石塔群は，県内でもこれほど多くの群集した石塔群の列は少なく，非常に貴重な遺跡である。発掘当時から現地での保存が望まれたが，諸般の事情から山内石塔群の所在する清武町黒坂に移転，保存を行うことにした。

移転に際しては，風化の著るしい石塔を除き，単品も含めほとんどの五輪塔，板碑を黒坂に移した。移転後は当分覆屋等の施設はつくらず露天での保存になるため，板碑全部とセットの五輪塔に科学的な風化防止を行い強化した。また，破損状態の石塔も多く，それらは，樹脂系の接着剤で補強した。[1] 処理後は，板碑とセットとなる五輪塔を中心に配列した。

2．石塔の保存処理

我国では，石造物文化財の補修は昔から枘と硫黄を使う接着法などの伝統的な技法で行われてきたが，昭和36年に行なわれた国の重要文化財の長崎市の眼鏡橋の修復工事にエポキシ樹脂を使用して以来，各地で石仏や五輪塔の補修に科学的な処理が行なわれてきた。

石の劣化には，過負荷などによる外的応力や石の中の水分凍結によるき裂などの内的応力による劣化，風蝕や侵蝕による劣化がある。これらの石の劣化原因を除去するためには，屋内保存などで水分との分離ができる。科学的には，アクリル樹脂，ウレタン樹脂，エポキシ樹脂，シリコート樹脂を使い石の呼吸をとめずに石質強化を行うことができる。また，接着には，エポキシ系の樹脂が使われている。[2]

当石塔群の石塔は石材が凝灰岩で硬質のものがあるが，ほとんど風化しやすいもろい石質のものである。最も心配されるのは風蝕と侵蝕による劣化で，風化防止のための石質の強化処理が必要であり，過負荷による外的応力で折断された石塔には補強が必要である。[3]

石の補強のための接着作業は，石の重量を考慮しエポキシ系樹脂による接着と枘を使った強化の両方を使用した。エポキシ系樹脂の選定は，粘度，接着強度が高く，硬化時間の長い硬化剤のアラルダイトＡＷ106(主剤) を１に対し，アラルダイトＨＶ 953 Ｖ(硬化剤) １の割合で混合したものを使った。溶剤はアセトンである。使用の目安としては，接着面 400 ㎠に対し，30㎖の接着剤を使い，板碑13基，空風輪および相輪８基，火輪16基，水輪６基，地輪19基の計62基の石塔の接着を行った。また，接着剤だけによる強化では不安定な板碑や五輪塔のほとんどの強化に径８㎜，長さ７㎝～15㎝のステンレス棒を１～２本を補強用の枘とした。補強の作業手順は，①接合する石塔の接着面を十分に乾燥させ，きれいな状態の面にする。②石塔の接着両面に枘用の穿孔を行うための箇所を決める。③径９㎜の石工用ドリルを使いステンレス棒より多少大きめで長めの枘穴をあける。④ステンレス棒を穿孔した枘穴に入れ接着面をあわせ接合具合をみる。⑤接着剤アラルダイトＡＷ106(主剤) とアラルダイトＨＶ 953 Ｖ(硬化剤)を１：１の割合で混ぜあわせる。⑥一方の接合面に⑤の接着剤をヘラでよく塗りこみ，枘穴の中にも十分に流し込み，ステン

レス棒にも塗り，枘穴にステンレス棒をさし込む，⑦もう一方の接合面にも同様に接着剤を塗り両面を接着する。⑧接着後は接着剤が十分に硬化するまで縄などで石塔を固定し，12時間から15時間，乾燥させる。⑨接着面からはみ出した接着剤はアセトンでふきとっておく。

次に，石塔の風化防止のための強化処理には，前述のように，石の呼吸をとめずに強化する方法が最も求められる点である。そこで，いくつかの風化防止方法のうち，脆弱な石質の強化に最も適しているアルキル・アルコキシ，シリケート（ＳＳ 101）を使用した。ＳＳ 101は耐久性が大きく，成分的にも相似性があり，同系統の強化剤エコルシリケート等に撥水性を附与させ，石の呼吸（水分の蒸発）を阻外しない持徴を持っている。さらにアクリル樹脂やエポキシ樹脂に比べ外観上の変化も少ない点も長所としてあげられる。しかし，膠着力が少ないため極度に風化した石を強化させるには不適当である。この強化処理は板碑50基，セットの五輪塔60基について行った。

補強枘穴の穿孔作業

風化防止のための強化処理作業手順は，①石塔を十分に乾燥させ，中の水分も蒸発させる。コケ類などもきれいにとっておく。②強化剤は，ＳＳ 101と触媒Ｃを95：５の割合で混ぜあわせる。③，②の溶液を水槽に水を入れ，石塔をつける含浸の方法か，刷毛による強化剤の塗布を行う。④，刷毛による塗布の場合は，五輪塔には何度も塗りこむように行う。また，墨書陰刻のある板碑については若干薄めに塗布する。液は，標準的な大きさの五輪塔１基につき約１㎏が目安である。⑥　自然面利用の板碑には，さらに薄めに塗布する。⑦　陰刻に留ったＳＳ 101はアセトンで十分にふきとる。⑦　自然乾燥を十分に行うこと。

風化防止　強化剤の塗布作業

３．石塔の移転

移転は石塔群から南西へ約１km離れた清武町大字木原黒坂公民館北の町有地の一角約100㎡に行った。この場所は運動広場の一部で，フェンスを四方に張り，セメント敷きにしてある。西側に扉をつけた出入口を設け，その入口を入ると中程まで道（見学道）をつくり両側の石塔を見れるようにした。道は南北方向に設けた。ちなみにこの黒坂公民館は，県指定有形文化財の「弘安八年（1285）」銘の五輪塔の所在する黒坂観音堂の敷地内にある。

黒坂に運び入れた全ての石塔を処理し出土状態で配列することが現地保存に最も近いが，場所が狭いため，板碑とセットになる五輪塔について処理を行ない復元することにした。広さと活用の面から移転地を３つに分けた。西側の北半分には，当石塔群の中で最も器種的にも，石塔の配

列の面からも特徴を持つⅣ区をそのまま復元した。セットとなる五輪塔は復元し，板碑も推定地に立て，単品の空風火水地輪もそのままの状態で現地保存の感じを出させた。Ⅳ区は「コ」の字型の配列がしてあり，見ごたえのある復元である。西側の南側には，Ⅳ区以外から出土した板碑を復元させた。埋め込み部の明確な板碑はその部分まで埋め込み大型の板碑は倒壊の危険性から４分の１から５分の１ほど埋め込んだ。東側にはⅣ区以外のセットの五輪塔を復元したり，特徴的な単品を区ごとに配列する。

復元　板碑の復元作業

復元Ⅳ区の復元作業

復元　復元完了

以上のように，保存処理と移転を行ったが，初めての試みで様々な問題点が考えられる。保存処理については，方法的には問題はないと思うが，個々の劣化の程度や，墨書の状態を考慮に入れた処理を行っておらず，一定の処理に終ってしまうた。また，欠損部への擬石の使用も行なわず，不十分な処理で終ってしまった。

移転についても，最少限のスペースを利用したもので十分とは言えないが，Ⅳ区の復元については満足の行くものであった。ただ，板碑の配列と他区の石塔の復元には，もう少し，考慮がなされるべきであった。さらに，今回の保存処理はそれなりの成果を得られたが，科学処理で行うよりも，覆屋[3]を施設して外的劣化から石塔を守ることこそ永久的な保存処理復元作業であるような気がする。今回行った科学的な保存処理は半永久的なものではなく，近い将来，再び劣化が行

移転地遠景

説　明　板

ってくると思われるので，継続的な保存処理か半永久的な覆屋施設が望まれる。

註

(1) 保存処理の方法については，一般的な石造物の処理方法を奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センターにご教示いただいたが，時間的な余裕がなかったため，当石塔群の石塔の石質や風化程度を考慮し，試行錯誤を重ねながら処理を行った。処理方法については十分のものとは言えず，今後の機会にさらに研究していきたい。

(2) 奈良国立文化財国立研究所主催の遺物保存科学課程の研修での東京国立文化財研究所長樋口清治氏の講義内容による。

(3) 現在，前述の宗隣原供養塔や，本庄の石仏等の保存に覆屋を用いて効果をあげている。

付　論

山内石塔群理解のための二・三の提言

水野正好

山内石塔群は，その広大な墓域の全面が発掘調査され，移転に先立つ記録保存の措置がとられたため極めて重要な所見が得られた。この山内石塔群は，北西にのびた丘陵稜線の北面，西面を階段状に削り出して，北面に3段，西面に3段の平坦地を造り，五輪塔約400基を中心として，板碑約70基をまじえて形成されている。五輪塔には紀年銘をもつものがなく，塔身等に示される応永（1394～1427）年例を最古例とし，承応（1652～1654）年例を最新例とすることからするならば，この期間を含んだ前後の時期に墓地の形成が行なわれたことを知りうる。発掘調査の結果，墓坑は見られず，蔵骨器の発見例も僅か3基にとどまる。以下，この山内石塔群をめぐり若干の提言を行いたいと考える。

1．本墓地の性格の検討

本墓地の板碑の紀年銘から見て，墓地の形成は15世紀初葉から17世紀中葉までの間，約250年間という比較的長い期間にわたる。この間の造塔は五輪塔・板碑を含めて470基であるのに対し，発掘調査で得られた蔵骨器は僅か3点，墓坑はこれを欠くという状況である。五輪塔・板碑下には葬者を見ない，死者を葬らない墓地と性格づけてよいであろう。

こうした山内石塔群と同様な例は各地に見られる。例えば奈良市米谷墓地は1800基の墓標を調査したが，その墓標下からの蔵骨器の発見は皆無であった。米谷では別に大形五輪塔を具えた埋葬地が設定されて居るのであり，埋め墓と詣り墓が明確に区別される形が連綿と続いているのである。従って，本墓地の場合も米谷墓地同様，基本的には「詣り墓」と見るべきであり，「埋め墓」は他地に求められる可能性が強い。ただ，火葬後，遺骨を他地に納骨し，この地に「詣り墓」のみを設ける場合も考えられるが，いずれにせよ，本墓地は「死者を葬らぬ墓地」・「死霊の依憑する墓塔を祀り詣る墓地」という性格が指摘されるのである。長期間，こうした性格は本墓地を貫徹する形で息ずいたのである。

2．本墓地内の計画墓域と追加墓域

本墓地は，北面に3段，西面に3段の平坦面を階段状に設ける。この形が当初からの企画であるか否かは検討を要するところである。最下段のⅪ区から最上段のⅠ区に至るには極めて丘腹斜面が急峻なこともあり，大きく蛇行する墓道を設け，その蛇行曲折地に各平坦面を設定する形態をとっている。従って北面の3面は西側（Ⅴ・Ⅵ・Ⅺ面）を低く，東側（Ⅰ・Ⅳ・Ⅹ面）を高くして千鳥足状に平坦面を連繋する型で墓道が計画されているのである。ところで西面の3段の平坦面はそれぞれ3段を直接に連繋する墓道を持たない。上段のⅢ区は北面Ⅰ区に至る墓道から西

(1)

折して始めて至り得る，中段のⅧ区は墓道から北面Ⅵ区を抜けて始めて至り得る，下段は墓道からⅪ区南崖上を経て始めて至り得るというように，いずれも北面西側平坦面を通らねば至り得ないといった性格を具えているのである。換言すれば，西面の3段は北面の西側平坦面を借りて通ることにより墓道と結びつくのであり，北面西側平坦面形成後の造成であること，西面3段の形成は，北面よりも後出して造成されたものと考えられるのである。大局的に観るならば北面が墓道を中心にまず両側を千鳥足状に平坦面を配する型で成立し，のち，西面へと墓地を拡張する過程が辿れるのである。

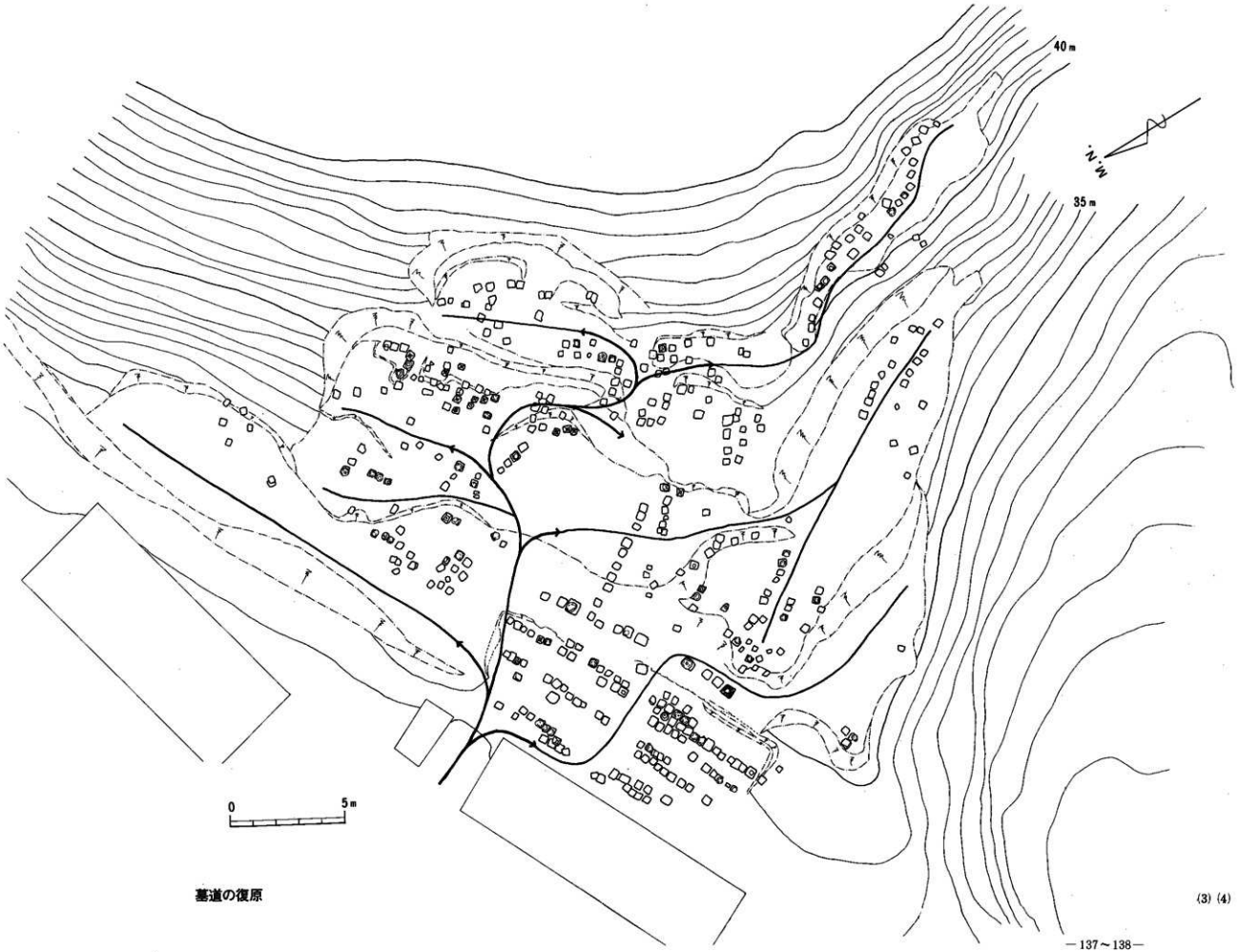
北面が当初の墓地計画を伝えるものと想定したが，その場合，北面の現状が全て当初の計画を伝えているとは考えられない。当初の墓地の姿を変更している部分が指摘されるのである。まず，その第一はⅪ区である。長方形に区画する平坦面は他になく，その規模も北面の他の平坦面より遙かに大きく異常であることから見てまず後代にこうした形状に整えたことが推測される。元来の形状はⅥ区に接しⅩ区よりやや低く，規模もⅣ区やⅥ区と共通する平坦面であったと考えられよう。第二はⅩ区に東接したⅨ区，Ⅸ区の東方に離れて所在するⅫ区である。この2区は共に墓道を直接もたぬ墓域として後出するものであることは明瞭である。第三はⅣ区北端の北への張り出し部の設置である。元来はこの部分は丘陵の斜面として残されるべき地である。削平し一見Ⅳ区を北へ逆に張り出す形で1区画の平坦面を作り出しているのである。第四はⅡ区の上方，Ⅰ区西方の小平坦面である。比較的早く開穿された面であるが，西面平坦面の形成開始と深く係り合う面である。第五にはⅥ区の西端，背縁を改めてえぐりひろげた一面が見られる。墓道をもたず，Ⅵ区を通じて奥を拡げるという型をとるだけに後出するものと言えよう。山内石塔群の形成過程は，このように墓道を復原し，平坦面の配置を絡み合せ有機的に息づくものを当初の面影を伝える計画的墓域と見，奥へ拡張したり前面を削り加えたりする，墓道に結びつかない平坦面を時間の経過に伴う変化一新しい追加墓域と考えるのである。

このように山内石塔群を理解すると北面墓地に西面墓地を加えるといった大きな変化，北面・西面墓地内での平坦面の追加造成の数が指摘されて，大きな変動の跡がたどれるのである。墓地は大いに動き流れるという表現が山内石塔群には与えうるのであり，激しい変化を通じて中世・近世の歩みが把握されるのである。

3．本墓地の形成過程の検討

本墓地が，北面の曲折した墓道にとりつく左右各3段の平坦面から出発し，西面に新たな3段を開穿し，また北面の平坦面の一部はその奥なり前面に平坦面を新たに追加していく状況が指摘された。このことは明確に語るのは板碑である。墓地としての当初計画で造成された墓道左右の各3段は，右辺のⅡ区に6基，Ⅵ区に0基，Ⅺ区に17基，左辺のⅠ区に10基，Ⅳ区に6基（7基），Ⅹ区に6基の板碑を見る。Ⅵ区の0基は特別でⅪ区の17基が多きに過ぎ，Ⅵ区からの搬入が考えられるので9基前後がⅥ区・Ⅺ区に所在したと考えておきたい。こう考えてくると，この墓道両脇の6段は6基から10基の板碑をもつこととなる。これに対応して追加墓域を見ると，右辺のⅡ区上部は0基，Ⅵ区西部は1基，左辺のⅣ区北部は1基（0基），Ⅸ区0基，Ⅻ区0基であり各区

(2)



墓道の復原

(3) (4)

0～1基しか持ち得ないことが浮かび上る。同様西面の各段を見ると上段は2基，中段2基，下段0基となり，その数は北面の追加墓域と共通した在り方を示すのである。換言すれば，早くに計画的に墓域が設定された北面の墓域6区は6基から10基の板碑を樹て，新しく追加された西面の墓域各区は2基前後，北面でも奥や前に追加された墓域各区は1基前後を樹てるに過ぎないといった鮮やかな相違が読みとれるのである。このことと相関して，板碑の編年上，古く考えることの出来る大形で圭頭の鋭い1群は北面のⅠ・Ⅱ・Ⅳ・Ⅹ・Ⅺ区に集中しⅢ・Ⅵ区に僅か，Ⅶ・Ⅸ・Ⅻ区には見られないといった事実や，中形で圭頭の鈍い1群はⅢ・Ⅶ・Ⅹ・Ⅺ区に集中しⅠ・Ⅱ・Ⅳ区には少なくⅥ・Ⅸ・Ⅻ区には見られないといった事実，また小形の退嬰的な1群は，Ⅶ・Ⅹ・Ⅺ区に集中しⅠ・Ⅱ・Ⅲ区に僅かに見えⅣ・Ⅶ・Ⅳ・Ⅷ区には見られないといった事実がある。この3群の型式は必ずしも継起して成立するものではないが，北面のⅠ・Ⅱ・Ⅳ・Ⅹ・Ⅺ区の成立が早く，やや遅れて西面のⅢ・Ⅶ区の成立があり，以降も各区での板碑の樹立がつづき，特に西面Ⅶ区，北面Ⅺ区での配置数が多く，墓地の動きが墓地の「口」，「端」といった地域に移る傾向が見え，やがてⅨ・Ⅻ区のように北面の東端，東はずれに新たな，板碑を持たぬ墓地が成立していくのである。先に墓域各区の形成過程を各段各区の在り方から復原したが，こうした墓地形成過程の変遷が板碑の在り方からも立証されるのである。北面の墓道左右の平坦面（Ⅰ・Ⅱ・Ⅳ・Ⅵ・Ⅹ・Ⅺ）6区の形成を第1期とすれば，西面の平坦面（Ⅲ・Ⅶ・Ⅻ）の形成が第2期，その継続を見る第3期とつづき，北面東端のⅨ・Ⅻ区の形成が第4期ということになるのである。また，北面平坦面の追加として指摘したⅣ南区，Ⅰ西区，Ⅵ西区は，共に転用した板碑，転移した板碑を見るのみで本来はこれを欠く形をとっている。第4期に属する追加墓域とすることが可能であろう。本来は五輪塔の形式分類に基づく検討も必要であるが，積組式五輪塔という不安定な性格を考え板碑でもって検討した結果であるが，平坦面形成序列ともよく合致するだけに本墓域の形成過程，墓域構造はここに把握しえたと考えるのである。

4．平坦面―各区の検討

山内石塔群の各墓区―平坦面の形成過程を検討し，北面―西面―北面東端といった平坦面―各区の造営過程を提示したが，次にこうした平坦面―各区内の動きを検討したい。各区が成立から終焉までの間，終始一定の指向性をもつ形で造墓してゆく場合，或いは途時指向性を一変する形で造墓していく場合など種々の在り方が見られるであろう。次にその在り方を各区で検討して見よう。

北面Ⅰ区は第1期に設定された墓域である。この墓域を詳細に検討するとⅣ群の墓塔の在り方が浮かびあがる。まず南崖縁にそって2基ずつで組合わさる小群3単位で成立する第1群が東にあり，2基・1基の小群2で成立する第2群が西側にある。一方，平坦面中央や南寄りに6基の五輪塔が散乱し第3群を形成し，また本平坦面の入口部に5基，2基の五輪塔を並列した第4群が見られる。この第Ⅰ区で配置時の目的を忠実に伝える状況を示すのは第1群，第2群であり，第3群は取り片付けの状況，第4群は再配置の状況を示すものといえる。第3・4群の五輪塔がこのⅠ区の当初の五輪塔群であり，第1・2群五輪塔群の設置に当り，旧の第3・4群を移動し

場をあけて第１・２群を配置したもの，その際，第３群は散乱状況のまま，第４群は並列状況で再配置されたと見てよい。従って，第３群は広場の中央に，４群は墓道と墓域口にというように墓としては不適切な位置を占める結果となったのである。こうしたⅠ区の経緯は板碑からも窺いうる。第１群２基の五輪塔が３ヶ所に整然と連るが中央の小群に中形の圭頭の鈍くなった板碑が，また東の小群に小形の墨書板碑かと思われる板碑が，また第２群の２ヶ所の間に中形の異形板碑が見られるのに対し，第３群には６基，第４群には１基の大形の圭頭の鋭い板碑が伴う。古式の板碑は移動・再配置された第３・４群に，新式の板碑は配置された状況を伝える第１・２群に係るのであり，Ⅰ区が一旦整然と南崖縁に墓塔を連ねきった時，整理し，再び新しい墓塔を同様に整然と連ねていく，そうしたタイプの墓域であることを示しているのである。

Ⅳ区は非常に複雑な構造を見せる。平坦地の南崖にそい東・西に冂字形に北へ開いた五輪塔群２群（東を第１群・西を第２群とする）がまず注目される。第１群は五輪塔を冂形に８基連ね，その東辺と北端に６基の板碑を３基ずつ分けて並べる。第２群は９基の五輪塔を冂字状に連ね内部に２基，脇に１基の五輪塔をおき，空間内に細礫を敷きつめる。こうした第１・２群の間に11基の五輪塔が列状に２・３基ずつ集まり第３群を構成している。この第１・２・３群の北側には墓道からのびた小径があったと見え画然と分別されて北に３群の五輪塔群がある。第４群はⅣ区を北へ拡張したと先に推定した地にあり３基の五輪塔が南北に並び，第５群は第２群の北，Ⅳ区入口部に接して２列３基計６基の五輪塔群が連なる。第６群は第４・５群間の７基からなるが３基には整然と東西に連なる群である。Ⅱ区の場合，Ⅰ区の如く墓域内を整理再配置し新墓を配するといったタイプをとらず，南崖にそう第１・２群の配置が一环になると，その間に第３群を営んだり，墓道小径の北辺を整地して新しく墓域にとりこみ第４・５・６群を形成しているのである。従って全五輪塔が空輪までも揃えて遺存するという完好な情況を示すこととなるのである。ただ，一つ考えて置かねばならないことがある。第１・２群の整然たる冂字状配置の問題である。たしかに完存する五輪塔，大形の圭頭の鋭い古式板碑の並列といった状況は一見，第１群の旧規を伝えるものと見えるが，詳細に検討すると必ずしも２基１対といった組合せも顕著とは言えず，むしろ，或る時期，Ⅰ区で見られたような２基１対といった五輪塔のあり方が見られたものを整理しこうした整然たる例の少ない冂字状再配置を行うという過程も考えうるのである。ただし，その場合でも第１・２群の形成が古く，３・４・５・６群の形成が遅れることは言うまでもない。所在した墓を整然と整理し，その後，外周や外辺へ墓域をひろげていくタイプとして注目される。なお，４群には中形の圭頭のやや鈍い板碑１基が伴い，古式の板碑６基をもつ第１群の後裔墓域かと推察され，第４・６群のように形成中の五輪塔群に２基１対の関係をもつ例が見られることと併せて注目される。

古く墓域として開発された北面の一部を検討したが，一方，新しく開発された西面の一画を検討しておきたい。西面に営まれた３段の墓域は南北に長い平坦面をもつことに特色がある。上段のⅢ区をとり上げると，幅狭く延長は17ｍを測る奥行きの深い墓域であり，西縁寄りに小径が北から南へ通していたものと考えられる。この小径と丘陵東崖縁にそい25基の五輪塔が列状に連なり，小径と西崖縁にそい４基の五輪塔が見られる。Ⅲ区を詳細に検討すると中央部に当初の墓域

(6)

と考えられる2群がまず東崖縁ぞいに見られる。南群を第1群，北群を第2群としよう。第1群は7基からなり礫石に囲まれた中に2基ずつ3グループあり1基が奥に入っている。中形の圭頭の鋭い板碑1基を併存している。この第1群は一時墓域が狭猛化した段階で小径の西，崖下縁との間を整地拡張して2基の五輪塔を配し，その後は平坦面を南に延して礫石を敷いた中に4基の五輪塔を樹てるというように展開している。北の第2群は8基の五輪塔が集中し，礫敷面に2基1対の五輪塔，背後に2基からなる2対と1基ずつの2基が配置されている。やはり狭猛化したため小径をへだてて西に張り出し部を造り，2基1対の五輪塔を据え，さらに墓道入口に2基3対計6基の五輪塔を配している。従ってⅢ区では，中央から小径を距てた地に張り出し部を設けて移り，やがて奥より，或いは入口寄りに造墓地を動かしてゆく過程がたどれるのである。幅の狭小な平坦面だけに整理再配置する空間をもち得ぬことに起因する動きと言えよう。

Ⅶ区は西面中段の幅のやや広い平坦面に営まれ，その中央を北から南へ二分する形で小径が設定されている。いま南端部を見ると小径の東には6基の五輪塔が整然と並び，その奥一南に4基の五輪塔が乱れた配置で樹てられている。整然とした配置から不整な配置へと移るのであろう。こうした動向は小径の西側にも通ずることで南端に4基が整然と，北に5基（2基は小径に面し，3基は背後）は雑に配置されている。小径の左右に十分な広さを得て整然と並べ，時の経過と共に不整化していく在り方を示すのであり，Ⅲ区とはまた異なる動きを示すものである。Ⅲ区・Ⅶ区共に2基1対の五輪塔の集合であることを注目すべきことである。

一方，北面最下段の平坦地，本墓地の入口に該当するⅪ区，Ⅵ区を見ると重要な所見が得られる。Ⅵ区の東半には五輪塔を見ない広い範囲があり整理され他地域に搬出された可能性が考えられる。逆にⅪ区では実に118基近い五輪塔，8基に及ぶ板碑が集中する。東西に2分され，東側には4列（北から12・14・18・8基）西側には5列（北から12・14・17・19・4基）が東西軸で配置されている。各列は整然を配列される部分と2基1組ずつ単位を連れる部分があり，五輪塔を整理し整然と配置した後，順次2基単位で配列していく様に読みとれる。従って東西の9列はこの段一平坦面で整理，造墓が行なわれているのである。他の平坦面が2群構成であるのに対し本平坦面が実に9群で構成されることは異様である。恐らく元来は2群構成であったと考えられるが，Ⅵ区や山内石塔群以外の墓地が本墓地に移され，以後造墓を続けていくといった事情があったものと考えられる。本平坦面のみが特別に広く，しかも長方形といった整った墓域景観を示し他と明確に区別される理由は他地よりの一斉の移転によるもの，その際の拡張造成を示すものと考えてよい。多くの各期の板碑をもつところからすれば，他の平坦面の造墓者よりも一段と優れた家，「株」の墓域がここに移されたと考えられ，優れた存在の故に墓地の下段，中央を占地しえたのであろうと推測されるのである。北面，西面各区とは異なった造墓事情をもつものと考えてよい。

5．山内石塔群に流れる想い

古く営まれた北面，新しく拓かれた西面，そのそれぞれをとり，各平坦面の内部の動きを見た結果，古い板碑を伴う各墓は全て整理，再配置され原初の様相を示す平坦面のないことが推測さ

れるに至った。中世的墓地の景観は或る時期，一斉に整理され近世的墓地としての景観に塗りかえられたのである。中形板碑の時期がその転換期であろう。中世の五輪塔・板碑を持つもののその旧状は求め得ないと言えよう。近代的墓地の景観は中世的墓地のもつ空間をそのまま利用し，時にその拡張を通じて生み出されるが，一方では西面の新規墓地化といった大きな変化を生じている。そうした激しい動きの中で中世五輪塔は乱積されたり整然たる再配置の措置がとられているが，常に２基１対といった組合せを失い単に列状に連なる存在となる。２基１対が夫妻のそれを語るものとすれば，そうした縁による配置は無視され美しく一列に，或いは冂状に連ねられることとなるのである。夫婦の縁を失い，父母の縁を失い，「無縁」化するのであり，その象徴として列が誕生するのである。しかし，中世的世界に代って登場した近世的墓地では，夫婦１対の五輪塔配置を依然として踏襲し，その縁を連ねて累代，次々と列状に五輪塔が連なるのである。整理された中世五輪塔の列と「縁を連ねて累代が列を形成してゆく」点が近世五輪塔列の異なるところである。

多くの平坦面は２群でなり，その展開の歴史を刻んでいる。各群が夫妻墓塔の累系・累代墓としての性格をもつだけに，こうした群２単位で成立する平坦面の性格は重要である。恐らく二つの「家」で成立するのであろうが共に板碑をもつ場合と一に板碑をもち一がもたぬ場合があり，均質な「家」，不均衡な「家」の存在を暗示している。極めて近い親縁関係にある家，株といった関係にある者の墓域として平坦面を見ることができる。

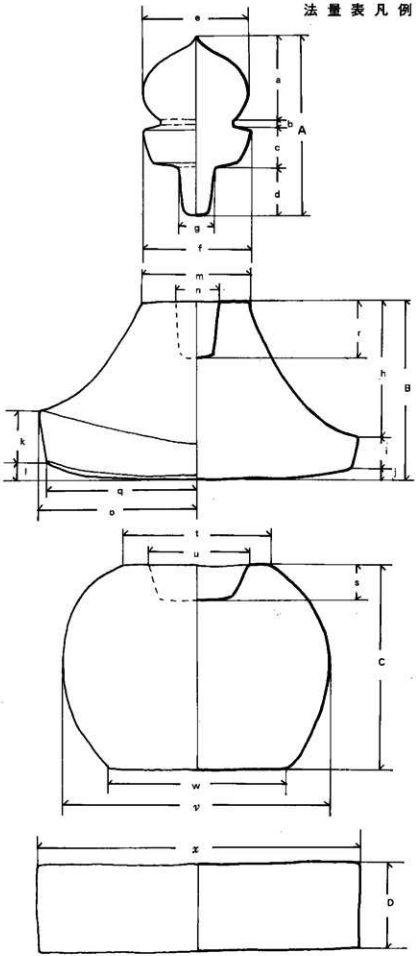
一方，XI区のように優れた「家」とが墓地の移転止むなきに至り一斉に本墓地に五輪塔，板碑を移し以後造墓をつづけるといった顕著な事例もまた指摘できる。同じ１村内の有力家族と考えられるが見事な「列状配置」を形成する。寺檀制に係る現象かとも考えられ注目を惹く。いずれにせよ，多くの重要な歴史を刻みごんで山内石塔群は息ずいたのである。

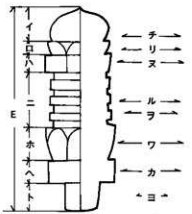
本稿は，昭和57年３月12日，宮崎県教育委員会北郷泰道氏の案内を得て現地を踏査した時の所見に，同氏より提示された資料の分析を加えて成稿したものである。現地の詳細と整合し得ない部分が生ずるかも知れない。後日の補訂を期することで稿を終えたい。

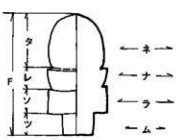
昭和59年３月12日　記

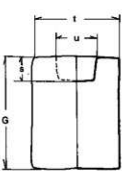
五輪塔類法量表

法量表凡例









凡　例

1．五輪塔法量表の計測値は図の通りである。
2．法量表のセットの項目のアルファベットは下記の組み合わせを表わす。

A_1	空風輪・火輪・水輪・地輪
A_2	相輪・火輪・水輪・地輪
A_3	空風輪・火輪・塔身・地輪
A_4	相輪・火輪・塔身・地輪
B_1	空風輪・火輪・水輪
B_2	相輪・火輪・水輪
B_3	空風輪・火輪・塔身
B_4	相輪・火輪・塔身
B_5	火輪・水輪・地輪
B_6	火輪・塔身・地輪
C_1	空風輪・火輪
C_2	相輪・火輪
C_3	火輪・塔身
C_4	火輪・塔身
C_5	水輪・地輪
C_6	塔身・地輪
D	単品

3．地輪の㊧は受部を右する地輪を示す。
4．△は関東と図版に若干の差異がみられる。
5．石材　A　凝灰岩(硬質)
　　B　〃　(AとCの中間)
　　C　〃　(軟質)

区・番号	図面番号	図版番号	セット	法量 A	a	b	c	d	e	f	g	法量比	石質	備考
I— 31	41		A1	25.5	12.5	0	6.0	7.0	13.8	13.6	7.0	0.91		
38	41	16	A1	(29.0)	(13.0)	0.5	9.0	6.5	15.8	16.4	9.5			
50㊥	41	16	A1	30.5	17.5	1.5	6.5	5.0	15.5	16.2	7.5	1.13		
51	56	16	A1	(7.5)			(2.0)	5.5			8.0			
30	41	29	A3	40.5	25.0	0	8.0	7.5	17.5	19.0	10.0	1.43		
33	40	29	A3	29.5	15.5	0	6.5	7.5	15.4	15.6	9.0	1.01		
34	40	29	A3	39.5	20.0	0	9.0	10.5	18.0	18.2	11.8	1.11		
22	71	40	D	38.5	19.0	0	9.0	10.5	18.5	18.5	10.0	1.03		
23	71	40	D	(23.0)	14.5	2.5	6.0		18.5	18.5		0.78		
29			D	(17.5)	13.0	0	4.5		14.0	12.5		0.93		
84		40	D	25.5	13.5	0	6.0	6.0	13.5	14.0	8.0	1.00		
88	71	40	D	(26.0)	(10.0)	2.0	5.5	8.5	15.0	15.0	9.5			
91	71	40	D	(36.5)	(19.0)	0	10.5	7.0	20.0	21.0	10.5			
92	71	40	D	(29.0)	(14.0)	1.5	8.5	5.0	15.5	16.0	8.0			
96	71		D	(19.0)	10.5	0	5.5	3.0	15.0	15.0	9.0	0.70		
II— 35	42	16	A1	29.0	18.0	0	4.5	6.5	15.5	14.0	7.5	1.16		梵字(崇)
51	42	16	A1	24.0	15.5	0	3.5	5.0	15.0	16.0	7.0	1.03		
〃 55	42	17	A1	22.0	12.0	1.0	4.5	4.5	15.2	16.0		0.79		
73	42	17	A1	(28.0)	(12.5)	1.5	5.0	9.0	16.5	16.5	18.5			
116	43	17	A1	27.5	13.0	1.0	8.0	5.5	14.5	15.5	7.0	0.90		梵字(曼)
75	43	30	B1	25.0	12.5	0	5.0	7.5	15.5	16.0	8.0	0.81		
3	71	40	D	18.0	10.0	0	3.5	4.5	13.5	14.0	8.0	0.74		
4	71		D	23.0	11.6	0	8.2	3.2	13.0	12.5	(6.0)	0.89		
9	71	40	D	(26.0)	(12.5)	2.0	6.5	5.0	12.5	12.5	8.0		B	
12	71	40	D	22.5	15.0	0	2.5	5.0	15.0	15.5	8.5	1.00		
14	71	40	D	30.0	15.0	0	6.5	8.5	19.0	20.0	11.5	0.79		
15	71	40	D	24.5	12.0	0	8.5	4.0	15.5	14.5	8.0	0.77		
17㊦	71	40	D	(27.0)	(14.0)	2.5	4.5	6.0	13.8	13.4	6.3			
17㊥	71		D	21.2	12.0	0	4.0	5.2	12.9	13.0	7.7	0.93		
18	71	40	D	(26.0)	11.5	0	9.5	5.0	14.5	14.5	8.5	0.79		
19	71	40	D	18.5	11.5	0	4.0	3.0	13.0	14.5	8.0	0.88	B	
20		40	D	24.0	12.0	0	5.5	4.5	13.0	14.0	9.0	0.92		
42	71	40	D	27.0	13.0	2.5	5.5	6.0	14.5	13.5	8.8	0.90		
62			D	(22.5)	13.0	2.0	6.0	(1.5)	17.0	15.5	9.0	0.76		
114	72	40	D	(23.0)	19.0	0	(4.0)		16.0	16.0		1.19		
115			D	(23.0)	14.0	3.0	4.0	(2.0)	16.2	(15.0)	8.5	0.86		
117	72		D	25.0	13.0	1.0	5.5	5.5	13.5	14.0	7.0	0.96		
118	72	40	D	29.0	15.0	0	9.5	4.5	15.5	15.5	10.0	0.97		梵字(曼)
III— 28	43	17	A1	24.5	15.0	0	5.5	4.0	15.5	15.5	7.5	0.97		
31	43	18	A1	(31.0)	18.5	0	7.5	(5.0)	(17.5)	18.0	13.0			
34	44	18	A1	28.0	15.0	1.0	5.5	6.5	13.5	15.0	7.5	1.11		
1㊦	72	40	D	27.0	15.5	0	6.5	5.0	16.0	16.0	9.0	0.97		梵字(曼)
8	72	40	D	19.0	12.0	0	3.5	3.5	15.0	15.0	7.0	0.80		
11	72		D	(26.6)	19.6	0	5.0	(2.0)	16.4	16.4	6.8	1.20		
12	72	40	D	(26.0)	13.5	2.0	6.5	(4.0)	16.0	17.0	7.0	0.84		
13	72		D	(27.0)	17.5	0	6.5	(3.0)	17.0	17.0	7.0	1.03		
14	72	40	D	(29.0)	19.0	0	5.0	5.0	16.0	16.5	10.0	1.19		
15	72	40	D	(25.5)	14.5	0	4.0	7.0	14.0	15.0	9.0	1.04		
18	72		D	(24.5)	12.0	1.5	5.5	5.5	16.0	15.5	8.5	0.75		
19	72		D	22.0	11.0	0	6.0	5.0	13.0	13.5	8.5	0.85		
20	72	40	D	23.0	13.0	1.0	3.0	6.0	14.0	14.5	9.0	0.93		
21	72		D	(22.5)	14.5	0	7.0	(1.0)	15.5	15.8	(6.0)	0.94		
75		40	D	(30.0)	18.0	1.0	7.5	(3.5)	17.0	17.0	8.0	1.06		
76			D	(28.0)	20.0	0	5.1	(2.9)	15.8	14.1	11.0	1.27		
IV— 23	45	18	A1	25.5	13.5	1.0	7.0	4.0	13.0	14.5	6.5	1.04		
24	57		A1	(7.5)				7.5			7.2			脚部のみ(脚四角)
62	45	18	A1	(25.0)	13.5	1.0	5.5	(5.0)	15.5	17.0	7.5	0.87		
64	51	19	A1	25.5	15.5	0.5	5.0	4.5	18.5	17.0		0.84		梵字(曼)
65	45	19	A1	(22.5)	(10.5)	1.5	6.5	(4.0)	14.5	14.5				
70		19	A1	(21.0)	(12.5)	1.0	4.0	(3.5)	16.0	15.5	8.0			
71	44	19	A1	18.0	10.0	0	5.0	3.0	11.5	11.2	6.5	0.87		
72	44	20	A1	(21.0)	14.0	0	5.0	(2.0)	14.0	15.0	6.0	1.00		
74	44	20	A1	24.5	10.0	0	8.0	6.5	15.5	14.5	7.5	0.65		
75	45	20	A1	(21.5)	(10.5)	1.0	7.0	3.0	12.0	12.2				
78	46	20	A1	(18.5)	(10.0)	0	5.0	3.5	(13.0)		(7.5)			
79	46	21	A1	23.0	11.5	1.0	7.0	3.5	16.0	15.5		0.72		
80	46	21	A1	24.0	9.0	1.0	8.0	6.0	17.0	18.0	8.2	0.53		
85	46	21	A1	33.5	17.2	0.8	10.0	5.5	14.0	15.5		1.23		
86	47	21	A1	21.0	11.0	1.2	6.4	3.6	15.2	15.2	7.8	0.72	B	

空風輪法量表(1)

区・番号	図面番号	図版番号	セット	法量									石質	備考
				A	a	b	c	d	e	f	g	法量比		
Ⅳ— 91	47	22	A1	23.0	13.5	0	5.0	4.5	15.5	15.0	6.0	0.87		
96	47	22	A1	24.0	13.0	0	5.0	6.0	13.5	13.5	7.8	0.96		
97	48	22	A1	23.6	13.8	0	4.2	5.6	17.2	17.4	8.0	0.80	B	
97	47	23	A1	30.0	13.5	1.5	8.0	7.0	17.2	18.0	9.5	0.78		
100	48	23	A1	34.0	18.5	0	10.2	5.3	18.8	17.7	10.2	0.98	B	
125㊓	48	23	A1	26.0	15.5	0	5.5	5.0	18.0	18.0	7.5	0.86		
126	49	23	A1	25.5	12.0	2.0	5.0	6.5	15.0	16.0	13.0	0.80		
127	48	24	A1	25.5	13.5	0	6.5	5.5	13.5	14.2	5.8	1.00		
131	49		A1	30.0	18.0	0	7.0	5.0	12.5	7.0	7.5	1.44		梵字(墨)
77	57	41	B1	21.5	10.5	0	6.5	5.0	15.0	14.5	8.5	0.70		
7㊑	72	41	D	25.0	10.4	1.0	6.4	7.2	15.8	16.0	9.0	0.66		
15	72	41	D	23.0	11.5	0.8	6.5	4.2	15.0	15.0	7.0	0.77		
16	73	41	D	20.0	9.4	0	5.8	4.8	9.5	(10.0)	7.2	0.99		
18	72	41	D	(25.5)	(15.5)	0	6.8	3.2	15.0	12.5	6.0			
47	72		D	30.3	13.7	0	9.0	7.6	14.6	14.4	11.2	0.94	A	
48	72	41	D	25.2	14.0	0	7.0	4.2	15.5	16.0	8.0	0.90		
60㊑	72	41	D	29.8	15.0	1.2	9.2	4.4	17.0	18.0	8.5	0.88		
60㊒	72	41	D	(19.0)	9.8	1.2	4.8	(3.2)	11.0	11.0	7.0	0.89	A	
61	72	41	D	26.0	12.0	1.5	6.5	6.0	16.5	17.0	9.0	0.73	A	
76㊑	72		D	(15.0)	11.0	0	(4.0)		12.4	12.5		0.89		
88	72	41	D	19.0	11.0	0	3.5	4.5	13.5	13.0	5.8	0.81		
90㊑	73		D	(20.0)	13.8	0	5.2	(1.0)	16.0	17.0	7.0	0.86		
93㊒	73		D	23.0	11.0	0	7.5	4.5	12.5	13.0	7.5	0.88		
95	73	41	D	19.0	10.4	0	4.0	4.6	15.0	14.0	5.8	0.69		
104	73	41	D	31.0	17.0	0	7.0	7.0	17.5	17.5	9.5	0.97		梵字(墨)
121	73	41	D	27.2	13.5	0	7.5	6.2	18.2	18.0	10.0	0.74		
130㊒	73		D	21.0	12.0	0	5.5	3.7	13.0	13.5	6.5	0.92		
142	73	41	D	22.6	16.1	0.9	6.5	3.4	15.0	15.7	7.6	1.07		
144		41	D	27.0	16.6	0.8	5.2	5.2	20.0	18.0	7.2	0.83		
145		41	D	26.5	12.6	1.4	7.0	5.5	17.5	16.5	7.5	0.72		
150	73	41	D	21.0	13.0	0	3.5	4.5	13.0	13.4	7.0	1.00		
183	73	41	D	28.2	13.2	0.8	7.5	6.7	16.5	16.0	8.5	0.80		
201	73		D	(13.0)	(8.0)	0	5.0		18.0	16.8				
202	73		D	(16.5)	11.5	0	(5.0)		13.8	13.4		0.83		
203	73	41	D	(24.0)	(14.0)	0	6.8	3.2	15.0	15.0				
204	73	41	D	33.8	17.5	0	9.0	7.3	17.5	17.5	9.0	1.00		梵字(墨)
206	73	41	D	(27.4)	10.4	1.2	10.8	4.9	15.2	15.8	6.4	0.68		
207		41	D	25.0	10.8	0	6.4	7.8	13.8	14.0	7.0	0.78		
208	73	41	D	21.5	9.7	0	5.8	6.0	13.0	13.2	8.8	0.75		
209	73	41	D	26.2	15.6	0	6.5	4.1	9.4	9.2	(5.0)	0.17		
210	73	42	D	28.0	14.5	3.5	4.5	5.5	15.5	16.5	7.5	0.94		
211	73		D	(15.0)	10.5	1.0	3.5		13.0			0.81		
213	73		D	(19.5)	11.5	0.8	5.5	(1.7)	13.6	13.6	7.2	0.85		
215	73	42	D	(21.5)	14.0	0	(7.5)		13.5	14.0		1.04	B	
216	73	42	D	21.0	13.0	0	5.0	3.0	15.5	14.5	7.5	0.84	B	
231	73		D	27.0	14.5	1.2	5.5	5.8	19.0	17.4	10.0	0.76		
233	73	42	D	18.9	12.7	0	7.0	2.8	13.4	13.2	6.7	0.95	B	
Ⅴ— 17	51	24	A1	(24.5)	17.5	0	4.5	(2.5)	17.0	11.0	(8.0)	1.03		
19	52	24	A1	19.0	9.5	0	6.0	3.5	12.5	12.8	7.5	0.76		
8	74	41	D	20.5	10.0	0	6.8	3.7	12.2	12.4	5.0	0.82		
9	74	42	D	23.5	13.5	0	6.5	3.5	14.5	15.0	6.5	0.93		
10	74	42	D	31.5	14.0	3.5	8.5	5.5	18.5	20.0	8.0	0.76		
11		42	D	(28.5)	11.0	2.5	7.5	(7.5)	18.0	17.5	(9.0)	0.61		
12			D	(27.0)	19.5	0	2.5	5.5	15.0	16.0	8.0	1.30		
13	74		D	(27.5)	15.0	0	5.0	2.5	18.5	18.5	9.0	0.81		
14		42	D	33.5	16.0	2.0	7.0	7.5	16.5	16.5	7.5	0.97		
15		42	D	30.0	15.0	2.5	7.0	6.0	18.0	17.5	10.5	0.83		
Ⅵ—130	52	25	A1	19.5	10.0	0	5.0	4.5	11.0	12.0	6.0	0.91		
141	52	25	A1	22.0	12.0	1.5	4.5	4.0	12.5	13.0	6.5	0.96		
1		42	D	26.0	15.0	1.5	3.5	6.0	11.5	17.5	8.0	1.30		
3′—1		42	D	(32.5)	19.0	0	8.0	(5.5)	15.5	15.0	7.0	1.23		
3′—2	74	42	D	(22.5)	14.5	0	3.5	4.5	20.0	19.5	12.0	0.73		
3′—3			D	23.5	12.5	0	5.0	6.0	15.0	16.0	8.5	0.83		
3′—4			D	(19.5)	12.0	0	5.0	(2.5)	15.0	16.2	7.5	0.80		
3′—5		42	D	(24.5)	16.5	2.0	2.5	(3.5)	16.5	15.5	8.0	1.00		
3′—6		42	D	(30.0)	17.0	0	8.5	4.5	17.5	17.0	6.5	0.97		
3′—7			D	(24.5)	12.5	0	9.0	(3.0)	15.5	15.5	7.5	0.81		
3′—8		42	D	28.0	14.5	0	9.5	4.0	17.5	18.5	9.0	0.83		
3′—9		42	D	33.0	18.5	0	9.5	5.0	17.5	13.0	9.5	1.06		

空風輪法量表(2)

区・番号	図面番号	図版番号	セット	法			並					法量比	石質	備考
				A	a	b	c	d	e	f	g			
Ⅵ— 5			D	(25.0)	14.5	2.0	(4.5)	(4.0)	16.0	16.5	(7.0)	0.91		
7		42	D	23.0	13.0	0	5.5	4.5	14.5	14.5	9.5	0.90		
9			D	19.0	10.0	0	6.0	3.0	15.0	15.0	6.5	0.67		
12		42	D	29.5	15.0	0	10.0	4.5	14.0	13.5	7.5	1.07		
13			D	(19.0)	10.5	0	8.0		15.5	16.0		0.68		
14			D	(21.0)	14.0	0	4.0	3.0	18.5	17.0	11.0	0.76		
15			D	(24.0)	13.5	0	5.5	(6.0)	12.5	12.5	7.0	1.08		
17		42	D	26.5	16.0	0	5.5	5.0	16.5	16.5	9.0	0.97		
23		42	D	21.0	17.5	0	0	3.5	12.5	0	6.0	1.40		
24		42	D	23.5	12.0	0	7.0	4.5	15.0	15.5	8.5	0.80		
26			D	28.5	12.0	1.5	7.0	8.0	18.0	19.0	9.5	0.67		
27		42	D	(24.0)	11.0	1.0	6.5	(5.5)	13.5	14.0	8.0	0.81		
28		42	D	26.0	13.5	0	7.0	5.5	17.0	18.0	7.5	0.79		
29	74	42	D	32.0	18.0	0	7.5	5.5	18.5	18.5	10.5	0.97		
30		42	D	33.0	13.0	3.0	10.0	7.0	18.0	17.5	10.0	0.72		
31			D	(20.0)	11.0	0	6.0	(3.0)	14.5	14.5	9.0	0.76		
32		43	D	28.0	12.5	0	11.0	4.5	15.0	14.5	9.0	0.83		
33		43	D	25.0	10.0	3.5	6.5	5.0	16.5	16.5	10.0	0.61		
35	74	43	D	36.5	21.5	0	8.0	7.0	16.0	16.0	8.0	1.34		
36		43	D	28.0	13.0	1.5	4.0	9.0	16.5	11.5	10.5	0.79		
44	74	43	D	27.0	18.0	0	5.0	4.0	19.0	19.0	8.5	0.95		
45		43	D	27.0	13.0	1.0	7.0	6.0	14.0	14.0	7.0	0.93		
46			D	20.0	9.5	0	4.5	6.0	15.0	14.0	8.0	0.63		
47		43	D	(18.5)	12.0	1.0	5.0	0.5	14.5	13.5	8.0	0.83		
51	74	43	D	30.0	19.0	0	7.5	3.5	16.0	16.0	8.0	1.19		
55	74	43	D	26.0	15.5	1.5	5.0	4.0	17.5	14.5	8.0	0.89		
56	74	43	D	(30.0)	22.0	0	4.0	(4.0)	18.0	17.0	7.5	1.22		
57	74	43	D	26.0	15.5	0	5.0	5.5	16.0	16.5	9.0	0.97		
58	74	43	D	28.0	15.0	2.0	4.5	6.5	15.0	15.5	7.5	1.00		
63		43	D	(20.5)	13.0	1.5	5.5	(0.5)	16.0	16.0	9.0	0.81		
64			D	(18.5)	10.0	2.0	4.0	(2.0)	16.5	17.0	9.5	0.61		
65		43	D	24.0	13.5	0	4.0	6.5	14.0	14.5	9.0	0.96		
66			D	27.5	13.5	0	7.5	6.5	15.0	15.0	7.5	0.90		
67㊀		43	D	(19.0)	12.5	2.0	3.5	(1.0)	17.0	17.0	7.0	0.74		
68		43	D	19.5	11.0	0	5.5	3.0	12.5	13.0	6.0	0.88		
70		43	D	27.0	15.0	0	4.5	7.5	16.0	16.0	10.0	0.94		
72		43	D	(20.5)	9.0	0	6.5	(5.0)	13.5	13.0	9.0	0.67		
73		43	D	27.5	14.5	0	6.5	6.5	17.0	17.0	8.5	0.85		
89			D	(19.0)	(11.5)	0	3.5	4.0	11.5	11.5	6.5			
97	74	43	D	(28.0)	17.0	0	6.5	(4.5)	17.0	17.0	7.5	1.00		
127		43	D	(22.0)	12.5	1.5	7.5	(0.5)	14.5	15.0	8.0	0.86		梵字(吸)
160		43	D	23.5	13.0	0	5.0	5.5	13.0	14.5	7.9	1.00		
161			D	(15.5)	(15.5)				14.5					
162		43	D	(26.0)	17.5	0	5.0	3.5	14.0	13.5	11.5	1.25		
163		43	D	25.0	13.5	1.5	5.0	5.0	16.0	16.0	9.0	0.84		
Ⅶ—102	52	25	A1	(23.0)	12.0	0	5.5	5.5	14.0	15.5	7.0	0.86		
142㊁	59	30	B1	27.0	16.0	0	7.5	3.5	15.8	15.6	8.6	1.01		
4		44	D	24.0	13.0	0	6.5	4.0	12.0	12.5	6.0	1.08		
8			D	22.0	13.0	0	6.0	4.0	15.0	15.0	8.0	0.87		
13			D	21.0	13.5	1.0	5.5		14.0	14.0		0.96		
21	74	44	D	30.0	15.0	2.0	6.0	7.0	17.0	17.0	10.0	0.88		
22	74	44	D	26.0	12.0	0	8.0	5.0	17.0	15.5	10.0	0.71		
23		44	D	30.0	18.0	6.0	0	6.0	17.0	17.5	9.5	1.06		
24		44	D	28.0	14.5	1.5	6.0	6.0	16.0	15.0	7.0	0.91		
25		44	D	25.5	15.0	0	6.5	4.0	15.5	15.5	9.5	0.97		
26		44	D	28.0	13.5	0	7.5	7.0	13.0		10.0	1.38		
27		44	D	28.9	15.9	1.0	6.5	5.5	18.0	16.5	9.5	0.88		
28			D	(21.0)	14.0	1.5	(5.5)		14.0			1.00		
29			D	(16.5)	10.0	1.0	5.5		18.0	17.5	(7.0)	0.56		
30		44	D	32.5	17.0	0	9.0	5.5	16.0	14.5	9.0	1.06		
31			D	24.5	13.5	0	5.5	5.5	15.5	15.5	7.0	0.87		
32		44	D	23.0	14.0	0	4.0	5.0	17.0	16.5	8.5	0.82		
33	74	44	D	26.0	14.5	0	5.0	6.5	18.0	16.5	8.4	0.81	B	
35		44	D	30.0	19.0	0	7.0	4.0	20.0	20.0	10.0	0.95		
36		44	D	26.5	11.5	2.0	7.0	6.0	15.5	15.5	8.2	0.74		
47			D	24.5	12.0	0	9.0	3.5	16.5	15.0	8.0	0.73		
48	75	44	D	19.0	13.0	0	4.0	2.0	15.5	15.5	6.0	0.84		
56			D	(15.0)	12.0	0	(3.0)		14.5			0.83		
57		44	D	22.0	12.5	0	4.5	5.0	14.5	13.5	7.0	0.86		

空風輪法量表(3)

区・番号	図面番号	図版番号	セット	法量									石質	備考
				A	a	b	c	d	e	f	g	法量比		
Ⅷ— 58		44	D	23.0	12.0	0	7.5	3.5	15.5	16.0	8.0	0.77		
60		44	D	26.5	13.5	2.0	8.0	3.0	16.0	16.5	8.0	0.84		
61		44	D	25.0	11.5	0	8.0	5.5	14.0	13.0	7.5	0.82		
62			D	18.5	8.0	1.0	5.5	4.0	14.0	15.0	8.5	0.57		
63		44	D	21.5	10.5	1.0	6.5	3.5	14.0	12.5	8.0	0.75		
65	74		D	16.5	10.0	0	4.5	2.0	14.5	14.5	7.0	0.69		
68		44	D	28.0	13.0	1.0	6.0	8.0	13.0	13.0	9.0	1.00		梵字(墨)
69		44	D	(22.5)	14.0	1.0	5.5	(2.0)	17.5	17.5	9.0	0.80		梵字(墨)
70			D	(19.0)	(19.0)				14.0					
71			D	(19.5)	10.5	0	6.5	(2.5)	14.5	14.5	9.0	0.72		
73㊀	74	44	D	(28.5)	(18.0)	0	6.0	4.5	13.0	13.0	6.0		B	
87			D	25.0	15.5	0	5.0	4.5	18.0	17.5	8.5	0.86		
96	75	239	D	25.0	10.0	2.0	7.0	6.0	13.5	14.0	7.0	0.74		
127	74		D	24.5	15.0	0	5.0	4.5	14.0	14.5	6.5	1.07		梵字(墨)
130		44	D	23.0	12.5	0	4.5	6.0	14.0	14.5	7.5	0.89		
134	75		D	29.0	14.5	2.0	7.0	5.5	20.5	21.5	9.5	0.71		
136	74	44	D	25.5	14.5	1.0	6.5	3.5	11.8	14.8	7.1	1.23	B	
147		45	D	31.0	17.0	0	9.0	5.0	17.5	17.5	9.0	0.97		
154		45	D	(21.0)	12.5	1.5	6.0	(1.0)	16.0	16.0		0.78		
155		45	D	20.5	11.5	0	5.5	3.5	14.5	14.5	7.5	0.79		
180	74		D	23.0	12.5	0	4.0	6.5	14.5	15.0	9.0	0.86		梵字(墨)
203	74	45	D	24.5	14.5	0	4.5	5.5	15.0	(15.0)	6.2	0.97	C	
204			D	25.0	15.0	0	6.0	4.0	13.4	13.4	5.7	1.12		
209			D	16.0	10.0	0	4.5	1.5	12.0	11.0	7.0	0.83		
210	74	45	D	20.5	11.5	1.0	3.0	5.0	14.8	15.0	7.3	0.78	B	
Ⅷ— 93	53	26	A1	24.5	11.0	1.5	5.0	7.0	14.0	14.8	7.5	0.79		
126	53	26	A1	30.5	16.0	1.0	7.0	6.5	16.8	17.0	9.0	0.95		
140	66	34	C1	15.0	7.5	0	4.0	3.5	13.0	13.5	(6.5)	0.58		
4			D	(21.5)	(15.0)	1.0	3.5	(1.5)	15.5	15.0	8.0			
8			D	(24.0)	11.5	2.0	6.5	(4.0)	15.5	15.5	6.5	0.74		
9			D	(24.5)	14.0	0	5.0	(4.5)	15.5	16.2	8.0	0.90		
11		45	D	28.0	16.5	0	7.5	4.0	19.5	21.0	9.5	0.85		梵字(墨)
14		45	D	(24.5)	19.0	0	5.0	(0.5)	16.0	16.0		1.19		
15		45	D	24.7	11.5	0	6.5	6.7	12.2	12.2	8.0	0.94		
17			D	30.0	17.5	0	7.0	5.5	16.0	17.0	8.8	1.09		
18			D	24.5	10.0	0	9.5	5.0	15.0	15.0	8.5	0.67		
20		45	D	29.0	18.0	0	5.0	6.0	15.0	15.0	6.5	1.20		
25		45	D	(23.7)	(14.6)	0	5.1	(4.0)	14.8	14.8	8.1			
31		45	D	27.6	15.0	0	8.0	4.6	17.3	17.0	11.0	0.87		
33	75	45	D	24.5	13.5	0	6.0	5.0	14.0	14.5	7.0	0.96		
37㊀	75	45	D	24.0	13.0	0	5.5	5.5	13.0	13.5	6.5	1.0		
39	75		D	(17.9)	10.2	0	7.7		16.9	18.2		0.60		
40		45	D	26.5	14.0	1.0	6.0	5.5	15.0	16.2	6.5	0.93		
46			D	(13.0)	8.5	1.0	(3.5)		12.5			0.68		
52		45	D	(24.5)	14.5	1.0	4.0	(5.0)	16.5	18.0	9.0	0.88		
53		45	D	21.0	9.5	0	6.5	5.0	13.5	13.0	7.5	0.70		
59			D	(20.0)	14.0	0	(6.0)		14.5			0.97		
61		45	D	(21.5)	18.0	0	2.5	1.0	13.5	12.5	7.0	1.33		
63		45	D	30.0	16.0	0	6.5	7.5	16.5	17.0	7.5	0.97		
64	75	45	D	26.0	12.0	0	7.5	6.5	15.5	18.0	9.5	0.77		
66		45	D	(19.3)	(12.6)	0	6.0	0.7	15.6	15.5				
67	75	45	D	26.0	14.5	0	7.5	4.0	15.5	16.0	7.5	0.94		
68㊀			D	(23.1)	12.9	0	5.5	4.7	13.9	13.9	6.8	0.93		
70		45	D	27.0	15.0	0	7.0	5.0	14.0	15.0	7.0	1.07		
71		45	D	24.7	13.0	0	6.0	5.7	14.0	14.0	8.5	0.93		
76	75	45	D	25.2	12.0	0	6.2	7.0	14.1	14.1	8.1	0.85		
80		45	D	28.7	16.0	3.0	3.0	6.7	17.8	17.8	9.4	0.90		
81	75	46	D	29.9	14.4	1.6	5.4	8.5	15.3	15.3	9.7	0.94		
82	75		D	(16.5)	10.5	0	6.0	2.5	14.5	15.0	(6.0)	0.72		風輪に穴あり
83			D	(23.0)	17.0	0	6.0		16.0	16.0		1.06		
94		46	D	26.4	14.5	1.5	2.4	8.0	14.5	14.5	8.9	1.00		
96	75	46	D	29.0	15.0	2.0	7.0	5.0	16.5	16.0	9.0	0.91	B	
102		46	D	24.9	14.0	0	4.9	6.0	15.1	15.1	8.9	0.93		
108		46	D	26.7	14.0	0	7.0	5.7	16.0	17.1	8.6	0.88		
115	75	46	D	22.0	14.2	0	7.6	(0.2)	13.4	16.0		1.06		
116		46	D	23.5	13.2	0	5.8	4.5	17.0	16.8	7.5	0.78		
117		46	D	(18.3)	10.7	0	5.3	(2.3)	11.0	11.4	5.7	0.97		
127		46	D	27.0	15.0	0	6.5	5.5	16.0	15.5	10.0	0.94		
132		46	D	19.5	12.0	0	4.5	3.0	13.4	13.4	7.3	0.90		

空風輪法量表(4)

区・番号	図由番号	図版番号	セット	法量									石質	備考
				A	a	b	c	d	e	f	g	法量比		
Ⅷ-137④	75	46	D	28.9	17.2	0	5.0	6.7	15.5	16.1	8.3	1.11		
137⑤	75	46	D	18.0	9.5	0	4.0	4.5	14.5	14.5	10.0	0.66		
138		46	D	21.5	14.5	0	2.0	5.0	13.5	14.2	8.5	1.07		
141			D	21.8	9.6	1.0	6.1	5.1	14.4	15.0	7.3	0.67		
147		46	D	27.1	16.0	0	4.9	6.2	16.8	16.8	8.8	0.95		
148			D	18.9	10.0	0.7	4.9	3.1	13.9	14.0	6.5	0.72		
149		46	D	20.3	12.1	0	5.3	2.9	15.1	15.1	6.8	0.80		
158			D	16.2	11.5	1.0	8.0	5.7	15.0	10.5	7.0	0.77		
159	75	46	D	26.5	18.7	0	7.8	6.0	15.6	15.8	6.9	1.20	B	
166		46	D	(28.3)	20.0	0	7.3	(1.0)	17.6	17.6	8.2	1.14		
167	75	46	D	19.9	16.2	0	3.7	4.0	15.0	13.5	(6.0)	1.08		
201	75	46	D	25.5	15.0	0	6.0	5.0	11.5	12.0	6.5	1.30	B	
205			D	(25.4)	(13.0)	2.0	5.4	5.0	13.4	13.4	8.1			
206			D	(21.0)	(13.0)	1.0	5.0	(2.0)	14.8	15.5	8.5			
210	75	46	D	(23.5)	(15.0)	0	3.5	(5.0)	14.5	16.0	7.0		B	
b—16			D	(23.0)	13.5	0	5.0	(4.5)	15.2	15.0	7.2	0.89		
b—96			D	(25.0)	(10.0)	2.0	6.5	6.5	14.0	15.0	7.0			
b1'—2	75	46	D	34.5	20.5	1.0	5.5	7.5	19.0	2.0	9.0	1.08		
b1'—5		46	D	28.5	12.5	1.0	7.0	8.0	14.5	15.6	6.5	0.86		
Ⅸ—27⑩	53	26	A1	26.5	11.5	0	7.5	7.5	13.8	13.8	7.0	0.83		
2	76	46	D	21.0	12.0	1.5	7.5	0	18.2	16.5	0	0.66		
4		46	D	(21.5)	(12.5)	2.0	7.0	0	15.0	16.0	0			
6	75	46	D	(27.2)	(15.2)	0	7.5	(4.5)	17.8	18.8	8.6			
7	75	47	D	(25.0)	(14.0)	2.0	6.0	3.0	17.0	17.5	7.0			
8	75	47	D	(24.5)	(13.0)	1.0	6.0	4.5	13.5	13.5	6.0			
9⑥	75	47	D	(22.5)	(14.5)	1.5	4.0	2.5	13.5	14.5	5.0			
15	76		D	(27.5)	15.0	1.5	7.5	(3.5)	20.5	21.5	9.5	0.73		
17	76	47	D	(16.5)	(10.5)	0	6.0		14.5	15.5				
27⑥		47	D	(23.5)	11.5	1.5	5.0	(5.5)	15.0	14.5	9.0	0.77		
28			D	(22.0)	10.5	1.5	6.0	(4.0)	13.5	13.5		0.78		
30	76	47	D	(25.0)	(10.0)	0	7.5	7.5	13.5	14.0	8.5			
31			D	(23.0)	(11.5)	0	7.0	(4.5)	14.5	14.5	9.0			梵字(墨)
32		47	D	22.0	11.5	0	5.5	5.5	13.0	13.0	7.0	0.88		
35		47	D	(22.0)	11.5	1.5	5.5	(3.5)	13.0	13.5	8.0	0.88		
38	76	47	D	(22.0)	11.5	1.5	5.0	(2.0)	12.5	13.5	6.5	0.92		
41		47	D	(18.5)	(10.5)	0.5	5.5	2.2	14.5	14.5	9.0			
43		47	D	18.7	9.0	1.0	5.0	3.7	12.1	12.1	6.0	0.74		梵字(墨)
48	76	47	D	(23.5)	15.5	1.5	5.5	(1.0)	15.5	15.0		1.00		梵字(墨)
52	76	47	D	(28.0)	(14.0)	2.0	7.5	4.5	18.5	18.0	7.5			
61			D	28.0	12.0	1.0	10.5	4.5	15.5	15.5	7.0			
65			D	(20.2)					14.2					
Ⅹ— 25	53	26	A1	28.0	13.0	1.5	6.0	7.5	15.8	15.8	8.0	0.82		
66	54	27	A1	23.0	13.0	0	7.0	3.0	17.0	15.5	8.0	0.76	B	
74	54	27	A1	21.0	9.5	1.0	6.0	4.5	15.5		7.0	0.61		
1	76	47	D	28.0	15.5	0	8.0	4.5	17.0	18.0	9.5	0.91		梵字(墨)
8	76	47	D	22.0	14.0	0	6.5	1.5	15.0	13.0	5.5	0.93		
9		47	D	19.5	11.0	1.5	3.5	3.5	16.0	14.5	7.0	0.69		
11	76	47	D	(25.0)	(12.0)	2.5	7.0	3.5	14.5	15.0	6.5			
12		47	D	(18.5)	(9.0)	0	5.5	(4.0)	12.5	13.5	8.0			
14			D	(26.5)	11.0	1.0	6.5	8.0	(15.0)	16.5	9.0			
15		47	D	27.5	14.5	1.0	7.0	5.0	13.5	12.5	8.5	1.07		梵字(墨)
16			D	24.5	19.0	0	4.5	1.0	17.0	15.5		1.12		
18		47	D	34.0	17.5	1.5	8.0	7.0	17.0	17.0	9.0	1.03		
23			D	(20.0)	12.0	0	8.0		15.5	14.5		0.77		
26			D	(20.5)	11.0	3.5	5.0	(1.0)	17.0	17.0		0.65		
30			D	25.5	18.5	0	6.5	0.5	18.0	18.0		1.03		
32		47	D	26.0	11.5	1.5	5.5	7.5	13.5	12.5	8.0	0.85		
33		47	D	25.5	13.0	0	6.0	6.5	16.5	16.0	5.0	0.79		
35		47	D	25.0	17.5	1.5	4.5	(1.5)	17.5	17.0		1.00		
37			D	28.0	14.0	0	8.0	6.0	19.0	19.0	12.0	0.74		
39			D	27.0	16.0	0	5.0	6.0	15.5	15.5	7.0	1.03		
40		47	D	26.0	12.0	2.5	6.0	5.5	15.5	15.5	8.0	0.77		
41		47	D	28.0	11.0	0	7.0	5.0	17.5	17.0	8.0	0.63		梵字(墨)
43		48	D	25.5	16.0	0	6.0	3.5	15.0	14.5	6.0	1.07		
47		48	D	22.5	16.5	0	3.0	3.0	16.5	16.5	11.5	1.00		梵字(墨)
48④			D	(27.5)	(14.5)	3.0	5.0	5.0	15.0	15.5	8.2			
76			D	(19.5)	(12.0)	2.5	4.5	(0.5)	15.5	13.5				
87		48	D	28.5	15.5	0	7.0	6.0	18.0	18.0	7.0	0.86		
88④			D	(19.5)	(12.0)	0	(2.5)	(5.0)	11.0		6.0			

空風輪法量表(5)

区・番号	図面番号	図版番号	セット	法					差				石質	備考
				A	a	b	c	d	e	f	g	法量比		
X—89㋐	76	48	D	22.0	12.0	0	1.5	3.5	14.0	14.0	7.0	0.86	B	
89㋑		48	D	22.5	11.0	1.0	6.5	4.0	15.0	14.0	7.0	0.73		
91			D	21.5	13.0	1.5	4.5	2.5	13.5		6.0	0.96		
92	76	48	D	25.0	15.0	1.5	6.0	5.5	17.0	16.0	7.0	0.88		
110		48	D	25.0	13.0	0	6.0	6.0	16.5	16.0	7.5	0.79		
114		48	D	26.5	13.0	0	8.5	5.0	18.5	17.5	7.0	0.70		梵字(墨)
115		48	D	22.5	13.5	0	4.0	5.0	11.5	10.5	7.5	1.17		
117		48	D	(24.5)	14.5	2.0	8.0		20.0	19.5	0	0.73		
122		48	D	(25.0)	(13.0)	0	8.5	3.5	17.0	17.0	9.0			
125		48	D	20.0	9.0	1.0	6.0	4.0	14.5	14.0	7.5	0.62		
126		48	D	25.0	11.5	2.5	6.0	5.0	14.0	14.0	7.0	0.82		
127	76	48	D	(24.0)	14.5	2.0	4.5	(3.0)	16.0	16.0	7.5	0.91		梵字(墨)
128	76	48	D	29.5	18.0	0	6.0	5.5	16.5	17.0	9.0	1.09		
129		48	D	24.5	13.0	0	8.0	3.5	14.0	14.0	6.5	0.93		
164	76	48	D	20.5	9.0	0	7.0	4.0	13.5	14.0	7.0	0.67		梵字(墨)
165			D	(19.5)	11.0	1.5	7.0		14.0	(13.5)		0.79		
168			D	(21.5)	12.5	1.5	5.5	(2.0)	12.5	12.5	5.0	1.00		
169	76	48	D	26.5	17.0	0	4.0	5.5	12.0	12.0	8.5	1.42		梵字(墨)
XI—486	60		B3	30.6	13.8	1.8	9.0	6.0	13.0	13.8	6.0	1.06	B	
3			D	(23.0)	16.0	0	4.0	(3.0)	15.5	16.0	7.5	1.03		
7	76		D	31.0	14.0	2.5	6.5	8.5	16.0	18.0	9.0	0.88		
10		48	D	(24.0)	13.5	2.0	7.5	(3.0)	18.0	18.5	7.5	0.75		
13			D	(20.0)	14.0	1.5	4.5	(1.0)	15.0	15.0		0.93		
16			D	22.0	11.0	1.5	5.0	4.5	15.0	15.0	6.0	0.73		
17			D	(22.5)	(9.5)	0	6.0	7.0		16.0	11.0			
20㋐			D	29.0	21.0	0	7.0	(1.0)	17.0	17.0	8.0	1.24		
25			D	(20.0)	(20.0)				16.0					
26			D	22.0	13.0	0	4.5	4.5	14.0	14.0	8.0	0.93		
27			D	23.0	14.0	0	5.0	4.0	12.0	12.0	8.5	1.17		
28			D	(16.5)	(3.5)	0	8.0	5.0		16.0	9.0			
29			D	(28.0)	18.5	3.0	6.5		17.5	17.5		1.06		
31			D	(23.0)	(23.0)	0			(17.5)					
36			D	(20.0)	12.5	1.5	6.0		15.0	16.5		0.83		
37	76	48	D	27.5	15.5	1.0	5.0	6.0	16.0	15.5	7.5	0.97		
41			D	(25.5)	14.5	0	(11.0)		15.5	15.5	10.0	0.94		
49			D	(25.0)	(10.0)	4.0	7.0	(4.0)	(19.5)	19.5	6.5			
52	76		D	(27.0)					18.0	12.0				
54		48	D	21.0	11.5	0	5.0	4.5	15.0	15.0	9.0	0.77		
64			D	26.5	17.5	0	6.0	5.0	13.0	14.0	7.0	1.35		
65			D	(30.5)	12.0	0	7.5	(6.0)	13.5	12.0	8.0	1.26		
66			D	(21.5)	(12.0)	2.0	5.5	(2.0)	15.0	15.5	7.0			
70		48	D	(24.5)	(17.0)	0	6.5	(1.0)	17.0		7.5			
80			D	(25.0)	(15.0)	0	7.0	3.0	13.5	13.5	7.5			
88		48	D	25.5	14.5	0	5.5	5.5	11.5	13.0	9.0	1.26		
89			D	(37.0)	21.0	3.5	8.5	(4.0)	16.5	16.0	11.0	1.27		
94			D	(24.5)	16.0	3.0	4.0	1.5	15.5	16.5	7.0	1.03		
98			D	(22.5)	(15.0)	0	7.0	(0.5)	17.5	19.0	8.0			
102		48	D	29.0	17.0	0	5.0	7.0	16.0	15.5	10.0	1.06		
107			D	(29.0)	18.0	0	7.0	(4.0)	16.5	18.0	10.0	1.09		
111	76		D	(22.5)	16.5	0	5.0	(1.0)	15.0	15.5		1.10		
116			D	30.0	17.5	2.5	4.5	5.5	16.5	17.0	8.5	1.06		
141			D	24.0	13.0	2.0	4.0	5.0	17.0	17.0		0.76		
142		48	D	32.0	18.0	2.0	6.5	5.5	16.0	17.0	9.5	1.13		
144	76		D	36.0	21.0	0	8.0	7.0	21.0	21.0	11.0	1.00		
147			D	(22.0)	(22.0)				14.0					
149	76	49	D	28.0	21.0	0	3.0	4.0	15.0	15.5	10.0	1.40		
150			D	28.0	22.0	0	3.0	3.0	16.5	16.5	9.5	1.33		
151		49	D	36.5	19.5	0	11.5	5.5	20.0	20.0	9.0	0.98		
153			D	30.5	16.5	0	8.0	6.0	15.5	15.0	9.0	1.06		
154		49	D	26.0	15.0	0	6.0	5.0	15.0	15.0	8.0	1.00		
155	76	49	D	32.5	16.0	2.5	9.5	4.5	15.0	14.5	9.0	1.06		
156		49	D	22.0	13.0	0	4.0	5.0	16.0	16.0	9.5	0.81		
161			D	(17.0)	13.0	0	(4.0)		13.0			1.00		
172			D	(20.5)	10.0	(2.0)	4.0	(4.5)	10.5	10.5	5.5	0.95		
173	76		D	(17.0)	9.0	0	5.0	(3.0)	18.5	19.0	11.0	0.49		
174			D	(25.0)	(14.0)	0	7.0	4.0	11.0	13.5	8.0			
177		49	D	34.5	23.0	0	7.0	4.5	19.5	17.5	8.5	1.18		
178			D	(27.0)	16.5	2.5	6.0	(2.0)	17.5			0.94		
179	77	49	D	37.5	22.5	0	10.0	5.0	16.5	17.0	8.0	1.36		

空風輪法量表(6)

区・番号	図面番号	図版番号	セット	法量									石質	備考
				A	a	b	c	d	e	f	g	法量比		
XI—180		49	D	30.8	15.0	0.5	6.5	8.8	14.5	15.5	9.8	1.03		
190	77		D	28.0	19.0	0	5.0	4.0	14.5	14.5	10.0	1.31		
191			D	(26.5)	20.0	0	3.5	(3.0)	14.0	14.0	8.0	1.43		
195			D	25.0	15.0	0	6.0	4.0	14.0	14.0	9.0	1.07		
203			D	(22.0)	16.0	0	6.0		14.0	14.0		1.14		
204			D	30.5	19.0	0	5.0	6.5	16.5	(18.0)	9.0	1.15		
205			D	(19.0)	11.0	1.5	6.0	(0.5)	14.5	15.5	8.0	0.76		
213		49	D	26.0	13.5	2.5	4.0	6.0	13.0	14.0	6.0	1.04		
214			D	(24.0)	15.0	0	8.0	(1.0)	15.0	14.5		1.00		
215			D	29.0	15.0	0	8.0	6.0	15.5	15.5	11.0	0.97		
218	77	49	D	27.0	12.5	0	8.5	6.0	18.0	17.5	9.0	0.69		
219			D	(15.5)	(15.5)				15.5					
235			D	(17.0)	16.0	(1.0)			15.5			1.03		
278			D	(22.0)	14.0	0	5.0	(3.0)	15.5	16.5	7.5	0.90		
323		49	D	28.0	11.5	2.5	7.0	7.0	13.0	13.0	8.0	0.88		
356	77	49	D	(18.5)	11.5	1.0	4.5	1.5	13.5	13.5	7.5	0.85		
357			D	24.5	11.5	0	7.5	5.5	13.5	14.0	8.5	0.85		
388		49	D	(22.0)	14.0	2.0	5.0	(1.0)	14.0			1.00		
408	77	49	D	(33.0)	22.0	0	7.0	(4.0)	14.0	13.5	6.5	1.57	B	
413			D	20.5	13.0	0	5.5	(2.0)	12.5	12.0	7.5	1.04		
441	77	49	D	27.0	17.0	0	4.5	5.5	14.5	14.5	9.5	1.17		
460㋐		49	D	25.0	12.5	0	9.5	3.0	17.0	16.5	6.0	0.74		
480㋐	77	49	D	31.5	20.0	0	6.5	5.0	14.8	15.8	14.0	1.35	B	梵字(墨)
487	77		D	(24.0)	13.5	0	6.5	(2.0)	15.0	15.0		1.03		
495		49	D	29.0	17.5	0	5.0	6.5	14.5	14.5	8.5	1.21		
613			D	(20.5)	12.5	0	7.0	(1.0)	14.0	14.0	7.0	0.89		
705		49	D	21.5	12.5	2.0	7.5		16.0	16.0		0.78		
706		49	D	35.0	19.5	4.0	11.5		18.5	19.0		1.05		
708	77	49	D	22.0	15.0	1.0	4.0	7.0	17.0	17.0	9.0	0.88	B	
730			D	23.5	16.5	2.0	7.0		18.0	18.0		0.92		
732			D	(22.5)	(10.0)	0	(7.5)	(5.0)	15.0	15.0	10.0			
734			D	(21.1)	(9.5)	0	8.0	(3.5)	15.5	15.5	8.9			
736			D	(17.0)	(9.0)	3.5	4.5			(16.0)				
764			D	(24.0)	(19.5)	0	(4.5)		(15.5)	14.0				
784		49	D	32.0	19.0	0	6.0	7.0	15.5	16.0	8.5	1.23		
XI— 18	69		C1	24.4	16.0	0	3.5	4.9	15.0	14.2	6.2	1.07		
4	77	49	D	28.5	19.0	0	5.5	4.0	16.0	15.0	7.5	1.19		
7	77	49	D	35.5	25.5	0	8.0	2.0	21.0	19.0	7.0	1.21		
8	77	50	D	29.0	17.0	0	5.0	7.0	13.5	13.0	9.0	1.26		
9	77	50	D	(25.0)	17.5	0	6.0	(1.5)	16.0	16.5		1.09		
19		50	D	(25.0)	15.0	1.5	5.0	(3.5)	17.0	17.0	9.0	0.88		
22			D	(19.0)	14.0	0	(5.0)		13.5			1.04		
27		50	D	25.0	13.0	0	7.0	5.0	15.5	16.0	6.5	0.84		
34		50	D	25.5	13.0	0	7.5	5.0	14.0	14.0	8.0	0.93		
39		50	D	29.5	19.0	0	6.5	4.0	16.0	16.0	8.0	1.19		
47		50	D	(24.0)	(15.0)	0	6.5	(2.5)	15.0	14.5	6.0			
52		50	D	24.5	13.5	1.0	5.5	4.5	14.0	13.0	5.5	0.96		
57	77	50	D	29.5	13.5	1.0	9.5	5.5	17.0	16.0	9.0	0.79	B	
65			D	(26.0)	(13.5)	0	6.8	5.0	13.5	14.0	8.0			
69	77	50	D	(25.0)	(13.0)	0	7.0	5.0	13.5	14.0	7.5		B	
101	77	50	D	22.0	10.5	1.0	7.5	3.0	14.0	13.5	5.0	0.75		
102	77		D	(18.0)	13.0	0	4.5	(0.5)	9.5	15.5		1.37		
106			D	23.0	14.0	0	5.0	4.0	15.5	14.5	9.0	0.90		
XII— 13	77	50	D	30.0	14.0	0	12.0	4.0	19.0	22.5	9.0	0.74		
29	77	50	D	32.0	(15.5)	2.5	8.0	6.0	21.5	23.0	8.0			
30	77	50	D	(32.0)	(21.0)	1.5	9.5	0	22.0	22.0	0			
32	77	50	D	(30.0)	17.0	1.5	10.0	1.5	22.0	22.0	11.0	0.77		
33	77		D	(30.5)	(18.0)	3.0	9.5		25.0					
XIV—212	77		D	18.0	6.0	0		12.0	13.2	13.8		0.45		
221			D	29.5	14.5	1.0	9.5	4.5	18.5	14.0	13.0	0.78		
222			D		11.0	0	5.5		14.0	14.0	6.0	0.79		
223			D	(20.0)	(13.0)	0	7.0		13.5	15.0	6.5			梵字(墨)
224			D	31.6	15.0	2.5	7.0	6.1	21.6	21.6	8.5	0.69		
225	78		D	25.5	14.0	1.5	4.5	5.5	16.5	16.0	8.0	0.85		
226	78		D	28.5	15.5	1.5	7.5	(3.5)	(19.5)	21.5	10.0			
227			D	(24.0)	17.0	0	5.0	(2.0)	16.0	15.0	7.0	1.06		
229			D	(22.0)	15.5	1.5			17.0			0.91		
232			D	29.0	17.5	0	12.5	4.0	14.0	16.0	9.0	1.25		
234	78	51	D	(22.0)	11.0	2.0	7.0	(2.0)	16.5	16.0		0.67	B	

空風輪法量表(7)

区・番号	図面番号	図版番号	セット	法量									石質	備考
				A	a	b	c	d	e	f	g	法量比		
XW−235	78	51	D	27.5	15.0	2.0	5.0	5.5	14.5	15.0	9.0	1.03	B	
236	78	50	D	(22.0)	(8.0)	2.0	6.0	6.0	12.7	12.8	7.7			
237	78	50	D	22.5	11.5	0.5	7.0	3.5	12.0	13.5	6.0	0.96		
238	78	50	D	(24.0)	13.0	0	10.5	(0.5)	16.5	18.0	8.5	0.79	B	
239	78	50	D	(21.0)	(12.0)	0	(9.0)		15.5	15.5			B	
240	78	50	D	(25.5)	(13.5)	0	7.5	4.5	14.2	15.4	8.3			
241	78	50	D	(24.5)	14.5	0	6.0	(4.0)	17.0	18.0	7.3	0.85		
242	78	50	D	24.0	8.0	1.0	9.5	5.5	12.5	12.5	6.5	0.64	B	
243	78	50	D	(17.0)	10.5	0	3.5	(3.0)	15.5	15.5	7.5	0.68	A	
244	78	50	D	(25.0)	(15.5)	0	6.0	3.5	16.5	16.0	7.0		B	
245	78	51	D	24.0	12.5	1.0	5.5	5.0	15.0	14.5	7.5	0.83	B	
246	78	51	D	(20.5)	12.5	0	5.0	(3.0)	13.5	14.4	13.0	0.93	A	
247	78	51	D	(19.5)	12.5	0	3.5	(3.5)	13.5	(13.0)	7.0	0.93		
248	78	51	D	(25.0)	15.0	0	6.5	(3.5)	15.0	14.0	7.0	1.00	C	
249	78		D	23.0	11.5	0.5	6.0	5.0	14.5	14.5	7.0	0.79	A	
250	78		D	(27.0)	(11.0)	0	11.0	5.0	14.0	15.5	8.2			
252	78		D	(24.0)	(11.5)	2.0	6.0	(4.5)	15.5	15.0	6.5		B	
253	78		D	26.0	15.0	0	5.5	5.5	18.0	18.0	7.0	0.83		
254			D	(13.5)	9.0	0	4.0	(0.5)	12.5	12.8	5.5	0.72	C	
256	78	51	D	29.0	14.0	0.5	8.5	6.0	20.5	20.5	10.5	0.68		
257			D	(22.5)	(12.0)	2.5	6.0	2.0	15.5	14.5	7.0			
258			D	(21.5)	12.0	0	8.5	(1.0)	15.0	15.0	7.0	0.80		
259			D	27.0	14.5	2.0	6.0	4.5	12.0	12.0	6.5	1.21		
260			D	(25.1)	(14.5)	0	9.5	(1.1)	19.0	19.0	9.2			
261			D	(22.0)	(13.0)	0	4.5	(4.5)	15.0	14.0				
262			D	(17.5)	11.0	0	5.5	(2.0)	14.0	14.0	6.5	0.79		
263			D	(23.5)	15.0	0	4.5	(4.0)	15.0	15.0	7.0	1.00		
264			D	(25.0)	(12.5)	2.5	5.5	4.5	12.0	12.5	8.5			
265			D	25.0	14.0	2.0	6.0	3.0	15.0	15.0	9.0	0.93		
266			D	(19.5)	(10.0)	0	5.5	12.0	14.0	16.5	7.5			
267			D	(23.5)	15.5	0	6.0	(2.0)	15.0	14.5	8.5	1.03		
268			D	23.9	18.0	0	5.9		15.8			1.14		
270			D	(17.0)	(13.0)	(4.0)								
271			D	(18.8)	12.5	0	5.5	(0.8)	12.9		5.0	0.97		
272			D	(25.0)	21.0	0	2.3	(1.7)	15.5	15.0	6.5	1.35		
273			D	(26.5)	(12.0)	0	9.5	5.0	15.5	15.5	8.0			
274			D	(27.0)	15.0	0	(8.0)	(4.0)	14.5			1.03		
275			D	20.0	14.0	0	2.0	4.0	13.5	13.5	8.5	1.04		
276			D	(13.0)	9.0	0			10.2			0.88		
277			D	(18.0)	(12.5)	0	5.5		14.5	15.0				
278			D	(23.0)	(14.0)	2.0	5.0	(2.0)	21.0	19.5	7.0			
279			D	19.0	10.0	1.5	4.0	3.5	14.0	14.0	6.8	0.71		
280			D	(16.0)	11.5	0	4.0	(0.5)	14.0	14.0	6.0	0.82		
284			D	30.0	13.0	2.0	8.0	7.0	14.2	14.2	10.5	0.92		
286			D	(21.5)	(13.5)	0	5.0	(3.0)	15.0	13.5	9.0			

空風輪法量表(8)

区番号	図面番号	図版番号	セット	法 B	h	i	j	k	量 ℓ	m	n	o	p	q	r	歯車形	枘穴	石質	備考
1-31	41		A1	18.0	6.6	10.4	1.0	11.0	1.4	12.8	9.0	15.8	34.0	15.8	8.4	0.53	丸		
38	41	16	A1	14.8	4.0	10.0	0	10.0	1.2	15.0	12.0	16.4	35.0	16.8	6.2	0.42	丸		
50㊀	41	16	A1	19.1	8.7	7.8	2.5	10.8	4.1	16.2	9.5	18.2	31.9	19.0	(6.0)		角		
51	56		A1	15.0	9.2	4.1	1.1	6.2	2.6	17.2	10.2	18.6	37.8	18.2	6.4	0.40	丸		
35	40	30	A2	17.4	7.3	8.0	0.9	8.6	(2.4)	15.5	10.0	17.9	40.0	(18.4)	6.5	0.44	丸		△
36	40	27	A2	17.2	6.0	9.0	0.8	10.0	2.6	20.0	12.0	17.5	38.0	18.0	8.0	0.45	丸		
30	41	29	A3	18.5	4.4	12.5	1.0	9.8	4.8	19.0	12.6	17.0	35.4	17.5	8.0	0.52	丸		
33	40	29	A3	16.0	9.4	6.0	0.4	7.2	2.0	20.0	10.0	17.0	36.6	18.0	9.0	0.44	丸		
34	40	29	A3	16.5	5.8	10.5	0.2	9.4	1.7	23.1	13.0	21.0	42.5	20.6	10.0	0.39	丸		
32	56	34	B6	11.9	4.9	5.1	0.6	4.2	1.3	21.0	10.2	17.0	34.1	16.9	5.2	0.35	丸		
47㊀	61	29	C3	14.7	5.8	7.2	0.6	7.5	2.5	29.1	11.3	21.2	44.4	21.0	6.4	0.33	丸		△
7	85		D	16.8	17.0	9.6	0			18.8	10.8		42.2		7.8	0.44	角		
8			D	16.5	5.5	9.5				13.0	8.0		33.0		7.0	0.50	丸		
13		56	D	23.0	(12.0)	(9.5)				21.0	11.5		51.0		8.0	0.45	角		
14	85		D	25.0	10.3	12.7	1.6	6.9	8.2	16.6	12.2	22.6	47.6	23.0	7.9	0.53	丸		
15			D	26.5	20.0	6.5				23.5	10.0		53.5		7.5	0.50	丸		
19		56	D	22.0	13.0	8.5				26.0	10.0		55.0		9.0	0.41	角		
25			D	17.0	15.5	0		0		(26.5)	10.5	0	(46.5)		9.0		丸		
26㊀			D	11.5	11.5	0		0		25.5	7.5		32.5		3.0	0.35	丸		
29㊀	86	56	D	16.7	14.9	0	1.0	0	3.6	23.4	10.2	18.7	38.9	18.7	7.3	0.43	丸		
37㊀	85		D	10.2	5.0	4.6	0.6	4.0	3.6	26.0	9.3	19.9	40.4	20.0	5.0	0.25	丸		
48㊀	85	30	D	14.7	5.7	9.0	0	6.0	1.3	13.2	9.8	14.1	34.1	14.0	7.3	0.43	角		△
50㊀	85		D	15.0	10.0	3.8	0.8	(4.0)	4.8	17.2	10.0	(18.0)	37.8	18.2	6.2	0.40	丸		
86		56	D	10.8	3.9	4.3	1.0	4.0	3.3	25.8	9.4	18.0	40.4	18.4	5.7	0.27	丸		
90	85	56	D	15.8			0.9	5.1	2.4		8.1	17.1	38.6	18.5	5.0	0.41	丸		
94			D	(21.0)	12.0	9.0				22.0	9.0		(18.0)				丸		
95			D	17.0	7.0	7.0				16.5	10.5		44.0		8.5	0.39	角		
Ⅱ-35	42	16	A1	22.9	12.9	4.6	5.0	9.0	1.0	13.3	9.8	18.1	36.6	16.3	8.3	0.63	丸		
51	42	16	A1	19.4	12.4	5.0	0.4	7.0	1.5	17.8	8.4	18.0	38.7	17.4	4.8	0.50	丸	B	
55	42	17	A1	20.2	18.4	0	1.6	0	2.2	16.2	9.4	18.2	37.6	18.2	5.0	0.54	丸	B	
73	42	17	A1	22.6	16.0	5.0	1.1	3.3	3.5	15.3	10.5	17.4	39.4	18.0	9.9	0.57	丸		
116	43	17	A1	20.0	11.0	6.2	1.0	9.8	2.0	13.5	8.6		35.0	15.8	6.0	0.57	角	B	
75	43	30	B1	27.1	15.2	6.5	0.5	5.8	3.0	18.7	9.3	18.7	38.8	18.2	7.9	0.54	丸	A	
52	56	30	B5	19.9	10.1	6.9	1.5	4.2	4.0	14.0	9.2	18.0	38.8	18.7	4.1	0.51	角	B	
61	56		B5	20.1	12.8	4.8	0.5		2.3	12.5	8.2	15.4	35.2	14.6	6.4	0.57	丸	B	
67	56	30	B5	14.4	6.5	7.0	0		0.4	11.2	7.0		28.0		3.8	0.51	角	B	
74	56	56	B5	25.0	17.2	6.2	1.6	8.0	3.8	23.8	14.0	24.1	50.3	23.6	10.6	0.50	丸	B	△
85	57	31	B6	13.7	5.6	7.1	0.9	6.3	3.0	16.3	7.9	19.3	35.5	19.8	3.7	0.39	丸		
93			B5	15.6	5.8	9.8	0	8.0	0	11.8	8.0	18.0	36.8	15.6	9.2		丸		
23			D							16.0	9.0				6.5		丸		
33	86		D	23.0	13.4	9.4	0	13.2		24.4	11.1		45.0		8.0	0.51	丸		
38㊀	86		D	15.3	4.1	9.3	1.5	5.4	2.1	23.7	9.8	18.2	39.5	18.4	6.2	0.39	丸		
40	86		D	19.4	11.0	2.4	6.0	5.4	2.4	14.4	6.6	16.6	40.0	16.4	5.8	0.49	丸		
86㊀			D	12.5	4.5	8.0				15.1	9.4				5.0		丸		
Ⅱ-28	43	17	A1	14.2	7.6	4.6	0.4	6.6	0.8		9.0	16.8	36.4	16.8	7.8	0.39	丸		
31	43	18	A1	17.0	(8.0)	(7.6)	(1.2)	7.2	4.4	15.6	9.2	18.0	(36.0)	17.8	9.4		角		
34	44	18	A1	21.4	12.1	8.7	0	8.3	0.4	13.0	8.9	16.3	34.1	14.5	7.6	0.63	丸		
108	86	56	D	26.3	20.1	6.4	0.8	7.0	1.5	14.8	9.2	17.8	41.0	17.7	5.3	0.65	丸		
5	86		D	18.5	13.5	(2.5)				13.5	9.0		36.0		3.5	0.51	丸		
6	86	56	D	22.9	15.8	6.0	0.7	3.4	3.7	16.4	8.8	17.1	35.3	15.1	5.6	0.65	丸		
48	86	56	D	18.2	9.6	(7.3)	(1.5)	6.5	2.2	16.6	10.2	19.1	39.6	19.4	8.4	0.46	丸		
	86	56	D	23.6	13.6	7.8	1.0	7.0	3.2	18.0	9.6	18.8	41.0	18.4	5.8	0.58	丸		
	86	56	D	12.6	7.3	4.8	0.2	5.3	1.4	11.1	8.2	16.4	36.8	16.5	3.5	0.34	角		
Ⅳ-23	45	18	A1	16.4	9.3	6.0	0.6	5.4	1.3	22.8	10.8	17.4	39.4	18.1	6.9	0.42	丸		
24	57	31	A1	19.5	9.1	5.4	2.7	8.8	4.0	20.0	8.7	20.1	41.8	19.2	8.2	0.47	丸		
62	45	18	A1	17.8	13.2	7.2	1.4	8.4	1.4	20.2	9.6	19.8	40.6	20.0	6.6	0.44	丸	B	
64	51	19	A1	20.6	11.2	(8.0)	(0.5)	8.2	(1.8)	16.2	10.0	19.0	41.2	17.2	6.0	0.50	角	B	梵字(蓮)
65	45	19	A1	19.6	13.8	(4.0)	0	4.0	2.0	15.0	8.0	16.3	33.6	16.8	5.6	0.58	丸	B	
70		19	A1	18.8	8.2	7.8	0.8	8.8	2.6	15.2	9.8	16.0	35.2	16.4	6.8	0.53	丸	B	
71	44	19	A1	15.4	9.8	2.6	2.6	3.0	4.2	(14.4)	8.6	17.0	37.8	17.6	5.0	0.41	丸		
72	44	20	A1	21.0	(12.5)	7.8	0	6.6	1.2	16.0	9.0	17.6	(38.0)	16.2	4.4		丸	B	
74	44	20	A1	19.6	(10.0)	8.4	0.6	(10.4)	1.0	(16.6)	(8.0)	(16.2)	35.6	15.8	6.0	0.55	丸	B	
75	45	20	A1	16.2	11.0	3.0	2.5	5.2	5.0	12.4	9.0	16.3	35.1	16.2	6.0	0.46	角	B	
78	46	20	A1	18.2	7.8	8.8	0	10.0	1.8	16.0	9.2	16.0	36.2	16.0	6.0	0.50	角	B	
79	46	21	A1	19.2	(9.6)	7.0	1.8	6.2	3.6	(13.4)	8.6	17.9	36.8	16.0	5.0	0.52	丸	A	
80	46	21	A1	19.0	9.4	7.2	1.2	(7.0)	5.2	14.2	9.6	18.6	37.8	18.4	(6.8)	0.50	丸	B	
85	46	21	A1	13.4	4.8	7.4	0	7.4	3.0	(17.0)	9.2	17.3	34.8	17.2	4.6	0.39	丸	B	梵字(蓮)
86	47	21	A1	20.7	12.0	6.4	1.6	4.5	3.5	17.1	9.1	16.9	37.7	17.8	5.2	0.55	丸	B	
91	47	22	A1	18.4	6.0	6.2	1.8	7.6	3.8	15.6	8.4	18.4	39.0	17.2	4.8	0.47	丸	B	
96	47	22	A1	18.4	11.2	5.0	1.2	5.0	1.8	16.0	9.0	17.0	34.8	15.0	5.6	0.53	角	B	
97	48	22	A1	(15.6)	9.0	3.8	2.2	3.4	5.8	(13.6)	8.0	15.0	36.8	17.2	6.8		丸	B	
99	47	23	A1	25.6	20.8	4.2	0	10.2	1.6	(21.0)	11.0	21.8	42.0	19.4	(6.8)	0.61	丸	A	
100	48	23	A1	19.9	9.5	8.9	1.2	10.2	0.7	17.1	10.5	19.2	42.0	19.2	8.3	0.47	丸	B	
125㊀	48	23	A1	17.3	12.4	3.4	1.0	2.2	2.2	14.4	9.8	18.4	38.8	17.8	6.0	0.46	角	B	
126	49	23	A1	25.0	15.0	7.0	4.0	9.8	3.0	13.8	11.0	19.1	40.8	19.0	6.5	0.61	角	B	
127	48	24	A1	19.3	12.3	6.0	0.8	7.5	1.3	19.8	9.2	19.8	41.8	18.9	5.8	0.46	丸	A	梵字(蓮)
131	49		A1	10.6	4.7	5.1	0.7	3.2	2.7	18.5	9.2	14.3	34.5	14.2	6.8	0.31			梵字(蓮)
19	49	27	A2	13.4	6.4	(5.2)	(0.6)	8.4	2.0	19.0	10.0	18.6	39.4	19.0	7.2	0.34	丸	A	
20	50		A2	16.2	6.6	7.0	1.0	6.8	1.9	17.0	12.2	22.6	44.8	22.0	9.0	0.36	丸	A	
21	50	28	A2	18.1	7.6	7.2	1.1	(4.4)	4.9	22.9	11.1	(22.3)	44.6	22.3	4.8	0.47	丸		
22	51	28	A2	17.4	(6.8)	(8.4)	(1.2)	(10.0)	0	13.2	10.2	20.4	45.4	(21.0)	6.4	0.38	角	B	

火輪法量表(1)

区番号	図面番号	図版番号	セット	法 B	h	i	j	k	量 ℓ	m	n	o	p	q	r	歯直比	軟穴	右質	備考
W-27	57		B1	22.4	12.1	6.8	3.5	9.0	4.0	14.2	10.2	19.8	38.9	19.6	7.0	0.58	無鍍丸		
69	57	31	B5	12.6	(9.0)	(3.0)		0	(3.8)	0	16.4	8.0	14.4	30.0	14.0	3.2	0.42	丸	C	
81	57	56	B5	30.4	20.9	8.0	2.3	9.5	4.5	16.3	8.8	22.6	48.5	22.8	3.8	0.63	丸		△
92	57	31	B5	20.4	12.4	6.0	0.6	7.6	4.6	15.4	10.4	16.4	38.4	18.6	5.2	0.55	丸		
110	93	31	B5	18.2	10.0	6.9	1.3	3.2	6.2	16.2	10.1	20.7	40.6	20.7	6.6	0.45	丸	A	
98	63	34	C3	22.4	20.5	0	1.3	0	2.8	16.3	9.7	0	31.1	15.6	6.2	0.72	丸		
2			D	20.5	9.2	8.5	1.8			17.5	8.0		39.0		7.5	0.53	角		
40	86		D	22.6	11.5	7.2	2.6	7.3	4.5	15.0	9.8	19.5	39.5	18.9	6.4	0.57	丸	A-B	
76			D	12.2	7.6	4.6	0	3.8	1.4	13.0	7.7	13.0	(27.0)	13.8	4.6		角		
93	87		D	16.6	11.8	2.6	2.0	5.2	1.4	14.0	9.0	18.0	37.0	17.0	6.0	0.45	丸	B	
130	87		D	21.3	11.5	6.6	2.9	7.5	3.1	14.7	10.1	17.1	37.5	17.2	5.0	0.57	角	B	
205			D	17.0	5.2	11.6				17.5	9.0		36.0		6.1	0.47	丸		
221		56	D	17.0	(16.6)	0	0	0	2.0	24.0	10.0	19.0	36.0	19.0	(8.8)	0.47	丸		
222	87		D	22.6	10.4	10.0	0	10.2	1.0	21.0	9.0	19.8	40.0	19.4	8.2	0.57	角		
234	87		D			9.7	0	11.0	0.4		9.8	19.3	40.2	19.2			角	B-A	
236	87		D	17.0	5.6	11.4	0	10.2	1.5	17.6	9.0	17.7	36.4	17.2	6.9	0.47	丸	B	
237	87		D	15.8	7.8	6.4	1.4	6.8	2.6		6.8	13.6	29.8	13.8	3.8	0.53	丸		
238	87		D	30.6	19.0	9.0	1.8		5.0		10.6		52.6		6.0	0.58	丸	B	
241	87		D	17.5	5.4	9.0	0	10.5	1.2	19.8	13.0	19.8	42.2	19.8	10.0	0.41	丸	B	
W-17	51	24	A1	21.8	(12.0)	(4.5)	(3.6)	7.1	3.4	14.3	9.7	19.2	(41.7)	19.9	6.4		無鍍丸		
19	52	24	A1	15.0	10.9	2.4	0.6	6.0		18.3	11.3	16.5	34.0	(15.5)	5.4	0.44	丸	B	
1	87		D	22.6	14.1	6.8	0.6	7.5	1.5	18.0	8.8	18.3	38.6	16.2	7.4	0.59	丸		
4	88		D	(11.4)	(5.6)	(3.4)	(0.5)	4.6	2.4	12.6	(8.0)	16.4	35.2	16.6	(5.0)		丸	B	
20	88		D	20.0	(11.7)	(7.5)	(1.0)	(6.0)	3.0	16.1	8.0	17.5	35.6	16.5	(4.2)	0.56	丸	B	
22			D	18.5	11.5	7.0				12.0	6.5		28.2		4.0				
29	88		D	14.0	5.7	6.8	1.5	6.8	1.4	9.9	6.9	13.0	29.7	13.4	4.5	0.47	丸		
39			D	17.5	13.5	4.0				18.5	10.0		39.5		7.5	0.44	丸		
W-13	52	25	A1	15.8	10.4	4.8	0	(4.3)	0.8	12.0	8.2	15.5	35.0	13.9	6.2	0.45	丸	A-B	
141	52	25	A1	16.5	11.0	4.5	0	3.4	2.0	15.9	8.3	16.4	36.6	16.2	4.6	0.45	丸	A-B	
99	58		B5	26.7	15.2	7.6	2.4	4.5	5.5	15.7	10.2	22.0	44.1	21.9	9.5	0.61	丸	A	
108	58	32	B5	16.2	9.0	(3.8)	(1.2)	3.1	3.5	14.0	10.0	15.2	35.0	15.3	4.7	0.46	丸	B	
109	58	32	B5	14.5	8.2	3.5	2.7	5.8	0.7	17.5	8.9	17.6	34.7	16.5	5.7	0.42	丸	A	
112	58	32	B5	15.5	9.3	4.7	0	6.0	3.0	(18.9)	9.1	15.0	36.9	17.0	4.7	0.42	丸	B	
121	58	32	B5	(18.0)	(7.7)	5.8	0.6	7.0	0.5	(18.6)	10.0	14.4	32.1	(14.5)	(5.6)		丸	B	
126	58	34	B5				6.0	1.5	1.4	2.2	9.6	14.0	31.0	12.2			丸		△
106	60	64	C3	23.3	11.4	9.4	1.2	10.3	3.5	13.6	8.7	19.8	44.7	17.5	6.5	0.52	丸		
113	64	34	C3	11.3	5.5	5.8	0		2.0	11.0	7.0		26.8	12.5	4.8		丸	B	
167	64		C3	15.7	6.6	6.8	1.0	7.8	2.5	11.8	9.4	14.5	31.5	14.4	7.7	0.50	無鍍丸		
10			D	14.0	8.0	5.5	0.5			23.5	11.0		38.0		7.0	0.37	丸		
11			D	15.3	6.0	7.0	0.6			(17.0)	9.8		35.0		6.0	0.39	丸		
67	89	56	D	18.4	12.7	4.4	0.5	(5.5)	(0.4)	10.1	7.8	14.7	30.3	13.7	3.8	0.61	丸		
96			D	15.0	11.5	3.5				16.5	9.5		32.0		8.5	0.47	丸		
105	88	32	D	21.9	(12.8)	(6.1)	(3.0)	6.5	6.6	15.2	9.5	18.1	39.4	17.9	6.0	0.56	丸	B	△
122	88		D	13.5	8.5	5.0				13.0	10.0		29.5		7.5	0.46	無鍍丸	B	
124			D	13.5	6.0	5.5				14.0	6.5		32.0		7.5	0.41	丸		
131	88	56	D	16.3	7.0	7.5	0.6	5.5	2.2	14.8	10.2	14.8	34.7	15.1	4.8	0.47	丸	B	
133	88	56	D	22.5	13.0	6.7	2.8	5.9	4.5	12.4	8.7	19.7	44.8	20.9	7.5	0.50	丸		
135	88	56	D	18.4	9.6	7.2	0.8	6.0	2.1	16.1	9.4	15.8	35.5	14.7	8.5	0.52	無鍍丸	B	
138	88	56	D	21.0	14.5	4.2	2.3	4.5	2.5	17.4	9.3	18.9	39.1	18.1	7.2	0.54	丸	B	
139	89	56	D	20.1	12.3	6.1	0.9	7.0	0.9	15.1	8.0	18.7	37.1	16.8	5.0	0.54	丸		
140	89	56	D	18.0	11.7	3.8	1.1	5.4	2.3	16.6	8.4	17.8	35.6	17.5	6.1	0.51	長丸	B	
152	89		D	17.5	13.3	3.7	0.5	3.5	2.6	18.5	10.4	19.0	39.6	19.7	7.6	0.44	丸		
158			D	17.9	12.9	4.0	0.3	3.5	2.5	18.4	10.0	19.3	39.5	19.0	7.7	0.45			
159	88	56	D	14.2	9.4	4.0	0.5	5.7	(2.8)	21.3	9.4	15.4	34.0	14.5	5.0	0.42	丸	C	
W-18	52	25	A1	20.1	10.5	6.5	1.5	7.3	1.1	14.2	9.9	18.9	39.9	19.0	6.2	0.56	丸	B-C	
142	89	30	B1	12.9	6.2	4.1	0.6	6.1	2.7	23.4	10.1	16.0	36.9	15.8	5.8	0.38	丸	B	
80	59	32	B5	13.5	9.3	4.2	0	(4.8)	0.2	(16.5)	(8.0)	(16.5)	38.5	17.8	(5.0)	0.35	丸	B-A	
141	59	33	B5	14.2	6.0	6.0	0	5.0	0	18.2	8.1	17.2	32.7	15.8	4.2	0.43	丸	A	
149	59	33	B5	13.4	7.7	4.8	0.5	5.7	1.7	14.0	8.9	15.7	31.3	15.5	4.9	0.43	角	B	
73	65	34	C3	13.1	6.8	5.8	0.4	6.3	2.4	13.3	7.1	17.0	33.9	16.5	5.7	0.39	丸	B	
1			D	14.0	14.0	0	0			16.5	7.9		(38.0)		7.0		丸		
2			D	19.0	10.5	6.5	0.5			7.4	7.0		36.0		5.0	0.53	丸	B	
11		57	D	18.0	9.3	7.5	0.5			14.4	7.0		34.2		5.0	0.53	角	B	
12			D	18.0	13.5	4.5				(15.5)	10.0		41.0		6.0	0.44	丸	B	
44			D	16.0	9.1	5.4	1.5			14.0	9.0		39.2		6.0	0.41	丸		
53	89	57	D	24.2	20.4	3.2	0.7	3.9	2.2	12.7	9.1	16.4	32.9	14.9	6.3	0.74			
73	89	57	D	10.7	3.1	5.2	0.4	4.4	2.7	12.2		0.14	29.9	13.3	0.0	0.36	丸	B	
98	89	57	D	17.2	4.5	11.3	1.1	7.0	1.7	18.5	11.0	14.0	30.7	13.8	6.5	0.56	丸	C	
120	89		D	16.2	9.7	6.5	0.5	8.0	1.2	11.6	7.8	14.7	39.0	14.4	4.2	0.42	角		
135	89		D	19.0	11.3	5.9	0.9	5.4	1.0	17.0	9.4	18.5	39.6	18.0	5.0	0.48	丸	B	
146			D	16.3	6.3	8.5	1.5			14.9	9.5		30.5		3.0	0.53	丸		
206	89		D	20.2	11.6	7.0	0.4	(6.4)	1.0	15.8	9.4	(21.4)	41.8	(19.0)	7.2	0.48	丸		
207	89		D	18.8	(18.0)					(13.0)	(7.0)	0	28.0	(14.8)	(6.0)	0.67	丸		
89	93	53	26	A1	19.0	10.4	6.6	0.6	5.3	2.0	18.5	11.0	19.2	40.6	19.0	8.3	0.47	丸	A
126	53	26	A1	20.2	11.5	5.6	1.2	6.6	1.9	17.4	10.3	17.4	34.7	16.5	7.1	0.58	丸		
121	59	33	B5	18.0	11.9	4.9	1.0	5.7	0.8	19.2	9.0	19.5	39.2	18.8	5.0	0.46	丸	B	
140	66	34	C1	12.9	6.9	5.1	1.1	(5.9)	1.8	17.4	8.5	13.7	32.0	13.2	6.3	0.40	丸		
30	66	57	C2	14.1	11.3	6.9	0.2	6.0	0.8	12.7	9.5	15.4	35.7	13.9	5.2	0.39	丸		△
211	66	35	C3	(9.7)	4.6	(2.9)	(1.2)	(2.4)	(2.4)	(18.4)	(7.9)	(12.8)	29.2	(12.8)	(3.3)		丸		
212	66	35	C3	(7.4)	(5.2)	(2.2)		0	(3.0)	(3.4)	16.2	6.8		(13.0)	12.8	4.2		丸		
6	90	57	D	13.4	9.0	3.0	1.0	3.0	2.0	16.8	8.0	16.8	35.8	16.0	5.8	0.37	丸	B	

区番号	図面番号	図版番号	セット	法量 B	h	i	j	k	ℓ	m	n	o	p	q	r	法量他	枘穴	石質	備考
36-16			D	14.0	8.5	5.5				(15.5)	(8.5)		(30.5)		5.5				
32	90		D	18.2	9.6	7.0	1.0	5.4	1.0	12.0	8.6	13.8	35.8	13.0	5.0	0.51	丸		
34	90		D	17.6	9.8	5.0	1.2	6.4	1.0	13.8	8.0	16.6	33.2	15.4	6.2	0.53	丸		
37⑩	90	57	D	18.4	12.8	4.0	0.5	5.2	0.6	15.0	9.6	16.8	36.0	16.0	5.2	0.51	丸		
109	90	57	D	15.4	11.0	3.4	1.0	(3.2)	1.2	17.0	9.0	(17.0)	37.0	17.0	6.8	0.42	丸	B	
122⑩	90		D	19.0	13.8	4.0	0.2	3.8	2.0	15.6	8.6	16.8	35.2	15.8	4.8	0.54	丸		
163	90	57	D	20.0	9.6	8.0	1.6	(10.3)	0.4	17.4	9.0	(15.4)	32.0	14.0	5.0	0.63	丸		
b-11			D	18.5	8.5	4.0				20.0	9.0		36.0		6.0	0.43	丸		
b-12			D	18.4	9.7	8.7				18.5	11.0		33.0		6.0	0.56	丸		
b-18			D	17.0	10.2	6.8				(18.3)	8.1		31.1		5.0	0.55	丸		
b1-2		57	D	20.5	20.5	0	0	0	0	13.0	8.0		33.2		8.0	0.62	丸		
b1-4			D	20.3	10.0	8.0				9.2	7.0		39.0		7.5	0.52	角		
b1-4			D	19.0	10.0	8.0				14.5	7.0		38.5		4.5	0.49	丸		
b2-2		57	D	11.5	(8.0)	(3.5)				(15.5)	8.0		(31.0)		3.5		丸		
b2-5			D	22.0	(15.2)	(6.8)				12.0	8.0		(39.2)		7.0		角		
b4-5			D	18.0	10.0	8.0	0			17.0	10.0		35.5		4.0	0.50	丸		
b1-1			D	22.0	(16.0)	6.0				(20.5)	(6.9)		32.6		6.9	0.67	丸		
4-27⑩	53	26	A1	17.0	8.8	6.1	1.8	8.3	1.8	13.4	7.6	16.7	34.9	16.2	7.2	0.49	丸		
5	91	57	D	19.6	9.8	7.2	1.6	6.4	4.0	9.4	10.2	19.8	40.0	19.0	6.8	0.49	丸	A	
10	90	57	D	14.0	8.0	5.4	0.4	6.8	2.6	13.4	7.2	16.0	34.0	16.0	4.0	0.44	丸	A	
29	90		D	16.4	9.4	6.0	0.8	9.8	3.2	12.6	8.0	16.4	36.0	16.0	6.6	0.46	丸		
34	90	57	D	14.4	6.4	6.4	1.0	6.5	2.6	12.0	8.0	15.6	33.0	17.0	5.0	0.44	丸		
36	91		D	22.4	14.0	7.0	0.8	7.4	3.0	12.6	9.0	20.4	44.0	21.0	5.0	0.51	角	C	
37	90	57	D	18.0	12.0	4.0	1.0	4.2	3.0	13.0	7.6	12.2	29.0	11.8	2.2	0.62	角		
44	91		D	20.4	11.6	7.0	1.4	8.0	2.8	16.8	9.6	21.4	49.0	21.4	6.0	0.42	丸		
46	91		D	20.0	12.0	4.3	1.7	6.3	2.3	17.8	9.6	16.3	35.3	15.5	10.0	0.57	丸	B	
64	90		D	14.6	9.6	4.6	1.0	7.6	1.6	10.4	6.2	12.0	27.6	13.4	3.8	0.53	丸		
I-25	53	26	A1	20.4	12.2	5.4	2.0	5.3	2.1	21.3	9.4	19.8	41.5	19.4	7.8	0.49	丸		
66	54	27	A1	18.6	11.3	6.5	0.8	9.0	1.8	(12.8)	11.2	20.0	44.0	19.5	6.4	0.42	丸	B	
74	54	27	A1	17.5	8.3	7.1	1.3	7.4	3.4	13.9	9.5	19.5	39.6	18.0	4.7	0.44	角(隅丸)	B	
50	61	33	B5	20.0	10.0	7.7	1.5	2.5	6.5	(24.0)	10.0	21.1	46.0	21.1	(6.3)	0.43	丸	B	
69	59	33	B5	17.0	8.5	7.1	1.0	8.9	(2.3)	14.2	9.1	16.7	37.7	17.1	3.4	0.45	丸	B~A	
82	61	33	B5	20.4	(10.8)	8.9	0.3	9.1	1.1	(18.6)	(11.0)	17.5	34.2	15.4	(7.1)	0.60	丸	A	
61			B6	21.4	12.5	7.7	2.7	6.6	2.7	12.4	8.2	16.7	39.0	16.6	6.5	0.54	丸		
5			D	19.5	13.0	6.0				14.5	8.0		39.5		5.0	0.49	丸		
6	91	57	D	13.3	4.2	6.8	1.6	8.6	1.6	20.4	8.5	20.4	44.7	20.4	7.0	0.30	角	B~A	
10			D	16.5	6.5	10.0				21.0	8.0		37.0		6.5	0.45	丸		
22			D	15.5	5.0	10.0				15.0	9.0		35.5		5.0	0.44	丸		
29			D	14.2	5.0	9.0				18.0	9.8		32.2		4.5	0.44	角(隅丸)		
68⑩	91		D	18.6	11.2	5.8	1.5	8.7	2.0	19.5	11.4	20.8	43.6	20.4	6.7	0.43	丸		
75	91	57	D	18.3	10.8	6.0	0.8	3.9	4.8	14.5	8.6	16.1	33.9	16.0	5.4	0.54	角(隅丸)	A	
80	91		D	18.0	10.4	6.8	0.7	11.2	2.0	11.6	7.5	11.4	24.3	9.0	4.8	0.74	丸		
86			D	16.0	15.0	8.0	1.0			11.0	7.0		33.0		4.0	0.48			
163	91		D	17.0	11.0	6.8	8.5	0	7.8	3.0	15.0	10.5	18.4	38.0	18.0	8.0	0.45	丸	
3-19	55	28	A2	36.6	24.2	11.3	0.7	11.0	5.5	24.1	14.1	34.0	70.3	33.6	9.7	0.52	丸	A	
260	54		A4	21.6	5.3	13.7	1.5	(13.8)	4.7	25.0	12.1	(23.6)	50.4	23.6	10.0	0.43	角		
491	54	28	A4	22.9	10.4	10.5	1.7	15.3	2.2	23.3	11.9	27.4	52.3	26.9	7.4	0.40	丸		
486	60		B3	16.5	6.0	7.0	3.2	7.5	2.2	12.9	10.4	15.1	33.3	15.3	6.6	0.50	丸	B	
384	61	35	B5	13.4	4.8	7.2	0	7.1	2.1	16.2	9.5	19.2	41.7	18.0	6.0	0.32	丸	A~B	△
786			B5	20.5	8.9	8.8	2.2	10.8	3.9	16.5	11.0	17.5	35.5	18.0	7.8	0.58		B~A	
385	67		C3	14.1	3.2	7.2	1.3	6.3	2.0	13.6	8.7	19.5	40.6	19.9	6.2	0.35	丸		
480⑩			C3	14.4	2.9	9.8	0.8	10.4	1.7	16.3	7.3	18.5	35.1	15.1	4.1	0.44			
483⑩	67		C3	26.0	13.0	13.0	0	13.0	2.0	45.0	22.0	35.0	75.0	34.8	12.0	0.35			
474	70	66	C4	18.6	8.2	(9.0)	(1.0)	11.8	4.4	27.2	13.4	28.4	57.2	28.3	8.0	0.33	角	B	
19	92	57	D	14.2	7.6	4.1	1.3	3.9	3.3	19.6	8.5	18.1	35.6	18.1	8.5	0.40	角	B	
33	92	57	D	16.2	8.6	6.7	1.0	6.9	3.3	18.3	9.9	20.8	41.7	20.5	9.3	0.39	角	B	
39			D	18.5	11.0	7.0				20.0	8.5		38.0		5.5	0.49	角		
42	92	57	D	17.7	10.7	7.0	0.2	8.0	2.7	13.6	7.9	17.6	37.5	16.7	6.6	0.47	丸	A	
59			D	24.0	16.0	8.0				(15.0)	8.0		(36.0)		6.0		丸		
75	92	57	D	22.4	15.7	6.4	1.4	7.3	2.7	15.3	10.0	16.8	34.9	16.0	7.6	0.64	丸	A	
77⑩			D	23.0	9.0	14.0				26.0	12.0		52.5		10.0	0.44	角		
86		57	D	16.0	10.0	6.0	0	6.0	0	18.5	12.5	17.0	34.0	16.5	5.0	0.47	角		
91			D	14.0	(14.0)	0				(22.0)	12.0		33.0		6.0	0.42			
106	92	58	D	21.4	15.3	5.9	0	7.3	1.3	15.4	9.8	19.4	37.6	18.0	7.7	0.57	丸	A	
112			D	22.1	10.3	10.0	1.3	8.0	3.8	18.6	10.6	21.9	42.0	21.3	7.7	0.53	丸		
128			D	32.5	23.5	1.0	(0.5)	(5.5)	(3.5)	22.0	9.4	(22.5)	(40.2)	(22.0)	9.0		角		
129			D	23.5	11.5	12.0				(23.0)	(12.5)		42.5		6.0	0.55	丸		
133	92	58	D	19.6	8.1	9.5	1.5	9.3	1.7	18.5	11.0	17.3	35.1	16.4	9.3	0.56	丸		
134			D	22.0	16.0	6.0				17.0	8.5		41.5		5.0	0.53	丸		
143		58	D	35.0	27.5	7.0	0.5			19.5	12.0		53.0		8.0	0.66	丸		
164			D	13.0	8.0	(2.5)	(0.5)			15.0	9.0		34.0		8.0	0.38	丸		
188	92	58	D	21.0	14.9	5.5	0.5	4.7	3.5	13.0	8.4	13.4	25.6	13.2	7.3	0.82	丸	B	
192			D	11.0	6.5	4.5					8.0		26.5		5.0	0.42	丸		
211	92	58	D	19.3	10.7	6.4	0.9	6.1	1.5	16.2	7.2	18.6	39.1	18.0	5.1	0.49	丸	B	
232			D	12.5	8.0	4.5				14.5	8.5		(29.0)		8.0		丸		
249	92		D	22.4	(15.8)	6.0	0.8	4.4	4.0	(14.4)	7.6	15.0	34.4	16.0	4.8	0.65	丸		
250	93		D	23.4	15.3	4.2	0.7	9.3	1.2	21.3	11.6	19.5	42.3	20.0	8.0	0.55	丸		
253			D	17.5	12.5	4.0				18.5	10.0		(36.0)		8.0		丸		
258	93		D	26.0	14.0	11.1	0.9	4.0	9.7	20.2	13.0	20.5	44.4	21.8	10.4	0.59	角(隅丸)		蛇紋(墨)
263	93		D	(21.0)	(12.6)	6.0	2.6	4.0	4.8	(16.8)	10.0	19.4	43.0	20.4	(9.0)		丸		
268	93		D	14.6	6.2	7.8	0.8	9.0	2.4	23.4	11.6	16.6	36.0	16.4	7.0	0.41	丸		

火輪法量表(3)

区番分	図面番号	図版番号	セット	法量 B	h	i	j	k	ℓ	m	n	o	p	q	r	納穴	石質	備考
II-220	93	58	D	18.8	11.3	5.9	1.2	6.9	2.3	14.1	8.8	14.2	30.4	13.8	8.7	0.62	丸	A	
306②	93		D	19.0	9.4	8.8	0	9.4	0	(12.9)	7.4	16.8	35.0	16.2	4.4	0.54	丸	B	
307	93	58	D	21.0	16.0	4.6	1.1	3.8	4.3	9.8	6.1	18.9	36.4	18.6	3.9	0.58	角	A	
309	93	58	D	18.4	11.7	3.4	2.4	4.3	1.7	15.2	10.5	16.5	32.6	15.4	8.4	0.56	丸	B-A	
316			D	13.0	6.0	4.8	2.0			19.0	9.5		37.5		7.5	0.35	丸		
320②			D	(15.0)	9.2	(4.5)	(1.5)	(8.5)	(1.5)	16.5	8.0	(15.8)	31.6	(17.3)	6.2				
322			D	14.0	6.5	4.0	3.0			17.0	8.0		31.0		5.0	0.45	丸		
340	93	58	D	15.5	7.4	7.0	0.3	9.1	2.5	17.3	9.9	19.9	39.5	20.0	6.0	0.39	角		
349	93		D	17.0	6.2	8.1	2.6	6.3	4.3	19.4	10.6	17.9	36.4	17.3	5.8	0.47	丸		
351			D	14.0	(11.2)	(2.5)	0.8	2.0	2.4	19.6	10.4	18.6	45.0	23.5	4.0	0.31			
360	94	58	D	18.2	(8.8)	(9.2)	0.2	(4.9)	3.6	(15.5)	7.1	(17.0)	36.8	(17.7)	(3.2)	0.49	丸		
362	94	58	D	20.0	(12.8)	(5.6)	(0.8)	(4.6)	(3.2)	24.1	8.8	(16.7)	(37.5)	13.4	7.2		丸		
364	94		D	19.0	10.1	4.8	2.9	10.6	1.4	(16.0)	9.0	16.9	34.9	16.5	7.4	0.54	丸		
378	95	58	D	24.0	9.8	10.7	0.2	10.7	2.8	18.6	11.0	20.3	41.6	20.5	7.4	0.58	丸		
409	94		D	11.6	5.4	(6.4)	0	5.6	1.6	16.8	9.0	17.2	32.6	17.0	4.2	0.36	丸		
416②	94		D	19.0	8.4	7.6	1.8	6.4	6.0	20.0	10.0	22.6	50.0	23.6	6.8	0.38	丸	B	
417②	94		D	22.4	(9.5)	9.0	3.0	7.0	7.8	20.0	11.8	22.0	46.2	21.8	8.2	0.48	丸		
425			D	12.8	3.8	7.0	1.8	9.2	1.2	(18.6)	0	15.6	34.0	15.8	0	0.38		B	
465	94	58	D	16.2	(5.0)	(10.3)	(0.9)	7.1	4.1	(24.7)	12.0	20.3	(42.6)	20.3	(10.2)		丸		
471	94		D	12.2	4.8	4.1	1.0	4.4	1.3	20.3	10.4	15.9	34.3	16.2	(3.4)	0.36	丸	B	
701	94	58	D	18.0	8.6	8.0	1.0	5.0	1.2	18.0	8.0	16.0	36.0	15.0	2.6	0.50	丸		
709			D	14.0	5.0	6.3	3.0			17.0	8.0		31.0		6.0	0.45	丸		
710			D	16.0	11.0	4.0	1.0			17.5	8.0		38.5		3.0	0.42	丸		
711			D	20.5	13.0	7.0	0.5			17.0	7.0		37.5		5.0	0.55	丸		
712			D	16.0	8.0	7.0	1.0			17.0	8.5		36.0		4.5	0.44	丸		
713			D	15.0	7.0	4.0	2.0			18.5	9.0		37.0		7.0	0.35	丸		
714			D	19.5	11.0	7.0	1.5			17.5	7.0		37.5		3.5	0.52	丸		
715			D	18.5	13.5	4.0				13.0	8.0		33.0		7.0	0.56	角(偽丸)		
716			D	15.6	6.0	8.0	1.5			22.5	7.5		34.0		5.5	0.46	丸		
717			D	18.5	10.0	8.5				11.5	7.0		35.0		4.0	0.53	角(偽丸)		
718			D	14.5	7.0	6.5	1.0			15.0	8.0		34.5		5.0	0.42	丸		
719			D	20.0	13.0	5.5	1.0			17.5	9.5		43.5		6.0	0.46	丸		
727			D	15.8	3.9	9.2	2.1	6.3	2.2	20.0	9.4	18.1	35.9	17.8	7.2	0.44	角	B	
728			D	15.0	8.0	7.0				9.5	6.5		27.0		4.5	0.55	角		
729		58	D	22.5	(15.5)	6.0				(18.0)	9.0		34.5		5.5	0.65	丸		
737	95		D	15.8	6.8	6.7	0.7	(6.7)	5.2	21.4	10.6	16.9	36.8	16.4	6.2	0.45	丸		
752			D	17.5			0.5	5.5	0.2	20.6	11.0		49.3	18.4	8.4	0.35		B	
759			D	17.0	6.5	8.5	2.0			17.0	9.0		(34.0)		(5.5)				
769	92	58	D	14.4	6.8	4.2	2.0	5.8	2.3	15.9	8.3	14.1	31.8	13.6	4.0	0.45	丸		
775	95		D	15.0	4.6	8.0	1.5	5.6	4.2	17.7	9.9	14.9	33.0	15.4	4.1	0.45	角		
II-18	69		C1	24.1	(16.8)	7.5	0.7	7.0	2.3	13.4	9.8	20.3	42.6	19.6	(6.0)	0.57	角	A	
3			D	16.0	9.3	(6.7)				14.5	8.0		(30.5)		5.5		丸		
6			D	17.0	13.0	4.0				16.0	8.5		(36.5)		5.5		角		
21			D	19.0	(10.4)	(9.0)				14.0	7.5		(38.0)		5.5		丸		
26			D	13.5	7.5	(5.9)				21.0	9.5		36.0		7.0	0.38	丸		
30	95	58	D	20.6	15.4	4.5	0.7	8.5	1.5	11.8	7.5	16.6	38.5	14.3	5.3	0.54	丸	B	
37	95	58	D	14.0	8.0	2.3	1.9	3.0	3.8	(14.0)	7.8	15.7	37.1	16.6	4.8	0.37	丸		
48	95		D	17.8	9.4	6.0	1.5	6.4	2.7	19.4	9.1	19.9	43.2	19.6	8.0	0.41	丸	B	
51	95		D	19.8	9.8	8.5	0.2	(8.5)	1.4	11.0	8.8	(15.0)	34.8	14.8	(4.6)	0.57	丸		
104	95		D	14.4	(7.0)	(4.0)	(3.4)	(4.0)	4.4	13.0	9.0	(11.8)	31.2	12.0	4.8	0.46	丸		
III-1	96	58	D	25.0	17.2	6.1	1.5	4.5	6.0	13.9	0	15.3	35.5	16.8	0	0.75			
2	96		D	36.4	24.4	10.9	0.5	(10.6)	0.2	18.3	14.8	25.0	53.9	22.5	6.0	0.68	角		
4	96		D	26.0	16.1	7.6	0.8	7.3	1.9	16.2	0	19.4	43.9	19.1	0	0.59			
25	95		D	26.8	21.8	4.6	0.5	(6.4)	1.8	(25.0)	(8.8)	22.4	(45.0)	22.2	10.0		丸	B	
26	96		D	22.0	(14.8)	6.0	0.5	7.1	(4.9)	(13.1)	(6.9)	18.0	(39.1)	18.2	8.0		角(偽丸)		
27	96		D	32.1	21.6	7.7	2.6	7.6	9.0	23.0	9.8	25.1	51.3	25.4	7.1	0.63	角(偽丸)	B	
31	96		D	30.0	20.0	9.5	0.4	9.0	5.0	21.0	10.0	24.0	48.0	23.4	(8.2)	0.63	丸		
III-12	96		D	17.8	9.0	5.0	1.4	4.0	4.8	39.0	7.2	17.6	39.0	17.6	4.2	0.46	丸		
22			D	(15.6)	(8.8)	5.0	2.4	5.0	3.0	23.0	8.0	18.0	37.8	16.6	(5.4)		丸		
34	96		D	19.6	12.4	5.2	0.8	(4.2)	(2.2)	16.8	10.0	2.0	41.0	19.8	6.2	0.48	丸		
36	97		D	24.8	12.4	6.4	0.8	8.2	1.8	18.0		0	17.0	36.4	15.6		0.68		
39	97		D	26.6	16.0	8.8	0.4	7.4	2.0	15.6	11.0	22.8	42.4	23.0	5.0	0.54	丸		
40	97		D	18.0	7.0	9.0	1.6	9.0	3.8	17.8	11.0	20.2	44.2	20.8	8.4	0.41	角		
41	97		D	24.0	14.4	6.4	1.6	(5.8)	4.4	(15.9)	(12.0)	(20.5)	43.6	20.6	(7.5)	0.55	角(偽丸)		
50	97		D	18.8	13.4	9.2	0	(7.4)	(0.8)	18.0	8.8	20.0	42.6	(19.6)	4.4	0.44	丸		
55	97		D	18.4	11.6	5.6	0.6	9.4	(1.0)	(14.4)	7.2	(19.2)	38.0	19.0	6.6	0.48	丸		
56			D	18.0	(9.8)	4.6	2.8	(3.8)	(4.0)	21.0	8.0	15.0	34.4	(15.6)	4.2	0.52	丸		
58	97		D	17.0	7.4	6.0	1.2	(6.4)	1.2	17.2	8.4	(20.4)	39.0	20.4	6.0	0.44	丸		
86	97		D	21.0	12.0	8.6	1.2	(8.2)	2.4	18.0	7.6	(18.0)	40.0	17.2	5.0	0.53	丸		
109	97		D	19.0	8.6	9.0	0.6	10.4	1.4	17.0	10.0	16.4	36.0	(18.4)	5.0	0.53	角(偽丸)		
111	98		D	18.4	12.8	4.6	0.4	5.6	0.8	16.6	10.0	20.4	39.0	20.4	6.0	0.47	角(偽丸)		
118	98		D	24.8	18.0	9.0	0.6	6.0	3.0	13.0	10.0	18.8	46.8	17.8	5.4	0.53	角	B	
120	98		D	26.4	17.4	7.0	1.8	14.0	0.4	14.6	9.2	18.4	45.0	20.0	5.6	0.59	丸		
124	98		D	28.2	16.7	8.8	1.4	8.5	3.5	17.0	10.1	21.9	45.9	20.5	4.8	0.61	角(偽丸)	B	
131	98		D	17.4	8.0	6.2	2.5	8.2	2.0	31.4	8.0	14.0	31.4	14.6	5.0	0.55	丸	B	
152			D	15.2	13.9	2.5	2.5	(4.0)	(1.0)	(20.0)	8.0	(19.0)	(39.0)	(19.0)	4.6		丸	C	
164	98		D	14.6	6.9	(6.2)	(1.2)	5.7	0.2	15.1	10.0	15.1	33.9	14.9	5.0	0.43	丸	B	
174	98		D	20.4	24.6	4.4	0.8	(5.4)	(1.4)	16.6	11.1	20.4	44.4	(20.4)	7.2	0.46	丸	B	
183	96		D	25.4	13.4	10.4	0	7.8	1.0	16.0	8.8	21.0	44.4	20.0	5.8	0.57	角(偽丸)	A	
184	98		D	17.4	6.4	10.2	0.2	(9.0)	1.0	17.6	8.6	(18.0)	37.0	17.0	6.6	0.47	丸		
185			D	17.0	11.0	5.5				12.0	7.5		28.5		2.5		丸		

区番号	図面番号	図版番号	セット	法量														枘穴	石質	備考
				B	h	i	j	k	ℓ	m	n	o	p	q	r	法量差			
[illegible]-186			D	17.0	12.0	5.0				(15.0)	8.5		42.5		6.5	0.40	丸		
187			D	18.0	13.0	4.5				11.0	6.0		30.5		4.0	0.59	丸		
188			D	18.0	10.0	8.0				17.5	8.0		35.5		6.5	0.51	丸		
189			D	18.0	5.0	12.0				17.5	10.5		41.6		8.0	0.43	角		
198	98		D	16.0	7.0	7.8	0.7	6.5	1.0	16.1	7.2	17.9	36.3	(16.0)	4.3	0.44	丸	B	
201			D	20.1	7.6	9.1	3.8	6.7	12.3	22.3	12.4	23.1	50.9	23.0	9.4	0.39			
211	98		D	18.5	11.6	6.4	0	6.7	1.5	14.4	10.0	14.9	30.9	13.9	2.7	0.60	丸	B	
281	98		D	13.0	7.3	4.6	0.5	6.4	3.6	19.2	9.2	17.5	38.3	17.9	7.3	0.34	丸	A	

火輪法量表(5)

区・番号	図面番号	図版番号	セット	法量 C	s	t	u	v	w	法量比	納骨孔	石質	備考
I－31	41		A1	33.5	0	21.8	0	26.6	18.0	1.26			
38	41	16	A1	19.3	0	20.9	0	29.2	20.8	0.66			
50㊀	41	16	A1	20.3	0	23.4	0	40.4	23.0	0.50			
51	56	16	A1	19.6	0	23.5	0	32.5	32.1	0.60			
35	40	30	A2	19.4	0	29.0	0	34.0	28.0	0.57			△
36	40	27	A2	21.7	0	27.7	0	32.2	30.0	0.67			
47㋐	61	29	C3	16.5	0	(32.7)	0	35.5	32.8	0.46			△
37㋐	61	35	C5	16.4	0	23.0	0	29.9	25.3	0.55		B	
2		59	D	20.0	0	25.8	0	33.5	28.0	0.60		B	
6㊀	99		D	21.5	0	26.5	0	34.5	26.0	0.62			
54	99		D	19.0	0	21.5	0	36.3	22.8	0.52		B	
82	99		D	15.0	0	26.6	0	34.0	26.7	0.44			
II－35	42	16	A1	26.9	7.2			39.0	29.7	0.69			
51	42	16	A1	20.7	0	20.0	0	36.1	21.0	0.57			
55	42	17	A1	22.6	5.6	27.6	9.9	38.0	29.6	0.59	丸		
73	42	17	A1	28.3	0	28.4	0	42.5	29.5	0.96			
116	43	17	A1	13.6	0	22.3	0	33.0	24.0	0.41			
75	43	30	B1	21.5	12.9	30.8	8.4	40.6	30.0	0.53	丸		
52	56	30	B5	18.6	0	21.0	0	37.1	25.1	0.50			
61	56		B5	22.5	0	21.8	0	37.3	23.6	0.60			
67	56	30	B5	21.0	0	16.4	0	30.6	20.0	0.69			
74	56	35	B5	22.9	4.4	33.6	7.8	44.0	31.8	0.52	丸		△
85	57	31	B5	17.0	0	24.9	0	34.8	30.0	0.49			
93			B5	21.6	0	27.0	0	34.0	25.0	0.64			
36	61		C5	21.6	4.1	29.0	10.2	39.0	39.4	0.55	丸		
37	62		C5	29.1	6.7	23.0	11.8	36.6	24.0	0.80	丸		
48	61		C5	17.7	3.4	27.6	9.5	35.5	31.0	0.50	丸		
60	62	35	C5	16.0	0	21.9	0	33.7	27.6	0.47			
66	62		C5	29.0	0	23.5	0	34.0	21.0	0.85			
68	62		C5	29.8	0	24.6	0	35.4	25.1	0.84			
70	62		C5	17.3	0		0	32.8	24.0	0.53			
72	62		C5	24.2	0	21.3	0	39.5	19.5	0.61			
79	62		C5	13.6	0	28.0	0	39.5	27.0	0.34			
87	62		C5	18.9	0	21.8	0	30.5	25.0	0.62			
90	62		C5	19.0	0	24.0	0	32.0	12.0	0.59			
91			C5	37.6	0	21.3	0	34.0	22.5	1.11			
119	63		C5	19.2	0	22.5	0	37.4	21.0	0.46			
120	62		C5	20.1	0	20.5	0	35.7		0.56			
27			D	25.0	0	21.5	0	35.0	37.0	0.71			
28			D	13.0	0	23.0	0	28.0	25.5	0.46			
38㊀	99		D	23.0	0	27.5	0	36.8	29.9	0.63			
47	99		D	23.0	0	23.0	0	40.0	26.0	0.58			
84㋐			D	20.5	0	27.5	0	37.5	32.0	0.55			
86㊀			D	16.5	0	17.0	0	31.0	17.0	0.53			
102	99		D	23.8	0		0	29.2	15.0	0.82			
111	99		D	16.5	0	20.0	0	34.5	22.5	0.48		B	
III－28	43	17	A1	18.8	0	19.3	0	32.3		0.58			
31	43	18	A1	18.8	0	21.2	0	30.8	21.3	0.61			
34	44	18	A1	20.1	0	21.8	0	32.1	21.0	0.63			
24	63	36	C5	18.2	0	20.5	0	30.5	24.6	0.60			
30	63	36	C5	21.8	0	25.0	0	32.4	25.4	0.67			
41	63		C5	20.9	0	24.6	0	32.5	25.1	0.64		C	
43	63	36	C5	20.9	0	(24.9)	0	36.4	26.4	0.57			
2	99		D	23.0	0	(25.5)	0	36.0	30.0	0.64			
3	99		D	20.0	0	27.5	0	37.0	30.0	0.54			
4	99		D	15.5	0	28.0	0	33.0	28.8	0.47			
7	100		D	23.8	0	25.0	0	32.0	29.3	0.74			
9	99		D	28.5	0	18.5	0	27.0	20.0	1.06			
10	99	59	D	18.5	0	20.5	0	26.0	20.7	0.71			
27	100		D	10.6	0	20.2	0	30.2	20.4	0.35		C	
55	100		D	20.5	0	(29.5)	0	34.2	26.1	0.60		B	
56	100	59	D	27.0	0	29.4	0	36.9	27.8	0.73			
57	100	59	D	24.0	0	23.5	0	36.9	22.2	0.65			梵字(欠)
71			D	17.9	0	20.2	0	26.4	21.5	0.68			
149			D	14.4	0		0	23.7	20.5			C	
IV－23	45	18	A1	23.2	0	20.0	0	36.0	21.3	0.64			
24	57	31	A1	23.5	0	23.0	0	34.4	27.5	0.68			
62	45	18	A1	21.6	0	25.3	0	34.2	20.8	0.63			
64	51	19	A1	22.7	3.2	16.3	6.2	31.2	24.0	0.73	丸		

水輪法量表(1)

区・番号	図面番号	図版番号	セット	法量 C	s	t	u	v	w	法量比	納骨孔	石質	備考
Ⅳ－65	45	19	A1	15.9	0	(21.3)	0	30.9	24.6	0.51			
70		19	A1	18.9	0	19.0	0	32.5	25.4	0.58			
71	44	19	A1	18.7	0	20.0	0	31.9	20.2	0.59			
72	44	20	A1	23.2	0	22.8	0	36.9	20.3	0.63			
74	44	20	A1	20.7	0	16.9	0	33.6	21.5	0.62			
75	45	20	A1	17.2	0	(20.8)	0	30.1	18.0	0.57			
78	46	20	A1	20.7	0	21.2	0	33.2	25.0	0.62			
79	46	21	A1	22.3	0	(22.0)	0	35.0	21.8	0.63			
80	46	21	A1	22.8	0	21.6	0	35.3	22.6	0.65			
85	46	21	A1	20.0	0	(21.0)	0	30.9	21.4	0.65			梵字(墨)
86	47	21	A1	22.0	0	21.2	0	33.2	22.5	0.66		B	
91	47	22	A1	24.8	0	22.3	0	35.0	21.0	0.71			
96	47	22	A1	20.4	0	20.0	0	28.0	23.4	0.73			
97	48	22	A1	17.7	4.8	21.7	12.1	29.3	(21.0)	0.60	丸	B	
99	47	23	A1	19.4	0	28.5	0	39.6	34.0	0.49			
100	48	23	A1	26.0	0	18.8	0	33.8	27.5	0.77		B	
125㊀	48	23	A1	27.6	0	22.0	0	31.0	23.0	0.89			
126	49	23	A1	32.3	0	28.9	0	42.6	31.7	0.76			
127	48	24	A1	19.0	0	23.9	0	33.5	24.0	0.57			
131	49		A1	17.7	0	20.2	0	27.4	24.4	0.65			
19	49	27	A2	19.6	0	23.9	0	34.4	26.2	0.57			
20	50		A2	20.2	0	24.2	0	36.1	26.2	0.56			
21	50	28	A2	22.2	0	26.6	0	34.3	22.2	0.65			
22	51	28	A2	24.8	0	25.6	0	39.1	29.1	0.63			
77	57		B1	16.2	0	24.4	0	32.3	22.1	0.50			
69	57	31	B5	17.5	0	(19.0)	0	26.6	18.3	0.66			
81	57		B5	21.7	0	25.2	0	37.3	28.4	0.58			
92	57	31	B5	26.9	0	24.9	0	37.9	28.3	0.71			
110㊁		31	B5	23.3	0	19.8	0	30.0	21.0	0.78			
98	63	34	C3	17.3	0	23.5	0	31.9	15.0	0.54			
73	63	36	C5	19.6	0	26.9	0	36.6	25.0	0.54		B	
76㊂	63	36	C5	13.3	0	17.5	0	25.0	19.0	0.53			
93㊂	63	22	C5	27.0	6.2	21.8	14.3	36.6	19.6	0.74	丸		砂岩質 △
130㊂	63	24	C5	12.4	0	21.8	0	29.7	20.0	0.42			△
134	64		C5	19.5	0	17.1	0	30.4	20.5	0.64			
6	100	59	D	17.4	0	21.4	0	33.8	30.4	0.51			
7㊁	100	59	D	21.4	0	18.0	0	32.0	17.5	0.67			
8	100		D	24.0	3.5	23.0	15.0	34.0	23.0	0.71	丸		
9			D	13.0	0	20.8	0	29.8	21.0				
10	100		D	24.0	5.2	23.4	8.0	30.0	25.2	0.80	丸		
11	100	59	D	27.4	12.4	23.0	8.8	40.0	23.0	0.69	丸		
12	101	59	D	21.4	0	20.8	0	35.6	16.0	0.60			
13	101		D	33.7	8.3	30.6	18.1	(42.4)	29.5		角		
17	101	59	D	20.4	0	18.5	0	22.5	17.5	0.90			
39			D	19.5	0	22.1	0	32.1	23.5	0.61		A	
53	101	59	D	16.0	0	30.8	0	37.5	24.0	0.43			
57	101		D	16.0	0	21.5	0	34.0	24.0	0.47			
59㊂	101		D	17.1	0	28.5	0	32.8	20.8	0.52		C	
63	101	59	D	23.0	0	41.0	0	55.0	40.0	0.42			
66	101	59	D	22.0	0	16.6	0	34.2	19.0	0.64			
84	101		D	23.2	0	20.8	0	28.2	23.0	0.82			
90㊀	102	59	D	20.0	0	27.0	0	31.4	21.0	0.64			
94	102	59	D	26.2	3.6	24.0	9.2	40.2	25.5	0.65	丸		
120	102		D	31.0	5.2	35.9	13.5	53.0	32.6	0.58	丸	A	
122	100	59	D	22.0	0	27.2	0	35.0	25.0	0.63			
129			D	25.0	0	19.8	0	26.0	17.0	0.96			
141			D	22.2	0	28.0	0	36.0	20.6	0.62			
212			D	22.0	0	25.0	0	37.0	20.0	0.59			
219	101	59	D	18.5	0	24.0	0	36.5	25.0	0.51			
220	101	59	D	22.0	0	25.0	0	37.5	23.0	0.59			
227	100		D	14.0	0	19.0	0	32.5	21.0	0.43			
228	102		D	19.4	0	23.0	0	32.0	23.6	0.61			
Ⅴ－17	51	24	A1	27.0	0	28.5	0	40.3	24.5	0.67			梵字(墨)
19	52	24	A1	17.9	0	21.4	0	29.6	25.5	0.60			梵字(墨)
2	64	59	C5	17.5	4.0	20.8	8.4	29.9	25.6	0.59	丸		△
3	64		C5	19.1	0	17.0	0	28.8	14.0	0.66		B	
5	64	36	C5	21.5	0	29.2	0	38.2		0.56			
6		37	C5	21.8	0	26.0	0	34.5	13.0	0.63			
7	64		C5	25.9	0	24.6	0	37.1	25.9	0.70		B	砂岩質

水輪法量表(2)

区・番号	図面番号	図版番号	セット	法量 C	s	l	u	v	w	法量比	納骨孔	石質	備考
V—18	64		C5	25.5	0	33.0	0	43.6	30.9	0.58			
21			D	16.4	0	23.8	0	34.0	27.8	0.48			
24	102		D	31.0	6.5	26.5	20.5	48.5	35.0	0.64	丸		
26	102		D	18.6	0	28.0	0	38.2	24.5	0.49			
27	102		D	26.5	3.4	22.0	10.5	42.0	28.2	0.63	丸		
28	102		D	19.0	0	16.8	0	38.0		0.50			
30		59	D	26.0	5.5	39.5	7.0	45.0	36.0	0.58	角(隅丸)		
31		59	D	24.0	0	32.0	0	38.0	30.0	0.63			
32			D	24.0	0	24.6	0	34.0	22.0	0.71			
33		59	D	29.5	5.0	26.5	8.0	37.0	26.5	0.80	丸		
34		59	D	23.5	3.0	19.0	8.5	32.5	15.0	0.72	丸		
35			D	18.0	0	19.0	0	24.5	18.5	0.73			
36	102	59	D	24.5	8.0	26.5	9.5	41.5	35.2	0.59	角(隅丸)	B	
VI—130	52	25	A1	20.9	4.8	26.6	7.5	35.0	22.2	0.60	丸		
141	52	25	A1	23.3	4.4	27.2	12.6	31.6	20.0	0.74	丸		
99	58		B5	29.0	1.6	24.9	13.5	41.0	26.0	0.71	丸		梵字(線刻)
108	58	32	B5	13.7	0	24.7	0	30.5	24.4	0.45			
109	58	32	B5	18.8	0	26.0	0	35.5	24.8	0.53			
112	58	32	B5	16.3	0	22.5	0	33.4	25.0	0.49		B	
121	58	32	B5	17.3	0	25.9	0	29.8	26.0	0.58		B	
126	58	34	B5	19.1	0	19.9	0	29.7	22.7	0.64			△
106㊁	64		C3	28.7	9.4	25.3	13.0	42.8	27.7	0.67	丸		
113	64	34	C3	16.4	0	23.2	0	28.0	19.9	0.59		B	
167	64		C3	16.6	0	(23.2)	0	29.9	23.0	0.56			
100	64	37	C5	23.5	0	(21.9)	0	36.0	26.4	0.65			
107	65		C5	30.1	9.1	(35.6)	16.3	42.6	31.2	0.71	丸		
111	65		C5	19.5	0	(19.1)	0	27.8	(18.2)	0.70			
2			D	19.0	0	27.5	0	36.0	28.5	0.53			
3			D	20.0	0	(26.5)	0	35.5	24.5	0.56			
6			D	20.5	0		0	38.0	21.5	0.54			
48		59	D	24.0	0	25.0	0	35.0	21.0	0.69			
52			D	21.5	5.0	24.5	8.0	33.5	23.0	0.64	丸		
53			D	15.0	0	24.5	0	34.0	27.0	0.44			
54			D	24.0	0	25.0	0	34.0	20.0	0.71			
60			D	15.5	0	23.0	0	32.0	23.0	0.48			
61			D	18.0	0	21.0	0	27.0	20.5	0.67			
92	103	59	D	25.4	3.3	27.4	(8.8)	33.4	23.2	0.76	丸	B	
114			D	27.0	0	20.0	0	30.5	23.0	0.89			
117		59	D	31.0	0	37.5	0	50.0	38.0	0.62			
120		60	D	32.0	0	24.5	0	36.0	24.5	0.89			
134			D	20.0	0	18.0	0	34.0	23.0	0.59			
137			D	23.0	0	29.0	0	38.5	25.5	0.60			
156	103		D	19.0	0	25.5	0	38.5		0.49			
165	103		D	16.0	0	30.0	0	35.2	26.5	0.45			
VII—102	52	25	A1	22.4	0	23.2	0	34.0	27.5	0.66			
142㊀	59	30	B1	12.6	0	26.3	0	34.4	27.6	0.37			
80	59	32	B5	20.0	0	25.0	0	34.3	24.0	0.58			
141	59	33	B5	12.8	0	23.6	0	32.0	25.5	0.40		A	
149	59	33	B5	20.0	0	20.3	0	28.8	21.0	0.69			
73㊁	65	34	C3	17.2	0	20.0	0	27.8	20.2	0.62			
74㊀	65	37	C5	15.9	0	22.6	0	28.0	22.8	0.57			
79	65	37	C5	21.3	0	27.0	0	25.8	25.0	0.83			
95	65		C5	22.5	4.9	22.2	7.0	29.7	23.2	0.76	丸		
100	65	37	C5	16.1	0	19.0	0	30.0	18.0	0.54			
107	65		C5	22.2	0	24.8	0	35.3	26.8	0.63			
115	65	37	C5	19.0	0	14.9	0	26.0	26.8	0.73			
150	65		C5	17.8	0	32.5	0	37.5	29.0	0.47			
201	66		C5	17.6	0	18.2	0	26.6	17.5	0.66			
3			D	21.0	0	21.5	0	31.0	23.0	0.68			
5			D	18.0	0	20.5	0	35.0	(22.0)	0.51			
6	103	60	D	26.1	6.0	25.5	10.0	35.0	25.0	0.75	丸		
7			D	22.0	0	24.0	0	32.0	24.0	0.69			
10			D	20.0	0	21.5	0	30.0	(22.0)	0.67			
16			D	16.5	0	26.5	0	30.5	26.0	0.54			
19	103	60	D	18.2	0	19.9	0	33.2	20.0	0.55			
37			D	26.5	0	26.0	0	37.0	29.5	0.72			
38			D	20.0	0		0	34.0	21.0	0.59			
39			D	22.0	0	16.0	0	31.0	21.5	0.71			
40			D	18.8	0	25.5	0	36.0	28.0	0.52			

水輪法量表(3)

区・番号	図面番号	図版番号	セット	法量 C	s	t	u	v	w	法量比	納骨孔	石質	備考
竪— 41			D	25.5	0	29.0	0	36.0	24.0	0.71			
42			D	17.0	0	22.0	0	26.0	20.0	0.65			
43			D	34.0	0	24.0	0	37.0	21.0	0.92			
45		60	D	21.5	0	35.0	0	43.5	28.0	0.49			
46			D	22.0	0	16.0	0	30.0	23.0	0.73			
50			D	18.0	3.0	20.5	8.0	32.5	29.0	0.55	丸		
51			D	29.0	8.0	28.0	17.0	36.5	(25.0)	0.79	丸		
52			D	17.4	0	20.0	0	28.0	23.0	0.62			
64			D	16.0	0	21.0	0	31.5	24.0	0.51			
66		60	D	23.0	3.0	21.0	10.5	30.5	20.0	0.75	丸	B	
74④			D	17.0	0	23.5	0	29.0	24.5	0.59			
76		60	D	23.8	3.0	33.5	6.0	42.0	37.0	0.57	丸		
78			D	18.1	0	(21.5)	0	26.5	22.0	0.68			
85		60	D	17.5	0	15.5	0	36.0	23.5	0.49			
89			D	24.5	0	(22.0)	0	33.0	26.0	0.74			
90			D	16.5	0	21.5	0	29.5	25.0	0.56			
99			D	17.5	0	21.3	0	28.5	24.3	0.61			
121	103	60	D	22.5	0	17.2	0	30.3	19.6	0.74		A	
123			D	16.5	0	29.4	0	36.0	32.0	0.46			
125			D	28.5	5.0	24.5	11.0	39.0	32.5	0.73	丸		
137	103		D	19.8	0	25.8	0	36.0	26.0	0.55			
138	103		D	(16.2)	0	(26.0)	0	33.5	(29.8)				
139			D	17.5	0	22.5	0	28.5	19.5	0.61			
144		60	D	25.0	0	15.5	0	35.0	16.5	0.71			
173	103		D	17.2	0	20.3	0	28.1	22.0	0.61			
竪— 93	53	26	A1	25.7	4.7	25.4	9.2	38.8	28.8	0.66	丸		
126	53	26	A1	19.5	0	(25.4)	0	34.9	21.8	0.56			
121	59	33	B5	20.5	0	23.3	0	34.1	19.1	0.60			
211	66	35	C3	16.9	0	19.6	0	27.0	17.0	0.63			
212	66	35	C3	14.4	0	16.5	0	30.0	25.5	0.48			
1			D	24.5	0	22.5	0	35.5	(26.0)	0.69			
3			D	18.5	0	26.0	0	33.5	26.5	0.55			
5			D	16.5	0	25.5	0	31.0	27.5	0.53			
7			D	22.0	0	(25.0)	0	40.0	(27.0)	0.55			
12			D	33.0	0	(33.0)	0	40.0	31.5	0.83			
19			D	17.2	0	24.0	0	33.2	(26.5)	0.52			
27	103	60	D	15.9	0	23.5	0	31.7	21.8	0.50		C	砂岩質
30㊈	103		D	18.4	0	20.0	0	33.5	19.4	0.55			
38	104	60	D	33.3	0	23.6	0	35.0	24.5	0.95			
48	104		D	15.4	0	25.7	0	33.0	24.3	0.47			
51②	104	60	D	20.7	0	20.8	0	23.1	19.0	0.90			
54	104	60	D	22.5	0	18.0	0	31.7	18.8	0.71		A	
57	104	60	D	23.0	0	25.0	0	39.0	30.6	0.59			
62	104	60	D	24.2	0	24.2	0	37.3	25.0	0.65			
69	104		D	22.6	0	26.6	0	35.1	31.2	0.64		B	
85	104	60	D	21.0	0	14.4	0	28.2	13.7	0.74			
88	104	60	D	17.8	5.3	(25.0)		37.8	27.5	0.47	丸		
105	104		D	18.0	0	20.0	0	32.0	31.2	0.56			
113	104		D	20.2	0	24.7	0	34.8	26.4	0.58			
120	104	60	D	21.7	0	22.0	0	27.0	23.7	0.80		B	
131	105	60	D	19.0	0	24.6	0	35.7	21.9	0.53			
143			D					31.8	22.0				
146	105	60	D	15.8	0	28.7	0	37.6	29.0	0.42			
153	105	60	D	19.6	0	28.8	0	34.0	23.3	0.58			
157	105		D	26.6	0	17.0	0	36.8	17.0	0.72			
160	105	60	D	21.8	0	22.1	0	31.0	22.6	0.70			
164	105	60	D	19.0	0	24.7	0	33.8	27.7	0.56			
181	105	60	D	19.0	0	29.2	0	36.3	27.6	0.52			
204			D	19.2	0	22.5	0	32.0	28.5	0.60			
207	105	60	D	18.8	0	26.6	0	33.2	25.8	0.57			
209	105		D		0		0	33.3	26.0			B	
214	105		D	17.7	0	(26.7)	0	33.5	30.6	0.53			
217	105		D	21.6	0	25.4	0	35.5	22.8	0.60			
218	105	60	D	28.9	0	20.1	0	29.6	18.0	0.98			
219	106		D	20.3	0	29.0	0	33.1	28.2	0.61			
b—10			D	18.0	0	22.0	0	31.0	26.0	0.58			
b—13			D	17.0	0	21.5	0	30.0	(29.0)	0.57			
b—17			D	19.0	0	23.5	0	33.0	27.5	0.58	丸		

水輪法量表(4)

区・番号	図面番号	図版番号	セット	法量 C	s	t	u	v	w	法量比	納骨孔	石質	備考
Ⅷ-b1-1			D	20.5	0	(27.5)	0	32.5	26.5	0.63			
b1—3		60	D	19.0	0		0	34.0	(26.5)	0.56			
b1—6			D	21.0	3.0	34.0	8.0	40.5	34.0	0.52	角		
b1—7			D	32.0	0	29.0	0	40.0	28.0	0.80			
b1—8			D	21.0	0	26.5	0	35.0	27.0	0.60			
b1'—1			D	19.0	0	30.5	0	36.0	24.0	0.53			
b1'—3			D	23.0	0	22.0	0	36.0	23.5	0.64			
b2—1			D	14.5	0	(26.5)	0	30.5	(24.0)	0.48			
b2—3			D	23.0	0	15.5	0	20.0	21.0	1.15			
b2—4			D	18.5	0	(30.0)	0	32.5	27.0	0.57			
b2—6			D	17.0	0	18.5	0	26.5	19.5	0.64			
c—1		61	D	24.0	0	21.5	0	32.5	20.0	0.74			
Ⅸ—27㊀	53	26	A1	12.6	0		0	32.0	20.5	0.39			
22	66		C5	25.3	0	27.9	0	37.0	38.0	0.68			
16	106		D	28.5	4.7	23.5	12.0	33.1	23.8	0.86	丸		
42	106		D	24.2	3.0	18.0	9.0	29.7	15.8	0.81	丸		
49	106	61	D	19.1	0	26.6	0	32.8	24.0	0.58			
63	106		D	23.6	0	23.2	0	29.4	20.0	0.80			
Ⅹ— 25	53	26	A1	24.5	5.3	32.5	8.5	42.6	30.2	0.58	丸		
66	54	27	A1	20.3	0		0	38.0	27.9	0.53		B	
74	54	27	A1	22.5	0	22.9	0	35.8	24.3	0.63			
50	61	33	B5	20.8	0	31.4	0	37.9	29.3	0.55		B	
69	59	33	B5	22.7	0	25.5	0	37.9	26.0	0.60			
82	61	33	B5	22.6	0	21.0	0	31.9	24.0	0.71			
101	61		B5	19.5	0	29.6	0	36.4	17.5	0.54			
71	66		C5	30.3	4.0	26.5	7.5	36.9	29.0	0.82	丸		
72	66		C5	17.2	0	23.6	0	32.8	21.8	0.52			
102		25	C5	20.2	0		0	37.0	29.5	0.55			△
103	66		C5	19.2	0	24.6	0	39.2	25.3	0.49			
105	66		C5	23.2	0	24.0	0	32.3	25.9	0.72			
162	67		C5	22.5	0	25.6	0	37.9	26.6	0.59			
167	67		C5	22.3	0	24.9	0	32.5	25.4	0.69			
170	67		C5	19.5	0	28.8	0	37.2	29.6	0.52			
354	67	38	C5	26.6	4.2	23.4	7.5	30.4	27.0	0.88	丸		
2			D	20.5	0		0	34.0	24.8	0.60			
4		61	D	18.0	0	25.0	0	28.0	24.2	0.64			
7			D	16.0	0		0	28.5		0.56			
19	106	61	D	19.0	0	22.0	0	32.3	22.9	0.59			
29	106	61	D	27.0	5.0	26.5	15.0	37.0	29.5	0.73	丸		
31			D	28.0	22.5	18.5	13.0	33.0	25.3	0.85	丸		
77	106		D	22.7	3.5	26.4	13.5	27.4	31.8	0.83	丸		
88㊀			D	25.5	0		0	35.0	27.6	0.73			
104㊀	106		D	15.6	0	20.4	0	30.6	24.9	0.51			
116		61	D	14.4	0	22.2	0	28.6	22.4	0.50			
161	106		D	25.0	0	23.0	0	36.1	19.8	0.69			
Ⅺ—259	55	28	A2	53.0	0	40.8	0	69.6	40.4	0.76		A	梵字(曇)
384	61	35	B5	18.8	0	17.5	0	33.0	22.0	0.57			△
786			B5	17.9	0	26.5	0	34.0	27.4	0.53		B~A	
385	67		C5	15.4	0	18.5	0	32.9	17.7	0.47			
480			C5	22.9	0	23.0	0	28.9	22.4	0.79			梵字(曇)
483㊀	67		C5	19.3	0	25.2	0	31.6	21.4	0.61			
245	68	39	C5	46.2	6.3	40.6	14.0	63.3	40.1	0.73	丸	B	
246	68	39	C5	40.0	7.6	38.6	12.0	59.0	40.3	0.68	角	A	梵字(曇)
248	68	38	C5	23.4	0	24.0	0	37.2	25.0	0.63		A	
306			C5	14.5	0	27.3	0	34.5	21.4	0.42			
332	67	38	C5	23.1	0	25.5	0	38.6	26.5	0.60			
338	68		C5	23.2	0	23.0	0	37.6	26.5	0.62			
345	67		C5	13.4	0	27.8	0	36.4	27.0	0.37			
352	68		C5	22.7	0	21.6	0	33.0	22.0	0.69		A	
353	68		C5	22.7	0	21.4	0	29.5	22.0	0.77			
371	67	38	C5	24.8	0	24.8	0	32.4	24.8	0.77			
383			C5	19.4	0	28.0	0	32.2	25.4	0.60			
404	69		C5	17.9	0	27.3	0	38.1	31.1	0.47		B	
405	67	38	C5	13.5	0	26.9	0	34.1	26.3	0.40			
418	69	61	C5	17.2	0	28.5	0	37.6	27.0	0.46			△
450	69		C5	17.5	0	27.5	0	31.5	24.5	0.56			
460			C5	17.6	0	25.6	0	31.6	24.0	0.56			
468	69	39	C5	16.7	0	25.4	0	28.8	20.4	0.58			
702			C5	32.4	0	27.0	0	33.0	25.5	0.98			

水輪法量表(5)

区・番号	図面番号	図版番号	セット	法量 C	s	t	u	v	w	法量比	納骨孔	石質	備考
五一757			C5	(22.5)	0	(18.2)	0	31.8	22.2			B~C	
780	69		C5	23.0	0	24.8	0	37.0	25.2	0.62			
783	69	38	C5	24.6	5.5	28.6	10.9	41.6	26.2	0.59	丸		
788		39	C5	15.4	0	25.2	0	29.4	26.6	0.52			
789			C5	17.4	0	28.2	0	34.4	27.1	0.51			
2			D	17.0	0	30.0	0	33.0	27.0	0.52			
17㊃	106		D	13.9	0	18.5	0	26.2	17.5	0.53			
23			D	15.5	0	25.0	0	32.0	25.5	0.48			
40		61	D	22.0	0	28.0	0	34.5	28.0	0.64			
47			D	23.5	0	20.0	0	31.0	26.0	0.76			
50			D	18.5	0	23.5	0	32.0	24.0	0.58			
55			D	18.0	0	20.0	0	31.5	27.0	0.57			
56			D	23.0	0	30.0	0	42.0	36.0	0.55			
60			D	17.5	0	26.5	0	31.0	26.0	0.56			
69			D	20.0	0	10.0	0	25.0	18.0	0.80			
72			D	19.0	0	22.5	0	34.0	20.0	0.56			
74		61	D	24.5	0	22.0	0	22.5	22.5	1.09			
76			D	18.0	0	18.0	0	29.0	18.0	0.62			
78			D	33.0	0	30.0	0	34.5	25.0	0.96			
84			D	11.5	0		0	30.0	27.5	0.38			
87			D	18.5	0	18.0	0	30.0	18.5	0.62			
90	106		D	28.5	0	28.0	0	36.5	24.0	0.78			
97			D	24.5	0	26.0	0	31.0	25.0	0.79			
101			D	16.5	0	20.5	0	29.0	23.0	0.57			
104			D	16.5	0	14.0	0	39.0	39.0	0.42			
117			D	16.5	0	24.0	0	30.0	18.5	0.55			
124			D	18.5	0	25.0	0	31.5	21.0	0.59			
130			D	(18.0)	0	(16.0)	0	36.0	26.0				
131	107	61	D	21.5	0	21.5	0	34.0	27.5	0.63			
132			D	15.0	0	28.0	0	31.0	22.5	0.48			
139			D	(22.0)	0		0	32.5	21.5				
140㊃			D	19.5	0	20.0	0	23.0	20.0	0.85			
157			D	25.0	0	29.5	0	36.0	27.5	0.69			
158			D	15.0	0	20.0	0	30.0	24.0	0.50			
163			D	17.0	0	26.0	0	35.0	26.0	0.49			
165			D	14.0	0	16.0	0	23.0	20.0	0.61			
170			D	18.0	0	26.5	0	36.0	27.5	0.50			
175			D	19.0	0	23.5	0	27.0	25.0	0.70			
176			D	17.0	0	25.0	0	29.5	26.5	0.58			
184			D	30.0	0	35.5	0	42.5	27.0	0.71			
186			D	15.0	0	20.5	0	29.5	22.0	0.51			
197			D	19.0	0	23.0	0	31.0	19.5	0.61			
199			D	21.0	0	22.0	0	37.0	27.0	0.57			
212			D	23.5	0	28.5	0	36.5	27.5	0.64			
217			D	15.0	0	15.0	0	26.0	22.0	0.58			
223	107	61	D	23.0	2.0	18.5	12.0	37.0	25.0	0.62	丸		
227			D	21.0	0	21.5	0	35.5	18.5	0.59			
228			D	25.0	0	26.0	0	34.5	23.0	0.72			
231			D	20.0	0	20.5	0	29.0	21.0	0.69			
234	107		D	31.0	6.0	26.5	10.5	42.5	29.0	0.73	丸		
238		61	D	20.5	0	26.5	0	33.5	25.0	0.61			
251	107		D	25.2	0	24.0	0	38.6	30.0	0.65			
282	107		D	32.7	0	33.7	0	51.6	35.4	0.63			
320㊃	107		D	24.0	0	21.9	0	35.2	20.6	0.68			
325	107	61	D	17.5	0	28.3	0	32.5	23.0	0.54		B	
334	108		D	22.4	0	(26.1)	0	41.5	30.0	0.54			
343	107		D	33.1	7.1	24.0	11.5	45.1	25.6	0.73	丸		
361	107		D	19.6	0	20.0	0	34.6	30.7	0.57			
431	108		D	16.8	0	20.6	0	28.7	23.6	0.59			
463	108	61	D	18.5	0	23.0	0	30.0	22.2	0.62		A	
464	108	61	D	19.6	0	26.3	0	34.5	27.4	0.57			
481㊃	108		D	19.9	0	23.4	0	34.8	28.5	0.57			
483㊃			D	22.0	0	21.5	0	28.0		0.79			
549	108	61	D	32.5	10.6	28.0	23.0	37.3	26.0	0.87	丸		
703	108		D	20.3	0	20.4	0	32.6	22.0	0.62			
725			D	21.0	0	28.0	0	37.0	24.0	0.57			
741	108		D	19.8	0	25.2	0	31.5	26.0	0.63		A	
742			D	13.8	0	28.2	0	33.2	26.6	0.42			
743	108		D	13.2	0	22.8	0	30.4	24.0	0.43			

水輪法量表(6)